

# 瀬戸正夫の人生 上巻

(電子版)

はじめに

本書は、1992年にバンコクで、東南アジア通信で連載していた『瀬戸正夫の人生上下』を、2001年7月に自費出版した本である。

今年は戦後70年、日本人納骨堂80周年記念ならびに、自分の7回目の羊年84歳を迎える記念すべきめでたい年なので、絶版になっっている『瀬戸正夫の人生』を再版することにした。

自分の幼稚な知識で記した文には間違っている箇所もあるが、間違っていた部分は訂正し、新たに入手した資料を盛り込み、更に手を加えて修正し、自分の人生に関した様々な出来事や思い出を記し、再版し、アジア文化社の電子版(Ebook)で発表し、大勢の読者の方々に目を通してもらいたいと思う。

僕は、1931年5月23日に、周囲を美しいアンダマン海に囲まれたサヤームのプーケツの孤島で生まれた。

生まれて間もない9月18日に、関東軍の陰謀により、満州の奉天郊外の柳条湖で南満州の鉄道を爆発した事件が発生し、満州事変が勃発した。日本軍は9月19日には奉天城を占領し、氣勢をあげた。

だが、満州事変が勃発したお陰で、1931年9月26日には、上海で10万人におよぶ抗日集会が行なわれ、10月10日には、上海と北京で抗日救国会義勇軍の組織が開催された。翌年の1932年1月28日には、上海で、海軍陸戦隊が中国19路軍と交戦を交え、1937年7月に泥沼に足を突っ込んだ支那事変へと進展し、更に、資源豊かな強敵、米英を相手に大東亜戦争へと拡大する結果となった。

僕は戦雲渦巻く中で育ったみだが、父親の複雑な家庭の事情もあって、最愛の両親からは捨てられ、日本の国家のために少年兵としての特訓を受け、ビンタまで頂戴したが、最後には、日本の国家からも、日本の国籍を破棄され、前途真つ暗な死の暗闇に突き落とされたのである。

果かない我が身を振り返り、自殺まで考え、戦前、戦中、戦後の、悲惨な荒れ果てた茨の道を、独りぼっちでさ迷い、トボトボと辿った84年間の自分の人生行路。喜びを、悲哀を、怒りを、愛情を、心に秘めた様々な思い出を、包み隠しなく赤裸にし、涙で綴った自分史である。

人間の一生とは何なのか。どんなに苛められても、どんなに辛くても、常に辛苦に耐え、純真な気持ちを保ち、健康に気を配り、明るい笑顔で、力強く、元気に生き抜くしかない。

瀬戸正夫

## 目次

### 瀬戸正夫の人生

- 僕に秘められた秘密
- プーケットで排日運動発生
- 初めて目に映ったクルンテープ（バンコク）
- 貨物船でソンクラーク県へ
- ソンクラークの仲間
- 新しい生活メナムホテル
- バンコク日本人学校
- 父は特務機関だった
- 戦争と平和の分岐点
- ピブーン首相の華僑対策
- タイ・フランスと国境紛争
- 戦雲渦巻くタイの動き
- 「がんぢす丸」に避難
- 大東亜戦争勃発
- さようなら「がんぢす丸」
- 日本軍タイに奇襲上陸
- ナコーンシータマラートの惨事
- 開戦当時の父の行動
- 僕の噂話
- 学校の行事
- 開戦当初の日本人学校
- 慰問
- バンコク初空襲
- 大病
- あの世の美しい花園
- 戦時中の汽車の旅
- 戦時下のソンクラーク
- 父を尋ねてマラッカへ
- 戦火の跡マレー半島へ
- タイピンの町
- スリムのからゆきさん

クアラルンプール都市  
マラッカで父と再会  
美しい心の友  
父の恋人  
優しかった父  
華僑のパーター  
父と最後の別れ  
森の家  
第二の人生  
フワヒンの臨海学校  
フワヒンの水泳教室  
フワヒンの海  
学寮生活  
おかゆ騒ぎ  
こそ泥とミツキーの大怪我  
学寮の生徒  
おもだの床屋さん  
面会と破れた靴  
バンコク大洪水  
ナレーの家  
不思議なアラビヤ人  
南方軍の凱歌  
バンコク駐屯軍の素顔  
バーンポーン事件の真相  
大東亜会議と独立  
連合軍の反撃  
人生の転換期  
買って貰えなかった自転車  
ドーンムアン空軍基地  
朝の雑巾掛け  
物資不足に悩む  
プール開き  
水泳特訓  
学校の水泳大会

英霊参拝  
屑鉄拾い  
軍事教練  
祭部隊の兵隊さん  
死の泰緬連結鉄道  
クラ地狭横断鉄道  
機銃掃射を受けて  
闇のバンコク  
アルバイト  
大日本帝国敗戦の兆し  
タイ戦場の兆し  
僕の卒業式  
優しい町田先生  
高等科一年生になって  
倉上香織ちゃんの死  
阿波丸轟沈事件の真相  
敗戦間近の日本人学校  
疎開準備  
敗戦への道  
日本の敗戦を迎えて  
中国人街の青天白日旗流血事件  
敗戦の代価  
資産を没収されてバーンブワトーン・キャンプへ  
悲しい抑留前の準備  
愛犬ポチとの別れ  
バーンブワトーン・キャンプ  
第2キャンプ  
偵察  
日射病  
配給品配り  
第2キャンプの村造り  
釣り  
キャンプの素顔  
スポーツ大会

ブカブカの運動靴

演芸会

ひばり幼稚園

第2キャンプの学校

楽しかった学校

最後の卒業式

キャンプの出来事

残留組

涙の別れ

第1キャンプへ移動

バンクワン刑務所

第16陸軍病院

病院内の生活

## 瀬戸正夫の人生

### ■僕に秘められた秘密

父（瀬戸久雄）が和歌山の串本町潮岬村の故郷を後にし、船でシンガポールへ渡ったのは、1909（明治42）年の頃、父が未だ20歳ぐらいのときだった。父はシンガポールからマレー半島（今のマレーシア）を徐々に北上し、英国人が経営していたゴム園などで医師として勤めたりしながら、およそ7年間、マレー半島を転々と歩いていた。だが、その間の経路に関してはなにも教えてくれなかったので、謎に包まれていてぜんぜんわからない。

これは僕の想像に過ぎないのだが、最後は恐らくペナン島に辿り着き、そこに暫くいたのではないかと思う。父が当時のサヤーム（シヤム）王国（現在のタイ王国）に入国したのは、1917年（大正6）年だった。ただし、何月何日にタイの何処に入国したのかは不明である。

父がプーケット島へ渡ったのは大正何年頃だったのかわからない。だが、父がプーケットにいたのははっきり判明しているのは、1922年（大正11）年2月初旬からである。

僕がこの世に飛び出した時点から、僕の身に大きな秘め事が秘められていた。両親の間にどんな複雑な経緯があったのかは知らないし、僕にとって全く関係ないことである。

父が勝手に好きな女と楽しんで、その挙句の果てに生まれたのが、邪魔者扱いにされ、両親や、日本の国家からすらも見捨てられた僕なのだ。

僕が自分の秘密を薄々感づいていたのは、日本人学校に入ってからだった。僕の義理の母（石橋テイ）は、1886（明治19）年12月に長崎県南高来郡布津村飯野の貧しい石橋家で生まれた。家庭が貧しかったために、母は未だ小さい子供の頃、雪の降る日に泣きながら田島家へ養子として貰われていった。

母は14、5歳のときだった1900（明治33）年の頃、田島の養父と一緒に上海へ渡り、そこで数年間暮らし、20歳の頃、ハウスキーパーという名目でシンガポールへ渡った。

シンガポールから父と同じようにマレー半島を北上し、最後はペナンに留まり、ペナンからスマトラ、メダンやプーケットなどを数回往復していた。

何のために往復していたのかわからない。母の職業は形式上はハウスキーパーとなっていた。だが、技術も手に職もない女の身ひとつで何ができたのであろうか。実際にはカラユキさんだったのではないかと思う。

母の話では「マレー半島を歩いているうちに、洗濯屋をしていた石井さんと知り合い、彼と数年間一緒に暮らし、石井さんとの間に、可愛い女の子が2人生まれた。だけでも2人とも3、4歳のときに死んでしまった。今生きていれば、正夫の姉に当たるんだけど……」と、よく口癖のように話していた。

ただし、石井さんがどんな人だったのか、いつ頃から同棲していたのか、どうして別れたのかに

関しては、何も教えてくれなかった。

母がサヤーム(タイ)のプーケツに入学したのは、1922(大正11)年12月13日だった。その時点で、母は父の処で世話になっていた。しかし、プーケツから再度ペナンや、スマトラ、メダンなどへ渡航している。実際にプーケツに戻ってきたのは4年後の1926(昭和1)年8月26日だった。

父(瀬戸久雄)と母(田島テイ)と一緒に同棲し始めたのはこの頃からではないかと思う。世間では結婚した夫婦とみられ、母は「瀬戸テル」と名乗っていた。

父はプーケツの市場の近くに面したパン・ンガー通りで、NipponDispensary(日本薬局)を開業し、薬局兼患者の治療も兼ねていた。

当時のプーケツには、日本人は父の他に、写真館や、帝国雑貨店の営業をしていた人や、カラユキさんなどを含めて、みなでおよそ10人弱の日本人が住んでいた。

プーケツは有名な錫の産地で錫鉱山が多く、その頃マレーや中国大陸から錫鉱山目当てに出稼ぎに来る気の荒い中国人の労働者が非常に多かった。

休日になると、プーケツの市内は中国人の労働者で溢れ、まるで中国の田舎町かと錯覚を起こすほどであったという。

僕が生まれたのは、生まれてくるべきではなかったであろうけども……僕は一体誰の落とし子であるのかすらも知らないで……1931年(昭和6)年5月23日、土曜日の午後1時半に日本薬局内で、父の手によってオギヤーオギヤーと産声をあげた。

生まれて間もなく「瀬戸正夫」と命名され、父、瀬戸久雄、母、瀬戸テルの子として、太陽がきらきら輝く美しいアンダマン海に囲まれた現在有名になっているリゾート地、プーケツ島で生まれた。

### ■プーケツで排日運動発生

僕が生まれて間もなくだった。およそ4ヶ月後の9月18日の夜、満州で満州に進駐していた日本の関東軍の陰謀により、満州事変が勃発した。このために、プーケツの町にいた華僑および、中国大陸から出稼ぎに来ていた労働者から、日本人に対して凄惨な排日運動が起った。

「日本鬼に商品は一切売らない」、「日本鬼の家には立ち入り禁止」、「日本鬼殺」などのスローガンを掲げ、日本人が外へ出ると、石をぶつけられたりした。市場へ買い物に行っても「日本鬼」と罵られ、唾を引く掛けられるだけで、何一つ買えなかった。

プーケツにいた数少ない邦人は身に危険を感じ、家の中に閉じこもっていなければならなかった。中国人のボイコットがあまりにも酷かったために、下火になるまで、タイの警官が日本人の家の前に立って警戒し、見守ってくれたのである。

中国人のボイコットののために、僕が毎日飲んでいたコンデンス・ミルクも手に入らなくなった。父は薬局業では生計が立てられず、営業を閉鎖し、写真館をやっていた日本人の友人から、写真館

を引き取り、暫くの間写真真業で何とかその日、その日の生活を凌いでいた。だが、日々の生活は益々苦しくなるばかりで、最終的にプーケツでは暮らしていけなくなり、父は職を求めて一人で先にバンコクへ出かけていった。

あとに残された親子2人の元へは、数ヶ月経っても父からは何の連絡もなかった。困り果てた母は、食料品を買う金も無く、家賃も支払えず、借金に借金を重ねて細々と暮らしていた。

だが、或る日、僕が外で一人で遊んでいたとき、玩具を後ろ向きになったままで引つ張っていたとき、運悪くバナナを揚げていた釜の中にお尻を突っ込んでしまった。お陰でお尻に大火傷をし、背中を丸めたまま暫く動けなくなってしまった。

その頃の僕は、砂糖黍が大好きで、毎日砂糖黍ばかり食べていた。砂糖黍を食べたお陰で、更に悪運が重なり、お腹の中にミミズのような大きな虫が沸き、時々身体が引きつるようになった。

医者に診察して貰って初めて虫が沸いていることがわかり、虫下しを飲んだところ、なんと、丸々太った真っ白い虫が口と、お尻から108匹も飛び出してきて、医者をびっくりさせた。

待ちに待った父からは、10ヶ月振りに初めて便りがあり、「バンコクに出てくるように」と、旅費代を100バーツ送金してきた。母は、隣近所から借りていた借金を返済し、手元に残った僅か20バーツのお金を旅費にあて、プーケツから荷物を絡げてこっそりと漁船に乗り、100キロほど離れたトゥラン県を目指し、カンタンの小さな漁港に到着した。

カンタンの漁港に着いたとき、母の懐には一銭のお金も残っていなかった。どうしようかと、途方に暮れていた母は、土地の人からトゥランの町に、日本人で医者をしている河原ドクターがいることを聞き出した。

車賃もなかった母は、僕の手を引き、カンタンの漁港から炎天下をトボトボと歩き、河原堪吉先生を頼って行き、そこで3日ほどお世話になった。母は、河原先生に慰められ、お金を借り、辛い思いをして、薪を焚いて走っていた汽車で、父がいるバンコクへ向かったのである。

### ■初めて目に映ったクルンテープ（バンコク）

僕の幼い頭脳のコンピュータに記憶が刻み込まれ始めたのは3、4歳の頃からではないかと思う。母親のお腹の中で暴れ狂い、苦しい思いをさせて「オギャーオギャー」と産声を上げて、複雑な腐敗しきったこの世の中に無理やりに押し出され、見知らぬ世間の人々の間に放り出され、親や、国家からも邪魔者扱いにされた僕は、渦巻く荒波の中に「ポイ」と捨てられ、独りぼっちで涙を溜めながら、トボトボ生きていかなければならない運命を背負わされるはめに陥ってしまったのである。

初めて僕の目に映ったもので、はっきり記憶に残ってるもの、それは、ほとんど車も走っていないサームロー（客を乗せてペダルを踏んで走る三輪車）すらもないシーンと静まり返った何処かの田舎町を思わせるようなクルンテープ（バンコク）だった。

この頃のバンコクは、すがすがしい美味しい、暖かい空気の流れ、緑に包まれた静かなひっそり



した町の中を、細見の中国のおっさんが暢気そうな顔で、大きな車輪をキーキー軋ませてロツチュック（人力車）を両手で引っ張って行く姿や、馬に食べさせる草を積んだ馬車の上に、髭を生やした浅黒いでっぷり太ったアバン（インド人）が鞭を持って馬車をガタゴト操りながら走っていた。その頃、僕は何処に住んでいたのか定かでないが、記憶を辿ってみると、どうやらワツ・サケート（黄金の山寺院）附近のラーチャダムヌーン通りの近くに面した所に住んでいたのではないかと  
思う。

家の裏に緩やかに茶色っぽい濁ったクローン（運河）が流れていた。ンゴープ（ニッパ椰子の葉で作った幅の広い帽子）を被った物売りのおばちゃんたちが、のんびりした雰囲気で小舟を漕いで、行き来していた。

僕は釣りが好きだったので、よく裏のクローンで、ワツ・サケートの塔を眺めながら一人で糸を垂らして魚を釣っていたが、餌ばかりとられて魚はなかなか釣れなかった。

或る日、釣りに夢中になっていた僕は、其処から「ドボーン」と落っこちて流され、溺れそうになり、危ないところを母に助けてもらった。僕はクローンに落ちた瞬間に、無意識に水面から顔を上げて空を見ていたので助かったのではないかと思う。

ワツ・サケートの傍にいつまで住んでいたのかわからない。だが、其処からルワーン通りに面した中央病院の真ん前にある二階建ての長屋に引越した。周囲の住人は中国人ばかりだった。

その頃の僕は凄く悪戯坊主だったのかも知れない。兎に角、クローンに落ちてからは、外へも勝手に出て行くので、いつも長い紐で足を縛られ、柱に繋がれて部屋の中で猿みたいにキヤツキヤ騒ぎ、暴れまわっていたようで、近所の子供たちは僕のことを、「リン、リン」（猿、猿）と呼んでいた。

父はサムムヨートにあった塩田厚さんが開業していた日出薬局兼病院で、患者の診察をしていた。当時、サムムヨートには中国人が経営していた「ハーン・カイヤー・サムムヨート（サムムヨート薬局）」のタイ語の看板と、松尾齒科のペート・タムフワン・ジープン・チャンヌン（日本一等齒科医）のタイ語の看板と、HINODEと、英語で大きく書いた看板が二階に掛かっていた。下には別に漢字の看板が出ていた。

松尾忠彦さんと塩田さんの店は一軒おいた隣同士だった。塩田さんは酒が好きだった。仕事が終わると、三階で皆と酒を飲んで酔っ払って騒いでいた。塩田さんには息子さんがいて、当時、ソーイサップ（現サップ通り）にあった日本人学校に通っていた。彼の名前は覚えていないが、僕はいつも彼と一緒に遊んでいた。

母は時々シープラーヤー通りにあった花屋食堂へ連れて行ってくれた。花屋へ行くと、上松次雄さんが大きな声で、「正夫ちゃん、いらっしやい」と言って、美味しいお握りを握って食べさせてくれた。

その頃の花屋は、今の花屋の斜向かいにあった。母は花屋のほかにもバーンラックの先で慰安所をやっていたオロクおばさんの所や、ほかの所へも連れて行ってくれたが、当時のバンコクのこと

は、これぐらいしか覚えていない。

## ■貨物船でソクラー県へ

僕が4、5歳の頃だった。父は日出病院から手を引き、南タイのシンゴラ（ソクラー）県へ行くことに決め、荷物を纏め、親子3人でオリエンタル・ホテルの近くに停泊していた貨物船に乗船し、チャウプラヤー川の曲がりくねった川を下り、ソクラーへ向かって出航した。

パークナム（河口）を過ぎ、青々した海に出た頃から、船は緩やかに大きく上下左右に揺れ始めた。母は船に酔いゲーゲー吐き、ほとんど何も食べられず、船室のベッドの上でのびていた。

僕は父のお尻にくっついて歩き回った。父は、甲板に出て船員たちと楽しそうに話したりして、デッキから海の彼方を寂しそうな顔で眺めていた。恐らく潮岬の故郷のことでも思い出していたのではないかと思う。

船内に船員が飼っていた可愛い三毛猫がいた。僕はその猫を部屋に連れてきて、ブツブツ独り言を言いながら猫と戯れ遊び、夜寝るときも猫を抱いて眠った。

夜中にふと目が覚めた。船は途中で何処かの港に寄港し、明かりを光々と照らして、大きなクレンで、ガタゴトガタターンと、轟音をこだまさせて荷物を下ろしていた。

バンコクを発って3日目の朝、ソクラーのシンボルであるふたつ並んだ大きいコ・メウ（猫島）と、小さいコ・ヌーウ（鼠島）を通過し、サミラービーチを横切って内海にある小さな港の桟橋に到着した。

船から上陸してみると、其処は魚の匂いがプーンと鼻をつくごたごたした汚いソクラーの市場の近くだった。

父は、ワツ・ドーンラック（ドーンラック寺）の近くの角にあった白い大きな二階建ての洋館風の家を借りてローンモーオ・カイセイ（回生医院）を開業した。父は患者を診察しても、貧しい人からはお金を取らなかったもので、みんなから親しまれ、タイ人からは「モーオ・カイセイ」と呼ばれ、マレー系のイスラム人からは「ドクター・ジャラン、ジャラン」と呼ばれ、尊敬されていた。

我が家は北向きだったが、二階は四方に窓が付いたので、風通しがよく、涼しくて過ごしやすかった。真ん前の左角に苔むした塀に囲まれたドーンラック寺があった。

その塀の外側に、大きなこんもり茂ったポーの木（菩提樹）が聳っていた。其処から、500メートルほど先の同じ並びに、赤い煉瓦で囲まれた高い塀の中にソクラーの刑務所があった。

右手のペッキリー通りを歩いて10分もかからない所に、寂れた小さなソクラー駅と、直ぐ側に古ぼけたステーションホテルがあった。

西側の角には汚い木造建ての旅館があった。いつも綺麗に着飾った女性が窓際に集まって何か食べたり、喋ったりしていた。夜になると、サミラービーチの近くにあるカウ・タクワン（タクワン山）の灯台の灯りよく見えた。

その頃のソクラーには、娯楽と称するものは映画以外には何もなかった。ナコーンナイ通りに、

トタン屋根で出来た二階建てのみすばらしい古ぼけたバーン・ボン映画館があった。

階下の席は長椅子が並べてあるだけで、自由席になっていた。二階が二等席で、ちゃんと一人ずつ座れる、南京虫が一杯待機している木製のお粗末な堅い椅子が並んでいた。

その頭上に、長い綱がついている幅1メートル半、長さ3メートル程ある分厚い布が所々にぶらさがっていた。客が椅子に座ると、後ろの映写室の側に座って客を見張っている綱引き係りのおさんが、その綱の端を引っ張っては緩め、引っ張っては緩めてだらりと垂れ下がっている布をユラユラウラリと動かし、映画が終わるまで満遍なく繰り返し返して涼しい風を送ってくれた。

その頃の映画は洋画しかなく、カーウボーイが馬に乗って拳銃でパンパン、バンバン撃ち合っている西部劇や、チャリー・チャップリンの喜劇、それにターザンなどであった。

映画のプログラムが変わるたびに、家族全員で観に行っていたが、その頃の映画は無声映画だったので、舞台のスクリーンの下のみっこに5、6人の楽団がいて映画の場面を見ながら適当に演奏していた。

演奏と言っても指揮者がいるわけでもなく、ただ太鼓と喇叭とフルート、それにドラがあるくらいで、撃ち合いや、喧嘩が始まると、今まで静かに演奏していた音楽が急にテンポが速くなり、急ピッチでプードンドンドンと太鼓を打ちまくり、観客の気持ちを煽り立てる仕組みになっていた。

僕が約1万人の人口しかなかったソンクラへ渡ったのは4、5歳の頃だったと思うが、当初ソンクラにいた日本人は、父と歯医者をしていた久松さんと、茶碗屋をやっていた北文子さん家族、それに三井物産の駐在員しかいなかった。

だが、間もなくバンコクから滝川虎若夫妻と、西野智さんが前後して父を頼ってきて、我が家で一緒に暮らすようになった。西野さんは歯科医で、まだ独身だった。

滝川さんは医師だったがバンコクではどうしても医者の特権が取得できないために、ソンクラまで父を頼ってきたとのことだった。滝川さんには子供はなかったが、我が家は急に賑やかになった。

西野さんは下に部屋を仕切り、「西野歯科医院」を開業して歯の治療を始め、真面目にこつこつと仕事をしていた。1年ほど経った頃、西野さんは父の紹介でペナンへ見合いにゆき、そのまま結婚しておとなしいお嫁さんを連れて帰ってきた。我が家で結婚祝いをしてから間もなく、ソンクラの刑務所の前にあった二階建ての家を借りて引っ越していった。

我が家はまるで日本人のホテルか倶楽部みたいで、人の出入りが激しく、寝泊りする人も多かった。暇になると、ソンクラの日本人が我が家の二階の広間に集まり、花札合わせをしたり、ランプで七並べや、ポーカーなどを徹夜でやっていた。

ただ遊ぶだけではなく、マツチ棒を点数にして賭けていた。面白そうなので僕も遊びたかったが、「子供は遊ぶもんじゃないから」と言われ、僕はいつも一人だけ除け者にされていたので、みんなの後ろから見ただけだった。

そのうちに、花札の合わせ方やランプの遊び方、それに点数の数え方まで全部覚えてしまった。

しかし、誰も仲間に入れてくれなかったので、時々勝手にカードを出してきて一人で遊んで満足していた。

日曜日にはよくお弁当を作って、西野さんや、滝川さんたちと一緒に、松の木が生い茂っているサミラービーチへ行ったり、岩が多いカウセンヘピクニックに行ったりした。

僕はいつも一人で浜辺を走り回って蟹を追っかけまわしたり、小さな虫を探し求めたりして楽しんでた。僕は一人っ子だったので、大人の人たちと何処かへ行くときは、いつもみんなと離れて独り言を言いながら寂しく遊んでいた。

父は写真が好きだったので、何処かへ遊びに行くときは、いつも肩からカメラをぶら下げて歩き、時々僕の写真なども撮っていた。

父は暇になると、いつもサムムロー（三輪車）で何処かへ遊びに行ってしまう。父はサミラービーチの前の山の麓にある県庁の倶楽部へも行き、タイの友人と一緒に楽しそうに玉突きなどをしてた。僕も2、3回連れて行ってもらったことがあるが、其処はソクラーの上流社会であった。

僕はソクラーに来てからは、足を縛られて猿回しみたい引っぱりまわされることもなくなり、自由に羽を広げて飛び歩けるようになった。

しかし、いつまでも外で遊んでいて帰りが遅くなったりすると、母はカンカンに怒り、籐の鞭で、僕の体をとろかまわずビシッビシッと叩いた。太股にみみず腫れができたりして、「痛いようー痛いようー」とわめき、泣きながら逃げ回り、暗くなっても家の中に入れてくれなかったりした。

僕はまだ5歳ぐらいであったが子供心に、他の子供たちは親の膝にもたれて愛され、幸福そうにしているのに、僕だけはこうしてこんなに痛い思いをしなければならぬのであろうかと、悲観し、叩かれたときよりも一層悲しくなり、入口でしょんぼりして、澄んだ夜空に輝いている綺麗な星を見つめ、いつになったら戸を開けてくれるのかと、シクシク泣いていた。

## ■ソクラーの仲間

僕は、家にいるときは独りぼっちだったので、家に飼っていた雌犬のメーリーと遊んだり、ビー玉をゴロゴロころがして遊んだり、紙でいろんな形の飛行機を折って飛ばしたり、玩具で遊んだり、机の上でビー玉で玉突きをしたり、赤蟻と黒蟻を捕まえてきて喧嘩をさせたりしながら、一人でブツブツつぶやいて遊んでいた。

だが、不思議なことに、時々凄く孤独感に襲われて寂しくなることがあった。気が沈んだときは、いつも扉の影に隠れて、声を震わせてわけのわからない歌を歌いだすのだが、歌っているうちにこの世に捨てられ、独りぼっちにされたような気持ちになり、悲しくなって最後にはシクシク泣きだしてしまふのだった。

僕は釣りが好きだったので、気が向くと、家の裏に流れているクロオン（運河）へ小さな釣竿を持って釣りに出掛けた。プラモー（背中に棘が一杯ある黒い魚）プラーチョオン（雷魚）や、なまずがよく釣れた。

だが、釣れても自分で魚の口から釣り針を外すことができないので、魚が釣れるたびに、釣れた魚を家までブラブラぶら下げながら走ってきて釣り針を外してもらい、またクローンまで走ってゆき、ご飯を食べるのも忘れて釣りに熱中した。

その頃タイ人の友達も大勢でき、20人ぐらいの仲間と一緒に、裸足でワイワイ騒ぎながらソクラの町中を、鬼のように走り回っていた。木の股がY形になった手ごろな枝を見つけてパチンコを作り、鳥を打ちにいたり、お寺でかくれんぼをしたり、鬼ごっこをしたりして、朝から暗くなる頃まで外で遊び狂っていた。

こおろぎの時期になると、バケツに水を入れて、みんなで原っぱへこおろぎを捕りにいった。こおろぎの穴を見つけて穴の周囲を少し深めに掘り、水を流し込んで暫く待っていると、こおろぎが穴から這い出してきて水面にぼっかり浮きあがってくる。

こおろぎを捕るたびに、さて、今度は何かかと、こおろぎを物色した。こおろぎにはトーンデー（赤金）と、トーンダム（黒金）頭が黒と赤の二種類のおおろぎがいた。

捕れたこおろぎを缶に入れ、砂地に人差し指で指の太さの溝を掘り、両方の入口から雄のこおろぎを放して喧嘩をさせると、こおろぎは、お互いに大きな牙をむき出して噛みあい、負けたほうは後ろを向いて逃げ出し、勝ったほうのこおろぎは勝った、勝ったと、羽を震わせて「キーツ、キーツ」と歓声をあげて負けたほうのこおろぎを追い掛けまわす。

そこで、負けたほうのこおろぎを捕まえて、自分の髪の毛を一本引き抜き、こおろぎの首に引っ掛けてぐるぐる回し、目が回った頃合いを見計らって、また溝の穴の中に入れて喧嘩をさせた。

このほかにも、椰子の木が生い茂っている所へゆき、かぶと虫を捕まえてきて、かぶと虫のふたつの羽を前向きに折り、2匹のかぶと虫の羽を、羽と羽の間に差し込んで押しくらさせたり、地獄蟻を捕ってきて、どちらが先に砂の中に潜るか競争させたり、蟻地獄の巣に蟻を落とし、砂を掛けられて逃げ回っている蟻を、どちらの蟻地獄が先に退治するかと、興味深く見つめて楽しんだ。

そうかと思うと、みんなでお金を出し合って、爆竹を買い、たばこの空き缶で爆竹を被せておき、爆竹がパーンと爆発するたびに缶が空中に高く舞い上がるのを見て「うわーすごい」と歓声をあげて喜んだ。

時々サミラービーチへゆき、みんなで戦争ごっこをしたり、蟹を追っかけたり、網で小魚を掬ったりして遊んだが、飽きてくると、砂浜に落とし穴を掘り、みんなが木陰に隠れ、誰かが歩いてくると、息を殺して見守り、仕掛けた落とし穴に人が落ちると、みんな大喜びで、「やったー」と歓声をあげ、怒られる前にさっさと逃げ出してしまふのだが、実にスリルがあつて面白かつた。悪いこともし放題、実に好き勝手なことをして楽しみながらいたずらして遊びまわつた。

僕の悪友仲間には、ひよろつとした一番背の高いガキ大将格のプレームがいた。彼は非常に頭がよく、いつもいろんなゲームを考えだしては、みんなと遊んでいたが、のちに彼はタイの首相になったのである。

僕にとってソクラは天国であつた。学校へ行って勉強する必要もなく、何処へでも自由に行

けたし、何でもしたい放題、遊び放題、お腹が空けば家に帰ってきて好きなものをむしゃむしゃ食べて、また飛び出せばよかったし、お菓子が欲しくなれば、真ん中に穴の開いた1サタン銅貨をせびり、キヤラメルを買って5厘のお釣りを貰って満足していた。

夜でも「映画見たいよう」と言えば、誰かが映画館に連れて行ってくれたし、何か欲しい物があれば、父にねだれば何でも買ってもらえたし、何ひとつ不自由なく暮らせた。

ソンクラの潮風とともに明るくのびのびと飛び回って暮らしていた僕は、8歳のとき、バンコクの日本人学校から「日本人の子弟は義務教育を受けなければいけない」との通知により、急遽バンコクの日本人学校に入学することになった。

仲良しのガキ仲間とも別れを惜しみ、みんなに「ソンクラの友よ、さようなら」と言って別れを告げ、母と2人で、ハートヤイの駅からバンコク行きの急行列車に乗ったのは、1939年（昭和14）年4月末頃だった。

### ■新しい生活メナムホテル

バンコクに着いて初めにお世話になったのは、ニューロードの中央郵便局の前で茶碗屋を営んでいた藤島さんの店だった。其処で暫くお世話になり、間もなくスリヴォン通りにあった橋本さんが経営していたメナムホテルでお世話になることになった。

何も知らなかった僕は、このメナムホテルに預けられて日本人学校に通うことになるとは夢にも思っていなかったし、母もバンコクでずっと一緒に暮らすものとはばかり思っていた。だが、入学式の日、母に手を引かれて日本人学校に連れていかれ、入学式が終わった頃、母は「用事があるから」と言って、先に帰ってしまった。

学校からホテルに戻った僕は、母がいないのでそのうちに帰ってくるだろうと、呑気な気持ちで母の帰りを首を長くして待っていた。いくら待ってもなかなか帰ってこないで、僕は何となく心細くなり、寂しくなって、ホテルの入口にあるこんもりとした噴水が出ている築地の所で待つことにした。

薄暗くなっても母はついに戻ってこなかった。僕はとても悲しくなり、目に涙を溜めてシクシク泣きだしてしまい、築地の水の中で気持ちよさそうに泳いでいる綺麗な金魚の姿をいつまでも見つめていた。「アアア、綺麗な金魚、金魚になってスイスイ泳ぎたいなア」。

初めて独りぼっちにされた僕の生活は、その日から一変してしまった。まだ小さくて何も知らなかった僕だったけど、まず、何をするにも気兼ねしなければならぬことを自分自身で身に染み込むほど体験した。

何か欲しいものがあっても、何かをしたいと思っても、思うように自由にできないし、何も買ってもらえない惨めな身になってしまった。

メナムホテルには、痩せた橋本秀さんのおじさんと、威勢のいい太った橋本トノさんのおばさんと、一人娘のツタエちゃん、それに、まだ若いみっちゃん（松本道さん）と、ハツちゃん（木場ハ

ツ子さん)の5人家族だった。ホテルは本館と別館に分かれていて、長くいる人は別館に入っていた。

おばさんは凄いやり手で、一人でホテルの経営を切り回していた。メナムホテルのほかに、シロム大通りに面したクローンを渡った通りの市電が走っている所にも、バンコク食堂と、ナレー通りにも敷地の広い大きな池があるメナムホテルの新館を経営していた。

メナムホテルの玄関前に、広い庭があつてマンゴーの木が行儀よく並んでいた。そのマンゴーの木に可憐な顔をした白いチャニー(尾のない手長猿)が細長い鎖で繋がれてしょんぼりしていた。

僕は猿の顔を見つめているうちになんだか可哀想になつてしまい、毎日食べ物を持って猿に会いに行った。猿も徐々に僕に懐き、抱きついてくるようになり、そのうちに遠くにいる僕の姿を見ると、「ホーホーオツ」と呼ぶようになった。それからは猿と大の仲良しになり、僕が「ホーホーホー」と言うと、猿も口を尖らせて「ホーホーホーオ」と答えるようになった。

ホテルの裏には細長い池があつた。その池の中には大きな鰐が1匹放し飼いにされていた。池には魚も一杯いたので、僕は暇になるとそこで釣りをした。糸を垂らしていると、時々その鰐がすうつと目の前に浮かびあがつてきて小さな可愛い目でじつと僕を睨みつけるので、僕もじつと鰐と睨めっこなどして笑っていた。

或る日、鰐にやる餌を持ってきて放り投げてみると、細長い口を開けてパクリと食べてしまった。それ以来鰐は僕の顔を見ると、今度は鰐が口をあぐり開けて、餌を頂戴と、催促するようになり、知らん顔をしていると、いつまでも鋸のような大きな口を開けて待つようになった。鰐も馴れれば可愛いもので、手長猿や鰐とも仲良くなり、浚刺としたツタエちゃんとも仲良くなった。

別館に、ほっそりした枝をほびこらせた大きなドーク・チャムピーの木(チャムピーの花の木)が風に揺られてフラフラ踊っていた。そのチャムピーの木に、白い香りのいいチャムピーの花が一杯咲き乱れていた。

僕はこのチャムピーの木が好きで、寂しくなったりすると、木の梢まで登り、手ごろな枝に座つて、ザワザワ、サラサラ歌う木の葉の歌、風の音楽にリズムを合わせてゆうらゆうら揺れる枝にもたれ、心地よい気持ちで風の歌声に耳を傾け、すっきりした青空を眺め、懐かしい遠いソングラーの我が家のことを思い出して、いつまでも涙ぐんでいた。

本館の横の垣根のそばにも、鬱蒼と蔽い茂った大きなマカームの木(タマリンドの木)があつた。からからに乾いた細長い熟したマカームの実が一杯ブラブラぶら下がっていた。

木に登つてとつて食べてみると、甘くて美味しかった。このマカームの木の垣根の側のあばら小屋に、僕よりも少し大きいイスラムの男の子が住んでいた。僕が木の上でマカームをむしゃむしゃ食べていると、下から欲しそうな顔をして見上げていたので、マカームの実を投げてあげると、嬉しそうにして食べていた。

彼と遊びたいと思つたが、垣根が邪魔だったので、2人で垣根の柵のところをやつと体が潜り込

めるほどの穴を開けて、そこから出入りして遊ぶようになった。彼はヴィンと言う名前で、僕よりもみつつ年上だった。ヴィンは僕のことをマイチャンと呼び、お互いに仲良しになった。

メナムホテルで僕に与えられた部屋は、おばさんたちが使っている広い大部屋だった。部屋の入口に大きな箆笥があつて、布団や枕など寝具が入っていた。夜寝るときは大きな夏蚊帳を部屋一杯に吊つて、みんなで蚊帳の中に潜り込んで寝るのだが、おじさんはよく「プーップー」と、おならをして、時々出したおならを掌に包んで、僕やツタエちゃんに臭いおならを嗅がせるので、いつも「キヤッキヤー」悲鳴をあげて蚊帳の中で逃げ回っていた。

僕がメナムホテルに世話になつて一年ほど経つた或る日、南タイのロンピブーンから色の浅黒い養和嘉子ちゃんが日本人学校に入学するために、お父さんに手を引かれてメナムホテルにやつてきたので、僕たちのメンバーが一人増えて賑やかになった。

嘉子ちゃんもツタエちゃんも女だったので、別館で時々近所から清藤美奈子さん姉妹や、前田保子さんなどが遊びにきて、別館で人形遊びや、ままごと遊びなどに高じて遊んでいたが、僕もよく仲間に入れてもらつて皆と仲良く遊んでいた。

ツタエちゃんは我がままで、時々だをこねてお母さんや、アヤさんを困らせていたが、嘉子ちゃんも淑やかでおとなしく、いつも寂しそうな顔をしていた。嘉子ちゃんのお父さんは、時々田舎から土産物を持って嘉子ちゃんに面会にきていた。そのたびに嘉子ちゃんはこの嬉しそうで、お父さんと2人でどこかへ遊びに行つてしまう。

僕には誰も面会にこなかったし、差し入れもなかった。僕が時々物思いに耽つてしよんぼりしていると、小太りしたアチェー（中国語でお姉さん）が、僕を膝に乗せ、抱きしめて「正夫は可哀想だね」と言つて、慰めてくれた。僕はその優しい声に、目に涙を一杯溜めてアチェーの顔を見つめて、こっくりとうなずいた。

アチェーは、メナムホテルで洗濯、拭き掃除から台所の手伝いまでいろんな雑用を受け持つて切り回していた。彼女はバーシラック映画館の裏通りにあるごたごたした薄汚れた長屋に住んでいた。

彼女の家には、彼女と同じくメナムホテルでコックをしている海南島人の夫と、そのほか大勢の兄弟達と一緒に暮らしていた。

アチェーは、時々僕を自分の家へ連れてゆき、バーシラック映画館で西部劇映画を見せてくれたり、お菓子を買つてくれたりして、僕を大事にしてくれた。そのアチェーが或る日、僕が庭で手長猿と遊んでいると、「正夫、ちよつとこつちに来てごらん」と言うので、行つてみると、自分で縫つた真っ白い襟も袖もない女物のシャツを僕に着せてくれた。

それは女性用の洋服であつたかもしれない。だが、僕にとつては、このメナムホテルに来て以来まだ誰からも何も貰つたこともなかったし、自分で何かが欲しい、と思つても、どうにもならなかつただけに、アチェーの温かい気持ちに身に染みてとても嬉しかった。僕はただ一言「ありがとう」と言つただけで、声が詰まつてしまい、涙がどおとと溢れ出てしまった。

メナムホテルの隣に、色白の小太りした日本人のおばさんが経営していた、綺麗な娘が大勢いる



「宝亭」があった。宝亭の裏に雷魚が一杯いる池があった。僕はいつもヴェインの家の軒下で餌にするミミズや、おけらを捕って、宝亭の池へ釣りにゆき、大きな雷魚を何匹もつりあげた。

池には亀や蟹、それに真っ赤な雷魚の子や、真っ黒いなまずの子などが群れをなして、忙しそうに水面上がっては潜り、口をパクパクさせて呼吸しながらすいすい泳いでいた。

蟹なんかもよく捕まえたが、時々お腹に小さな子蟹を一杯抱いている親蟹を見つけたりした。そのときは、大きな空き缶の中に土と水を入れて、その中に蟹を入れて飼い、小さな豆粒ほどの子蟹が親蟹の背中に鈴なりに乗ったりして、ガサガサ動く姿を鑑賞して楽しんだ。

時々、宝亭の奥にある縁台に、若い綺麗な女の子たちが座って何かを食べている姿を見かけたりした。或る日のこと、宝亭のおばさんが、僕にお菓子とサイダーをご馳走してくれたので、喜んで食べていると、偶然みっちゃん（松本道）がやってきて、「おい、こらっ正夫ちゃんこんなところで何をしているんだっ！早く帰りなさいっ！」と、凄じい剣幕で叱られた。

僕にとっては何も悪いことなんかしていないのに、どうして叱られたのか、さっぱり分からなかった。だが、何も知らなかった僕は、食べかけのお菓子を残して、そのままメナムホテルへすっ飛んで帰った。

メナムホテルのおばさんは、たまに僕たち3人を連れて映画を観にいった。当時、一番よい映画館は、オデオンとチャローンクルン映画館しかなかった。映画を観に行くときは、ホテルの前に停まっているコーツという運ちゃんが運転していたタクシーを利用していった。タクシー代は、メナムホテルからチャローンクルン映画館までたった20サタンだった。

いつも映画を観終わってからラーチャヴォン通りにあるうどん屋へ行ってバーミーナム（黄色いラーメン）を食べてから、アイスクリームをご馳走になった。

僕にとって映画を観に行く日は、今日は何かおいしい物にありつけると、映画を観ながら頭の中で食べることを考えていた。僕は食べ物にはかなり飢えていた。お腹はよく減るし、あれも食べたい、これも食べたいと、食べたいものばかり、どんなにお腹の虫が泣き叫んだとしても、食事の時間までは水を飲んで我慢するかなかった。

一度、夕食のときに、あまりにもお腹がすいていたので、ご飯を茶碗で27杯も食べてしまい、ホテルのお客さんたちが食べるご飯が足りなくなってしまう、おばさんからガミガミ言われ、お目玉を頂戴したことがあった。

## ■バンコク日本人学校

僕がバンコク日本人学校に入学したのは、1939（昭和14）年5月、丁度僕が8歳のときだった。日本人学校から日本人の子は義務教育を受けなければならない、といった通知が舞い込み、僕は一年遅れで日本人学校に入ったのだが、両親は僕に関してあまり関心がなかったのかもしれない。

僕が日本人学校に入学した頃の日本人学校の正式名は、「盤谷日本尋常小学校」だった。だが、

昭和16年4月1日に、大日本帝国文部省発令により「盤谷日本国民学校」と改称された。

このバンコク日本人学校は、大正15年6月1日に、シープラー通りにあった日本人倶楽部内に設立され、16人(男13人、女3人)の初新入生を迎えて開校された学校である。その後、昭和7年7月に日本人倶楽部と一緒に、スリウオンとシープラー通りの間にあるソーイ・サップ(現サップ通り)に移転した。

大正15年9月に小林清平先生が初代校長として日本人学校に赴任され、昭和7年3月迄勤め、二代目の平良仲次郎校長が、昭和7年3月から昭和11年6月迄勤め、三代目の渡辺文人校長が、昭和11年6月から昭和15年8月迄勤められ、それ以降は金井純夫校長が終戦後の昭和21年9月30日付「外務省在外指定学校規則廃止」の発令が出される日まで校長を勤められた。

日本人倶楽部の名称は、僕が日本人学校に入学して間もなく「日本人会」と改称され、それ以来今日に至っている。

日本人会の建物は地下室があつて物置き場になっていた。一階は中二階みたいになっていて普通の二階建ての家より高く、階段を上がりきった一階の広い廊下の所に玉突き台が2台並んでいて、そこで会員の方が玉突きをして遊んでいた。

学校は日本人会館内の二階にあつた。広い廊下を真ん中に挟んで、大きい教室が一部屋と、小さい部屋が二部屋しかなかった。

僕は生まれてこの方まだ一度も何も習ったこともなく、初めてこの日本人学校で日本の学問、すなわち偉大なる神の国、大日本帝国軍国主義なる大和魂精神を無意識のうちに頭から叩き込まれることになった。

僕が入学した当初、学校の先生は渡辺文人校長、金井純夫先生、小泉貞先生と、それにタイ語を教えていたウライ先生を含めて4人だけだった。生徒も全校生で僅か27人(男14人、女13人)しかない寂しい学校だった。

学級も、複式で、一、二年が金井先生、三、四年が小泉先生で、五、六年を渡辺先生が指導していた。渡辺先生は怒ると、ビシビシ殴るのでみんなから敬遠され、「鬼先生」というあだ名がついていた。

僕が一年生のときの担任の先生は、優しい金井先生だった。先生から新しい教科書を配ってもらい、胸をわくわくさせて教科書を開いてみても、僕には何も分からなかった。

その頃の国語は片仮名からで、初めに「サイタ サイタ サクラガ サイタ」から習っていた。クラスの仲間はみんなすらすら読めるけど、悲しいかな僕だけは一字も読めなかった。足し算、引き算の意味すらも理解できなくて、先生を非常に困らせ、迷惑をかけてしまった。しかし、金井先生は親切に、僕が納得できるまで根気よく教えてくださった。おかげで少しは何とか読めるようになった。

僕がソングラーの我が家にいた頃は、ほとんど外でタイ人の友達と遊んでいたために、南のタイ語を覚えてしまい、家で日本語を話すときは簡単な日常会話しかしていなかったもので、バンコクにき

てから暫くの間タイ語もバンコクの標準語が分からず、日本語もチンブンカンブンで辛い思いをした。

僕は毎朝白いヘルメット帽を被り、学校の制服姿で、お弁当をランドセルの中に突っ込み、メナムホテルからソーイ・サップの学校まで歩いて通った。サムロー（ペダルを踏んで走る三輪車）に乗って通っていた人もいたが、サムローに乗れる人はいいなあ、と羨ましく思った。学校に入るときは、門の所で気を付けの姿勢でおじぎをしてから門を通り、板橋を渡って校内まで歩くようになっていた。

僕が一年生（昭和14年）のときのクラスメイトは、高塚泰子さん、清藤美奈子さん、許春子さん、洪瑟瑟さん、祭素真さん、祭健国君、池田實君、川井英一君と僕の9人で、男は4人しかいなかった。

僕たちは二年生と一緒に教室で勉強していた。二年生は5人だけで一番後ろの席に背の高いタイ人のソンバツ君がみんなと一緒に勉強していた。彼はいつ頃まで在学していたの覚えていないが、途中からいなくなってしまった。

初めの頃は全校生の人数も少なく何となく閑散としていただけに上級生とも仲良くなりみんなで鬼ごっこや、隠れんぼ、ドッチボール、バトミントン、縄跳び、石けり、水雷艇ごっこ、それに女の子の中に混じってお手玉や、あや取りなどもして遊んだ。

クラスメイトの中で僕は英一君や、實ちゃんと大の仲良しになりよく英一君の家や、實ちゃんの家へ遊びに行ったりした。

英一君はナレー通りに面した大きい洋館立ての家に住んでいた。英一君には姉の和子さんと、もう一人弟の雄二君がいる3人姉弟だった。両親も優しい人で僕にはとてもよくしてくださった。

彼とは、よく部屋の中で積み木をして遊んだ。裏の池に素晴らしく頭がよくて勇敢な大きなまがが一匹池の主みたいにして住んでいた。このなまが様はどんな餌を与えても食べないし、網を仕掛けても泥の中に潜ってしまっ出てこない。

生意気ななまが様は時々水面まで上がってきて小さな目で僕たちを睨み付けてからまたすうつと水中に潜ってしまう。手を水の中に入れて「パシヤパシヤ」やると、水中から魚雷のようにすつ飛んできて、ガブツと噛み付きにくるので、何とかして捕まえてやろうと思ひ、水面を「パシヤツパシヤツ」と叩いて飛び出してきたところを網でさつと掬おうと何回も試みたがだめだった。最後にその偉いなまが様に指を噛まれて痛い目に遭い「参った」と兜を脱ぎ、それ以来捕るのを諦めてしまった。

實ちゃんはナレー通りに近いスリヴオン通りの江畑洋行の倉庫がある広い屋敷内の大きな家に住んでいた。實ちゃんには妹の啓子ちゃんと、弟の弘君がいて、兄の敬一さんは日本で勉強するために帰国した後だった。

實ちゃんの家では広い大きな倉庫の中で隠れんぼをして遊んだ。裏は農園みたいになっていてチヨムプー、ファールン、プツサー、マカームなど、まだほかにもいろんな果物が一杯実っていたの

で、みんなで木に登って果物を取って食べた。りした。

或る日のこと、いつものようにみんなと一緒に果物を取っていたときだった。僕はプッサーの木に登り、梢の所までよじ登ってゆき、木の枝をざわざわ揺すって鈴なりに実っているプッサーの実を地面にポトポト落としていた真つ最中だった。アーアーなんと、枝がポッキリ折れてそのままへ墜落。

下でプッサーを拾っていた實ちゃんたちが「ヒヤー」と、声にならない悲鳴をあげて僕を凝視していた。だが、不思議なことに落ちてゆく次の瞬間に、僕の右手がいつの間にか途中にあった枝にしつかり掴まっていたので、下まで落ちないで助かった。それ以来友達から「手長猿」というありがたいあだ名を頂戴し、いまだにいろんな人から猿とか、手長猿と呼ばれている。

僕は寂びしくなると、サートーン通りにあった高橋尚美さん、春木康雄さん、鳥越次郎さん、川辺さんや、スリヴオン通りのトロカデロホテルの裏の横の小さなソイ（路地）にいた波多野喜美子さんと静子さん姉妹の上級生の家や、僕が一年生のときはまだ学校に入っていなかった新野充夫君、日高百合江さん、春木忠雄君の家などにも遊びに行っていた。

上級生には、僕が3歳のときにトウラン県でお父さんにお世話になった河原さんの兄妹の、河原錦二さんと蓮子さん兄弟もいたが、間もなく日本へ転向してしまった。

僕が二年生のときの担任の先生は、お淑やかな優しい金庭先生だった。一学期は二年生7人だけで、西側の運動場が見える教室でのんびり勉強した。だが、8月に渡辺校長が帰国したために、六年生2人が僕たちのクラスと一緒に勉強するようになった。

金井先生は9月から校長先生に栄転され、終戦後昭和21年9月30日まで校長先生を勤めていた。二学期に小泉先生もいなくなり、金井先生が一人で一、三、四、五と、四クラス教えていたので、さぞかし大変だったと思う。

学校の運動場の横に古ぼけたみすばらしい講堂があった。そこで時々映画を上映したり、学芸会をしたりした。学芸会と言っても、各クラスで何かを演出するのではなく全校生で劇をしたり、歌を歌ったりしていた。「動物の仲間」だったか何の劇だったのかよく覚えていないが、いろんな動物や、鳥が出てくる劇で川合和子さんが小鳥になって木の上でピーピー小鳥の鳴き真似をしていた。だが、劇が終わってから、和子さんが「木から降りられないよ助けてー」と泣きべそをかいていた。

学芸会では、時々渡辺幸治君と池田實君が猿の真似をしたりしていたが、それが非常にうまく、舌を上唇と歯の間に突っ込み、猿そのもののジェスチャーを披露し観客をゲラゲラ笑わせた。

何か祭りごとがあるたびに、講堂の傍にあった土俵で、北庄司さん、園山さん、日高秋雄（ひだかとしお）さんのおじさんたちがまわしをしめ、土俵に塩を撒いて「はっけよいのこったのこった」と、相撲をとっていた。

僕が初めて学校の運動会に参加したのは昭和15年5月1日だった。当時の運動会は生徒が少なかったの、学校と日本人会合同で、公使館邸の広い庭で行われていた。女の人は白いつばの広い布の帽子を被り、長袖の袖まで垂れ下がった長いワンピース姿で競技に高じ、みんなで一日わい

わい騒ぎ、お弁当などを食べて夕方までのんびりと寛いだ雰囲気で運動会を楽しんでいた。

僕が入学した昭和14（1939）年5月当初は小学校しかなかった。だが、幼稚園を、という、在留邦人の強い要望により、当時の日本公使館の力によって昭和15（1940）年9月2日に、金井純夫先生が園長、井斧トミさんが保母となり、12人の可愛い幼稚園児を迎えて「盤谷幼稚園」の開所式が行われた。タイの文部省に正式に登録された邦人にとって大事な日本人幼稚園が初めてバンコクに誕生した歴史に残る思い出深い日であった。

バンコク日本人学校は、僕が入学した頃は生徒も少なく、転入生もほとんどなかったが、2年後の昭和16（1941）年のはじめ頃から生徒が徐々に増えだし、教室が狭くなり、先生も足りなくなってきた。

昭和16（1941）年4月に宮脇良憲先生、宮脇アキエ先生、町田実先生と、3人の先生が台湾総統府新竹州から赴任してこられた。

宮脇先生には虹華さん、虹陽君、亜喜美さん、靖尚君と4人も子供がいたし、町田先生にも、成子さん、美佐子さん、干佳子さんと紀子さんと、やはり4人も姉妹がいたので、学校は急に活気ずき、学校の雰囲気もその日からがらっと変わってしまった。

学校の教室もいよいよ狭くなり、7月2日から日本人会館の正門を入った南側に二階建の木造校舎と、運動場の北側に先生たちの住む寮を建築することになった。

僕が3年生のときの担任の先生は、台湾から赴任してきたばかりの、太った眼鏡を掛けた厳しい宮脇先生だった。宮脇先生は国語、国史、終身、地理などの教え方が実にうまく、非常に興味深く飽きずに勉強できた。宮脇アキエ先生はとても優しい先生で裁縫や、音楽も教えていた。町田先生は鹿児島の人で体育のほうも担当していた。細い小さな優しい目をした先生で、一日中タバコをスパスパ吸っているヘビースモーカーでもあった。

一学校では毎朝全学校生が講堂に集まって朝礼をする仕来りになっていた。全員で東の宮城の方を向いて最敬礼をしてから、

#### 学校の児童誓詞

- 一、 天子様の体です 大事にします じょうぶにします
- 一、 今日も先生の教えをまもります 友達と仲良くいたします
- 一、 盤谷日本国民学校の生徒です 元気で正しく（ヨソ）の子供の手本になります

と、声を張り上げて唱え、タイの国家を歌い、ラジオ体操をしてから、並んで教室に入っていた。学校の休日は、

一、 新年

1月1日

紀元節

2月11日

神武天皇祭

4月3日

天長節

4月29日

- 春秋季皇霊祭 3月21日
- 神嘗祭 10月17日
- 明治節 11月3日
- 新嘗祭 11月23日
- 大正天皇祭 12月25日
- 二、日曜日
- 三、夏季休業日 4月2日より4月30日まで  
8月21日より8月31日まで
- 四、冬季休業日 12月26日より翌年1月7日まで
- 五、本校創立記念日 6月1日
- 六、泰国皇帝誕生日 9月20日
- 七、泰国革命記念日 6月24日
- 八、泰国憲法発布記念日 12月10日

勉強科目は大きく六科目に分かれていた。国民科が終身、国語、国史、地理の四科目で、理数科が算数と理科の二種目、体練科が体操と武道の二種目、芸能科が音楽、習字、図画、工作、裁縫、家事の六種目、実業科は項目のみで授業はなく、加設科にタイ語があった。

通信表の点の付け方は、優、良、可と区別されていた。ちなみに、昭和19（1944）年度の僕の通信表の成績を見ると、恥ずかしいかな、優は修身、国史、体操、武道、音楽とたったの五科目だけで、あとは全部良で頭を使う科目は全然だめだった。

しかし、今改めて自分のつまらない成績表を見てびっくりしているのだが、身体状況欄の栄養のところだけが可になっている。今思い出してみると、あの頃はよほど飢えていたのだなあと、思いあたる節がある。

学校での教育科目のほかに、毎年3月末、または4月はじめから10日間フワヒンで臨海学校があった。一年中でみんなが一番楽しみにしていた臨海学校だった。だが、夏休み（タイの夏休みは4月）になると、僕は一年と二年生のときに2回ともソングラーの我が家に帰っていたし、ほかも経済面やいろんな事情があつて6年間のあいだにフワヒンの臨海学校へは残念ながら一度しか行けなかった。

学校の授業時間は毎朝8時から午後3時頃までだった。日本語のほかにウライ先生が教えていたタイ語の時間が、週一回、1時間あった。このタイ語を一年から六年まで習ったのだが、タイ語の最初のページにあたるタイ語のアルファベット「コーカイ、コーオカイ」から始まって最後の終わりのページにあたる「ムーウ・ローン・ウツウツ・イーツイツ（豚がブーブー鳴く）までを習い終わると、また、はじめから「コーカイ、コーオカイ」と、スタートしなおして、毎年「コーカイ、コーオカイ」と6年間繰り返し、繰り返し後悔した次第である。

タイ語はこんなわけでウライ先生には悪いのだが、僕には全然勉強する気がなくいつも先生に叱

られ、物差しでビシビシ叩かれていたできの悪い弟子だった。

僕の好きな科目は音楽、理科、国史、終身、それとスポーツだった。歌は大好きでアキエ先生から習った唱歌はなんでも直ぐ覚えてしまった。楽譜や「ドレーミーファーソーラーシードー」を、臍の下から力を入れてはつきりと丸みのある声を出す発音の仕方なども学んだ。

僕はドレミファを覚えてから面白くなり、よく一人で「ドラーネーコーソーラーキーター、ドーシーターラーヨーカーシーベ」と、大きな声で歌っていたので、みんなから「正夫は頭が変になっちゃったんじゃないか」と、ゲラゲラ笑われていた。

学校では唱歌しか習っていなかったけど、レコードで聴く歌謡曲や流行歌も直ぐ覚え、よく口ずさんでいた。或る日、音楽の時間にアキエ先生がピアノ演奏「月光の曲」のレコードを、蓄音機に掛けて聴かせてくださった。僕はその「月光の曲」を聴いてからはクラシックの曲が好きになり、オペラまで好きになってしまった。

僕はハーモニカも好きで3歳の頃からハーモニカを「プープーピー」と、めっちゃめっちゃに吹いて遊んでいた。それが誰にも習ったわけでもないのにいつの間にかちゃんと吹けるようになっていた。

その頃学校でハーモニカを吹けるのは僕だけで、僕は友達の家へ遊びに行ったりしたときなどに、ハーモニカでいろんな曲を流し、みんなで歌を歌ったりして楽しんだ。

国語は読むのは好きだったが、書くほうはミズみたいにくねくねした字しか書けないので、苦手だった。ただ綴り方（今の作文）を書くのは好きだったので、何か作文を書いているときは僕の目は輝き、生き生きとしていた。或る時、宮脇先生から「正夫は綴り方を書かせるとうまいんだなあ」と、三重丸をもらい、褒められたことがあった。

国語の時間に、日本は神の国とか、天照大神、天の岩戸、神武天皇や、日本には神風が吹く話などを真面目に聴き、大日本帝国（当時ダイニッポンテイコクと習った）は神様の国なのかと思っていた。歴史や地理の時間にも天皇陛下は神様で、日本は神の国であるということなどを、実に素直に受け入れ、それを頭の中に叩き込まれた。

支那事変勃発のことも、悪魔の蒋介石とか、悪い支那人、チャンコロの言うことは信用できない。チャンコロは殺せと、教えられ、僕は「何だ！ 悪いチャンコロの奴め」と、本気で殺す気になっていた。

ソ連人のことを、日本に負けたロスケ、アメリカやイギリス人のことを、他国の領土を略奪する悪い赤鬼、青鬼ケートウと、軽蔑した言葉で呼び捨てにしていた。尻取りの中にも「ニッポンノノギサンガ ガイセンス スズメメジロ ロシヤ ヤバンコク クロバトキ キンノタマ マケテニゲルハ シナノ チャンチャンボウ ボウデタタクハ イヌゴロシ シーベリヤ……」と、僕たちはこの尻取りの意味も何も考えないで面白おかしく笑いながら何回も繰り返して遊んでいた。

終身では、一番はじめに教育勅語「朕維フニ我が皇祖皇宗国を肇ムルコト広ニ……」と、難しいあまり意味のわからない長い勅語を、試験にまで出され、辛いやな思いをして暗記しなければな

らなかつた。

教育以外の……忠、孝、愛、慈悲、忍耐、協力、助け合い、善、悪、罪、義理、人情、道德、責任、社会問題など、様々な分野に渡って指導を受けたこの終身教育は、僕が辿ってきた自分の人生行路にとって、身のためになるかけがえのない実により教育を施してもらったと、今でも心から感謝している。

町田先生はさすがにスポーツのエキスパートだった。僕は町田先生から剣道、柔道、相撲、弓、バスケットボール、バレーボール、サッカー、バトミントン、野球、水泳と、何でも習い、どんなに激しいハードな訓練にも耐え、すべてを覚えこみ、自分の身につけてしまった。

僕は走ったりするのは速く、一、二を争っていたが、柔道や相撲は全然だめでいつもみんなから投げ飛ばされていた。負けたんびに、町田先生から正夫ではなく「正子」と呼ばれ、先生から「ゴツーン」と拳骨をもらって、悔し涙を流していた。

だが、だんだんと要領を覚えて強くなった。柔道の練習のときなど、講堂の端から端までを、でんぐりがえりで前へ進むときは両手を床につき、頭をさげてゴロゴロ前へ転がってゆき、帰りは逆にお尻から後ろ向きに回転しながら戻った。これを連続で、てきぱきと素早く回転しなければならなかつた。それも前向きに回るのは簡単だが、後ろ向きに尻上がりに回るのは難しく、なかなか回転できなくて苦労した。

剣道は、僕自身がもともと身軽だったので、難なく覚えた。はじめは弱かつたが、そのうちに上級生にも負けないようになった。時々5人抜き勝負をやらされて、ヘトヘトになりながらも、何とか勝てるようになった。

一度、町田先生と勝負をしていた真つ最中に、僕の頭に巻いていた手ぬぐいが顔にずれ落ちてきて前が見えなくなり、先生に「おめーん、どー、小手、突きっ」と、容赦なく打ち込まれた。

僕も歯を食いしばって「エイッ、ヤー、おめーん、どー」と、盲滅法に立ち向かつた。だが、空振りばかりで、逆に先生から頭を力一杯「バシッ、バシッ」とこれでもか、これでもかと、続けさまに打ち込まれっぱなしで、「何を糞っ」と、悔しい思いをし、負けじ魂を叩き込まれた。お陰でそれ以来めきめきと強くなった。

僕は町田先生から詩吟や剣舞も習った。詩吟では木剣を腰に差し、扇子を持って「ベンセイシユクシユクー ヨルツカワヲーオ ワタルー イコンナリヤー ジューネン イツケンオーオ ミガクー リューセイイ コーセイイ チョーダーオ イッスー」と詠んで舞った。僕は剣道も剣舞も好きになり、よく一人で木剣を振り回して、腕が痛くなるまでビシッビシッと、ハードな練習を重ねた。

## ■父は特務機関だった

7月はじめに着工された待ちに待った待望の二階建ての新校舎は、11月23日に完成したので、僕たちは日本人会館から新しい広い校舎に移ることになった。校舎の二階には立派な舞台もあった。



新校舎落成式を記念して、祝賀学芸会と、展覧会が開催された。

この学芸会の日、僕は渡辺幸治君と二人で、楠正成と正行の「桜井の別れ」に出演することになっていった。二人とも羽織り袴に鉢巻をしめ、鎧姿で、心は浮き浮き弾んでいた。僕が父役の正成、幸治君が子役の正行の役を、

「青葉しげる 桜井の 里の別れの 夕まぐれ このしたかげに

駒止めて 世の行く末を つくづくと しのぶよいの 袖のうえに

散るは涙か はた露か……」

の歌声の流れに、二人で呼吸をあわせて、しずしずと剣舞を演じて大喝采を受けた。町田先生もよくなってきたと、喜んでくださり、とても嬉しかった思い出深いひと時であった。

丁度学芸会があった11月23日の日に、珍しく父が見にきていて、金井先生や知人と何か話しかっていた。僕が父に会ったのは学芸会が始まるちょっと前だったが、そのとき父は「今とても忙しいんだ」と言っただけで、父が一体何の用事でバンコクに出てきたのか、何処に泊まっているのか、いつソングラーへ帰るかすらも教えてくれなかった。

帰りは父と一緒に帰れるものと思い、胸をワクワクさせて、楽しみにしていた僕だった。終わりの時間になり、大急ぎで後片付けを済ませてから飛び出してきた僕は、校内を走り、父を探し回った。だが、父はすでに帰った後だったので、僕は急に気が抜けてがっかりしてしまった。

今日こそは父におごってもらい、たらふく食べてから、あれも買ってもらおう、これも買ってもらおうと思っていただけに、何だか父に裏切られ「正夫は邪魔だから」と、捨てられたような気がして悲しくなり、目に涙を一杯溜めて、一人で物思いに耽りながらメナムホテルまでトボトボ歩いて帰った。僕がバンコクで父に会えたのは後にも先にも今回がはじめてで、最後だった。

父の表看板は『ローンモーカイセー（回生医院）』の医師だったが、実際には日本軍の特務機関をしていたスパイだったのである。丁度僕が小学二年生に進学した年の1940（昭和15）年4月の夏休みに懐かしいソングラーの我が家に一時帰朝したときだった。我が家は一年前よりも活気づき、日本公の使館員の人や、私服の軍部関係の幹部の人たちの出入りが多く、いつも誰か数人の人たちが我が家で寝泊りしていた。

父も忙しそう、早朝から何処へ行くのか、時々、1日いなくなることもあった。或る日のこと、父は「海に釣りに行こう」と、僕を誘ってくれた。父は知人からボートを借りきり、ソングラーの湖の船着場から自分でボートを運転し、綺麗なサミラービーチが見えるコ・メーウ（猫島）、コ・ヌー（鼠島）から南に下がったタイの空軍の基地があったカウセン周辺など広範囲に渡ってボートを停め、停めてはまた動かしながら、釣り糸を垂らしていた。

僕は直ぐ釣竿を取り出し、釣り針に餌を付けて魚を釣り始めた。魚がよく釣れるので暫く夢中になって釣っているのだが、ふと気がついて父を振り返ってみると、父はまだ一匹も釣っていないかった。

何だか変だなあと、思ってよく見ると、父の釣り糸には1メートル置きに目印があって、釣り針の所には大きな重りがひとつ結んであるだけだった。父はその重りを海の底まで沈めて海の深さ

を測ってノートに書き込んでいた。

僕は父は何を調べているのだろうか、不思議に思い「お父さん何をしているの」と、問い質すと、父は「どの辺に大きな魚がいるのか調べているのさ」と、ニヤニヤ笑っていた。

ソククラーの内海にあたる湖に面した所に三井物産の会社があった。4、5人いた駐在員の中に小太りした愛嬌のいい父と親しかった高橋健（松島とも子の父で終戦後シベリアの抑留所で死亡）さんがいた。父はよく船をチャーターして、高橋さんの家族と一緒にソククラーの湖（タイで一番大きな湖で、北はナラティワート県、西はパッタラン県まで伸びている湖である）に無数に点在している島巡りを何回も試みた。大きな島には必ず寄り、上陸して島内を歩き回り、清水などが湧いている所があると、その水を瓶に詰めて持ち帰っていた。

僕は1941（昭和16）年の3月中頃にも、一ヶ月の予定でツタエちゃんと一緒に我が家に戻っている。そのときも、父はあっちこっちへ連れて行ってくれた。ソククラーから汽車でパッタニー県（ここでは誰を訪ねて行ったのか覚えていない）や、ヤラー県にいた鍋島さんの家へも遊びに行き、泊めてもらった。ナラティワート県のバーンナラーで医者をしていた芝儀一さんの家にも行き、2日泊めてもらった。父は芝さんの家の裏庭で4、5人の日本人とビールを飲みながら何か話し合っていた。

1941（昭和16）年3月頃だったが、4月にソククラーに日本の領事館を開設することになった。ソククラーの事情に詳しい父が世話役で、海岸に近い周辺の借家を捜し歩き、英国領事館と、サミラービーチに近い灯台の傍の野生の猿が一杯いるシースター通りに面した敷地の広い二階建てのシーサムラーンホテルを借りて、突貫工事で綺麗に改造し、4月1日に、マレー半島に近いソククラーに公式に日本領事館が開設された。

開所式の日は、中国から着任した中国通の剣道四段の勝野敏夫領事だった。勝野領事の招聘により、バンコクからは公使館から浅田領事、天田六郎領事、西野順次郎書記官、それに地元の南タイ近県に移住していた約30名の邦人が参列した。

晩餐会はサミラービーチが一望できる浜辺の公会堂で開催され、ソククラーのオルダム英国領事を筆頭に、邦人、地元の華僑やタイの高官を含めて約300名が集まり、盛大なパーティーが開かれた。

ソククラーに日本の領事館ができてからは、父はよく勝野領事と一緒に歩き回っていた。勝野領事は我が家にもちよくちよく来ていたし、父も頻繁に領事館に足を向けていた。僕も時々一緒に連れて行ってもらい、領事館の広い屋敷内を走り回って遊んだ。領事館の裏には別館があり、そこにはすでに若い職員が住んでいた。

時々我が家で勝野領事以下数人の人たちが集まって酒盛りをしていた。勝野領事は凄い酒飲みで酔っ払ったりすると、大きな声で歌っていた。父はギターを弾いたり、尺八を吹き、みんなて手を叩いて盥回しにして歌を歌ったりしていた。僕も時々父に呼ばれて唱歌を歌ったり、ハーモニカを吹いたりした。

父と勝野領事は名コンビで、いつも何処へ行くにも金魚のうんこみたいにくっついて歩いていった。そのうちに日本人のあいだでは、いつのまにか誰言うもなく「ソンクラー」へ行けば、大虎（勝野領事）小虎（父）の声がする」と、二人の名前は一躍有名になっていた。

夏休みも終わりに近い或る日、僕は一人でサミラービーチへお別れに行った。松林が風に打たれてザワザワ騒いでいた。遠浅で綺麗なサミラービーチ、その向こうにコ・メーウとコ・ヌーウが荒波にさらされていた。素足で砂浜を歩くと、真つ白い砂がキュッキュッと足元で囁き、またおいでね、と、こまねいていた。

またいつ訪れるかわからないけれど、今日はお別れの日。心地よい潮風を胸いっぱい吸い込み過去を思いだす。まださようなら、と言いたくはないけれど、離別しなければならぬ辛い身、美しいサミラービーチをふり返り、さようならと涙ぐみ、やるせない気持ちを胸に秘め、そよ風に送られて静かに立ち去った。

## ■戦争と平和の分岐点

父はマレー半島をおよそ7年間転々と歩き回っていただけであって、英語もマレー語もかなり話せた。タイ語はずっと南タイのプーケツやソンクラーにいたために、南タイ訛りのタイ語しか話せなかった。

義理の母はどちらかと言うと、言葉の面では父より上手だった。まず、上海語、福建語、マレー語、インドのタミール語と、タイ語ができた。したがって、2人とも言葉の面では不自由なく何処へ行っても困らなかつた。

時々、警察や裁判所で困った日本人たちに通訳をしてあげたりして便宜を計っていたようである。第二次大戦中一躍有名になったハリマオ（子分が約300いたマレーの虎だった谷豊さん）、谷豊さんがまだ戦争が始まる前に、ソンクラーの国境でタイの警官に逮捕されて警察の豚箱に放り込まれていたときも、父が警察署長と交渉して彼を釈放している。

父はいつ頃から日本軍のスパイ活動を始めたのか定かでない。現にソンクラーで海水の深さを測っていて僕に見破られたときですら、僕には真実を教えてくれなかつた。

父が日本の特務機関の活動を始めたのは、恐らく日本軍が南方に目を向けた頃からではないかと思う。バンコクの日出病院に勤めていた父が急にシンゴラ（ソンクラー県）に引越し、金もなかつた父が目抜き通りに二階建ての大きな洋館式の家を借りて回生医院を開業した。だが、実際に陰で父をバックアップしてくれたのは誰だったのか。

日本軍が一時南方に眼を向けたのは昭和の初期、昭和5年頃だった。が、実際に目を向けたのは昭和14年頃からだつた。

日本は日露戦争で当初からソ連、中国を重視して中国大陆を略奪しようとして企んでいた。日露戦争で苦戦した日本は、米英の援助によってやっとの思いでロシアが獲得していた満鉄の所有権などを含め、満州の利権をロシアから奪い取り、関東軍を満州に進駐させ、満州をも含め、本格的に中国

大陸を狙うようになった。

大日本帝国陸軍関東軍は、自国の政府の指示すらも聞き入れず、常に勝手に武力行動を起こしていた。1931（昭和6）年9月18日の夜、満州に駐屯していた関東軍の策略により、奉天北方の柳条溝で満鉄線路を爆発し満州事変を引き起こし、満州を制圧し、日本の希望通りに満州帝国を築き上げ、日本の傀儡国としてしまった。

満州事変勃発後、中国の日本に対する反日感情は日増しに高まり、日本人に対する反日運動は、中国大陸から東南アジア諸国およびアメリカのオレゴン州、ニューヨーク、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、シアトルにまでも拡大し、暴動で中国人の手によって邦人が殺害される事件まで発生した。

1932（昭和7）年1月28日、関東軍の工作によって、上海事変が勃発し、戦火は徐々に中国大陸へと拡大する一方だった。1937年（昭和12）年7月7日の深夜蘆溝橋事件が起こり、中国軍と血みどろな戦闘が続き、支那事変へと化した。

1939（昭和14）年9月1日、西欧州でヒトラーのナチドイツ軍は突如としてポーランドを占領してしまった。9月3日、イギリスとフランスはドイツに宣戦布告したが、このドイツ軍のポーランド進撃がきっかけで、欧州大戦が勃発し、第2次世界大戦のはじまりで、戦火はやがて欧州全土へと拡大していった。

ドイツ軍の本格的なイギリス本土空襲が激化し、当初はドイツ軍の勝利に帰した。日本はドイツがイギリスに勝つと見込み、日独伊三国同盟を結び、南方作戦の時期が来るのを待っていた。

日本は支那事変以来、蒋介石の中国国民党軍並びに毛沢東の中国共産党ゲリラ部隊に悩まされ、中国戦線の冷たい荒野の泥沼に釘付けにされたまま埒のあかない多大な犠牲者を出し、いつ終わるとも知れない戦闘を繰り返していた。

蒋介石は重慶でアメリカ並びに海外華僑からの武器援助を得て、中国大陸の領土を一步でも日本軍に侵略されないように必死に死守していた。

日本軍は次々と中国への補給ルートを切断し、1939（昭和14）年の末頃に中国に補給できるルートは、仏印のハイフォンの鉄道ルートと、ビルマのラシオの道路ルートだけしか残っていなかった。

仏印の蒋介石補給ルート遮断並びに、南方作戦の戦略基地を狙っていた日本は1940（昭和15）年9月22日、日本はフランスのヴィシー政府を軍の圧力により、北部仏印へ日本軍の駐屯地に同意させ、1941年（昭和16）年7月23日に、更に南部仏印の共同防衛を宣言させ、日本軍は平和進駐と称し、最後に全土を占領してしまったのである。

日本軍は25軍を北部地区のハノイ、ハイドン、ハイフォン、パクニン、セツパゴードに、近衛師団を南部地方のナトラン、シエムリアップ、プノンペン、カンポット、サイゴン、ツドウモ、ビエンホア、サンジャック、ミイトイに進駐させ、プノンペン、シエムリアップ、ビエンポア、ソーラン、ニュートラン、サイゴン、コンボンクーナン、ソクトラン、コンポントラツシュ、クラコー

ル並びに、タケオに2ヶ所、フーコック島にも2ヶ所計14ヶ所を空軍基地とし、ハノイ港とカムラン港を海軍基地として配備し、陸海空軍とも着々と南方作戦の準備を進めていた。

アメリカは第一次世界大戦以来国際連盟に加入していた日本が参戦したにもかかわらず、東南アジアで米英ソの列強国と肩を並べ始めた日本を軽視し、あらゆる方面で圧力をかけるようになった。

日本は日本が傀儡国とした満州国を承認すれば、9カ国条約の違反になり、アメリカとの国際連盟関係が悪化し、ジュネーブ19ヶ国の国際連盟の反対に遭うのを百も承知で、関東軍の軍事力に押されて「満州国」を承認したために、国際連盟から反対された日本は、自国の進路を破棄する行為を取り、国際連盟から脱退してしまった。

満州、中国、仏印地区に侵略していた日本の軍事行動に不満を抱いていたアメリカは、日本に対し、日本が自滅する方針を立て日本主力艦隊の制限、アメリカへの移民禁止、原油ならびに、国際経済の閉鎖、海外資産の凍結など様々な面で圧迫政権を強いた。米英連盟諸国から重圧を加えられた物資不足の日本は、石油並びに膨大な物資を南方から求めなければならない窮地に追い詰められてしまった。

米英も日本軍のインドシナ進出を重視し、戦争は避けられぬものと見込み、アメリカはフィリピンの軍事基地の強化。イギリスもシンガポール要塞の強化及びマレー半島の基地構築などに着手し、戦闘態勢を整えつつあった。しかし、アメリカの本心は戦争をする気はなく、できれば大戦を避けたい意志だった。

大日本帝国は、アメリカに日本の暗号を解読されていたとは露知らず、野村大使に暗号電を打ち、糞真面目な顔をして日米打開策交渉を続け、陰では対米英蘭作戦の準備を進めていた。

1941(昭和16)年10月2日、米國務長官コーデル・ハルから「日米首脳会談拒絶、中国、インドシナから日本軍の前面撤兵、日独伊三国実条約の破棄」と、アメリカ政府の無理な要求を手にした。

慌てた日本は再三日米外交交渉を進めたが、埒が開かず、1941(昭和16)年11月26日、日本政府はさらにハル長官から「日独伊三国条約破棄、日・米・英・ソ・中・タイとの不可侵条約の締結、中国・仏印から日本軍の前面撤退、蒋介石の国民党を中国政府と認めること」と、宣言したハルノートを受け取った。

だが、それは日本にとって、どうしても受け入れられない条件であった。わずか数人の指導者によって戦争と平和のいずれの道を選ぶかという、日本国民の運命を決定する大事な分岐点であった。だが大本营は、12月2日午後2時40分に海軍宛に「ニイタカヤマノボレ」、陸軍には「ヒノデハヤマガタトス」の、12月8日開戦の暗号を発信し、12月4日には各部隊は目的地向かって行動を起こしていたのである。

丁度日本軍が太平洋戦争の火蓋を切ろうとしていた12月7日の朝、アメリカのルーズベルト大統領から日本の天皇陛下宛に親電が届いた。だが残念なるかな、すでに12月4日、南方作戦行動を起こしていた日本軍は、アメリカを馬鹿にし、傲慢になりきっていた無敵陸軍の圧力も伴い、大

日本帝国が取った方針は、穏便に手を引く平和行為ではなく、一億人の同胞並びに連盟諸国や罪もない東南アジアの人々を、悲惨な戦火の渦に巻き込もうとする戦争行為であった。およそ一年分の補給力しかない日本は、資源豊かな巨大な国、アメリカおよび連合諸国を相手に勝ち目のない太平洋戦争を挑もうと勇み立っていた。

## ■ピブーン首相の華僑対策

僕がまだ世界の情勢もなにも知らないでソクラートの潮風と戯れ、自由に飛び回ってはしゃいでいた頃、日本は相変わらず中国といつ果てるとも知れない血みどろな戦闘を続けていた。

1939（昭和14）僕が日本人学校に入学した当時、タイ政府の首相はルワン・ピブーン・ソクラーム大佐（ピブーンは1941年7月28日元帥となる）であった。

1897（明治30）年7月14日ソタブリイ県のドリヤン園で生まれたピブーン首相の両親はタイ人であった。だが祖父は中国人であり、ピブーン首相も中国人の血を引いていたにもかかわらず首相はもの凄く中国人嫌いであった。

中国で支那事変が勃発した後、タイで経済力を握っていた愛国心に燃えた華僑は、ヤワラーにあった在外華僑秘密結社地下組織を通し、膨大な抗日戦軍資金を、現金あるいは武器に変え、世界各地に支部を持っていた青幫、紅幫並びにマニラの秘密結社紅門党の紅門会および、香港に本部があった中国政府の受け入れ先、西南運輸会社を通し、武器弾薬をせせと蒋介石の国民政府軍に送っていた。

満州事変以来ずっとそうであったが、当時は中国内部で日本との戦いに伴い、安全な地を海外に探し求めていた中国人は、中国大陸に名残を残し、天秤棒一本だけを担ぎ、ジャンク船や中国船に飛び乗り、タイにもどんどん出稼ぎにきていた。

その数は、タイ在住の華僑をも含め、およそ300万人に上っていた。タイに入国した華僑はタイの田舎の隅々までも侵入し、場所によってはアンジー（暴力団）の組織まで築き、売春宿や賭博場、それに阿片窟などを管理し、タイ人から一般の商売や職業までもとりあげてしまった。

このほか大手の資本家は、米、ゴム、森林、鉱山、船舶、輸出入、それに様々な利権まで奪い取り、華僑の経済力および権限をタイ全土にはびこらせていた。

こうした国内の華僑の動きに対する対策と、世界大戦が起こるのを予測し、世界情勢の緊迫感を重視し、いかにして外敵からタイの平和と独立を守るかに没頭していた愛国心に燃えたピブーン首相は、1939（昭和14）年6月24日の立憲革命を記念して、国名を「サヤーム（シヤム）」から「タイ国」と改称した。だが終戦後、タイはイギリスの圧力により、1945（昭和20）年9月2日にまた元の「サヤーム」に変更した。だが更に1949年5月11日、国号を「タイ国」英語で「THAILAND」と改称し、今日に至っている。

ピブーン首相は、1939（昭和14）年12月10日、タイはいかなる事情にかかわらず、あくまでも「厳正中立を守る」と世界に表明し、1940（昭和15）年8月29日、タイの正月を

4月1日から「1月1日」と、西洋式に変更し、文化、経済、国造りを施し、タイ国民にラッタニヨム（愛国心）運動を起こした。

このほかにも、「タイの国旗を地面に敷いて食事をするな」、「外出するときは、男はズボンとシャツを着用して靴を敷くこと」（当時のタイ人は女はサロン、男はパーカマーを腰に巻き、上半身裸のまま裸足で外をぶらぶら歩いていた）、「マークを食べるな」（マークは檳榔樹の実で、昔タイの女の人たちが檳榔樹の赤い実と石灰をプーの葉に包みんで、グシャグシャ噛みしめて、赤い食べかすを何処にでもペッペと吐き捨てていた。マークを食べると歯が赤黒くなるので、食べたあとマークの皮で歯を磨いた。マークの皮で歯を磨くと、歯が白くなり、マークの実を食べると虫歯にならないそうである）。

このほかに「映画館で映画を観終わったら、国王賛美歌の曲が終わるまで起立すること」、現在も実行されているが、今は映画が始まる前に国王賛美歌を流している。理由は映画が終わってからだと、終わる寸前に帰る人が増えたためである。

「朝夕8時と6時も国歌が聞こえたら、起立すること」と、布令が出ているので、その時間になると、国営ラジオで全国に国歌を流し、外にいる人たちは起立し、走っている車も全部停まって国旗掲揚をしなければならなかった。

この布令はタイ国民の義務とされたが、華僑に対する弾圧の一手段でもあった。午前8時と午後6時の国家放送は、現在も実行されているが、車は停まらなくなった。歩道で歩いている人も起立しなくなった。しかし、BTSの駅や病院などでは国歌放送の時間になると、ラジオやテレビのリズムをアップして流し、全員の動作が急にストップして、タイムスリップみたいに起立している姿に直面する。

ピブーン首相は華僑の同化政権を強化1938年から1940年（昭和13年から15年）のあいだに、まずタイ全国にあった中国の学校242校を強制閉鎖し、華僑の子弟をタイの学校に通わせ、タイ語でタイ語の教育と仏教を施した。

華字紙の新聞も「新中原報」一紙以外は全部廃刊にされてしまった。華僑が牛耳っていたタイの経済を、タイ国籍を取得している者のみの職業とし、タイ人の手にゆだねるべく、サムロー（三輪車）引き、運転手、押し車で売り歩く（アイスクャンデー、ラーメン、炭、豚など……）毛物売り、理髪業など47種にのぼる外国人職業規制を公布した。

それに道路、橋、鉄橋の入札は、外国人にやらせないようにし、すでに工事中の物はキャンセルさせ、政府自身の手で補わせた。森林や鉱山などの利権も期限が切れると同時にタイ人の手に復帰させ、タイ人自身の手による経済復興を計った。

1941（昭和16）年3月から9月にかけてロップリー、プラチンブリー、サタヒーブ、ナコーン・ラーチャシーマー（コーラート）、ウボン県を外国人禁止地区とし、90日以内に立ち退かなければならない、立ち退き命令が出され、そこに住んでいた窮地に追い詰められた可哀想な華僑は、泣く泣くその地を立ち去らなければならなかった。

しかし、一時途方にくれて困ったしたたかな華僑は、独裁者であるピブーン首相にどんなに虐められてもへこたれなかった。華僑たちは、ゆとりのある者が困った同志を助け、協力し、勤勉に働き、タイと中国名を持ちタイの地にじつくりと根を張り、商魂逞しく現在のタイ経済並びに政治力を築きあげ、タイ全土を自分たちの第二の故郷にしてしまったのである。

## ■タイ・フランスと国境紛争

タイ国自体もフランスとカンボジア国境紛争を抱えていたが、これがこじれたために、1940（昭和15）年11月に入ってからタイ・カンボジア国境で両軍の小競り合いが始まった。こればかりきっかけで、ピブーン首相は国王から最高司令官に任命され、フランスとの戦いに指揮を執ることになった。

タイはフランス領内を爆撃したが、フランスもタイの国境地帯に30数回に渡り空爆を繰り返して1940（昭和15）年11月28日午前8時、フランス機5機が越境し、タイのナコーンパノム県を爆撃し、市民6人が死傷する惨事が発生した。

フランスは更に1941（昭和16）年1月4日にアランヤプラテートも攻撃したため、タイは1月7日フランスに対して宣戦布告をし、本格的な戦闘を開始した。

怒ったタイの軍隊は勢いに乗じて越境し、仏印領内に突入し、凄い激戦となった。勇敢に戦ったタイ軍は各地で戦果をあげた。パヤーブ部隊はチャンセーンの真ん前にあるルワン・プラバーンの右手を占領し、イサーンのウボン部隊はナコーン・チャンパーサクを占領し、スリン部隊はシヤムラート県とサームローンとチョンコンを占領し、プラパー部隊はシーソーポーンから17キロ離れた西シーソーポーン地区を占領し、チャンタブリー部隊はパイリンの西側にあたるクムリヤン村とフワイカメン村を占領した。

はじめの頃はタイが有利であったが、フランスに外人部隊の応援が到着して以来戦況は逆転し、タイは1月中旬頃から苦戦状態に陥った。

一方、1941（昭和16）年1月17日の朝6時、チャンタブリー県のチャーン島沖付近でもタイ海軍3隻と、フランス海軍潜水艦を含む9隻との海戦があった。

フランスの巡洋艦ラモット・ピケ号9350トンは砲火に見舞われて炎上し、敗走した。しかし、タイもチョンブリー号とソクラー号各々480トンは2隻とも炎上し、撃沈された。

旗艦トンブリー号2200トンも大破したが、味方の空軍機の誤爆を受けたために、トンブリー号も午後フランス艦隊に気づかれぬままチャーン島付近の島影で沈没したのである。タイの海軍はトンブリー号旗艦を含め、いっぺんに3隻の軍艦を撃沈され、痛切な打撃を受けたのである。

タイは日本に泣きつき、フランスとの仲裁役を依頼した。フランスは当時の日本軍の圧力もあって1941（昭和16）年1月28日サイゴン港に停泊していた（名寄）艦上で停戦協定が調印され、タイは同年3月想像もしていなかったルワン・プラバーン（メコン河の右岸のみ）、チャムパーサク、シエムリアップ並びに、プラタポーン（バツタンバン）の4県をフランスから返還しても



らった。

タイは日本に借りができたおかげで、今まで誰も承認しなかった満州傀儡国を認めなければならない羽目となった。

タイはこのフランスとの仏印戦争で、陸軍94人、海軍41人、空軍13人、警官12人、合計160人の戦死者を出した。国家を守るために戦死した尊い戦死者の霊を祀るために、パヤータイとラートヴィティイ通りの四辻の真ん中に、160人の戦死者の名前を刻み込んだ戦勝記念塔が完成し、1941年（昭和16）年6月24日、ピーン首相の手によってオピニングセレモニーが行われた。ピーン首相はこの仏印戦争の功績により、1941年7月28日、国王から元帥に任命され、ルワン・ピーン・ソククラーム元帥となった。

なお、旗艦トンブリー号はチャンタブリー沖のチャーナム島から引き揚げられ、パークナムの海軍兵学校内に安置され、毎年1月17日に盛大な慰霊祭が行われている。

### ■戦雲渦巻くタイの動き

これより前の1938（昭和13）年12月16日、国王に、首相の大役を任命されたピーン大佐は、12月20日国防大臣を兼任し、（後日内閣の編成あり）首相以下23人の閣僚による新内閣を組織し、戦雲渦巻く世界の情勢からタイ国の独立を守らなければならない苦しい立場に直面していた。

中国大陸では、相変わらず日本と中国の日華戦争が続き、1939（昭和14）年9月1日、欧州ではナチドイツ軍によるポーランド進撃が開始され、第二次世界大戦が勃発した。

タイは日本が中国から南下し、仏印に進駐し、各所に空軍基地を築き、南方作戦の準備を整えながら徐々にタイに接近してくる日本軍の動きを警戒するようになった。

ピーン首相は日本と交戦を交えることを前提の下に、密かに国土防衛準備に着手していた。バンコクの都市をペッチャブーンに移すと称して、ペッチャブーンに軍司令部本部を構築し、バンコク、サラブリー、ロップブリーを軍事戦略基地センターとし、コークカティヤムにも前線指令基地を配備し、プラチーンブリー、ワッタナコーン、ナコーンパトム並びに、ドーンムアンなどの空軍基地の強化を計り、ロップブリーとコークカティヤム間に四車線のコンクリート道路を造らせ、着々と戦闘準備を進めていた。

このほかにも、日本軍を食い止めるために東北のバンコク、ロップブリー、ナコーン・ラーチャシーマー。東のバンコク、ラヨーン、チャンタブリー、チャチョンサウ。北のバンコク、ナコーンパトム、ナコーンサワン、ターク、ラムパーン。南のペップブリー、ラノーン、プークェツ、ソククラ地区に軍用道路の工事を進めていた（当時タイの地方のハイウェイはガタガタな道だった）。

弱国であったタイは、米英、特にイギリスのサー・クロスビー公使に、飛行機並びに武器の援助を求め、ペップブリー県から先の南部タイを英軍に防備させ、東部の印度支那方面をタイ軍が防備し、日本軍と一戦を交える共同防衛案をだした。だが、いずれも英軍の力不足のためにこの案はお流れ

となつてしまった。

米英と親しかったタイは、当然一番恐れていた日本とも、外交面ではお面を被り、うまく折衝していた。1940（昭和15）年6月12日、タイは日本と「日タイ不可侵条約」および「日タイ友好親条約」を結び、日本の要望に答えて1941（昭和16）年には日本領事館の新設希望にも応じ、開戦になれば日本軍にとって重要な基地となるのを承知の上で、4月には南タイのシンゴラ（ソンクラ）に、9月には北タイのチャンマイにそれぞれ領事館の開設を認めた。

日本は領事館と称して、軍部の出先を前線に進出させ、内部で情報活動をやりながら、今後のビルマ作戦および、マレー半島攻略作戦などの案を練っていた。

日本はタイの日本公使館を大使館に昇格にする交渉を進め、1941（昭和16）年8月16日、日・タイ間に初めて大使館が誕生し、タイに初代大使として、日本軍のタイ進駐交渉役を務める大役を背負わされた坪上貞二大使が赴任してこられた。

日本の要望にはなんでも素直に応じていたタイではあったが、1941（昭和16）年10月9日「タイ国内のドーンムアン、ナコーン・ラーチャシーマー並びに、ウタラディツ3ヶ所の飛行場を使用したい」との、日本の申し入れをきっぱりと断つて以来、日本の行動を重視するようになった。

日本軍は必ずタイの南部に上陸すると見込んでいたピブーン首相は、1941（昭和16）年9月4日に、「タイの国民はタイの国土を守るために戦わなければならない」という法律を公布し、予備兵を募集し、義勇兵の募集を募った。続いて9月22日には陸海空軍を各部署に配備させ、東西南北の軍事基地を固めさせた。

9月末にはタイが日本と戦うことを仮定として「タイの国民は老若男女子供にいたるまで年齢を問わずタイの国を守れ。タイに侵入してくる敵はみんな殺せ。もし相手に勝てぬとみたら、家、車、その他使用できる物はすべてを焼き払い破壊せよ」と、国防令が発せられ、さらに10月14日には「戦争に関するタイ国民の義務」というビラが各県郡村に配られ、地方の隅々にラジオがセットされ、11月22日には緊急戦闘態勢が敷かれていた。

戦火が次第に我が身に迫り、お尻に火がついたタイは、日本軍がいつ攻めてくるかわからない不安な日々かられていた。タイは日英米の戦乱の狭間に巻き込まれないよう、必死になって中立を宣言し、外交面でも様々な手を尽くしていた。

タイ当局は日本人を恐れ、在タイ日本人を警戒するようになり、邦人の行動を監視し、怪しまれた者は尾行され、電話も盗聴され、手紙も密かに検閲されるようになった。当時の一般民衆は、中央部のバンコク方面には仏印から日本軍が侵入し、南タイのシンゴラ（ソンクラ）周辺にはマレー半島から英軍が攻めてくるであろうとみていた。

いよいよ大戦が間近に迫り、緊迫しきつた1941（昭和16）年12月4日、タイの地元紙に「日本軍は12月8日から15日のあいだにタイに攻めてくるであろう。それは案外12月10日の憲法記念日の日かもしれない」といった記事が掲載された。しかし、一般のタイ人は戦争のニュ

ースなどにはあまり関心がなく、暢気に12月10日の憲法記念日の祭日のお祭り気分浸っていた。

ピブーン首相は「イギリスの偵察機、日本の輸送船団を発見。日本軍はタイに上陸するもよう」と発表し、さらに12月6日には「日本の輸送船団およそ35隻、哨戒艇8隻、駆逐艦20隻がタイ湾に向かって進行中である」との情報、ロンドンおよびワシントンからの情報をキャッチしていたのである。

「いよいよ日本軍が近日中にタイに上陸する。戦争は免れない」と、判断したピブーン首相は、アランヤ・パテート方面の仏印を視察することにした。首相は出発前に、アドウン・アドウンヤデートチャラツ警察中将与、マンコーン・ポロム中将を呼び、アドウン警察中将には首相全権代理を一任し、マンコーン・ポロムヨーティ中将副最高司令官にも最高司令官全権代理を一任し、二人に首相が留守中の全権を与え、「一旦緩急あるときは総力を挙げて戦うべし」と指示を与えた。

12月7日の早朝、ピブーン首相はチラ・ヴィチツソムクラーム中将与、チャルーン・ラッタナクンローリツ少将を伴い、車で仏印国境へ出かけ、前線基地の視察の途に着いた。

ピブーン首相一行は、アランヤパテートと、ワッタナナコーンを視察し、プラチーンブリーの第二軍管区で作戦の打ち合わせをし、当時タイ領であったシーソーポーンで実際に日本軍が攻め込んできたのを仮定として、守備兵に実戦ながらの予行練習を実施させた。

当時タイ領だったプラタポーン（バツタンバン）で昼食を済ませた一行は、ピブソンクラーム地区へ向かったが、途中で暗くなったため、ワッタナナコーンに戻り、そこで一泊することになった。

だが、夜中の11時頃バンコク発、アドウン警察中将からの電報で、日本軍に関する緊急報告を受け取った。ピブーン首相は、その場で直ぐ軍の主だった幹部を集め、軍事会議を開き、今後の日本軍に対する作戦協議をした上で、8日の午前1時頃車でバンコクに向かってすつ飛んだ。

丁度その頃、バンコクの日本大使館では「ピブーン行方不明」と、ピブーン首相の行方を必死になって捜し、大慌てに慌てた緊迫したひとときでもあった。

### ■「がんどす丸」に避難

1941（昭和16）12月10日頃からタイのラジオは各局とも「世界の情勢が悪化し、日米英大戦の兆しが緊迫している。もし、タイに侵略してくる者があれば、みんな敵とみなし、タイの国民は銃を持って戦うべし」と放送し、毎日ルアート・スパン（スパンの血）の歌を流し、タイの国民の血を煽り立てていた。

その頃の僕には日本の雲行きがどうなっているのか、日米関係がどうなっているのか、あるいは世界の情勢がどうなっているのか知る由もなく、相変わらず元気でソーイ・サップの日本人学校に通っていた。

昭和16年12月6日は土曜日で学校は半ドンであった。授業が終わり全校生が校舎の前に整理

し、金井校長先生の注意事項を聞き、みんなで「先生さようなら」と大きな声で挨拶し、僕たちスリヴォン組み10人ほどはいつものようにランドセルを背負い、桜のバッヂを付けた白いヘルメット帽を被り、一列に並んでペチャペチャ喋り、ゲラゲラ笑いこけ、道草しながらのろのろ歩いて帰った。

12月7日の夜は日本人学校の講堂で「映画の夕べ」がある日だった。一方、マッカサンの日本大使館でも、タイ政府の要人を招待した晩餐会がある日だった。僕は映画を観れると思いきや楽しみにしていたのだが連れて行ってもらえなかったもので、がっかりしていつものように夜8時頃大きな蚊帳に潜り込んでグーグーウ眠ってしまった。

だが、ぐっすり眠っていたところを、いきなりメナムホテルのおばさんに叩き起こされた。どうしてこんな時間に起こされたのかと、寝ぼけていると、「これから学校へ行くから直ぐ支度するように」と早口で言われた。

僕はいつもと様子が違うので、変だな、と思ったが、直ぐ学生服に着替え、ツタエちゃんと部屋で待っていた。おばさんは貴重品を風呂敷に包み、僕たちを促して表にたむろしていた顔見知りのサムローに乗り、ソーイ・サップの日本人学校へとすつとんだ。

僕たちが学校に着いたのは11時頃だった。だが、まだ大勢の人たちが古ぼけた講堂に集まって映画を観ていた。恋愛物の映画だったが大人の人たちは心配そうな表情でなにかひそひそ話合っていた。映画を観ている最中に、日高洋行の数台のトラックが校内に入ってきて運動場や日本人会館の前でエンジンを停めて待っていた。

映画が終わってから、「みなさん、そこに停まっているトラックに分乗して乗ってください。」と言われ、僕は喜んでトラックに飛び乗り学校をあとにした。僕が乗ったトラックはゆっくりとスリヴォン通りを走り、深夜のひっそりと寝静まったバーンラックの市場を通り、右手に見えるボルネオ倉庫のバンコクドックの前を素通りし、左手の高い櫓にぼんやりと灯を点したヤンナワー消防署（現在も残っている）の前を通過した。

僕が乗っていたトラックは女と子供ばかりだった。一緒にトラックに乗っていたおばさんたちはみんな申し合わせでもしたように真剣な顔をして黙って座っていた。僕には誰もなにも教えてくれなかったが、はて、なにが起こったのであろうか。このトラックは一体何処へいくのだろうか、好奇心に満ちた目をらんらんと光らせ、行き先を見守っていた。

トラックは間もなく右手の真つ暗な路地に入り、三井埠頭の突きあたりの倉庫の前でピタッと停まった。その真つ暗な闇の中に4383トンの大きな黒い巨体を灯りで光々と点した大阪商船の「がんどす丸」が緩やかに流れているチャウプラー川の岸边に錨を降ろして僕たちがくるのを待っていた。

ギンギン揺れる狭いタラップを綱にしがみつき、船の上まで登りきると、瘦せたすらつとした日田豊明船長以下数人の船員さんたちが「今晚は」と挨拶して、暖かい眼差しで僕たちを迎えてくださった。

波多野喜美子さんと静子さん姉妹たちみたいに、夜中の午前一時半頃家の扉をドンドン叩かれ、叩き起こされて慌てふためいて後からサムローで飛んできた人や、大使館員の子弟だった天田三和子さん3人姉妹のように、数人の大使館の人たちと車で駆けつけた人もいて、およそ200人の老人婦女子をぎゅうぎゅう詰めに詰め込んだ「がんぢす丸」の船内は足の踏み場もないほど混雑し、蒸し風呂みたいに蒸し暑くてむんむんしていた。

大人の私たちは気疲れしたのか団扇を片手にパタパタ扇ぎながら憂鬱そうな顔をしてその辺に横になって寝転がっていた。

僕たち子供組みは、誰かが決めたわけでもないのに「やあー！ 明日はこの船で日本へ帰れるぞー！」と大喜びで、午前1時半頃までデッキの上でワイワイ騒ぎ、鬼ごっこをしたりしていたが、そのうちに一人ずついなくなり、遊び疲れた僕も寝ることにした。

船室は暑いのでデッキの上で寝ることに決め、暫くブラブラ歩き、ふと真っ暗な倉庫のほうを見下ろすと、フラフラ風に揺られて踊っている小さな裸電球がひとつ目に映った。大きく揺れている薄暗いその裸電球の傍に金井先生と町田先生が数人の男の人たちと立って「がんぢす丸」を見張っていた。

僕は先生はどうして船の上で休まないのたろうかと考え、デッキの上にひっくり返り、透き通った綺麗な星を眺め、ひとつ、ふたつ、みつつと、ダイヤモンドみたいにきらきら輝いてる星を数えていたが、いつの間にか夢の世界へとさ迷っていた。

僕がぐっすり眠っていた頃、日本軍のタイ上陸が間近に迫り、日本の大使館では坪上大使や、田村武官がいらいらしながら必死になってピブーン首相の行方を捜し求め、タイ政府と、日本軍のタイ平和進駐問題を速やかに交渉しなければならぬ生死を争う緊迫した重苦しい空気が流れていた。

12月8日のまだ薄暗いうちに目覚めた僕は、朝の爽やかな微風を胸一杯吸い込み、白々と明けはじめたチャウプラー川の流れをぼんやりした眼差して見つめていると、何処へ行くのか遙か彼方からタイの軽巡洋艦が一隻と、潜水艦が1隻波を蹴立てて「がんぢす丸」の真ん前をすうっと通り過ぎ、パークナム（河口）目指して過ぎ去った。

僕はそのまま船の手摺にもたれかかり、物思いに耽り、ゆったりと流れてゆく薄茶色の川の流れをじっと見つめていた。すると、日田船長さんが近づいてきて、しゃがれた声で「ぼうやは早起きだな、昨夜はよく眠れた？」と聞かれ、僕は「おはようございます。昨夜はぐっすり眠れました」と答えた。そこで船長さんから、「日本は大変な戦争を起こしちゃったんだよ」と、はじめて大東亜戦争が勃発したことを知り、これは大変なことになった、僕たちはこれから先どうなるのであろうかと思った。

## ■大東亜戦争勃発

丁度その頃、12月4日に南遺艦隊に護衛され、南方軍11個師団約36万人の精鋭を満載した

224隻の輸送船団は海南島の三亜を出航し、敵の偵察機を警戒しながら進路をサヤーム湾（タイ湾）目指して航海中だった。

この船団の中にはマレー半島で敵前上陸を執行する山下奉文中将司令官率いる第25軍南方作戦に従事している輸送船も含まれていた。

熱田丸に旅団長川村少将、那古丸、香椎丸に師団長松井中将、竜城丸に軍司令官山下中将、関西丸に21聯隊長岡部大佐笹子丸に11聯隊長渡辺大佐、浅香山丸、青葉山丸、九州丸、佐渡丸波ノ病院船など59隻の船団は、第一次上陸部隊の11隻を含めた59隻が、12月8日の未明にサヤーム湾（タイ湾）を封鎖し、上陸準備を整え、大本営の「山」、「川」、（山は平和、川は交戦）の暗号を待っていた。

一方、佯美支隊はタイよりも先にマレー半島の東海岸のコタバルに5500人の精銳が敵前上陸を執行したが、英軍の激しい反撃に遭い、佐倉丸、綾戸山丸、淡路丸3隻の輸送船は、英軍の低空飛行による爆撃および機銃掃射で3隻ともかなりの被害を蒙った。淡路丸は爆撃で炎上し、苦戦中であつた。

なお、11月26日に南千島の択捉（エトロフ）島の単冠湾（ヒトカップ）から密かにハワイ作戦に向かつて出動した機動部隊は、第1航空艦隊司令長官・南雲忠一海軍中将が率いるアメリカ軍港ハワイ真珠湾奇襲攻撃にも成功し、トラ、トラ、トラの暗号電を発信し、大戦果を挙げた。日本国内では号外が飛び「やった！勝った」と、大騒ぎで喜んでいた真つ最中であつた。

南方軍がタイに進駐する直前に、コタバルの敵前上陸成功と同時に、数分後には機動部隊によるハワイのパールハーバー軍港の奇襲攻撃にも大戦果をあげた。一方、第25軍師団は予測していた日・タイ間の平和進駐交渉が、ピブーン首相がアランヤプラテート方面に雲隠れし、不在で難航したために、日本軍は待ちきれず、独断でタイに勝手に奇襲上陸を執行したのである。

従つて、タイ湾方面に面した南部タイのプラチュワプキリカン、スラターニー、チュンポーン、ナコーンシータマラート、ソククラ、パッタニー6ヶ所に、一挙に奇襲上陸を執行したために、各地でタイ軍と激戦を交え、双方で多大な犠牲者をだす結果となつた。

東海岸にあたるサムプラカーン県のバンブー避暑地は、バンコクからだと南にあたるが、バンブー避暑地にも、なんの抵抗も受けずに午前3時頃到着し、白馬山丸から上陸した約1000人の近衛師団の吉田支隊（近衛歩兵第4連隊第3大隊速射砲一小隊、聯隊砲中隊）は、ノンタブリーのラーマ六世橋を占領する命令を受けて待機していた。

バンコクで老人婦女子を無事にがんどす丸に避難させた在郷軍人の会長だった日高秋雄（としお）さんは田村武官と打ち合わせをし、20台のトラックを飛ばし、途中でパークナム周辺の電話線を切断しながらバンブーに駆けつけた。

バンブーでは既に吉田支隊と警官隊が対峙し睨み合っていた。その時点ではまだピブーン首相と平和進駐の交渉も決まっていなかった。停戦命令がでるまで待つべきであると、判断したバンコクで戦況の状況を監視していた第15軍参謀八原博通中佐と補佐官の徳永賢二中佐の2人は、バー

ンプーに急行し、吉田支隊を指揮していた吉田中佐に会い、徳永中佐との話し合いで、ピブーン首相の停戦命令が発令するまで待機することになった。

そのお陰で吉田支隊は午後1時40分頃全員無事にバンコクに到着し、聯隊主力に復帰した。徐々にバンコクに進駐した日本軍は、チューローンコーン大学に軍司令部を置き、タイの学校や、ルムピニー公園に駐屯し、バンコクの守備にあたった。

### ■さようなら「がんどす丸」

戦争の怖さもなに知らなかった僕にとって、大東亜戦争のお陰でこのままこの「がんどす丸」で日本へ帰れかもしれない。それに、勉強もしなくて遊んでいられると、みんなでキャツキャーキーキー、ゲラゲラ笑いながら喜んで船内を走り回っていた。

探検と称して、2、3人で下の蒸し風呂みたいに熱いエンジンルームで、狭い鉄の階段を「ゴンゴン」と、わざと大きな音を立てながら、降りていたり、マストによじ登って船員さんに叱られたり、大人の人たちから「こらっ！このがきどもうるさいっ！」と、怒鳴られたりしながら子供の世界の中で暗くなるまで一日中楽しくはしゃいで遊んでいた。

8日の日は何事もなく静かに暮れていった。9日は実に思いで深い日となった。朝7時頃、僕たち日本人学校の生徒は甲板に集まり、船員さんたちと一緒に1、2、3、4と、元気よくラジオ体操をしてから、炊き立ての熱いご飯と味噌汁、それと黄色い薄く切った二切れのたくわんの朝食をたらふくご馳走になった。

その後、また、みんなと楽しく遊んでいると、午後3時頃だったかと思うが、松尾信彦君や、ミツキー（新野充男）、大谷一之君、同級生の泉美代さんたちと甲板で鬼ごっこをして走り回っていたときだった。

ふと見ると、日の丸の旗を風にひらひらとたなびかせて日本の兵隊を満載した白馬山丸がチャウプラー川を遡って徐々に「がんどす丸」に近づいてくる姿が目についた。

僕は思わず「うわー！日本の兵隊さんに乗せた船だー！」と、大声で叫んでいた。途端に船内はざわめき、船室にいた大人の人たちもみんな甲板に飛び出してきて、手やハンカチを振りながら「やあー無事だったか、よかったなあ！、元気で頑張れよー！」と、お互いの声が入り乱れて交差し、感激のあまり涙を流していた人もいた。

白馬山丸は「がんどす丸」に擦れ擦れになるまで近づき、兵隊さんの顔がはっきり見えるようになる。威勢のいい若い兵隊さんが笑顔で「なにもないけど、これ食べてねー」と、キャラメルや、乾パン、氷砂糖などが入っている小さな袋を次々と僕たちに投げてくれた。僕たちは「兵隊さん、ありがとう、ありがとう」と、言いながら、キャラメルを口にほおばった。

兵隊さんに乗せた白馬山丸は徐々に「がんどす丸」から離れはじめた。僕たちの兵隊さんありがとうの声がいっつの間にかお互いに「さようなら、お元気でね」の声にかわり、これから戦場へ向かって行くもう二度と会えないかもしれない兵隊さんに、「さようなら、さようなら」と手を振りな

から、白馬山丸が小さくなるまで声を限りに「さようなら」と、叫んだ。

タイの各地に上陸した日本軍のタイ進駐も一段落し、バンコク市内の治安も一応正常に復帰したので、僕たちは「がんばす丸」の船員さんたちとお別れすることになった。

緊迫した7日の夜半から「がんばす丸」に避難し、お世話になった約200人の老人婦女子は、10日の朝、三井ワープの棧橋に並び、日田船長さんならびにお世話になった船員さんに「大変お世話になりました、どうもありがとうございます」と、お礼を告げ、「お元気で、さようなら」と、お互いに名残を惜しみ、手を振りながら解散し、各々がサムローや車に乗って帰途についた。

僕たちがお世話になった一生忘れられない思い出深い「がんばす丸」は、1942（昭和17）年5月28日、単独でサンジャック沖を航海中、午後8時過ぎ頃アメリカの潜水艦に2本の魚雷攻撃を受け、1時間40分後に沈没。

船客はタイの留学生11名を含めて158名が乗っていたが、船客1名と、船員は日田船長を含めて6名、計7名が戦死した。助かった人たちは救命ボートに分乗し、暗闇の波に揺られて放流しているうちに、日本の軍艦に救助され、全員無事に日本に到着している。

僕たちがお世話になった日田豊明船長は、徐々に沈みゆくデッキの上で懐中電灯をゆくりとまろく円を描き、みんなに最後の別れ告げ、本船とともに運命をともしたのである。

## ■日本軍タイに奇襲上陸

大東亜戦争当初弱国だったタイの人口はおよそ1700万人、バンコクが約60万人、邦人が約500人であった。日本軍の推測によると、タイの兵力は陸海警官隊を含めて、およそ6万乃至7万人。海軍は軽巡洋艦を旗艦とする1水雷艇隊、空軍は新式機約60（主に日本製）機、旧式100機（主に米国製）。首相兼国防司令官はピブーン元帥、副司令官はプロム中将、海軍司令官はルワン・シン中将、空軍司令官はルワン・アドウン少将だった。

マレー半島の国境と接している空軍基地を狙っていた。特に、プラチュワピリカン、ナコーンシータマラート、ソククラートおよび、最大の目的地とされていた英軍が警備しているマレーの東海岸の堅固なコタバル空軍基地であった。

第18師団の詫美支隊の精鋭を乗せた佐倉丸、綾戸山丸、淡路山丸3隻の輸送船はタイ湾で輸送船団から離れ、別れて単独行動に移り、12月8日未明コタバル市の明かりが見える沖合いに停泊し、荒波を侵し、空軍基地目指して敵前上陸を決行した。

詫美支隊の第一陣は上陸に成功したが、海辺で英軍の猛烈な反撃に迎えられ、佐倉丸、綾戸山丸、淡路山丸3隻の輸送船は英軍の低空飛行による銃爆撃で、淡路山丸は直撃弾の命中により炎上し、3隻ともかなりの打撃を受けた。

山下中将司令官率いる南タイに上陸する部隊の船団は、次のように配備され、各地の上陸地点を目指して続航し、荒波に揉まれながらタイ湾の沖合いに停泊し、タイとの安全な確約を得ず独断で上陸を開始した。



## 5 師団主力

### 第1分隊 シンゴラ（ソンクラ）上陸

那古丸、熱田山丸、香椎丸、竜城丸、関西丸、  
竜城丸に軍司令官 山下奉文中将  
香椎丸に師団長 松井太久朗中将  
熱田丸に歩兵第9旅団長 川村参朗少将  
関西丸に歩兵第41聯隊長 岡部貫一大佐

### 第2分隊

浅香山丸、笹子丸、九州丸、青葉山丸、関西丸

笹子丸に歩兵第1聯隊長 渡辺綱参大佐

### 第3分隊 安藤支隊

鬼怒川丸、阿蘇山丸、ターペー上陸

相模丸、金華丸、東山丸、宏川丸、パッタニー上陸

東山丸に歩兵第42聯隊長 安藤忠雄大佐

### 第1揚陸隊 ナコーンシータマラート

2607名 自動車50輛

### 第2揚陸隊

宇野支隊の一部 1048名 自動車20輛

### 第3揚陸隊 チュムポーン

2233名 馬330頭 自動車20輛

### 第4揚陸隊 プラチュワプキリカン

宇野支隊 1007名 馬100頭 自動車40輛

### 第5揚陸隊 バンコク

吉田支隊 1100名 自動車20輛

一方痺れを切らして仏印で待機していた近衛師団は、飯田中将の出動命令を待っていた。平和進駐を心待ちしていた第15軍司令官飯田中将は、ヒブーン首相の回答が得られるまで近衛師団のタイ進駐を待とうと考えていた。

しかし、緊迫した戦況の時間に追われていた塚田参謀長は待ちきれず、寺内総司令官の決裁を得て、12月8日午前3時半（日本時間）に第15軍に対し、タイ進駐開始を命じた。

岩淵豪大佐の指揮の下に、近衛兵第5聯隊第1大隊「戦車1中隊、野砲1中隊は住田通訳官（住田カルチャーセンターの住田千鶴子の父）を先頭に、大湖（グラン・ラック）北岸シエムリヤムレヤ付近から仏印の国境を突破し、シソフォン、プラチーンブリー、バンコクに向かって突進。師団

主力は大湖の南岸道路から新国道を突破し、シソフォン以西先遣隊の進路を続行し、バンコク目指して前進した。

バンコクに向かって進撃中、アランヤプラテート上空で、日本の飛行第77戦隊の戦闘機11機と飛行第31戦隊の軽爆撃機9機がタイ空軍機と空中戦を交えた。だがタイは小型機3機を撃墜された。

近衛師団のタイ侵入と同時に、飯田中将第15軍司令官は、直ちに鉄道第5聯隊第3大隊をタイに投入し、急速な速さで鉄道路線の連続を進めた。速やかな鉄道隊の成果のお陰で、12月10日からサイゴン、バンコク、南タイ間への一貫輸送が可能となった。

### ■ナコーンシータマラートの惨事

ソンクラークでは日本軍の上陸があまりにも速すぎたために、タイ当局は日本人を逮捕する時間がなく、何事もなかったが、ソンクラークから南西30キロほど離れたハートヤイにいた邦人は、みんなハートヤイの警察に監禁されていた。だが午後2時頃日本軍の救援隊により運よく全員が無事に救出された。

かの山田長政が1630（寛永7）年に毒殺されたといわれる有名な地、ナコーンシータマラークトにも道路工事をしていた技術者などを含め、10数人の邦人が住んでいた。マル歯科店で歯医者兼医者をしていた入江茂夫妻や、写真屋を開業していた人、タイ人と結婚していた中川さんたちは、ナコーンシータマラートの警察に監禁されていた。

このほかに、秘密警察官から日本軍のスパイをしている、と、睨まれていた6人の邦人は別に隔離され、ラーチャダムヌーン通りのラーメスワン橋の北側の袂にあった一軒屋の大南会社の二階建ての社宅兼事務所に軟禁されていた。

ナコーンシータマラークトにも、三池丸および善洋丸2隻の輸送船から2607名の兵力を満載した歩兵第143聯隊の宇野支隊が午前3時頃ターペーのタイ空軍基地目掛けて上陸を開始した。だが、途中でクローン（運河）の進路を間違えてかなり遅れて目的地にたどり着いた。

ターペー空軍基地の守備隊は、午前4時にソンクラークの郵便局員から「日本軍ソンクラークに上陸す」との、短い電文を受け取った。空軍基地の部隊はソンクラークへ応援に駆けつけようと準備をしていた矢先だった。

ターペー空軍基地の近くのターペー村にもクローン・ターペー（ターペー運河）から日本軍が上陸を開始し、空軍基地を占領しようとして進撃してきたため、タイ軍の主力は、ターペー基地の守備にあたることになった。

ターペー空軍基地を死守したタイ軍、警察、青年義勇隊は、日本軍と目と鼻先で対峙し、午前6時50分頃から正午まで勇敢に戦った。双方で突撃し、互いに銃剣で刺し違えて戦死するほど凄まじい白兵戦が繰り広げられた。バンコクの最高司令官から停戦命令が出されるまで激戦が展開され、宇野支隊にかなりの打撃を与えた。

空軍基地で戦闘が開始されて間もなくだった。大南会社の社宅に軟禁されていた6人の同胞は、ダダダダダーン、ズドン、ズドンと撃ち合う砲声の音を聞き、じっとしていられなくなり、午前7時頃見張りの警官の隙を狙って裏のトタン張りの扉をよじ登り、逃げ出そうとしたが、運悪く警官に見つかり、背後から撃たれた。

だが、それでも必死になって逃げようとしたのだが、可哀想に6人ともみんな後ろから銃剣で刺され、血みどろになって倒れ、タイの警官に殺されてしまったのである。

警察署では、日本軍に日本人を殺害したことがバレるとまずいので、6人の遺体をラーチャダムヌーン通りのワツ・チャマウ（チャマウ寺）に埋め、そ知らぬ顔をしていた。

だけど、二日後に6人の同胞の行方を問い質され、はじめて真相を知った軍部は、横柄な態度のナコーンシータマラートの警察署長を軍用車で連行し、軍部内で取り調べを行った後、午後4時半頃警察署に送り返した。

身の危険を感じた警察署長は、それから二日後の夜中に、船でバンコクへ雲隠れしてしまった。このために、日本軍と警官とのあいだに一時緊迫した空気が流れた。日本との衝突を恐れた市民は、市内から西へ向かって8キロほど離れたボーサデツ村のボーサデツ寺や村の中に避難していた。一方、タイの軍人や警官は、それぞれの部署につき、身を潜め、戦闘態勢を敷いて待機していた。

しかし、日・タイ親善問題を重視した日本大使館の配慮により、6人の邦人殺害事件について、事を穏便にする方針で話し合いが付き、ボーサデツ村に避難していた市民も、ホッとして我が家に戻った。

この間、ナコーンシータマラートの小さな町は荒れに荒れた。いきなり日本軍に勝手に侵略され、しかも12月8日の午後6時の国営放送からは、毎日流されていたタイの国歌が、その日に限って「君が代」が流された。

ナコーンの市民は勿論、タイ全土の国民は啞然とし、「タイはもう日本に占領されてしまったのか」と、思い込んだ。平和だった町に、いきなり招かざる刺客、日本軍の急襲で大勢の死傷者を出したナコーンの町はやっと落ち着きを取り戻し、平常の日々の安定した生活を取り戻した。

すべてか落ち着き、たった数人の日本人を殺したために、警察当事者がお詫びの印として、主催者となり、6人の哀れな遺体をチャマウ寺から掘り返し、12月15日頃シータヴィ通りのシータヴィ寺で告別式をあげるようになった。タイ側からは軍、警、役人、市民などおよそ300人が参列し、日本側からは軍部の代表者10人ほどが参列した。

タイの警官が安らかに眠っている6人の棺おけを担ぎ、一列に並び、火葬場の周囲をせずしと三周し、火葬台の上に安置し、厳かに唱えられた読経とともに、タイで邦人として初めて戦争の犠牲者となった、海外土木の小石原収助さん、昭和通商の富檻一彦さん（36）、昭和通商の竹下好男さん（36）、大南会社の奥田正知さん、三菱商事の京谷秀朗さん（33）の、6人の魂は遺族に悲しみを残し、めらめら燃える炎とともにあの世へ去って逝った。

戦争とは言え、アアア！ なんと、戦火に巻き込まれた果かない生命。京谷さん、奥田さんと、

みんなの名前を叫び、じんわりにじむ涙を臉に溜め「どうか安らかに眠ってください」と、手を合わせ、冥福を祈らずにはいられない。

小さな白木の箱に収められた6人の霊は、6人の同士の手によってバンコクに届けられた。12月25日、サパーンプツ（メモリアル・ブリッジ）の前にあるトゥリーペツ通りのワツ・リヤプ（リヤプ寺）にある日本人納骨堂で、坪上大使、第15軍飯田司令官以下在留邦人ならびに、タイの高官も参列し、悲しみに満ちた盛大な慰霊祭が行われた。

1941（昭和16）年12月8日未明武士道精神をモットウとした大日本帝国の陸海空軍部隊は、米英に戦線布告を発する前に、まず、英領であったマレー半島のコタバルに奇襲上陸を執行し、続いてハワイのアメリカの軍港基地パール・ハーバー（ハワイは7日の朝）を奇襲攻撃し、世界の国々に顔向けできない恥ずかしい大戦果を収めた。

日本はタイとは、日タイ友好条約や不可侵条約を結んでおきながら、なんの前触れもなくいきなり自分勝手にタイの領土に踏み込み、武力行動で侵略し、各地で怒り狂って必死になって抵抗したタイ軍と激戦を交え、多大な犠牲をだした。

「日本軍はただタイを通過するのみだ」と称し、武力の圧力によってタイを鎮圧し、勝手にタイの基地や主だった所を占領し、場所によっては強制的にタイ軍ならびに、警察の武装解除まで行ったのである。

大和魂精神を骨髄までぶち込まれた規律正しく組織化された厳しい日本の軍隊。世界のお手本となるべき優秀な軍隊。だが悲しいかな、生死をかけ、南タイに敵前上陸した部隊の一部の将兵は、なんの関係もない民家をぶち壊し、住民の物を手当たり次第に略奪し、素直なか弱い罪もない女性までも強姦し、満喫し、傷つけた。

しかも侮辱された他人の悲しみを、あざ笑い馬鹿にし、軽蔑し、自尊心を傷つけ踏み躪っておきながら、罪の意識もなくそのまま破竹の勢いでマレー攻略へと進撃していったのである。

お国のために、天皇陛下のために戦い、いつ果てるかもしれない身を捧げた尊い生命。アアア！だが、善良な罪もないアジアの民族に被害を与え、足蹴にし踏み躪った当時の軍服を着た一部の日本軍の行為をもう一度振り返って反省してみることはないのであろうか。

## ■開戦当時の父の行動

シンゴラ（ソングラー）には山下中将率いる第一次上陸を執行する第25軍主力、第5師団の精鋭を乗せた9隻の輸送船団から第41聯隊が荒波を被り、上陸用船艇数隻が転覆し、約100名に上る将兵が水死するほどの高波を侵し、はじめはタイ側の抵抗もなく東海岸の新飛行場付近に上陸し、瞬く間に飛行場や、ソングラー駅を占領してしまった。

第41聯隊の奇襲上陸があまりにも速かったために、あわてたタイの守備隊は日本軍に飛行場を占領された直後から、灯台の上や山の麓に陣取り、海岸から上陸してくる日本軍に向かってバリバリと攻撃を開始した。

ハートヤイに向かって進撃中の日本軍にも途中の道路ならびに鉄道線路を封鎖し、機関銃で撃ってきたために、双方で攻防戦が繰り返された。

開戦がはじまる1日前の12月7日の晩、ソンクラーの日本領事館では、日本軍の上陸に備えて、父を含めて隠密にスパイ活動をしていた藤原マ機関の情報関係の人たちなど、およそ20人の邦人が集まり、夜遅くまで晩餐会が続いたが、父は一足先に帰宅していた。

その夜、我が家にはスンガイパディから遊びにきていて父に「いま危険だから帰るな」と、止められた滝川虎若赤ひげドクター夫人や、母の甥にあたる田島貞さん、それに森園さんなど、まだ数人の人たちが我が家に泊まっていた。

父は、夜中にみんなが寝静まった頃、裏の風呂場の側で、石油缶の中に貴重な機密書類を投げ込んで燃やしていたところを母に見つけられ、問い質されたが、父はただ無言で黙々と書類を燃やしていたという。父は勝野領事から、12月8日の未明に日本軍が上陸することを聞いて知っていたが、誰にも知らせていなかった。

ソンクラーに日本軍が上陸するときに、軍の上陸時間に合わせて勝野領事が浜辺で懐中電灯をまく回してOKの信号を送ることになっていた。

実際の真相は不明だが、当日肝心な勝野領事は前の晩に飲みすぎて自室でぐっすり眠っていたといわれている。しかし、父は日本軍が12月8日の未明にソンクラーに上陸することを知っていたのである。

領事館には通信機もあったのだが、生憎バッテリーがなかったために上陸部隊と連絡が取れず、日本軍は日本の領事館と連絡が途絶えたまま上陸を開始したと、なっている。

ソンクラーの海岸線には、サミラービーチ付近には長い塹壕が掘ってあった。だが、そこには敵はなく、山の上や数箇所布陣して待ち受けていたタイ軍と激戦となった。

日本軍がソンクラーに上陸すると同時に、医者であった父は、日本刀をぶら下げて軍服姿で家をとびだし、かねてから目を付けておいたソンクラーにある乗用車やトラック、自転車などを、町内から勝手に挑発して歩き、軍部の進撃を援助した。それに軍部の憲兵隊と一緒にイギリス側のスパイ狩りも手伝った。

バトルン通りにあるバーン・ボン市場の側で綿布屋を営業していたインド人2人と、他の地区からスパイ容疑で逮捕された連中も含めて、我が家の前にあるソンクラーの刑務所に放り込んでしまった。

日本軍がソンクラーに上陸したその日の夕方5時頃、サミラービーチの沖に停泊して荷揚げ作業に忙殺していた日本の輸送船団は、英軍機の空襲に見舞われ、1隻が炎上した。だが、英軍機は日本の戦闘機と空中戦を交え、4機が撃墜されて逃走した。英軍機の空襲はそれ以来暫く頻繁に継続された。

だが或る日、ソンクラーで撃墜された英軍機から3人の英軍のパイロットが逮捕され、捕虜としてソンクラーの刑務所に収容された。刑務所に保留されていたイギリス人3人および、スパイ容疑

で逮捕されていたインド人など数人が父の通訳によって刑務所から連行され、チョンカウ通りのサミラービーチが右手に見える、当時モーピヤン（ピヤン・ドクター）のホテルがあった所から200メートルほど先のレーム・ソン（松林岬）の浜辺で処刑されることになった。

なんと可哀想に、日本軍の兵士からスコップを渡され、これから処刑される身である本人が、自分が埋められる墓穴を掘らされた。イギリス人3人のパイロットは、墓穴の前で目隠しされてズドンズドンと撃たれ、自分が掘った穴に転げ落ちた。

父が立会いの下で処刑にした3人の飛行士は、1941（昭和16）12月16日であった。3人の飛行士の名前は、R. Gordon（36）、E. Rega（年齢不明）、H. C. Wright（26）である。現在カーンチャナブリーのチョンカイ外国人墓地で眠っている。

3人の墓地を見つけたのは偶然だったのだが、およそ15年ほど前に、京都精華大学の学生を案内してチョンカイ墓地でレクチャーをしていたときに、墓守りをしているロットさんから、名前はいわからないがソングラーの日本人の医者に処刑にされたのだ、と聴き、偶然だったが、3人のイギリスのパイロットがチョンカイ外国人墓地で眠っていることなどの真相を発見したのである。話はちよつと横道にそれたが、父は3人の飛行士を処刑にした後1942（昭和17）年元旦、長年住み慣れたソングラーの家を捨てて、家族を置き去りにし、日本刀を腰にぶらさげて軍属として軍部とともに行動し、シンガポール攻略へと飛びだしてゆき、それっきりタイには戻ってこなかった。

#### ソングラー住民の証言

スチャート・ラッタナプラカーンさん「精米所経営者」

警察の人や、一般の人10人ぐらいいた人たちが海に20隻の船を発見したので、走って郵便局に行き、ソングラーのナイイ・アムポー（郡長）に知らせるようにと、連絡した。

午前1時頃小船が海岸目指してきた。

郡長と私はイギリス領事館の家に隠れていた。

日本兵に見つけられたが、住民だと示し、疑われず行かせてくれた。

4時頃我が家に戻ってみたら、家族はだれもいなかった。

チャイ・チャーシンさん「ソングラーの発電所勤務」

12月7日の夜11時頃、サムローが海に船が一杯いると、教えてくれた。

警察に知らせると、警官がすつ飛んで行った。

発電所に戻ると、警官と志願兵が3、4人いた。

日本兵がきたので身を引くと、機関銃と迫撃砲を据えた。

翌朝5時頃日本軍の飛行機がいっぱい飛んできた。

日本兵は2日間警備していた。

チャン・スントーンさん「志願兵」

志願兵でナム・ンゲーム通りに住んでいた。

午前2時頃エンヒンさんが日本軍がきたと言って、走り去った。

日本軍はカラヤー通りを歩いてきて、ナゴシーの茶碗屋の扉をたくと、ナゴシーさんが軍服姿で現れた。

私は糊を持たされ、イギリスを撃退するビラを貼る

手伝いをさせられた。

タイは敵ではない、友人だといった内容だった。

ナコーンナイ通りに神戸マリーンの店があったが、

ナコーンナイの電話線を切っていた。

モーカイセイ（カイセイ医師、（父）は軍刀を持って軍人の姿で現れた。

ハートヤイにゴムの三菱、ソクラーに三井物産があった。

ポントヴィン・ノップパーニツさん「ソクラー生まれ」

1941年タイの兵士になった。

午前2時頃緊急警報が鳴った。

サナツさんがいま日本軍が上陸したと告げ、

電話線を切っていた人に発砲したが当たらず逃走した。

5時頃日本軍がバーンコンヨウの塹壕から機関銃を撃ってきた。

暗くて日本軍の人数はわからない。

ポン・ダムさんとポン・チャアさんは撃たれて直ぐ死んだ。

日本軍の飛行機も一杯飛んでいた。

司令官は敵が見えなかったら撃つなど言った。

私は日本軍を沢山機銃掃射して殺した。

戦いで友人が2人死んだ。

12時頃静かになった。

私は軍曹に進級した。

戦いで耳が遠くなってしまった。

サテイヤン・プロンマッパツさん「マハーワチラヴツ校教師」

12月8日午前2時頃ウティツ先生に呼び起こされた。

日本軍がきた、町は日本軍でいっぱいだ。

私は直ぐ妻と子供を起こした。

日本軍は南へ向かっていった。

私は外へ出てみたが、発電所やテーサバーン（市役所）も占領されていた。

危険なので家へ戻り、避難準備をする。

明るくなってナムグアム通りへ行くと、ポスターが貼ってあった。

タイと日本の旗が交差していた手を握っているポスターだった。

日本の飛行機が一杯飛んでいた。

船から大砲を降ろしていた。

スアントウーンのタイ軍の兵舎から大砲や爆弾の音も聞こえた。

イスラームの村にいる妹の家へ舟で避難した。

サムローン・ルアープンシューさん「コーホーン兵舎にいた兵士」

12月7日夜12時頃緊急ラッパが鳴り集合。

司令官が（いま5隻の軍艦がソクラーに向かってくる。

この軍艦には国旗が無い、緊急事態になるかもしれないので、

タンボン・ナムノイに行くと言った。

其処へ行くと、既に鉄道に陣地が敷かれていて撃ち合いになった。

10時頃ピブーン首相の命令で停戦となり、日本軍を通した。

12月8日タイに奇襲上陸した日本軍の進撃ルート

（タイ軍部の資料より・時間は現地時間）

0940 当時ダイ領であったプラタボーン（バッタンバン）県に

二手に分かれて、50台のトラックで進撃

1200 タイの警官隊と交戦、警官2人戦死、負傷多数、警官2人と

市民4、5人逮捕され、シーソーポーン郡に監禁される。

日本軍3人戦死、負傷多数。

ピブソンクラーム県

0700 日本の空軍機23機アランヤプラテート方面に飛び去り、一時間後に

250台の機動部隊。パイラヨードトから侵略し、県知事と

コークトロン村の警察署長が逮捕されたが、途中で逃走した。

シーソーポーン郡



1135 日本軍ビブソンクラム県から装甲車とともに侵略。  
シーソーポーンを占領。およそ500人の守備兵を残して、  
アランヤプラテート目指して進撃。

#### ワッタナコーン郡

0900 日本の戦闘機11機と爆撃機6機飛来し、ワッタナコーン基地を爆撃。  
タイの戦闘機3機撃墜され、操縦士3人戦死。  
0940 日本軍ワッタナコーン基地を攻撃し、飛行場を使用する。  
1200 日本軍シーソーポーンを通過。  
1740 日本軍第一線部隊およそ5000人カビンブリー鉄道を渡る。  
別動隊はアランヤプラテートを通過。

#### バンコク

9日午後 ドーンムアン空港付近で道路を封鎖していたタイ軍と市民に対し、  
宮本中佐と部下の通訳官が日本軍の通過を計ったが、  
2人とも袋叩きにされて死亡。

#### サムツプラカーン県

0330 日本軍バーンブー避暑地に上陸開始、避暑地を占領し、係員全員  
および、サタヒーブ軍港からバンコクに帰る途中の海軍司令官  
シン・ソククラムチャイ海軍中將を逮捕し監禁。  
0430 バスの運転手の通報により、およそ20人の警官現場に急行。  
バーンブーから30キロほど離れたフアラムブーの曲がり角で  
日本軍と対峙。

#### プラチャワプキリカン県

0400 日本軍市内を占領。上陸した部隊と警官隊交戦。空軍基地で激戦。  
タイの空軍機7飛び出したが、6機が滑走路でやられ、飛び発つたのは  
1機のみ。この1機が輸送船目掛けて爆弾を落としたが失敗に終わる。  
1000 タイ軍兵舎を焼き捨てる。  
1100 タイ軍ガソリンタンクを燃やす。  
兵士並びに家族をロームムアク山の麓に避難させる。  
タイ18人戦死、27人負傷。  
日本209人戦死、300人負傷。

チムポーン県

- 0 2 0 0 日本軍北方サメツ島からレームディン村と、コーソン村に上陸開始。  
0 3 0 0 日本軍上陸完了。村人に危害はなかったが、外出禁止。  
0 6 0 0 ナーンサン橋で警官1人が発砲し、日本軍タイの機関銃隊と交戦。  
タイ5人戦死、5人負傷、日本の死傷者多数。死者の一部12人をシーヤーパイ校庭に埋めた。

スラーターニー県

- 0 5 4 0 パッタニー郵便局から電報で察知。  
0 7 3 0 日本軍2隻の上陸用船艇に分乗し、一隻に日の丸、後一隻にタイの国旗を立ててターピー川を上り、コープカーン市場および、下製材所付近の市場に上陸。中川少佐の先導で、クームアン橋まで進行。  
中川通訳、県知事と日本軍の通過を交渉。  
0 8 0 0 交渉不成立、豪雨の中で午後1時まで激戦。  
タイ約18人戦死、日本不明。

ナコーンシータマラート県

- 0 2 3 0 ソンクラー郵便局の電報でおよそ15隻の輸送船が  
ソンクラー沖に停泊の一報がナコーンの郵便局に届く。  
0 8 0 0 ターペー空軍基地豪雨の中で戦闘開始。昼頃まで激戦。  
タイ39人戦死、およそ100人負傷、日本軍不明。

シンゴラ（ソンクラー県）

- 0 0 0 0 日本人およそ20人領事館の晩餐会后、  
24時頃頭髪を剃り、軍服に着替える。  
0 1 0 0 日本の奇襲部隊嵐を侵し、小船でレームサイイ松林の最北に上陸。  
県庁、警察、駅、郵便局を占領。警察で日本軍に抵抗した警官負傷。  
別の奇襲部隊ソンクラーの飛行場を占領。練習機3機および守備兵  
全員逮捕され、武装解除される。  
0 2 3 0 タイ軍サムローン三又路に布陣  
0 3 0 0 交戦開始、ハートヤイハイウエー17地点で激戦。  
0 4 0 0 日本の空軍機飛来  
0 5 3 0 スワントウン大砲陣地日本の輸送船12隻発見。

0542 タイの大砲隊8門の砲で日本の船団ならびに、  
カウセン飛行場に砲撃開始。  
0800 タイ軍ハートヤイへ向かう列車を砲撃。  
0900 日本の海軍機タイの大砲陣地を猛爆。  
0930 タイの大砲隊飛行場を攻撃、飛行機一機に命中。  
1000 停戦。タイ8人戦死、20余人負傷、日本軍不明。  
日本軍は戦死した将兵をタイ軍と合同で油を掛けて焼いた。  
1700 英軍空軍機8機日本の船団を空襲。1隻炎上、  
日本の戦闘機50機が迎撃、4機撃ち落とす。

#### パッタニー県

時間不明 日本軍は早朝チャーイタレー村のルーサミレーに上陸。  
現在パッタニーにあるソクラー・ナカリン大学から  
バーンワー村までおよそ8キロの範囲を占領。  
現在のパッタニー・テクニクカレッジ学校付近で交戦。  
タイ24人戦死。日本不明。

#### 大東亜戦争勃発時の日本軍の行動

(日本の資料より・時間は日本時間)

12月8日

0215 佗美支隊コタバル第一次上陸部隊が敵岸に到着した  
0320 海軍機動部隊は真珠湾空襲第一撃を開始した  
0335 佗美支隊長は0215第一回上陸成功と第25軍に打電した  
0340 大本営はマレー上陸現地軍の電報を傍受し、直ちに支那派遣軍、  
第23軍、北支那方面軍、第11軍、第13軍の各司令官に  
マレー方面作戦開始を通報した。  
0350 第25軍は8日0335馬來方面上陸開始と大本営に打電した  
0400 第23軍は大本営の通電により、香港攻略作戦開始軍令す  
0400 近衛師団の吉田支隊はバンコク南方海岸に上陸した  
0412 第5師団主力は最期通知を手交するためハル国防長官と会見した  
0420 宇野支隊主力はチュムポーンに上陸した  
0430 第5師団の安藤支隊はパッタニーおよびターペーに上陸した  
0620 宇野支隊の一部プラチュワプキリカンに上陸した  
0700 近衛師団の先頭部隊はタイの国境を突破してバンコクに向かい

前進を始めた

0800

第23軍は九竜半島の啓徳飛行場に対して航空第一撃を開始し、またこれと前後して第38師団は東側から国境を突破して

攻撃前進に移った

0800

第3飛行団はタナメラ、クワラペスト両飛行場を攻撃し、第7飛行団はスンゲイパタニ、アロールスター、ケチル、アエルタワー、ペナンの各飛行場ケダー州およびペナン島一帯の飛行場群を攻撃した

0830

第4艦隊の第18航空隊はグアム島を攻撃した

0830

第5飛行集団はフィリピンのツゲダラオ飛行場および

バギオ兵営を攻撃した

1000

宇野支隊の一部はバーンドーンに上陸した

1010

第4艦隊千歳航空隊はウエーキ島を攻撃した

1100

第12飛行団はシンゴラ飛行場に躍進した

1230

日本軍のタイ国内通過に対するタイ国側の便宜供与に関する交渉が成立した

1332

第11航空艦隊はフィリピンのクラーク飛行場および

1345

イバ飛行場を攻撃した

2200

侘美支隊はコタバルを占領した

12月9日

1100

近衛師団の陸路侵入部隊の先頭はバンコクに進出した

1500

第15軍司令官飯田中將はバンコクに入った

12月9日

仏印度支那共同防衛に関する日仏間現地軍事協定の署名終わった

第10飛行団の一部はバンコクのドーンムアン飛行場に躍進した

12月10日

未明

第5師団の佐伯挺身隊はタイ、マレーの陣地を奪取した

0530

菅野支隊はフィリピンのピガンに上陸した

0600

田中支隊はフィリピンのアパリに上陸した

1150

プリンス・オブ・ウェールズを撃沈した

1403

レパルスを撃沈した

## 第一次マレー半島上陸部隊

コタバル部隊

淡路山丸（支隊長 佗美浩少将）

歩兵旅団司令部、歩兵第56聯隊第1大隊および5中隊、  
同聯隊砲中隊、師団工兵1小隊、その他 計1653名

綾戸山丸（歩兵第56聯隊長 那須義雄大佐）

第56聯隊本部、歩兵56聯隊第3大隊

同聯隊速射砲中隊、工兵第12聯隊1小隊

その他 計1700名

佐倉丸 歩兵第56聯隊第2大隊（第5中隊欠）

工兵第12聯隊1小隊、その他 計2150名

## 第1次タイ上陸部隊

シンゴラ（ソングラー）

第5師団右翼第一次分隊

熱田山丸（旅団長 川村中将） 那古丸、蚊推丸（旅団長 松井中将）

竜城丸（軍司令官 山下中将）

関西丸（21聯隊長 岡部大佐）

川村部隊 歩兵第9旅団司令部、歩兵第11聯隊 第2大隊欠、

同42聯隊第1大隊欠、戦車第1聯隊1中隊、野砲兵第5聯隊主力基幹

佐伯部隊 捜査第5聯隊第3中隊欠、野砲兵第5聯隊山砲1小隊基幹

鉄道突進隊 歩兵第41聯隊第1大隊、第3、第4、中隊機関銃半分欠、

独立連射砲第2中隊

## 第2分隊

笹子丸（11聯隊長 渡辺大佐）

浅香山丸、青葉山丸、佐渡丸、九州丸、病院船波ノ上丸

ナコーンシータマラート

三池丸、善洋丸、工作船東広丸、第1上陸部隊

宇野支隊第6分隊 歩兵第143聯隊第1大隊、第3中隊機関銃1小欠、

航空部隊の一部、自動車50輛、その他 計2607名

バーンドーン

山浦丸、善洋丸、(第2上陸部隊)  
宇野支隊第5、第6分隊、歩兵143聯隊第3中隊、機関銃1小隊欠、  
航空部隊の一部、自動車20輛、その他 計1048名

ターペー

左翼第3分隊

鬼怒川丸、阿蘇山丸、淡路丸、(侘美支隊第4分隊旅団長 侘美少将)

パッタニー

第5師団第1次左翼第3分隊(侘美支隊第4分隊56聯隊長 那須大佐)  
東山丸、宏川丸、金華丸、綾戸山丸、相模丸(第5師団第1次侘美支隊4分隊)  
佐倉丸(侘美支隊第4分隊56聯隊長 那須大佐)

チムポーン

宇野支隊主力第3上陸部隊

伏見丸、良洋丸、工作船東宝丸  
(宇野支隊主力143聯隊本部、聯隊長 宇野大佐)  
歩兵第143聯隊第1大隊、山砲兵第55聯隊4中隊、  
工兵第55聯隊第3中隊1小欠、航空部隊の一部、  
軍馬330頭、自動車20輛、その他 計2233名

プラチュワプキリカン

ジョホール丸 第4上陸部隊

宇野支隊 歩兵143聯隊第2大隊第6中隊機関銃1小欠、  
航空部隊の一部、軍馬100頭、その他 計1007名

バーンプー避暑地

白馬山丸 第5上陸部隊  
吉田支隊 近衛歩兵第4聯隊第3大隊、連射砲1小隊聯隊砲中隊、  
自動車20輛 計1100名

侘美支隊の編組

支隊長 侘美浩少将、参謀 佐藤不二雄少佐(師団長より配偶)、

歩兵56聯隊長 那須義雄大佐、

山砲兵第18聯隊第1中隊、工兵第12聯隊2中隊、師団隊の一部、

第12聯隊自動車一部隊、師団衛生隊3分の1、第3野戦病院、

第11防疫給水部の一部、電信第1聯隊の無線1小隊、独立速射砲第6、

第7中隊、独立野戦高射砲第21中隊、独立工兵第14聯隊3中欠、

(長 森本明義中佐)

第49碇泊場司令部主力(長 中村勇治郎中佐)

水上勤務第47中隊1小欠、建設勤務第58中隊1小隊、陸上勤務第106中隊、

船舶高射砲第1、第2聯隊の各一部、船舶通信隊の一部

#### 宇野支隊の編組

長 宇野陸軍大佐

歩兵143聯隊、山砲兵第55聯隊第4中隊、師団無線4分隊、第38固定無線隊、

師団衛生隊の一部、第2野戦病院(半部欠)、独立自動車第336中隊の2分隊

自動車7輛

#### 南方作戦初動軍兵力

南方軍第14軍 16師団、19師団

南方軍第15軍 33師団、55師団主力、2師団

南方軍第16軍 2師団

南方軍第25軍 近衛師団5師団、18師団、59師団、直屬21師団、

支第23軍 38師団

#### タイ各地に配備された部隊

バンコク第18方面軍、第22師団、第33師団

ナコーンナーク 第33師団

ラムパーン 第15軍第4師団

プラチュワプキリカン 独立混成第29旅団

カーンチャナブリー 第15師団

#### マレー半島に配当された輸送船団

1 第5師団のソクラー上陸充当船 (10隻 85万4453総トン)

佐渡丸、竜城丸、熱田山丸、笹子丸、九州丸、

香推丸、関西丸、青葉山丸、他一隻

2 第5師団のパッタニー上陸充当船 (6隻 4万7783総トン)

広川丸、金華丸、阿蘇山丸、相模丸、鬼怒川丸、他1隻

3 第18師団佗美支隊コタバル上陸充当船

佐倉丸、淡路山丸、綾戸川丸、(3隻 26万4223総トン)

4 南部タイ上陸宇野支隊充当船

バーンドーン 山浦丸 (1隻 5231総トン)

ナコーンシータマラート 善洋丸、三池丸 (2隻 1万8218総トン)

プラチュワプキリカン ジョホール丸 (1隻 6187総トン)

チュムポーン 伏見丸、良洋丸 (2隻 11万2650総トン)

5 ソンクラー 第2次上陸充当船 (24隻 13万5912総トン)

6 パッタニー 第2次上陸充当船 (9隻 3万7111総トン)

7 コタバル 第2次上陸充当船 (4隻 2万1263総トン)

8 第5師団充当船 (13隻 7万7566総トン)

9 第25軍直轄部隊 (15隻 83万2376総トン)

10 マレー方面軍需品輸送船 (8隻 2万8589総トン)

このほかに川口支隊用 (5隻 2万9982総トン)

フィリピン部隊用 (108隻 63万5617総トン)

南海支隊用 (7隻 3万4417総トン)

坂口支隊用 (9隻 5万280総トン)

日本の南方作戦軍の配備

第14軍 比島方面、司令官 本間雅晴中将

第16師団、第48師団、戦車聯隊2、高射砲隊44門、軍直砲兵6大隊、

第15軍 タイ、ビルマ方面、司令官 飯田祥二郎中将

第33師団、第55師団一部欠、

第16軍 蘭印方面、司令官 今村均中将

第2師団、第38師団、第48師団、混成代56歩兵団、

南海支隊、戦車聯隊、高射砲88門、軍直砲兵大隊



第25軍 マレー方面、 司令官 山下奉文中将

近衛師団、第5師団、第18師団、戦車団一（聯隊4）、  
軍直砲兵11大隊、高射砲60門

第23軍 香港方面

第38師団、軽爆一戦隊、

南海支隊 太平洋諸島、混成第55団

南方軍総司令官 寺内寿一大将、 参謀長 塚田攻中将  
総参謀長 青木重誠中将、 総参謀副長 坂口芳太郎中将

開戦時マレー半島英軍の兵力及び配備

マレー軍司令部 長 P.F.パーシバル中将 シンガポール

第3軍団司令部 長 サー・レヴィス・ヒース中将 クワラルンプール

第9インド師団司令部 長 A.F.バーストウ准将 クワラルンプール

第8インド旅団 コタバル

第22インド旅団 クワンタン

第11インド旅団司令部 長 D.M.ミュレイ・リオン准将 スンゲイパタニ

第6インド旅団 ジットラ

第15インド旅団 ジットラ

第28インド旅団（軍団予備）イポー

ペナン守備隊 ペナン

第8豪州師団司令部 長 H.G.ペンネット准将 メルシン

第22豪州旅団 メルシン

第27豪州旅団 クルアン

第12インド旅団 軍直轄予備 ポートデイクソン

シンガポール要塞部隊 長 W.ケイト・シモンズ准将

第1マレー師団 シンガポール島

第2マレー旅団 シンガポール島

この他に現地義勇隊、海岸防備隊、高射砲隊がある

マレー正規軍および義勇軍の合計約8万6000名

陸軍航空兵力は、プレームハイム、バッファロ、ハドソン2型、ヴルデビースト、

プレームハイム4型など246機が、コタバル、アロールスター、クワンタン、スンゲイパタニ、テナガ、プラペスト基地などに配備されていた。

#### 正規軍

イギリス兵 2万0000名      インド兵 3万0000名  
豪州兵 2万0000名      マレー兵 若干

#### 義勇軍を含めた兵力

イギリス人 1万9600名      豪州人 1万5200名  
インド人 3万7000名      現地編入アジア人 1万6800名  
各種種族混合で 2万0000名      合計9万1000乃至10万1000名

海軍兵力 東方艦隊 長 サア・トム・フリリップ大将 シンガポール

戦艦プリンス・オブ・ウェールズ、巡洋艦レパルス、巡洋艦3隻、

駆逐艦4隻、砲艦3隻、仮装巡洋艦2隻、潜水艦1隻

1942（昭和17） 2月15日、シンガポール陥落。2月17日「昭南島」と、改名された。捕虜は約10万人（インド人約5万人、白人約5万人となっているが、正確な人数は不明）主だった司令官名は次の通り。

マレー軍総司令官      A.E.パーシバル中将  
インド第3軍団長      L.M.ヒース中将  
シンガポール要塞司令官      F.K.シュモンズ少将  
インド第11師団長      B.W.キー少将  
英第18師団長      C.A.カラガン少将

日本軍が破竹の勢いで攻略したマレー半島シンガポールの世界一を誇る堅固な要塞を占領した当初の明細は次の通りである。

シンガポール島は東西30キロ、南北に約70キロ、中央部に標高200メートルから400メートルの山がある。川が八方に流れていて、湿地も多く緑の綺麗な島である。

面積	13万6136平方キロ	人口	542万4858人
中国人	235万8335人	インド人	74万8829人
マレー人	228万6495人	白人	3万1199人
日本人	3000人		

## ■ 僕の噂話

二回目の楽しかった夏休みも終わり、ソングラーの我が家からメナムホテルに戻った僕は、5月から三年生になり、二年前よりほんの少し利口になったつもりで元気で学校に通っていた。

或る日のこと、布団などをしまふ箆笥の中で扉を閉めて1人で遊んでいると、どこからかおばさんたちが4、5人ガヤガヤと集まってきて、部屋の中で井戸端会議みたいに、いろんな人たちの悪口や、世間話に花を咲かせ、ペチャクチャとくだらない話をしていた。

僕は聞くともなく聞いていたのだが、そのうちに僕の父の話題になったので、じつと息を殺して耳をすませていた。すると、「正夫の父親は凄いならして、あっちこちで女に手をかけているそうよ。噂によると正夫はどうも貰い語りらしいよ」……「あら、そうかしら、瀬戸さんの隠し子じゃないか、と言っている人もいるけど」……「正夫は色が黒いし、あんなに大きなギョロギョロした目をしているから、やはり貰い子じゃないかしら」……「そうだねえ！ きつとそうよ」、「だけど、もし瀬戸さんの子だとすると、そのうちにあの子が大きくなったら、親父に似て末恐ろしい子になるじゃない」……などと話し合っていた。

僕は自分が「貰い子かもしれない」と聞いたとき、ふとソングラーの我が家での出来事を思い出していた。それは確か僕が5歳のときだった。その日はどうしたことか、僕は二階にあった大きな鏡の前から離れることができなかった。

ずっと立ったままいつまでも鏡に写っている自分の顔を、じつとまじまじと見つめながら、「僕の顔は一体誰に似ているのかな？ ママかな？ 眉毛がちよつとパパみたいだけど……ママにはどこも似てないようだけど……本当のパパなのか？ ママなのか？」と、子供心に取りとめのないことを考えていた。僕には何か本能的な予知感があつたのかもしれないのだが、自分のことを知りたくてそう思ふのだと思う。

その日の夕方、両親が二階に上がってきた目の前で、僕はいきなり「パパ、ママ、僕は誰の子？」と聞くと、両親の顔色が急に変わり、父が「正夫のパパとママはこのパパとママだよ」、僕が「ほんど？」と、聞き返すと、「ほんとうだ、どうしたんだ！ お前は何を考えているのだ！」と、荒っぽい口調で答えた。

あのとき父はどうしてもっと優しく答えてくれなかったのかと思うと、やはり、今此処でおばさんたちが話していることは、案外本当なのかもしれない。もし本当だとすれば自分の両親は誰で、どこにいるのだろうか、と、その日からしこりに残るようになった。

しかし、その時点ではまだ悲しみも何も沸かなかつたし、「ようし！ 真実を確かめてやろう！」と、謎を解こうとする気持ちすらおきなかった。ただひとつだけ、日本人学校に入ったお陰で、僕はプーケツで生まれたことを知ったのである。

それ以来、僕はそ知らぬ顔をして大人の人たちの話には敏感に耳を傾けるようになっていた。時々「○○さんとこの×ちゃんは貰い子よ」とか、「○○ちゃん、あの子は華僑の貰い子よ」と、言う会話を聞いたりするたびに、僕の仲間はずれな理由がなぜこんなに貰い子が多いのだろうか、と、思うようになって

た。だが、僕のことに関しては、残念なことに小学校6年を卒業して終戦になるまで、何ひとつキヤッチできなかった。

## ■学校の行事

僕が毎日楽しみにして通っていたバンコク日本人学校の行事には、楽しい遠足や、みんなで一緒にやるとやる学芸会、それに祭日の催し物のほかに、日本から日本の飛行機が飛んできたりしたときや、海軍の軍艦が入港したときなどに、出迎え兼見学および実習があった。

1939（昭和14）年には、5月19日「そよかぜ号」を、10月17日には世界一周飛行の「ニッポン号」を、12月に「やまと号」をと、この年は飛行機が着くたびに3回も小さなドーンムアン飛行場へ出迎えに行っているし、1940（昭和15）年に商戦学校練習船「白鷹丸」が入港したときも練習船を見学に行っている。

1941（昭和16）年3月1日に駆逐艦「文月」と「白露」2隻が入港し、「白露」の艦内で大砲の撃ち方や、魚雷の発射の仕方などを見学し、世界一を誇る大日本帝国海軍がいかに強いかについて講義を聴き、お昼はテントを張った艦内のデッキで日本米の粘り気のある美味しい昼食をご馳走になった。

同じく3月中頃に「占守」が入港したときも、同じような要領で講義を聴き、水兵さんたちの気合のかかった剣道や、柔道の試合を見学し、僕たちも水兵さんのように強くなるのだ、という、志気を植えつけられた。

日本の軍艦は主にパークナム（河口）に停泊していた。僕たち日本人学校の生徒は軍艦が入港するたびに、小さな日の丸の旗を持ち、先生に引率されて、プララームシー通り（ラーマ四世通り）のフワラムポーン中央駅前にあったパークナム電車の始発駅か、または、途中で停車するサーラーデーオン駅で、ガラガラに空いた二両編成の電車に乗り、みんなでワイワイ騒ぎ、チーンチーン、ゴーゴー、ゴットンガッタと揺られながら、鉄道と平行して右手に流れている運河に沿ってパークナムへ歓迎に行っていた。（当時パークナム電車の乗車賃は、往復でたったの1バーツだった）。

1941（昭和16）年6月23日には、朝日新聞社からタイ国へグラライダーの寄贈があった。僕たちはバスでドーンムアン空港へ行き、広い原っぱで長友飛行士からグラライダーの操縦の仕方、離陸、着陸、それに風向きなどについて講習を受けた。

男子は実際に操縦席にすわったり、グラライダーを引き上げる太い長いゴムを引っ張り、ゴムの先を杭に引っ掛けてグラライダーを飛ばす方法などの実地訓練を受けた。

その頃、6月の段階では、大東亜戦争はまだ始まっていなかったのだが、教育科目以外に、すでに軍事的指導要素が徐々に組み込まれていたようで、小さかった僕たち児童生徒は知らぬうちに実物に触れ、目で見て体で自覚し、自然に覚えていったのである。

僕は宇宙に対する憧れが非常に強く、直ぐにでもグラライダーに乗って、青空をすいすい飛び、ぐんぐん高く舞い上がり、宇宙を自由自在に飛び回ってみたい、と、子供心に美しい夢を描いていた。

## ■開戦当初の日本人学校

日本軍はマレー半島のコタバルならびにタイに敵前上陸すると同時に、機動部隊によるアメリカの真珠湾軍港を奇襲し、続いて香港、フィリピン、ボルネオ、スマトラ、ビルマ（現ミャンマー）、南太平洋諸島へと戦火を拡大していった。そのために今まで平和だった東南アジア全土が突如として砲火に見舞われ、地獄の娑婆と化した。

1941（昭和16）年12月10日の午後、マレー攻略部隊は、世界最強を誇る英東方艦隊のプリンス・オブ・ウェールズおよびレパルスが、マレーのクワンタン沖で日本の海軍機に発見されて撃沈されたので、世界中の人々をあつと言わせた。日本の海軍は凄く、強くと、大騒ぎとなり、一段落した後に、僕たちの日本人学校は再開された。

僕が日本人学校に入学した当初はたった27人しかいなかった学校は、大東亜戦争が勃発した年1941（昭和16）年には在校生が60人あまりに膨れ上がり、活気に満ちた学校になっていた。

ビルマ作戦に進撃するために、第15軍司令官飯田祥二郎中将の指揮の下に、バーンプー避暑地から上陸した宇野支隊ならびに、仏印から陸路タイに進撃した第25軍の近衛師団は12月9日午後バンコクに進駐し、チュラー大学や、タイの学校、ルムピー公園、チュラー大学前にあった白人のスポーツ倶楽部、アメリカや、イギリス人が所有していた敷地などを占領し、バンコクの警備も兼ねて駐屯していた。

ルムピー公園の側にあったひっそりしたチュラー赤十字病院も、屋根に赤いペンキで大きな赤十字のマークが描かれ、入院していた地元の患者はみんな追いだされてしまい、日本軍の負傷兵専用の野戦病院となった。

ルムピー公園には北川戦車部隊が陣取り、夕方ともなると、兵隊が素っ裸になり、フリチン姿で池の水を浴びていた。タイ人は初めて見る光景にびっくり仰天し、ただで見られるブラブラ揺れる兵隊のフリチン踊りを、喜々として凝視していた。

チャローンクルン通りのバーンラック市場の周辺は買出しの兵士や、地元の人たちでごった返していた。「コレバナナ デカイ、ヤスイ、ジョウトアル」と、叫ぶ商魂逞しい物売りの声で活気に溢れ、バンコク市内は軍人の街と化していた。

開戦後、久しぶりに学校に登校したが、初日は授業らしい授業はほとんどなく、はじめにやらされたことは、空襲に遭っても爆風でガラスが飛び散らないようにするために、新聞紙を5センチぐらいの幅に細長く切り、糊で校舎の窓ガラスを十文字に貼り付ける作業だった。それと、焼夷弾が落ちたときに備え、焼夷弾を消すための砂袋を作り、水とバケツを用意して、校舎の周囲に配備することだった。

僕には焼夷弾を消すのに、なぜ砂袋が必要なのか理解できなかった。焼夷弾の消し方も習い、さらに、爆弾が落ちたときに、うつぶせに伏せて親指で両耳を押さえ、残りの指で両目を押さえ、口を開けて口で呼吸をする練習もさせられた。

まもなく校庭内の寮の前に、セメントと土で固められた地上に高く突き出た矩形の防空壕が平行してふたつ出来上がった。空襲になった場合、兄弟姉妹のある者は別々の防空壕に入るように決められた。

## ■慰問

戦時中、慰問団ではないが、僕たち日本人学校の生徒は、よく日本の将兵を学校に招待したり、部隊へ行ったりしたものである。慰問先が何処のなに部隊と決まると、僕たちは先生の指導の下に、授業時間の合間に、みんなで歌や踊り、劇の練習などに熱中し、練習に勤しんだ。

僕は読書や、歌が得意だったので、慰問に行くたびに舞台の上で教科書の国語読本の本を両手に持ち、声を張り上げて朗読したり、「兵隊さんへのおたより」の綴り方(作文)を読み上げたり、好きな歌を独唱したりした。

大東亜戦争が勃発してからだったが、あっちこっちの部隊へ慰問に行くようになってからは、音楽の時間に、ほとんど軍歌ばかり習うようになった。しかも歌詞を暗記しなければならなかった。慰問先でよく歌った軍歌は、兵隊さんよありがとう、海行かば、愛馬行進曲、大東亜戦争陸軍の歌、愛国の花など、およそ60曲ほどに及んだ。

東南アジアで戦争が始まってまもない1941(昭和16)年12月30日、僕たちは初めてルムピニー公園に駐屯していた北川戦車隊の慰問に出かけた。

ルムピニー公園内のコ・ロイ(離れ島)の木陰に、大きなドラム缶の上に板を並べたにわか造りの舞台があった。池のほとりまでぎっしり埋め尽くして、僕たちの動作を見守っている将兵の目の前で演技を披露するのは初めてだった。

何処を向いても兵隊さんの顔、顔、顔、顔だらけの渦の中で、胸をドキドキさせながら初舞台を踏んだ僕たちは、みんな「あーあ、あの顔で、あの声で、手柄頼むと妻や子が……」の、暁に祈るの歌や、「兵隊さんよありがとう」の歌などを、うわずった声で二、三曲続けさまに歌った。

歌い終わった途端に、パチパチパチと、嵐のよう拍手を浴びせられ、突然「いいぞー、もう一度歌ってー！」(当時アンコールとは言わなかった)と、声がかかったときは、実に嬉しくて、僕たちはやった！と、自信をつけた。それ以来、あっちこっちの部隊を訪問し、兵隊さんと遊んだりして、公演して歩いた。

何日だったか日にちは覚えていないが、確か1942(昭和17)年の1月中頃だったと思う。日本軍はシンガポール攻略のために、まだマレー半島で激戦を繰り返している真っ最中であった。或る日のこと、僕たちはチューラー赤十字病院へ負傷兵のお見舞いを兼ねて慰問に行くことになった。

今までは何処へ行っても威勢のいい強そうな将兵さんばかりに直面していた僕の目に写ったものは、鼻をプーンとつく病院独特の匂いに混じって、白衣に身を包んだ見るも哀れな痛々しい赤裸々な人間の姿だった。

頭に包帯を巻いている人、片腕の無い人、足先を吹っ飛ばされた人、両目をやられた人、ベッド

でうんうん唸ってじっと寝ている人、車椅子に座っている人、庭の木陰でしょんぼりしている人などで、病院は白衣の兵士の異様な雰囲気にもまれていた。

こんなに大勢の人たちが、戦場でお国のため、天皇陛下のためにと、生命を捧げ、半身不随になっても頑張って戦っているのかと思うと、戦争の悲惨さに涙が滲み、心が沈みがちになってしまった。

僕が「兵隊さん、おはようございます」と、挨拶しながら病室の廊下を歩いているときだった。白衣をまとった一人の髭武者の兵隊さんが、じつと僕を見つめていたが、僕がそばまで行くと、「ボーヤいくつ」と聞かれた。僕は「11です」と答えると、「11、そうかー！」と、独り言を言ったかと思うと、「ボーヤは可愛いなー！」と呟き、いきなり僕を抱きしめた。

僕は抱きしめられたままじつとしていたのだが、その兵隊さんの暖かい涙が僕の肩に伝わり、僕の心にジーンと響くものがあつた。「アーア！ この兵隊さんは何処で負傷したのか知らないけど、きつと日本に僕と同じぐらいの子供がいるんだ。自分の子供や家族のことを思い出しているに違いない。可哀想に、早く戦争が終わればいいのに！」と思うと、なぜか僕も悲しくなり、いつのまにか目を真っ赤に腫らし、鼻をすすりながら貰い泣きしていた。

別れ際に、お互いに手をしっかりと握り、僕は涙声で、「兵隊さん、お元気でね」と、別れを告げた。兵隊さんはこつくりと頷いてみせただけだったが、僕は無性に悲しくなり、後ろ髪を惹かれる思いで病室をあとにした。

## ■バンコク発空襲

タイ南部のソンクラー周辺は、日本軍が上陸したその日の夕方から連合軍の激しい空襲を受けていた。バンコクが初空襲を受けたのは、開戦後丁度一ヶ月経った1942（昭和17）年1月8日の午前4時頃だった。

僕はまだメナムホテルに世話になっていたが、夜の静寂を破って、ウーウーと、腹の底まで染み込むような不気味なサイレンが鳴りだした。はじめて聞くサイレンの音に何事が起こったのかと、緊張していると、「空襲だー！ 早く明かりを消せー」と、誰かが叫んでいた。

空襲警報が鳴っても、メナムホテルにはまだ避難する防空壕もなかったのので、泊り客も従業員もみんな庭のマンゴーの木陰に夕涼みでもするような感じで、芝生の上に足を投げ出して座り込み、ペチャペチャ喋りながら空を仰いでいた。

まもなく上空を、ブーンブーンと、飛んでくる敵機の鈍い爆撃機の爆音が聞こえてきた。それと同時に、地上から無数の探照灯が冴えた夜空に照らしだされ、飛行機を探索し始めた。夜空を駆け巡る白い尾を引いて移動する探照灯の灯りの美しさに見とれていると、銀色に輝いた2機の双発機の機影が明るい探照灯に捕らえられた。あーあ！ なんと美しい夢のような世界であるうか。

暫くすると、暗闇に落下傘の先にぶら下がった照明弾が投下され、周囲が昼間のように明るくなった。次の瞬間ズドン、ズドン、バリバリッと流れ星のように尾を引いて飛んでいく曳光弾を

交えて打ち上げる高射砲隊の砲撃が始まった。

弾は敵機の側でバーン、バーンと、炸裂するばかりで一発もあたらなかった。爆撃機は悠々と旋回していたが、目的地を発見したのか、ヒューヒュー、ザーザーと、重い鉄の塊を雨のように降らせた。

落ちてきた爆弾がズシーン、ズシーン、ドカーン、ドカーンと、地響きを立てて爆発した途端に、今まで面白がって見ていた僕は急に怖くなり、ガタガタ震えだし、10分おきぐらいにトイレに通ってジャージャー小便ばかりしていた。「正夫の弱虫」と、ゲラゲラ笑う人がいるかもしれない。だけど、あとにも先にも、これが僕にとって生まれてはじめて経験したブルブル胴震いした恐怖の空襲体験であった。

1月28日の真夜中にも、数回目の爆撃を受けた。だが、その日はトンブリー県（当時はまだトンブリー県だった）で爆撃機が1機撃ち落とされ、大騒ぎとなった。これで懲りるだろうと噂された。しかし連合軍の爆撃の頻度は衰えを見せるどころか、終戦の日まで継続された。

特に、1943（昭和18）年頃からますます酷くなるばかりで、B24機爆撃が銀色の翼を連ね、編隊を組んで昼間でも悠々とバンコクの上空に飛来し、我が物顔に自由自在に爆弾を落として飛び去っていた。

このために、ラーマ四世通りのフワラムポーン中央駅、川向こうの（当時トンブリー県）バーンコークノイ駅、ニューロードの中央郵便局、ドーンムアン（当時日本軍の空軍基地）、ワツ・リヤプの発電所、サームセーンの発電所、水道局、マッカサンの日本大使館、ニューロードのボルネオ倉庫、チャウプラー川に架かっていた、プツ橋、ラーマ六世橋や、主な軍事基地が爆撃のターゲットとなった。

## ■大病

1942（昭和17）年2月3日頃だったと思う。午後3時半頃学校の授業が終わり、僕はいつものようにツタエちゃんや、嘉子ちゃんたちと一緒にメナムホテルに戻った。ホテルではみんなが並んで、日本の軍医からチフスの予防注射をして貰っているところだった。僕たちも「直ぐ並ぶように」と言われて、3人ともそのまま列に加わり、軍医から予防注射をもらった。僕は右腕にしてもらったが、皮膚がプツと膨れてとても痛かった。

僕はその日の宿題をすませ、水を浴び、夕食をすませたから、庭でチャニー（手長猿）と遊んでいた。が、急に頭がズキン、ズキンと疼きだし、熱っぽくて気分が悪くなってきたので、部屋に戻ってそのまま朝まで寝込んでしまった。

一早朝目が覚めて起き上がったが、熱で頭がガンガンしていた。だが、僕はちゃんと顔を洗い、ふらつく足取りで学校に登校した。学校に着いても体がだるいので、講堂の隅っこでおとなしくじつと座って休んでいた。

1時間目は確か算数の時間だったと思う。2時間目は国語の時間で、今日は1人ずつ読まされる



日だった。米美さん、瑟ちゃん、恵美ちゃんと、順番に読み終わり僕の番となった。宮脇先生に「次、正夫」と、名前を呼ばれて「はい」と、返事をして読みだしたが、読んでいるうちに目がぼおっと霞み、行を間違えたり、字を読み違えたりして、もたもたしていたので、クラスの仲間がみんなクスクス笑いだした。

そのうちに宮脇先生がかんかんに怒りだし、「正夫、なにをばやばやしているのだっ！ もっとはつきりしつかり読めっ！はじめから読みなおしっ！」と、叱咤されて読みなおした。だが、何回繰り返しても間違いだらけでどうしてもすらすら読めなかった。字を見つめれば見つめるほど、まるで魔法使いの字みたいなのに、ぼおっと霞むばかり、僕はとうとうメソメソ泣きだしてしまった。

今までゲラゲラ笑っていた級友もさすがに悪いと思ったのか、急にしんとなくなってしまった。すると、宮脇先生が「正夫、お前はそれでも男か！ なにをめそめ泣いているのだっ！ 男は泣かないんだっ！そこに立っておれっ！」と叱られ、ゴツーンと拳骨のおまけまで頂戴した僕はうつむいたまま終わりのチャームが鳴るまで我慢して立っていた。

その日は時々眩暈がするようになった。お昼のお弁当も全然喉を通らず、水ばかり飲んでいった。そのうちにどうしたことか、左の皺くちやになったお爺ちゃんのような顔をした可愛い金玉が卵の大きさぐらいにパンパンに腫れ、熱をおびて痛くてたまらなくなってきた。

実に辛い長い1日であったが、待ちに待った最終授業がやつと終わり、「先生、さようなら」と挨拶して、みんなと並んで帰途についたときは、さすがに歩く気力もほとんどなかった。歩いているうちにみんなから置き去りにされてしまった僕は、ガンガンする重たい頭を垂れ、朦朧とする意識の中で前につんのめりそうになりながら、酔っ払いのようにヨロヨロ歩き、やつとの思いでメナムホテルに辿り着いた。途端に意識不明になり、僕はそのまま倒れたり倒れてしまった。

僕はシローム通りの東京食堂の前にあった木原病院に担ぎ込まれ、40度の高熱にうなされ、危篤状態に陥っていた。びっくしたメナムホテルのおばさんが、ソングラーの義理の母に「マサオ キトク」と、電報を打ったので、母が慌ててすっ飛んできた。

### ■あの世の美しい花園

病室の狭いベッドに寝かされていた僕は、木原病院のドクターから話しかけられても、なにを言っているのかも聞こえなかったし、身動きもできず、声すらもでなかった。腕に注射針を刺されても、体内の神経は痛みもなにも感じなくなっていた。

40度以上の熱は一向に引かず、僕はいつのまにか意識不明になってコンコンと眠っていた。どれぐらい眠っていたのか知らないが、僕は誰もいない森に覆われた青々とした芝生を敷き詰めたような美しい野原の中を歩いていた。

音のない静かな心地よい涼しい世界。その中に小さな草花から大きな大木にいたるまで、青、赤、黄、橙、紫、白など、色とりどりに咲き乱れた大小様々な大きさをした花が満開していた。こんなに美しい世界、遠くに見える山の麓まで花、花、花、見渡す限り見事な花の世界、あーあ！ なん

と美しいこと。このような美しい花園がこの世の中にあつたのだろうか、そこから離れがたく、快感に満ちた気持ちでいつまでもフラフラさ迷い歩いていた。

ふと我に返った僕は、夢のような朦朧とした意識の中で目を覚ました。だが視界は真っ白でなかに覆われていてなにも見えなかった。意識が次第に回復し、体内の神経が感電し、五感がピクツと動き始め、やっと自分の体の上から白い布が被せられていることに気がついた。

白い布をそおつと引つ張つて顔をだしてみると、町田先生が涙を流して立っていた。すると、町田先生が「オー！ 正夫、先生はもう駄目かと思つた。だけど、足の裏から注射したんだ、助かつたか、よかつたな！」と、涙ぐんでいた。

僕は一時心臓も止まり、一旦仮死していたらしいのだが、奇跡的に助かつた。また、この世に帰つてきたのだが、あの綺麗な花園は果たして夢であつたのだろうか。それとも、実際にあの世をさ迷つていたのであるか。あの美しい花園のことはいまだにありありと思ひ出せるのだ。世の中には実に不思議なことがあるものである。

僕は自分の意識を取り戻してからだけど、さらに4、5日木原病に入院していた。毎日いやといふほど、腕とお尻にチクリ、ブスリと細長い注射針を突き刺されて痛いめに遭い、うんざりしてしまつた。入院中も毎晩のようにドカン、ドカンと爆弾を撒き散らす空襲に見舞われ、神経をゆさぶられたが、僕はひとりで真つ暗な病室で心細い思いをして寝ていた。

## ■戦時中の汽車の旅

僕は体が衰弱しているので静かな所で休養するようにとの木原医師のアドバイスで従い、僕は木原病院を退院したその日に、義理の母と汽車でソクラーへ帰ることになつた。いつもフワランポーン駅から急行列車に乗っていたのだが、戦争でフワラムポーン駅や、チャウプラヤー川に架かつていた南線の肝心なラーマ六世橋が連合軍の空襲などで不通になつたりしていたので、当時はトンブリー県だつた川向こうのバーンコークノイ駅から普通列車に乗らなければならなかつた。

バーンコークノイ駅も数箇所爆弾が落ちた跡があつた。が、まだそれほど酷くはなかつた。駅はわりと混雑していたが、空襲を恐れてか、南タイ行き乗客は少なかつた。僕が乗つた列車はタイ人ばかりだつたが、座席もわりに空いていたので、楽に寛いで座れた。

僕は久しぶりにソクラーの我が家へ帰れるので、かなり元気になり、心は弾んでいた。朝7時頃出るはずの列車に乗つたのだが、後ろの貨車に日本軍の物資を積み込んでいるらしく、数人の日本兵が銃を持って警備にあたっていた。

出発時間よりかなり遅れた列車はSL機関車のポーと鳴つた汽笛を合図に、車両の横から蒸気をシュッシュツと吐きだし、ガタン、ゴットンと、のろのろ動きだした。しかし、途中で鉄橋が数箇所落とされていたために、列車は暫く走つては停車したりした。

補修された鉄橋を渡るときなどは、ぐっとスピードを落とし、ギシギシ橋げたをききませながら静かに渡つた。駅によつては長時間停まつたりして、亀みたいにガサゴソ走り、陽が暮れる頃やつ

とチュムポーン駅の活気づいた小さな町にたどり着いた。

僕が乗ったノロノロ列車は、ハートヤイまでの直行便だったのだが、鉄道は日本軍部の管理下であったために、スケジュールが急に変更になり、チュムポーン駅停まりとなってしまうた。

停車して暫くすると、ひとりの伝令が、僕と母が座っていた席までやってきて、敬礼をしてから、「今晚は駅前のあの宿に泊まってください。宿泊料は払う必要ありません。列車は明日朝8時に出発しますから、それまでに乗ってください」と、言い残して、去って行った。仕方がないので、軍部から指定された駅前の古ぼけた二階建ての支那宿に一泊することになった。

僕は宿のベランダから、町の様子を眺めていたが、チュムポーンにはまだ日本兵が大勢駐屯しているらしく、町や駅の構内は一般市民と、日本の将兵とでごった返していた。列車が並んで停車している駅の路線の一角では、大勢の兵士が大粒の汗を流しながら、重そうな荷物を、せつせと貨物列車に積み込んでいた。

積み込みが終わると、作業をしていた兵士もみんなすうーっと列車の中に吸い込まれてしまった。マレー攻略に行くのであるうか、列車は南へ向かって音もなく滑りだし、闇の中へと消え去った。

## ■戦時下のソクラー

次の朝、ポーポーと鳴る汽笛の音で目覚めた僕は、宿の下で売っていた美味しいチョコレート（おじや）を食べ、腹ごしらえをしてから、また同じ列車に乗り込んだ。列車は昨日よりは調子よくシュツシュツ、ポッポと、快適に走りだした。途中で空襲に遭うのではないかと心配されていた連合軍の空襲もなく、無事にハートヤイ駅に到着した。

父がいないソクラーの我が家は、埃だらけの空き家になっていた。僕は母とこの大きな屋敷で2人きりで暮らすことになった。父がいた頃は、ホテルか倶楽部みたいに大勢の人たちが出入りし、活気に満ちた我が家は、まるで幽霊屋敷みたいにシーンとしていた。

僕がくる2、3日前にソクラーは空襲に見舞われ、家の前のドーナツク寺に爆弾が落ちてお坊さんが2人死んだ、と聞き、お寺を覗いてみると、まだ破片で飛び散った人肉の塊が木の枝に引っかかっけていて、ウジが湧き、プーンと鼻をつく悪臭が漂っていた。

僕は久しぶりに海の匂いを嗅ぎながら懐かしい旧友の家を4、5軒訪問したが、みんな空襲でコ・ヨー（ヨー島）に避難していたので、誰にも会えなかった。僕はがっかりして当てもなくひとりでソクラーの町や、サミラービーチをフラフラ歩き回った。

サミラービーチには、処どころに〇〇兵士戦没の碑と記載した、小さな四角の細長い木の墓標が潮風に打たれて寂しそうに佇んでいた。海辺の小高い岩の側にも大きな石に、黒字で太く刻まれた「松井兵団記念碑」の石碑が、暑い陽射しを浴びて浜辺を睨んでいた。

ソクラーにはまだ日本軍の駐屯部隊が点在し、活発に動き回っていた。ソクラーの駅の前にも一般市民から敬遠されていた恐怖の憲兵隊があった。日本領事館にも将兵が大勢詰め掛けていて、活気に溢れていた。

1942（昭和17）年2月15日、待ちに待った待望のシンガポールが陥落し、2日後に「昭南島」と改名された。軍部は大喜びで、あっちこちの部隊で酒盛りが始まり、万歳、万歳の声とともに、一晩中ドンチャン騒ぎで沸き返っていた。領事館でも、F機関の関係の人や、軍に協力した日本人が集まり、盛大なパーティーが開催された。

それから数日後に、朝から領事館の正面玄関で、将兵による歌や、演芸会が披露され、僕が賞品を配る役を仰せ使った。僕は賞品を渡すたびに、兵隊さんから「可愛いボーヤだ」と、頭を撫でられて照れてしまった。勝野領事から「正夫ちゃん、なにか歌って」と、言われたが、「なんだか恥ずかしくて、いやです」と言って、断ってしまった。

日本の兵隊さんに顔を知られた僕は、その日からよく兵隊さんの部屋へ行って遊ぶようになり、大勢の兵隊さんと友達になった。或る日、兵隊さんから「ぼく、タイのピーヤを知らない？」と聞かれて、僕は「ピーヤってなに？」と聞き返えた。「ピーヤはね、綺麗な女の娘が一杯いる所だよ」と言われて、「あーあ、そうなの！ 僕の家の前のホテルにいるよ」と答えると、「あーあ、あそこかーあ？」とがっかりした顔をしていた。

僕はもうすっかり元気になっていた。シンガポールが陥落してから間もなくだった。母は「お父さんは他の女ができて、マラッカでその女と一緒に暮らしている。家には一銭も送金しないで酷い」と、毎日のように父の悪口ばかりを、ブツブツこぼしていた。僕は同じ愚痴を再三聞かされて辟易してしまった。

そんな或る日のこと、母は何を思い詰めたのか、真剣な顔をして、急に「父に会いに行く」と、言いだした。僕も父には昨年11月にバンコクで別れて以来会っていないだったので、是非会いたいと思い、「直ぐ行く」と賛成した。

まず、領事館の勝野領事に用件を頼み、ソクラーの兵站に赴き、マラッカへ父に会いに行く通行証を書いてもらった。「瀬戸母子がマラッカの警察署長をしている父に会いに行くため、全ての便宜を取り計らうべし」といった内容だった。漢字と片仮名で書かれた字が、まるで印刷でもしたように綺麗な字だったので、僕はその筆跡の素晴らしさに惚ればれと見とれてしまった。

### ■父を尋ねてマラッカへ

僕が母と2人で父を尋ねてマラッカへ行ったのは、シンガポールが陥落して間もない2月末か3月初め頃だったと思う。兵站から将校専用のカーキ色の軍用車が我が家に迎えにきてくれた。

僕が乗った車は黄昏迫るソクラーの町を抜けだし、郊外の駐屯軍がいるかなり大きな基地に立ち寄った。運転をしていた若い上等兵は、上官から、僕たちをサダオまで送り届けて、22時までに基地に戻るように、と、命令を受けていた。

車は真っ暗な道を南下してタイの国境の町サダオへと向かって疾走した。サダオは開戦当初、タイの国境警察警備隊が警備していた。しかし、マレー半島から越境してきた英印軍により占領された町である。だが後に、ソクラーから進撃してきた佐伯部隊と激突した英印軍は12月9日に敗

走した。この小さな国境の町サダオはタイ領土で初めて英印軍と激戦を交えた町だった。

車は疲れたサダオの町外れの民家が数軒点在している所で停まった。僕は道端の一軒屋に案内されて、「今晚は此処でゆっくり寛いでください。明日の朝別の車が迎えにきますから」と、言われた。僕を送ってくれた若い上等兵はそのままそくさとソクラーへ引返して行った。

僕が泊まった部屋は小奇麗にきちんと整頓され、ベッドにはアイロンのかかったシートがピシッと敷いてあった。隣に人のよさそうな色の浅黒いマヤラ系のタイ人が親娘3人で住んでいた。

僕が泊まった家も管理しているとかで、朝、おばさんにミルクの一杯入った甘い紅茶とタイのお菓子をご馳走になった。時間はまだたつぷりあったので、僕は散歩がてら、埃だらけのサダオの町を歩き回ってみた。だが、なにもない小さな町だった。見るものも行く所もなく直ぐ飽きてしまった。

宿泊した家の軒下に大きな縁台があったので、僕は其処に足を投げだして座り、「おばさんたちと話しながら、外の景色を眺めていた。時々遠くから静けさを破って埃を撒き散らして疾走してくる日本の軍用車以外はほとんどなにも通らなかった。

僕は此処からマレーの国境まであと10キロほどしかないのに、どうして此処で泊めたのであるうか。この辺には日本軍の施設も兵隊の姿も見あたらなけれど、この家はなんのために借りているのであるうかと、自分なりに、よけいな推理を立てて楽しんでた。かなり陽が高くなった頃やつと迎えの車がきたので、お世話になった3人の親切な親子に別れを告げて埃っぽいサダオの町をあとにした。

### ■戦火の跡マレー半島へ

タイとマレー国境に検問所があった。だが、車は通り過ぎてしまった。国境線を通過した途端に、車はぐっとスピードをあげて走りだした。両側にゴムの木が密集したハイウエーを走っている車窓から、移り変わる景色を見ていると、戦争で川に架かっていた大小様々な橋は全部英軍に破壊されていた。

それを、工兵隊が敵に撃たれながら必死になって補修したとかで、尊い生命のかかった大事な橋が架かっていた。それと、道の両側の至る所に激戦で破壊された日本軍と英軍の戦車や装甲車などの残骸がまだそのまま残っていた。

車体に血痕の滲んだ戦車などもあり、戦争の凄まじさを物語っていた。駅なども、砲撃の跡や、焼け跡がまだ生々しく残っていた。車は急に広々としたジツトラの激戦地を通過し、暫く走ってアロルスターの空軍基地に入った。

基地の滑走路には数機の戦闘機が翼を揃えて待機していた。その先のほうに小高い山があった。かんかん照りの太陽にじりじり焼かれているその山には、異常にうごめく人並みで埋まっていた。

数千人の日焼けした真っ赤な肌を丸出しにした英軍の捕虜や、マレー人の労務者が黙々と山を切り崩し、籠に入れたずっしりした石を山の麓まで運んでいた。それを、銃を持った日本兵が遠方か

ら目を光らせて監視していた。

戦争とはいえ、負けると、身の自由もすっかり束縛され、こんなにも惨めな身分になってしまうのであろうか。まるで奴隷のように強制され、喉も渇くであろうに、休む暇もなくロボットみたいと同じ動作を万遍なく繰り返し、手足を動かしている捕虜たちの哀れな姿を見ると、何故か、涙が滲んでくる。あーあ！同じ地球上に住む人類でありながら、どうして仲良く暮らせないのであろうか。

アロールスターの基地で2時間休憩することになった。僕はみんなが食べている大衆食堂で、かまぼこや、牛肉などの具が一杯入った美味しいラーメンをご馳走になった。あまりにも美味しかったので、僕は2杯も平らげてしまった。

## ■タイピンの町

車は快適に走り、戦渦に見舞われたアロールスターの町を通過し、タイピンのきちんと整頓された静かな町に入った。旧司令部があった、と言われた、駐屯部隊に寄り、その二階で支持を仰ぎ、町の中心地にあった二階建ての将校専用のホテルに泊まることになった。

そのホテルは軍部によって管理されていた。中はがらんとしていて、客は2、3人しか泊まっていなかった。母は「疲れた」と言って、すぐゴロンと横になって寝てしまった。僕は退屈なので、ひとりで外に飛びだして、暗くなるまでフラフラ歩き回っていた。

タイピンは埃ひとつない実に静かな綺麗な町だった。軒並みの垣根には木がこんもりと生い茂り、いろんな小鳥がピーピー、ピーチクと、楽しそうに囀ってずっていた。あっちこっちの庭には、綿を敷き詰めたような青々した芝生が波のようにフワフワと踊っていた。僕はゴロンと芝生の上に寝転びたい衝動にかられ、夢を見ているような心地になり、いつのまにか小声で、歌を口ずさんでいた。

タイピンからは、腰に拳銃を携帯した中尉が護衛を兼ねて一緒に同行することになった。その中尉は、母と戦争の話をしてきたが、戦場で勝った手柄話ばかりしていた。しかし、そのうちに、「シンガポールが陥落してから、時々ゲリラ（ライテクの後を引き継いだ陳平書記長が率いるマラヤ共産党。南洋華人による抗日人民軍で、終戦時およそ5000人の兵力があった）が出没するようになった」と、話していた。

タイピンの郊外に差し掛かった頃だった。何処へ連れて行かれるのか、炎天下を上半身裸にされた半ズボン姿の白人捕虜が4列に並んで、長い列をなして歩いていた。恐らくイギリス兵か、豪州兵であろう。このように同じような姿を見るのは今回が二度目だった。

僕が初めて白人の捕虜を見たのは、1941（昭和16）年1月中旬頃だった。それはバンコクのスワン・アムポーンにあった捕虜収容所だった。メナムホテルのおばさんと一緒にドゥーシット物園に行った帰りに、近くにあったスワン・アムポーンの中を覗いたときだった。鉄条網に囲まれた中で退屈そうにしていた上半身日焼けした赤肌を丸だしにした哀れなフランス兵士の姿だった。

## ■スリムのからゆきさん

僕は山裾に行儀よく植えてあるパイナップル畑や、誰もいない森閑とした錫鉾山、ジャングルに覆われ雄大な山々や、青空にくっきり浮いた雲の流れゆく景色などを、じっと見つめていた。

車は山道のゴム林に覆われたスリム・リバ（スリム川）の手前にある坂道で停まった。坂の上に乗る奥行きのある大きな平屋があった。裏はジャングルになっていて、綺麗な小川がさらさら流れていた。

陽はまだ高かったが、今日は此処に泊まることになった。その家にはすでに4、5人の将校が軍服を脱いで寛いでいた。家の主は、マレー人の姿をした痩せた中年のからゆきさんのおばさんだった。20年ほど前に島原からシンガポールに渡り、マレー半島を転々と歩き、マレー人の金持ちと一緒に、6年ほど前から此処に住んでいるようだ。

おばさんは母と2人で、スリムの激戦や戦前のシンガポールの世間話をしていた。僕が側にいたので、都合が悪くなると、なにを話しているのか訳のわからないマレー語で楽しそうに話し合っていた。

スリムの攻防戦は、コタバル、ジットラに次ぐ激戦地だった。スリム川に架かっていた長い橋は、日本の戦車隊の活躍で珍しく橋を破壊されないで進撃できたので、川岸で敵の装甲車や車両を60輜も分捕り、大戦果を挙げた。至る所に敵の死体が転がっていて見られたものではなかった、という。おばさんは、スリム川の戦鬪が間近に迫った頃英軍の注意に従い、数日分の食料を持って付近の住民と一緒に裏のジャングルの中に避難し、凄まじい砲弾が炸裂する音を聞き、戦いが終わってから帰ってきて見たら、裏の川に腐敗した凄惨な形相をした英軍の死体が一杯浮いていたそうで、時々、犬が腐った死体の手や足をくわえてきてムシヤムシヤ食べていたので、暫くなにも食べられなかった。と、戦争の悲惨さを語っていた。

夕食後、みんなは遅くまで話し込んでいたようだが、僕は裏に面した川に近い部屋で、心地よい川のせせらぎの音を聞きながらぐっすりと眠った。朝、湯気のように霧が立ち込めた川のほとりで歯を磨き、透き通った底まで見える冷たい水で顔を洗った。

実に気持ち良かった。僕は暫くそこに立って、川の流れを見つめていた。気のせいかな、戦死した人たちの霊が「オーイ、正夫」と叫び、耳元でなにかを囁いているような気がしてならなかった。今日は大型の軍用バスが迎えに来た。おばさんの家に泊まっていた人たちは、憲兵と思われる私服の将校2人を残してみんな一緒にバスに乗った。手を振り別れて間もなくバスはスリム川の近くに駐屯していた守備隊の基地で暫く停まった。基地の中はがらんとしていてなにもなかった。そこで更に10人ほどの兵隊を乗せ、バスは激戦地だったスリム川の橋を渡り、クアラルンプールへと向かって走りだした。

## ■クアラルンプール都市

快適に走っていたバスがクアラルンプールの市内に入ってからだった。市内の混雑した橋を渡ろうとしていたときだった。籠に重い物を入れ、天秤棒を担ぎ、車に混じって横を歩いていた華人の太ったおばさんが僕たちが乗っていたバスに引っかけられた。籠の中の物が道端に飛び散った。おばさんは尻餅をついてひっくり返り、びっくりした表情でバスを凝視していた。

だがその途端に、バスを運転していた若い兵隊が日本語で「オイッ！ このチャンコロ、なにをばやばやしているんだっ！ 早くそこをどけっ！」と、大きな声で怒鳴っていた。哀れなおばさんは罵倒を浴びせかけられて怖くなったのか、天秤棒と籠をひったくると、そのままそそくさと、逃げ出していった。

バスに乗っていた兵隊さんもみんなゲラゲラ笑って見ていた。だが、僕は悲しかった。こつちが悪いのになぜ停まって親切に「ごめんね」と言っ、助けてあげなかったのかと思うと、実に情けなかった。

なんだか不愉快な思いをしていた矢先、まだ昼間なのに今日はクアラルンプールで泊まることになった。市内の目抜き通りにあつたすばらしい一流ホテルに案内された。「此処で明日の午後1時までゆっくり休んでください」と言われた。

僕が泊まったホテルは上から階下まで、これから何処かへ移動するらしい部隊の兵隊さんで埋まっていた。ホテルの食堂で昼飯を食べていると、珍しいのか「日本人の親子がいる」と、たちまちホテル中の噂になってしまった。

僕は午後からホテルを飛びだし、市内の繁華街を歩き回ってみた。クアラルンプールの町は今まで寄ってきた何処の町よりも大きかった。ホテルに戻ってくると、二階の窓から覗いていた兵隊さんが、「オーイ、ボーヤ」と呼んだので、僕は手を上げて「ハーイ」と答えた。すると、「二階の部屋に遊びにこないか？」と誘われた。僕は「今からすぐ今行きます」と言っ、すぐその部屋へ飛んでいった。

その部屋は大部屋で十数人の兵隊さんが雑魚寝していた。僕の顔を見るなり、「僕の名前はなに」と、聞かれたので、「僕、瀬戸正夫です。これからマラッカにいるお父さんの所へ会いに行くところです」と、てきぱきと答えると、「そうか、いい名前だー、可愛い顔しているなあー」と、感心して、僕の顔を覗き込んでいた。

僕は兵隊さんから漫画の本や、紙人形、こま、キャラメル、お菓子などを手に持てないほど頂戴し、兵隊さんの膝に乗せてもらったり、腕相撲をしたり、挟み将棋をしたりして一日楽しく遊んでいた。

他の部屋からも呼び出しがかかったりして、僕はたちまちみんなのアイドルにされてしまった。僕は別れ際に「兵隊さん、どうもありがとうございました。お別れに、海行かばを歌います」と言ううと、「歌を歌ってくれるか、それはありがたい」と、みんな嬉しそうな顔をして一斉にパチパチと手を叩いた。

僕は心込めて静かに、「海行かば 水漬かばね 山行かば 草むすかばね 大君の 辺にこそ死な



め かえりみはせじ」と歌った。僕の心が通じたのか、みんなしんみりした表情で涙を溜めていた。「正夫君ありがとう。俺たちはいつ死ぬかわからないけど、元気で頑張れよ」と励まされた。僕も「兵隊さん、元気で頑張っね、さようなら！」と言って、頭をさげた。僕が部屋から出ようとすると、「正夫君は良い子だ」と褒められ、みんなからぎゅっと抱きしめられた。僕は兵隊さんの汗臭い身体の温もりを、気持ちいを、ひしひしと身を感じ、悲しい思いをして部屋を飛び出した。

次の日、ホテルの玄関を出て、迎えの車に乗ろうとしていると、あっちこっちの窓から笑顔を見せた兵隊さんたちが一斉に、合唱でもするかのように、「オーイ正夫君、元気でなー、さようならーさようならー」と、一生懸命に手を振っていた。

僕も青空を仰ぎ、大きな声を張り上げて「兵隊さん、ありがとう、さようならー、さようならー」と手を振った。だが、なんだか悲しくなっていて、最後には声が詰まってしまった。

## ■マラッカで父と再会

車はホテルの玄関からすうっと滑りだし、綺麗なモスクのある町並みを通り抜け、徐々にクアラルンプールから遠ざかり、待望の父がいるマラッカへと向かった。

車はいつの間にか静かなマラッカの官庁街を通過し、古めかしい協会や、変わった形をしたモスクのある市内を徐行し、マラッカ川を渡り、やがてマラッカ警察の前で停まった。

運転していた若い兵隊さんが僕の小さな荷物を持ち、母に「ご主人は此処で待っていますので……」と言って、一番奥の部屋へ案内してくれた。

扉を開けて中に入ると、正面の大きな机にでんと座っていた軍服姿の父の笑顔に出会った。久しぶりに会った父は禿げつる頭をピカピカ光らせて元氣そうだった。父は「正夫、よくきてくれた」と、とても嬉しそうに顔をほころばせていた。

しかし、母と視線が合った途端に百面相みたいにカチンカチンの堅いこわばった顔に変わってしまった。暫く沈黙が続いたが、タイミングよくマレー人の警官が冷たい飲み物を持って入ってきたので、ホッと救われた。父に促されて表に停めてあった父の車で、今父が宿泊している宿舎へ向かった。

僕には町の何処を走っているのかさっぱりわからなかった。父の車が通ると、街角のあっちこっちでマレー人の警官や、日本の兵隊さんが姿勢を正して、手をあげて、ときばきと敬礼していた。シンガポールが陥落してからまだ間もないのに、父はいつ頃からマラッカの警察署長になったのか知らないが、マラッカの顔役になっていた。

父の車が停まると、家の中からずんぐりした年増の Ayahさんと、ほっそりした若い綺麗な優しい眼差しをした召使が「タベ・トゥワン」と言って、出迎えてくれた。マレー人の Ayahさんは僕を二階の窓際の風通しのいい部屋に案内してくれた。

長い髪を肩まで垂らした二重瞼の目の美しい Ayahさんが「サヤ……」と、しきりになにか話しかけてくれるのだが、僕にはなにを言っているのかさっぱりわからなかった。

日が暮れる頃、父はマラッカ海峡に面した浜辺の豪華な明るい中華レストランへ案内してくれた。僕はこんな豪華なレストランに入ったのは生まれて初めてだった。マラッカ海峡からビュービュー吹き付けるべっとりした潮風を受け、僕は父に会えた嬉しさを胸に秘め、眼鏡が鼻の付け根からずれ落ちそうになっている父の顔をまじまじと見つめた。父の顔にはなにか一種の陰りがあつた。

父はいろんなおかずを注文し、特に僕が大好きな大きな魚のフライを取ってくれた。僕は魚の柔らかい肉よりも目玉が好きだった。ソクラーにいた頃からそうだったのだが……魚の料理が食卓に並ぶと、僕はいつも真つ先に魚の目玉を取り、大きく抉り取った目玉をムシヤムシヤ食べていた。

父は、僕が魚の目玉が好きだったことを、ちゃんと覚えていたので、嬉しかった。食事が終わってから、父は「ちよつと海岸通りをドライブしよう」と言つて、車のハンドルを握り、ゆつくりと海岸通りを流し、郊外の静かな道を風に吹かれながら走つた。

父は上機嫌だった。歌を口ずさみ、車の汽笛をピッピッピッと鳴らしながら歌のテンポに合わせて走つた。僕にとっては快適に満ちたひとときであつた。

その夜、父と母は隣の部屋でなにかぼそ話し合つていた。だが、だんだんと語調が荒くなり、最後には父が困っている女に合わせると、わめいている母のヒステリックな甲高い声が目をつんざき、口論になってしまった。父は荒々しく部屋を飛び出し、車のアクセルをブルーンプルーンと響かせて闇の中へ消えてしまった。

母はソクラーから日本軍に戦火で荒らされたマレー半島を南下し、父が同棲している女と手を切らせるために、父を取り返すために、此処まで喧嘩をしにきたのが母の目的だったのか、と思うと、実に情けなかつた。

僕がソクラーの我が家を離れて独りぼっちでバンコクに置き去りにされて以来およそ3年になる。その間に家庭内でどのようなことが起こつたのか、僕にはわからない。しかし、軍部と一緒に戦場に向かつた父は、自分が撮つた好きな写真も全部鞆に詰め込み、母を捨ててソクラーから逃げだしたのだった。家庭の破局、それは両親の唯み合いの渦の中に巻き込まれた僕の心を傷つける大きな悩みの種となつた。

## ■美しい心の友

「ピーチクパーチク、チーチーパッパー、おはようさん」と、窓辺で元気に囀る雀の優しいメロデーに起こされた。まだ薄暗い冷たい夜気が漂っている窓から庭を覗くと、窓の下に高さ3メートルほどあるこんもりした2本の木の枝に小さな可愛い目を光らせた数百羽の雀が鈴なりになって囀っていた。

お互いにチーチーパッパー、と、挨拶を交わしていた雀が「さあ！ 行きましょう！」と、声を掛け合い、羽を広げてバタバタ飛び立っていった。何処へ飛んでゆくのか、アアア！ なんと可愛い雀。雀みたい好きな歌を歌って自由に飛べたらいいのになあ、と思う。

急に静かになつた窓から、空を眺めていると、柔らかな光線を遮り、黒い羽を羽ばたき、無数の

燕が虫を追いながらスイスイ飛んでいた。手が届きそうな軒先に燕の巢が転々と並び、親鳥が体を膨らませて小さな卵を温めていた。

美しい自然の動きに見とれていた僕は部屋から外へ飛びだし、森閑とした宿舎の周囲を散歩し、火炎樹の木陰に腰をおろした。じっと耳をすましていると、風に揺り動かされた真紅の花びらが、ひらひらしながら「おはよう」と、足元に舞い降りてくる。様々な演技や表現を無言で語ってくれる自然。美しい自然の友、心を慰めてくれる自然と語り、独りで孤独感に浸っていた。

## ■父の恋人

宿舎に戻ってきた僕を見つけたアヤさんが、笑顔で、ピキマナ（何処へ行っていたの？）、マカンナシ（ご飯です）と言って、僕を手招いた。食堂へ行くと、母が浮かぬ顔で、例によって父の愚痴をこぼし始めた。また、昨夜の続きが始まったのか、と思うと、うんざりして聞き流した。

家庭の不和、それは実際に父が悪いのか、母が悪いのか、そんなことは僕にはわからないし、僕には関係ないことなのだ。ただひとつだけはっきりしていることは、戦争のお陰で親子3人がバラバラに引き裂かれる時期が早く訪れただけのことである。子供心に両親は本当に別れるのであろうか、と、考えを巡らせていると、お先真つ暗であり、心が滅入ってしまった。

午後、父が「正夫遊びに行こう、おいで」と言って、僕を迎えにきてくれた。僕は退屈して体をもてあましていたので、喜んで前の座席に潜り込んだ。父は母には声も掛けなくてそのまま飛びだしてしまった。

僕は「お父さん昨夜どうしてお母さんと喧嘩したの、本当に別れるの」と聞くと、父は「正夫はまだ小さいからなにもわからないよ。そのうちに大きくなったらわかってくれると思うよ」と、寂しそうに呟いた。

僕が「お母さんと仲直りしてね」と言うと、「うん」と答えた父は、ちよつとの間において「正夫、マラッカに残ってお父さんと一緒に暮らさない」と問われた。僕は「お父さん、僕いやだ、バンコクに帰って勉強する」と言うと、父は「そうか」と頷いたきり、なにを考えているのか、顔を曇らせ、口を噤んでしまった。

父はある中国式の豪邸の家で車を停めて、僕を促し、先に立って勝手口を知った広い屋敷の中へ入っていった。ひっそりした奥まった中庭の側に黒光りした立派な中国式の応接セットや、安楽椅子が行儀よく並んで来客を待っていた。父は僕に「此处で待っているように」と言い残して、とことこと、二階へ上がっていった。

暫くすると、父は一人のおばさんと一緒に親しそうにして降りてきた。誰かな、と思っていると、父がおばさんに「俺の息子、正夫だ」と紹介した。すると、おばさんは「まあ、可愛い子ね」と、感心した顔で僕をまじまじと見つめていた。父は、僕にはただ一言「このおばさんは茂刈スズさん」と紹介しただけでなにも教えてくれなかった。しかし、僕には、この人が例の母が話していた父の恋人なのだな、と、直感でわかった。

初めて会った人のよさそうな父の恋人。茂刈スズさん、僕には父の気持ちなど理解できるはずもなく、父はなぜこの人が好きになったのであろうか、早く母と仲直りしてソングライターに帰って欲しいのに、と、複雑な思いにかられた。

## ■優しくった父

ほとんど人影もない坂道になった宿舍の付近には、白い洋館建ての大きな屋敷が4、5軒あった。だが、幽霊屋敷みたいにシーンと静まり返り、誰も住んでいなかった。僕は行く所も友達もいなかったのでもアヤさんと遊んでいた。

初めの頃はなにを言っているのかさっぱりわからなかったマレー語も、アヤさんと笑いながら手まね足真似で押し問答しているうちに、片言のマレー語が話せるようになった。

父は仕事に追われていたようであったが、暇になると、僕を迎えにきてくれた。父は時々小高い山の上にある中国人墓地や、マラッカ海峡に面した青々した荒波が荒れ狂う綺麗なビーチへ連れて行ってくれたりした。

それに僕が欲しい物はなんでも買ってくれたし、常に気を遣い「正夫、正夫」と言って、とても優しくしてくれた。僕は今まで父からこんなに優しくして貰ったことがなかっただけに、父はなぜこんなに優しくしてくれるのであろうかと、不思議に思った。

或る日のこと、父は僕に「これに乗って遊べ」と言って、イギリス製の素晴らしい自転車を持ってきてくれた。僕はとても嬉しくてたまらなくなり、大きな目をキラキラ輝かせて、「お父さん、ありがとう」と言って、直ぐその自転車に飛び乗った。

それ以来、僕はアヤさんに「サヤ、ピキジャンジャン」と言っは、心を弾ませて自転車のペダルを踏み、昔ポルトガルに支配されていた、と言われる、静かな情緒あるマラッカの街中を、風とともにスイスイ走り回った。疲れたりしたときは、浜辺の椰子の木陰で休んだりして独りで楽しんでいた。

父がいるマラッカ警察署へも2、3回立ち寄ったことがある。父はそのたびに「正夫、お腹空いた？ なにか食べない？」と、言って、警察の側にあつた小奇麗な店で冷たい飲み物や、マレー料理を頼んでくれた。

## ■華僑のパーティー

父はやつと母とも仲直りして、親子3人であつちこつちへ連れて行ってくれるようになった。マラッカに滞在して一週間ほど経ったある夜だった。父は日本の将校が集まる専用のレストランへ連れて行ってくれた。そこは、小さな豆電球をちりばめた薄暗い浜辺に面したレストランで、舞台上ではマレー人の楽団が静かな曲を演奏していた。

愛嬌のある可愛い歌手が交代でマイクの前に立ち、長いサロンを風にひらひらさせながら細かい声で喉を震わせて、マレー独特の悲哀の籠った歌を歌っていた。

テーブルには私服姿の軍人や胸を張った将校が、おかずをつつきながら洋酒を飲んでた。父はビールをうまそうに飲んでたが、レストランで出会った将校と情報交換をしているらしく、なにかひそひそと話し合っていた。

まだ8時頃であったが、急にウーウーと、空襲警報のサイレンが鳴りだした。その途端に音楽の演奏がピタリと止まり、電気もパツと消えてしまった。しかし、真つ暗闇の中で慌てて席を立つ者もなく、みんなテーブルを囲んだまま酒を酌み交わしながら夜空を仰いでいた。だが待てども敵機はついに現れなかった。

或る日、父は「正夫、今晚友人の家でパーティーがあるから一緒に行こう、ハーモニカも持って行くように」と言われたので、「なにをするの」と聞き返すと、「ハーモニカを吹いてもらうから」と言われた。僕は日本人の家にも行くのであろうと思ひ、なにか軍歌でも吹いてやろうと考えていた。しかし、父に伴われて訪れた家は想像に反し、海の直ぐ側にある華僑の豪邸であった。

集まっていた人たちはほとんどがマレー系華僑だったが、その中にはマレー人も数人混じっていた。父はいろんな人たちと挨拶を交わし、僕たち親子も「シンゴラからきた妻と息子の正夫です」と、紹介して、愛嬌を振り回していた。

僕たちは一番いい前の席に案内された。周囲のスピーカーから軽やかに流れてくる軽音楽のメロディーに酔いながら美味しい中華料理をご馳走になった。食事も終わり一段落した頃、父に「正夫、お前は詩吟は踊れるか」と聞かれた。僕が「うん」と頷くと、父は席を立ち何処からか扇子と木剣を借りてきた。やがて父のアナウンスにより、僕が詩吟を舞うことになった。

僕はベルトの上から左の腰に木剣を差し込み、右手に扇子を持ち、父が唄う「べんせいしゆくしゆくーよるつかわをーわたるー……」の歌声に合わせて、扇子をパツと開いて空中に投げ、最後は木剣を抜き、「エイツ、エイツ」と気合を掛けて切る真似をした。舞い終わると、一斉に嵐のような拍手が起こった。父は嬉しそうな顔で僕を見つめていたが、「次に正夫がハーモニカを吹きますから」と、アナウンスした。

僕はなんの曲を吹こうかと、ちよつと迷ったが、自分の好きな中国の歌「何日君再来」の曲を吹きだした。みんなシーンとして聴いていたが、吹き終わりと、僕が頭を下げると、パチパチと手を叩く音とともに、あつちこつちから「アンコール、アンコール」と言う声が沸き起こった。父が「正夫、もう一度吹け」と促したので、僕はハーモニカを口に大きく含み、右手の指先を震わせて、また同じ「何日君再来」の曲を演奏した。僕はみんなから「素晴らしい」と賛美の声を掛けられた。だが、僕自身は父と一緒に共演できた嬉しさで胸が一杯だった。

## ■父と最後の別れ

ジリジリ照りつけるマラッカの青空に見守られ、羽を広げて自由自在に飛び歩き、快適な孤独感を楽しんでいた僕は、いよいよ父とも別れなければならない日がやってきた。父と別れる数日前に、父は僕と母を伴い、大きな倉庫がある物置場へ連れて行ってくれた。そこには日本軍が連合国軍や、

外国人から没収したいろんな品物がきちんと整頓されて山積みされていた。

父は「正夫、此処にある物で欲しい物があつたらなんでも持っていっていいから」と、言われた。僕は軍隊用のよく見える双眼鏡と、顕微鏡を選び「お父さん、これ貰うよ」と言うと、父は、「もつとなんでも持っていっていいんだよ」と言ったが、僕は「もうなにもいらぬ、これでいい」と答えた。母は綺麗な生地数点と、卓上用の新品のシンガーマシンのを選び、珍しく嬉しそうな顔をしていた。

最後の晩、僕が小さなトランクに自分の洋服を詰め込んでいると、父がトコトコと部屋に入ってきて「正夫、明日はいよいよお別れの日だなあ、これはお前の護身用に……」と言って、長さ40センチほどあるよく切れる短刀を授かった。僕は「お父さん、ありがとうございます」と言って、その短刀を大事に鞆の中にしまい、じつと父の瞳を覗き込んだ。

また例によってチーチーパッパーと、雀の囀る囁きに揺り起こされた僕は、アア、今日でこの可愛い雀ちゃんたちもお別れなのだなあ、みんなの優しい歌声を聴くのもこれが聴き納めかもしれない、と思うと、なんだか感傷的になり、心が塞いでしまった。

父が手配してくれた軍用車が玄関の前に着くと、2人のアヤさんがせつせと荷物を運んでくれた。僕はお世話になったアヤさんに「テレマカシ」（ありがとう）と、お礼を述べて、父を振り返った。父は立ったままじつと僕を凝視していたが、大きな手で僕をぎゅつと抱きしめて「正夫、元気で頑張れよ」と、一言呟いたきり、押し黙ってしまった。僕も「お父さんも元気で、早く帰ってきてね」と言ったが、なんだかいたたまれなくなり、車に乗り込んでしまった。

ブルルーンとエンジンが掛かり静かに動き出した車窓から顔を突きだして、「お父さん、さようなら」と手を振ると、父も寂しそうな表情で手を振っていた。

僕にとってそれが父との最後の別れになろうとは誰が知ろう。日本の戦争がもたらした悪戯に酔いしれた父が悪かったのか、或いは、家庭の不和が原因だったのかしらぬ。あんなに優しくかった父は僕を置き去りにしたまま終戦になっても、ついに帰ってこなかったのである。

## ■森の家

およそ一ヶ月の思い出深いマレー半島の旅を終えてソングラーの我が家に辿り着き、ヤーレヤレと、ホツとしたのも束の間であった。母はなにを思ったのか、「空襲が怖いから暫くハートヤイに住む」と言って、ハートヤイの農家で暮らすことになった。

その家はハートヤイの郊外にあった。車から降りて赤土の細道をトコトコと歩いてゆくと、まるでおとぎの国の話にできそうな鬱蒼とした樹々に覆われたこんもりした森の中に、魔法使いが住みそうな小さな平屋が一軒ポツンと建っていた。

森の周囲には垣根もなにもなく、付近には民家すらもなかった。森を抜けると、遙か彼方まで凸凹の平地が続いていた。遠くに屠殺所があるらしく、牛の残骸が捨ててあった。そこにはいつも2、30羽ほどの禿鷹が群がっていて、骨にくっついて肉をみんなで仲良く突っ突いていた。

この森閑とした森の中には、昔から住んでいる仲間がいた。美しい声で囀る綺麗な小鳥、や、逃げ足の速い大きなトカゲ。おいでおいでと、頭を振りながら顔色を変えるカメレオンや、のろのろ歩きながら餌をあさる野鼠。地面をニヨロニヨロ這っている大小様々な蛇や、枝から枝へと自由に飛び移る可愛いリスなどが、我が物顔で元氣よく走り回っていた。

日が暮れると、真つ暗な闇の中から、チン、チン、ジージー、ビッピッ、キッキッキ、ギギー、チンチロリンと、様々な虫の鳴き声が、風に乗って流れてきた。此処は僕にとつて別世界だった。僕はこの自然に恵まれた境遇の中にいつまでも浸っていたい心境だった。だが残念なことに、母に伴われてバンコクに戻るようになった。

## ■第二の人生

楽しかった休養を終え、およそ3ヶ月振りにバンコクに戻った僕は、バンカッピのソーイ・ワッタナー（今のスクムヴィツ通りのソーイ19）の奥にあった神戸海陸の田中さんの家で暫くお世話になることになった。

車も通らない静かな家の前に、緩やかに流れている小さなクロン（運河）があった。そのクロンと平行して赤土の細い道の両側に、ふさふさした松並木が行儀よくずらりと並び、風に揺られて踊っていた。

路地の突き当たり敷地の広い小さな静かなワッタナー女学校があったが、日本軍の病院になっていた。学校の隣に、小ぢんまりした白い綺麗な教会があったが、此処も日本の通信隊の基地になっていた。

僕が通っていた日本人学校は、もう夏休みに入り休校になっていた。今年の卒業式は3月25日であったそうで、13期生の卒業生は「テナカノッポ」と、渾名で呼んでいた天田洋子さん一人だけだった。

母は「もうソククラに帰らなければならぬから」と言って、僕を学校の寮に放り込み、「さようなら」と手を振って、姿を消してしまった。また、独りぼっちにされた僕が、風呂敷に包んだ僅かな着替えを持って学校の寮へ訪れたのは、3月末頃だったのではないかと思う。

寮の入り口で運動靴を脱ぎ、靴箱に靴をしまい、金井先生のお尻にくっついて二階の寝室になっている部屋に案内してもらった。部屋には、先輩にあたる餓鬼大将の林国偉君と、1年下の波多野盛男君、同級生の泉英美代さん、それに、後輩の泉万里子さんと、養和嘉子ちゃんの5人が僕がくるのを待っていた。みんながにこにこ、にたにたした笑顔で迎えてくれたので嬉しかった。

箱形になった寮のベッドは、男と女が向かい合うように三つずつ並んでいた。男は窓際で、僕は真ん中で寝ることになった。ベッドの下に大きな引き出しがついていて、私物は全部そこにしまうようになった。

隣の部屋には僕たちの面倒を見てくれる金井先生の家族の栄子さん、それに、まだ小さかったよく子守をしながら一緒に遊んだ可愛い長女の純子ちゃんと、次女の貴躬ちゃんがまだヨチヨチ歩い

ていた。

バンコクの木原病院で一旦臨死し、閻魔さんに追い返されてこの世に戻った僕は、三途の川を渡るかわりに、地獄と化したマレー半島の激戦地、生き地獄の悲惨さを見るチャンスを得た。

それと同時に美しい花園はなかったけれども、自然に恵まれた環境の中で、自然と戯れ、美味しい潮風を胸一杯吸い込み、鋭気を回復するチャンスにも恵まれた。僕にとってはほんの僅かな期間であったかも知れないが、実に幸せなひと時でもあった。

命拾いした僕の生命線は何処でどう定められているのかさっぱりわからない。しかし、僕は1942（昭和17）年からこの暑いバンコクに定住し、自分の判断で生き抜いていかなければならない運命を背負わされるはめになっていた。僕の第二の人生が、前途多難な人生が、この日本人学校の寮からスタートを開始するきっかけとなった。

## ■フワヒンの臨海学校

僕がみんなと一緒にフワヒンの臨海学校に行くことに決まったのは、学校の寮に入ってから間もなくだった。今年の臨海学校は、4月6日から16日までとかで、僕にとっては初めての臨海学校であった。

朝、学校の校庭に集合し、先生に引率されてフワラムポーン駅まで歩き、フワヒン行きの急行列車に乗り込んだ。僕たちが乗った列車は間もなくラーマ六世橋を渡りフワヒンへと向かった。列車は主だった大きな駅にしか停車しなかった。フワヒンの小さな駅に着いたのは、午後3時頃だった。

僕たちは駅から二列に並び、ヒューヒュー吹きつける潮風に迎えられて元氣よく歩きだした。人通りもほとんどないシーンとした歩道のない道を歩いていると、時々サムロー（三輪車）がペダルをギーギーきませながらノロノロ追い越して行った。

フワヒン・ステーションホテルの入り口にある大きな象の形をした植木の下を通り抜け、真っ白い浜辺に足をかけ、青々とした海原を眺め、頬を綻ばせて面白半分にはしゃいで砂をキュッキュツと蹴り、今日から泊まる宿舎へと向かった。

宿舎はホテルからさほど遠くない海辺に面した高床式の大きなバンガローだった。男女別々の部屋が割りあてられ、僕たち悪戯な男組は入り口の部屋を陣取り、ワイワイ、ガヤガヤ騒ぎ、場所の取り合いっこを始めた。だが、「こらっ、なにをやっているんだっ、静かにしろっ」と、先生に叱られ、最終的に学年順に一列に並んで寝ることになった。

その日は夕食の時間になるまで自由時間だった。僕は仲良しグループと一緒にトランプでババ抜きをしたり、隠れんぼをして遊んだ。夕食になる前に、裏にある広い浴室でみんなとキヤーキヤー叫び、石鹸の泡があまり立たない冷たい浴槽の水を柄杓に汲んで、ザーザー、バシヤバシヤ水を掛け合い、はしゃいで楽しんだ。

## ■フワヒンの水泳教室



今日からみんなが楽しみにしていた待望の水泳教室が始まった。僕は今年から4年生になるのだが、まだ一度も水泳を習ったことがなかったので、全然泳げなかった。泳げない人は赤鉢巻をしていたので、みんなが僕の鉢巻を見て、「なんだ、正夫は泳げないのか」と言っていて、クスクス笑いだした。僕は「泳げないんだから仕方がないじゃないか」と反発したが、みんなに「正夫は三年生のくせに泳げないんだー、金槌だー」と、繰り返して、繰り返して、からかわれてしまった。僕は悔しかったけど「よし、いまにみていろー」と、歯を噛み締めた。

当時のバンコク日本人学校では、水泳のランキングがひと目でわかるように、次のように鉢巻で9色に色分けされていた。全然泳げない人は、真っ赤な赤鉢巻、少し泳げるようになり、犬掻きができる、赤鉢巻の真ん中に白い線が1本入り、クロール(自由形)が綺麗に泳げるようになると、白い線が2本となり、平泳ぎをマスターすると、白い線が3本となった。次に、バック(背泳ぎ)が出来ると、白鉢巻となり、バタフライが泳げるようになって、やっと白鉢巻に赤線が1本入るようになっていた。

犬掻き、クロール、平、バック、バタフライの5種目を無駄なく綺麗なフォームで泳げるようになると、さらに、町田先生流古式泳法を習った。手ほどきにはまず、普通の横泳ぎから習い始め、横泳ぎができるようになると、赤い線が2本となり、横泳ぎ一段、二段が泳げるようになれば、赤い線が3本となった。続いて、大摆手、小摆手をマスターして、初めて黒鉢巻となる仕組みになっていた。

黒鉢巻が最高で、これで全泳法を終了したことになり、当時の水泳連盟から級が貰え、先生の助手にされた。ただし、黒鉢巻を取得するには、スピードではなく、各泳法10種目のフォームを綺麗に泳がなければならぬ厳しい試験があった。

このフワヒンの臨海学校は、水泳教室の時間がたっぷり組み込まれていた。1日に午前と午後2部の2回も水泳教室があった。早く上手に泳げるようになるために、町田先生にスパルタ式指導を施された。

僕は金槌組みに回され、町田に「正夫は泳げないのか」と、言われたかと思っただけで、ザブーンと海の中に投げ込まれていた。僕は波に揉まれながら夢中になって手足をバタバタもがいていた。

ふと気がつくと、町田先生に抱き上げられていた。先生はにこにこ笑いながら「正夫、お前は15メートルも泳げたんだぞー」と言われた。が、僕自身は半信半疑だった。僕はその日のうちに犬掻きができるようになり、一気に25メートル泳ぎ切ったので、先生に「お前には水泳の才能があるなー」と、言われて、その日のうちに、赤鉢巻に白い線を1本つけて貰えたので、僕は嬉しくたまらなかつた。

僕は次の日から泳げる組に仲間入りさせて貰え、みんなと一緒にクロールの練習を始めた。町田先生から、手の掻き方や、鼻から息を吐いて横を向いて口から息を吸う息継ぎの仕方などを習った。

だが、先生に教えて貰った通りに息継ぎをしようと思って、閉ざした口をアーンと開けるたびに、塩辛い海水が遠慮なく口の中に飛び込んできて、なかなか思うように息継ぎができなかつた。だけ

ど、僕は一所懸命に練習に練習を重ねたので、10日間でクロールも完全にマスターしてしまい、みんなに負けないようになった。

## ■フワヒンの海

4月のフワヒンの海は、昼間はザザザーと、小波が押し寄せてくる水泳向きの穏やかな海だった。夜になると、風とともにザブーン、ザブーンと、大波が訪れ、様々な形をした色とりどりの綺麗な貝殻や、弾力のある透明な大きなくらげを運んできて、白い浜辺に撒き散らしてくれた。

朝のラジオ体操をすませ、まだ誰も通っていない砂浜を歩くと、綺麗な貝殻がそのままの姿で顔を覗かせていた。左右にゆつくりと頭を振る松林の下に腰を下ろし、見え隠れする白い砂浜を見渡した。民家もほとんどなく、人影すらない風いだ海に漁船が一艘ポツンと浮かんでいた。

僕は毎朝浜辺を散歩した。みんなから離れて一人で散歩した。何故か一人でいたかった。海を見つめ、サラサラ打ち寄せる静かな海を、素足でザブザブ歩いた。とってもいい気持ちだった。いろんな形をした貝殻を見つけては拾い、フワヒンの思い出にハンカチに大事に包んで持ち帰った。

## ■学寮生活

学校の寮は、階下の入り口の部屋が応接間兼居間になっていた。隣の部屋が食堂で、細長いテーブルが置いてあった。二階の寝室は裏にあたり、窓際の下に隣の屋敷の境界線を示す細長い先の尖った板で囲った垣根があった。

垣根の付根のあたりからマークの木（檳榔樹）が生い茂り、檳榔樹園になっていた。細長いフラフラ揺れている檳榔樹の梢に卵ぐらいの大きさをした青い実がびっしりと房になって頭を垂れ、おいでおいでをしていた。

寮では、朝起床したあとは、自分たちで寝具を畳み、きちんとベッドの後ろにしまい、部屋の拭き掃除もみんなが仲良くするようにアレンジされていた。僕たちの洗濯物は、寝室の隅っこに置いてある大きな籠の中に入れるようになっていた。ただし、洋服の裾に赤い糸で自分の名前を縫い込んでおかなければならなかった。

僕は縫針も挟みもなにも持っていなかったし、縫い方も知らなかった。だけど、僕は芙美代さんから縫針と赤糸を借りて自分の名前を縫い着けた。ぎこちない手つきで針を持って縫った。だが、針の先で自分の指先をチクリと突っ突いりして、なかなか思うように縫えなかった。縫っては失敗し、また縫っては失敗し、何回も縫い直してやっとの思いで、どうにか名前を縫い着けた。

## ■おかゆ騒ぎ

寮の朝食は、毎朝おかゆだった。朝食の時間は7時頃で普段はみんなと一緒に食べていた。だが時々、一人で先に食べることもあった。おかゆは自分たちで大きな釜から自由に取って食べたいだけ食べていいようになっていた。

ある日の朝、僕は先におかゆにありついた。その日は何故だか無性にお腹の虫がキューキュー泣き叫んでいて、お腹がペコペコだった。それにおかゆも美味しかったので、夢中になってムシャムシャ、パクパクと、お腹の中に流し込んでいた。が、いつの間にか6人分のおかゆを一人で平らげてしまった。

後からきた仲間に「えっ、正夫、おかゆがないの、どうしたの」と聞かれて、「僕みんな食べちゃったー」と答えた途端に、「おばさーん、おかゆがないよーっ、正夫のバカがみんな食べちゃったーっ」と、大騒ぎになってしまった。

おばさんは不満そうな顔をして「正夫、またおかゆを炊かなければならないんだよ。正夫みたいなのをバカの大食い、と言うんだよ」と小言を言われた。僕はそれ以来食べ物には気をつけるようになった。

### ■こそ泥とミツキーの大怪我

寮の食堂から先生の台所に行き来できる小さな扉があった。その台所から先生の応接間へ抜けるようになっていた。僕は何故か小さな子供が好きだった。いつも台所から応接間に抜けだし、お人形さんみたいな可愛い貴躬ちゃんをあやしたり、純子ちゃんを抱いたりして、応接まで遊んでいた。

ある晩のことだった、盛夫君と、国偉君が僕に「お腹が空いたから、3人で台所へ行つてなにか食べる物を捜してこよう」と誘われた。そこで、3人でそつとベッドから這いだし、抜き足差し足で階段を降りて、下の台所の扉を、ギギーツと音がしないように開け、戸棚に並んでいる食べられそうな物を物色した。だが、直ぐ食べられそうな物はなにもなかった。

仕方がないので、瓶に入っていた赤砂糖の蓋を開け、紙袋に入れて部屋へ持ち返った。僕たちは「ヤーアー、成功した、しめしめ」と喜んだ。が、直ぐ金井先生に感づかれてしまった。ギシギシきしむ先生の足音が近づいてきたかと思つた途端に、急に部屋のライトがパツとつき「さつき台所へ降りて行つたのは誰だつ、起きなさいっ」と、怖い声が響いてきた。

僕たち3人は狸寝入りをしていたが、僕はおかしくなつて、とうとうクスク笑いだしてしまった。ガバツと跳ね起きて、「先生、僕です」と言うと、盛夫君と国偉君もしぶしぶ起き上がってきた。先生に、台所から失敬してきた砂糖を取り返され、「泥棒の真似事をするんじゃない。直ぐ寝なさいっ」と叱られて、僕は朝までグーグー寝てしまった。

或る日の夕方、盛夫君と同じクラスにいるおとなしいミツキー（新野充男君）が寮に遊びにきた。二階の寝室でみんなとワイワイ騒ぎながら遊んでいたのだが、そのうちにベッドの上で押し合いっこをはじめた。

丁度タイミングよくミツキーが窓際にきて立ったときだった。盛夫君にいきなり胸を押されたミツキーがそのまま窓から外へ放りだされてしまった。ミツキーは二階の屋根瓦を突き抜け、下の尖った垣根をへし折って隣の敷地にドスンと落ちてしまった。もう駄目かと思つたが、ミツキーは頭から血をたらたら流し、ワーワー泣きながら垣根をよじ登つてきた。

ミッキーは垣根の先で頭を切っただけで運よく助かり、頭にやもりのような傷跡が残っただけですんだ。それ以来、チンチョコック（やもり）というニックネームがもうひとつ増え、時々みんなから、屋根から落ちたチンチョコックと、からかわれるようになった。

## ■学寮の生徒

長い夏休み（タイは4月）が終わり、昭和17年度の新学期が始まった。僕たちの寮には新たに3人の新入生が同居することになった。プレー県から英美代さんの弟にあたる泰男君が一人と、スラターニー県から中川道雄君と、片方耳の遠い清君兄弟がやってきた。悪戯な男ばかりが3人も増えたので、学寮は蜂の巣を突っ突ついたように急に賑やかになった。

泰男君も中川兄弟も日本語が全然でできなかったのも、初めの頃はお互いにタイ語で話し合っていた。だが金井先生から「わかってもわからなくてもいいから、日本語で話すように」と、注意されてからは、日本語で話すようになった。

親元を離れ、学校の寮に世話になっていた僕たちは、みんなから「学寮の子」または、「学寮の生徒」と呼ばれていた。

地方から出てきた田舎者の僕たちは、僕も含めてそうであったが、学校に入った当初は、日本語はチンプン、カンペンで、タイ語しか話せなかった。日本語の単語を記憶し、発音を間違えないで日本語が自由に話せるようになるまでには、かなりの時間を要した。

日本語に関しては、かなりの抵抗を感じていた。初めの頃は、みんなから「変な日本語だ」と言われ、笑われたりして恥ずかしい思いをした。それに、友だちから「なーんだー、お前のお母さんタイ人かー」とか、「混血の子だ」と、言われたりした。別に虐めでもなんでなかったのだが、そのなんでもない、人を小ばかにしたような言葉が、何故か、時々僕の胸をぐさつと刺した。

## ■おもだの床屋さん

学寮の生徒は、髪の毛が伸びると、ふたつきに一回のわりで、男だけが床屋へ行っていた。床屋へ行く日は、僕たち学寮の生徒にとっては自由に羽を伸ばして飛び歩ける楽しい日でもあった。

餓鬼大将の国偉君が先頭に立ち、みんなでガヤガヤ冗談を言いながら、ニューロードの中央郵便局の並びのシーパヤー寄りの近くにあった「おもだ」の床屋まで金魚のウンチみたいにぞろぞろくつついて行った。

おもだの床屋には髪を切ってくれる理髪師は3人しかいなかった。お客も多かったもので、順番がくるのを待っていないければならなかった。何故か、僕だけは「髪の毛が縮れていて堅いから」と、床屋さんに嫌われ、いつも後回しにされていた。

床屋でくりくりのまる坊主にされた僕たちは、そのまま真っ直ぐ学校の寮に帰ったことがなかった。帰りはスリヴォン通りを通らず、中央郵便局の前の車が通れないサパーンヤーウの細長い継ぎはぎだらけの板橋が架かった路地に入り、ナレー通りに突き抜けていた。ナレーからさらに、雑草

がボーボーと伸びた赤土の道を横切り、小さな板橋を渡り、竹藪が一杯生い茂った学校の裏に出ていた。

途中でみんなで鬼ごっこをしたり、木の枝を折って戦争ごっこをしたり、石ころを拾い、クローン（運河）に向かって誰が一番遠くまで投げられるかと、石の投げ比べをして戯れていた。

僕たちは裏通りから学校の近くまでくると、またみんなで行儀よく一列に並び、汗をたらたら流しながらそ知らぬ顔で、みんなと一緒に声を揃えて「ただいまー」と言って、寮に戻っていた。

寮に戻るや否や、みんなで浴室に駆け込み、素っ裸になって大声でワイワイ、キャッキヤー叫びながら、水をバシヤバシヤ掛け合い、水かけごっこをして遊び、快感に満ちた1日に終止符を打った。

## ■面会と破れた靴

学寮にいる仲間は、男は悪戯坊主が揃っていたが、実に仲むつまじかった。お互いに一度も口論や、喧嘩をしたこともなかった。宿題や勉強も一緒にやったし、掃除もみんなで力を合わせてやった。

みんなで助け合い、毎日笑いに明け暮れる楽しい寮生活を送っていた。時々話題になるみんなの噂話は、遠い田舎にいるお父さんや、お母さんのことだった。みんなが一番楽しみにしていたのは、やはりのなんと言ってもお父さんか、お母さんが会いに来てくれることだった。

寮には月に一回ぐらいの割りりで、誰かの両親が面会にきていた。時々プレー県から小太りした芙美代さんのお母さんや、チャンマイから痩せたほっそりした盛夫君のお母さんなどがお土産を一杯ぶらさげて我が子に会いにきていた。

芙美代さんのお母さんは何故か僕が気に入り、寮にくるたびに僕を我が子のように可愛がってくれた。いつも「正夫、正夫、これは美味しいよ」と言って、いろんなお菓子や果物を分けてくれた。僕には誰も面会にきてくれないことを、芙美代さんから聞いていたらしく、とても親切にしてくれたので、僕もその優しい愛情に溺れていた。

あーあ、みんなは幸せでいいなあー、だって、あんなに優しいお父さんや、お母さんが会いにきてくれるんだもの、僕、みんなが羨ましいよ、とつても羨ましいんだ。

ずっと寮に暮らしていると、なんとなく寂しくなったり、両親のことを思いだし、温かい愛情に縋りついたくなるものである。学寮の生徒もみんな同じ気持ちだったと思う。だが、僕は馬拉ッカで両親のいざこざに直面して以来気持ちが塞ぎがちだった。

僕はいつの間にか、一人で孤独を好むようになった。無意識のうちにみんなから遠ざかり、校舎の後ろの池のほとりで、魚やトンボを見つめ、独りぼっちで過ごしていることが多くなった。両親からはなんの音沙汰もなかったし、会いにもきてくれなかった。まるで孤島に捨てられたような切ない気持ちにかられ、時々物思いにふけり、涙もろくなっていた。

学寮に預けられた当初から、僕は、母から一銭のお小遣いすら貰っていないかった。親から捨てられて顧みられなかった僕は、自分の私物を買う金すらもなかった。月日の流れとともに、真っ白か

ったシャツは次第と色褪せ、靴下なども、所々から皮膚の肌色が顔を覗かせるようになった。

学校の授業で使うコンパスや分度器なんかもそうであったが、買いたくても買えなかった。いつも友人のを借りて使っていたが、実に惨めな情けない気持ちだった。

或る日のこと、僕が食堂の椅子に腰掛けて、破れかかった運動靴を縫っていたときだった。いつ部屋に入ってきたのか、町田先生が立ってじつと僕を見つめていた。先生は心配そうな顔で、「正夫、靴が破れたのか、靴は何足あるのか」と聞かれた。僕は「はい、靴が破れたので縫っているところです。靴はこの靴一足しかありません」と、答えると、「そうか、先生が新しいのを一足買ってあげようか」と、低い心配そうな声が返ってきた。

僕はいじめていたのかもしれない。とつても嬉しくて涙が溢れそうになった。だけど僕は「先生、いいです。僕はこれで我慢します」と、首を横に振った。先生は「そうか」と言って、暫く僕の瞳を覗き込んでいたが、大きな手で僕の頭を軽く撫でながら「正夫、なにか困ったことがあったら、先生に言うんだよ」と、優しい声を残して静かに立ち去った。

## ■バンコク大洪水

1942（昭和17）年8月13日、フワヒンの海で水泳を習って以来、久しぶりに全校生で当時のイギリス人クラブ（現チュラー大学の前にあるスポーツクラブ兼競馬場）へ水泳の練習に行った。

当時、バンコク市内で50メートルもある立派なプールがあったのは、このイギリス人のクラブだけであった。ここも日本軍に占領されていて、原部隊が駐屯していた。僕たちは水泳が終わってから、みんなで歌を披露し、兵隊さんたちと遊び、甘いお汁粉や、サイダーをご馳走になった。

8月16日、僕たち高学年はアユッタヤーへ遠足に行く日だった。フワラムポーンの中央駅で、アユッタヤー行きの列車に乗り込んだ。ゴットン、ガタンと、汽車に揺られて寂しい古ぼけたアユッタヤーの駅に着いた。

駅の裏手にあつた船着場から渡し船で緩やかに流れているチャウプラー川を渡り、（当時アユッタヤーの古都へ渡れる橋はなかった）人通りもまばらな孤島となっていたアユッタヤーの旧跡巡りをした。1766（明和4）年、ビルマ軍に都を焼かれ、廃墟と化し、苔むした遺跡の跡には雑草が生い茂り藪の中に大小様々な仏像の首が一杯転がっていた。

楽しかった遠足や外部の行事も終わり、一段落し、9月に入ってからだった。確か9月中頃だったと思うが、小さな溝から水が逆流し、校庭が少しばかり水浸しになった。僕たち学寮の生徒は、寮から校舎まで濡れないで歩けるように椅子を並べて板橋を架けた。しかし、翌朝起きて見ると、水嵩が増えていて昨日並べた椅子が全部校庭の隅っこに流されていた。

市内の道路も全部水浸しになり、学校は水が引くまで休校になった。水は日増しに増える一方で、寮の一階も水が浸入し、二階に上がる階段が三段まで水に漬かってしまった。水の流れとともに、蛇や、赤茶色い長さ20センチほどもある大きな百足などが泳いでいた。時々「こんには」と、小

さな蛇が頭をもたげてニヨロニヨロと、寮の中に潜り込んできたりした。だが、蛇ちゃんたちは疲れていたのか害はなかった。

階下は全然つかえなくなってしまう、トイレも、アープナム（水浴び）も二階でしなければならなかった。それに、水道も出なくなってしまった。

水深が深くなり、外へ出るには舟がなければ出歩けなくなった。或る日、金井先生がルア・サンパン（細長いタイ式手漕ぎ舟）を一艘手に入れてきたので、みんな大喜びで直ぐ舟に乗り込んだ。だが初めの頃はまともに舟を漕げる人は誰もいなかった。

僕も細長い櫂を持って舟を漕いでみたが、舟はぐるぐる回るばかりでなかなか思うように漕げなかった。バシヤバシヤツと水しぶきを上げながら、右側を漕いだり、左側を漕いだりしているうちにやっと櫂の使い方を覚え、片方だけで漕ぎながら舟を操れるようになった。

僕たち学寮の生徒は、毎朝舟にバケツを一杯積み重ねて、ソーイ・サップのクローンの側にあった街頭水道へ水を汲みに行った。大きな蛇口からジャージャー水が流れている水道管の周囲には隣近所から集まってくる舟でこった返していた。いつも1時間ほど掛かってやっと水にありついでいたが、タイのおじちゃんや、おばちゃんたちはみんなのんびりとペチャペチャ世間話などをしながら気長に順番を待っていた。

やんちゃな僕たちは飛び歩いて遊べる場所もなく退屈気味だった。学寮の窓から糸を垂らして釣りをしたり、大きな盥を水に浮かべて乗っかって遊んだり、校舎の二階で鬼ごっこをしたり隠れんぼをしたりして、あまったエネルギーを発散させていた。

時々、金井先生から舟を借りて、ルムピニー公園や、サートーン通り、シーパラヤー通り、それにシーロム通りなどへ見物に行ったりした。

何処も彼処も薄茶色のゆったりした水に溢れたバンコク市内は、埃も雑音も無い鏡のような美しい水の都（当時、今のようなルア・サンパンだらけで、ピチャピチャ水飛沫が跳ね返ってくる水面に、影絵の

何処を向いてもルア・サンパンで、ピチャピチャ水飛沫が跳ね返ってくる水面に、影絵のように写っている人々の顔は明るく、みんな喜々として楽しそうに舟を漕いでいた。小舟に野菜や果物を積んで商いに来ている舟もあって、まるで水上マーケットを覗いているようなのかな光景だった。

やっと水が引き始め、寮の一階が生簀みたいになり、逃げ遅れた魚が威勢よく泳ぎまわっていた。

僕たちは手に手にバケツを持ち、「ヤー其処にいる、ヤーそっちに逃げたぞー」と、はしやぎながら、水をバシヤバシヤ蹴り、魚と鬼ごっこをして楽しんだ。

捕れた、捕れた、大きななままずや、雷魚がごっそり捕れた。バケツでこんなに魚を大量に生け捕りにしたのは初めてだった。

洪水で苔むした校舎の周りを観察し、つるつるする講堂の隅っこにあった半分に割れた水がめふと見ると、逃げ遅れた可愛い真っ黒ななままずの子が一杯泳いでいた。

バンコクは1917（大正6）年にも一度大洪水があったそうである。今回は25年ぶりの洪水

とかで、一回目よりも酷く、バンコク全市が川と化し、車は一切走れなかった。水深は10月13日がピークで、洪水は10月31日まで続き、46日間の長期におよび、バンコクの最悪の年であった。

## ■ナレーの家

1943（昭和18）年の1月中頃だったと思う。母はソクラーの洋館建ての屋敷を神戸海陸の日田さんに譲り、9000バーツの大金を持ってバンコクに出てきた。母はすぐ家を物色し、ナレー通りの警察署の裏にあたる細い路地にあった古惚けたこじんまりした二階建ての木造家を借りた。

僕は僕の親代わりになり常に親切に面倒を見てくださった金井先生とおばさん、それに親しい仲間に別れを告げ、およそ1年近くお世話になった学寮から去り、母と一緒に暮らすことになった。

僕はやっと母と一緒に暮らせるようになった。ナレーから元氣よく学校に通っていた。家の留守番役をしていた母は、時々4、5人のおばさんたちと花札合わせをして遊んでいることもあったが、毎日何処へ行くのか、ほとんど家にはいなかった。

僕は学校が終わると、いつも真つ直ぐ家へ飛んで帰っていた。だが家に帰っても母がいないがらんとした家で、一人で過ごさなければならぬことが多かった。酷いときは、今か、いまかと、首を長くして待っていても、真つ暗になっても帰ってこなかったこともあった。

家にはおやつもなかったし、なにか買って食べようと思っても、お金も置いてなかった。僕は無性にお腹が空き、情けなかった。仕方がないので、時々自分で七輪に火（当時ガスはなかった）を起こし、米をとき、ご飯を炊いた。アイスボックス（冷蔵庫もなかった）から生物の魚を取りだし、魚をフライしたり、卵焼きを作ったりした。できたての熱いおかずは、ナムプラー（小魚で作ったタイの醤油）をぶっかけ、味もそっけみないおかずを口に放り込み、寂しい思いをして食べた。朝もそうだったが、学校に持って行くお弁当に詰めるご飯も、ほとんど自分で炊いていた。おかずは母が作ってくれたので助かったが、僕は、これなら学寮にいたほうがよかった。こんなにひもじい思いをしないで済むのにと、楽しかった学寮生活を思いだし、みんなの顔を思い浮かべて涙ぐむこともあった。

母はソクラーにいたときからそうだったが、賭け事が好きだった。バンコクにきてもその賭博癖は直らなかつた。いつも守屋さん、寺尾さん、おはなさん、西野さん、上松さん、稲田さん、平田さんのおばさんなどと、博打仲間同士が集まり、誰かの家で花札やトランプに熱中していた。

或る日、家へ帰ってみると、下の玄関の所に軍靴が脱いであった。誰がきているのかな、と思ひ、応接間を覗いてみたが、其処には誰もいなかった。二階からベッドがギシギシ軋む音が響いてくるので、なにをしているのかなあ、と思ひ、二階に上げてみると、なんと、母と、僕も知っている憲兵隊の0中尉が裸になって抱き合い、荒い吐息をフーハー、フーハー吐きながら、セックスをしている真つ最中だった。



僕は初めて見る人間のセックスに目を見張り、嘔然としてしまった。母は何故こんなことをするのか、と、僕にとっては大きなショックだった。僕はその日から憂鬱になり、母と一緒に暮らすのがいやになってしまった。

とても寂しくて、実にやるせない気持ちだった。僕はなんでもいいから友達が欲しかった。居たたまれない気持ちになり、近所から可愛い雌の子犬を貰ってきた。頭の真ん中に茶色のポチがあったので、「ポチ」と、名前をつけて、それ以来ポチと遊ぶようになった。

## ■不思議なアラビア人

ナレーの警察署の後ろに暫く住んでいたが、其処からソーイ・タングアンスワイに近いスリヴォン通り（正式にはスラヴォン通りと言う）の図書館の真ん前に引越すことになった。

広いコンパウンドの真ん中の大きな家が家主の家で、両側が貸家になっていた。玄関の前に四角に板で囲った小さな深い池があった。家は空色をした二階建ての綺麗な家で、台所は裏の離れにあった。

隣には、痩せぎすの背の高いすばしこそうなアラビア人の男の人が一人で住んでいた。彼は厳格なイスラム教徒だった。毎日、朝夕になると、二階の窓からコーランを唱える厳かな声が流れてきた。

人のよさそうな親切な男だったが、人の出入りは全然なかった。職業についてはなにも教えてくれなかったので、一体なにをしているのか、さっぱり分からなかった。だが、どうも連合軍のスパイ活動をしていたのではないかと思う。それは何故かと言うと、彼が「今晚空襲がありますよ」と言うと、不思議なくらい、確かにかに間違いなく空襲があったからである。

僕は、僕の家にもオーナーの家にも防空壕がなかったので、空襲警報が鳴るたびに、スリヴォン通りと、デーチョーの角に面した、大きな防空壕がある北庄司さんの所に駆け込むか、あるいは、我が家に近い海外土木に勤めていた小沢さんの家の小さな防空壕に避難していた。

或る日のこと、例のアラビア人の彼が、「明日の晩、バンコク市内は凄く空襲がありますから、私と一緒にバンカッピの友人の家に避難しましょう」と、誘ってくれた。彼の予言はいつもあたるので、彼のアドバイスに従い、一緒に避難することにした。

当日、支度をして彼がくるのを待っていると、何処から車を手に入れてきたのか、彼と、彼の友人が迎えにきてくれた。おんぼろ車がガタガタと振動し、並木通りに覆われた英国領事館の前を通り過ぎ、目の前に鉄道線路が横切っている遮断機のない踏み切り（現ブロンチッ通り）を通過した。鉄道を渡った右側に、タイの高射砲隊が陣取っていたが、そこから先が、バンカッピ（現スクムヴィッ通り）だった。鉄道を境界線にした東にあたるバンカッピはまだ田舎だった。

赤土が混じった埃だらけの狭い道に平行して、両側に細長いクローン（運河）が流れていた。汗と泥に塗れ、真っ黒に日焼けした上半身裸になった裸足の子供たちがクローンの所々で糸を垂らし、釣りに熱中していた。大人のおっさんたちは投網を肩にかけ、目でじっと魚の流れを追いかけて、網

を投げ込んで魚を捕っていた。網には威勢のいい大きな雷魚や、鮒などが、一杯ピチピチ跳ねていた。

遙か遠くまで青々した田んぼが続き、牛や水牛がのろのろ歩いていた。水牛は大きな口の中に草を一杯ほう張り、上下の歯をもぐもぐ擦り合わせながら美味しそうに草を飲み込んでいた。

田んぼの所々にニッパ椰子で覆われた小屋のような農家がポツーン、ポツーンと建っていた。その農家の周りには暑さを凌ぐために、バナナの木や、マンゴーの木などが植えてあった。木陰の近くに箱庭のようにきちんと整頓された野菜畑などがあった。農民は日焼けしないように顔を覆い隠し、黒っぽい長い袖のシャツで身を包み、のんびりした動作で畑に水をかけていた。

バンカツピにはサームロー（人力三輪車）はなく、時たまがら空きの白バスが埃を立てて通るだけで、他のバスはパークナム行きバスが走っているだけだった。

民家らしい民家も殆どなく見渡す限り田んぼの畦道が続く遙か彼方に、二階建ての大きな屋敷が一軒、仲間外れにされたかのようにポツンと、孤立して建っていた。

僕を乗せた車はメイン道路から右折し、小さな木橋を渡り、ソーイ・アーリー（現スクムヴィツ・ソーイ26）に頭を突っ込んだ。

こんな道走れるのかしら、と思われる田んぼの真ん中に道が浮かんでいるような道だった。車がやっと1台ほどしか通れない細い凸凹した赤土の道を進んで行くと、なんと周囲を細長い池に囲まれた要塞のような立派な屋敷にぶつかかった。

その敷地には、鏢のないサラバン帽（イスラムのまるい帽子）を被ったイスラム人がもうすでに20人ほど集まっていた。女の人たちは台所で楽しそうに鼻歌を歌い、バケツの先に綱を結び、井戸から水を汲み上げたりしながら、大きな鍋で料理作りに忙殺されていた。

夕方、みんなでわいわい言いながら、イスラム料理をご馳走になった。食事も済み庭で寛いでいると、例のアラビア人がニコニコしながら近づいてきた。僕の横に腰を下ろし、暫く経ってからだった。「日本はもう直ぐ負けるよ」と、突然とつぴなことを言いだした。

僕はびっくりして「えっ、どうして」と、聞き返すと、「今、日本軍はあっちこつちでこつぴどくやられているし……、連合軍にどんどん占領されているから……、日本が降伏するのはもうそんなに長くないよ、本当だよ」と、真面目な目で僕を見据えた。僕は彼の話を半信半疑で聴いていたが、もしかしたら、本当かもしれない、と思った。

疲れた夕陽が西の地平線に沈み始める頃になると、一日中昼寝をしていた真っ黒い小さな蝙蝠が休めていた羽をグーツと広げ、群れをなして小さな虫と鬼ごっこをしながら、空中で自由自在に舞っていた。

周囲の田んぼからも、ゲロゲロ、ゲゴゲゴ、ギーギー、ジージー、コロコロ、ウーウーと、蛙や虫が争って鳴きだした。心地よい虫の子守唄を聴きながら、うとうとしていると、ウーウーと、遠くからサイレンの音がこだましてきた。

僕はみんなと一緒に頑丈な深い防空壕に飛び込んだ。息を殺し、全神経を耳に集中していると、

やがてブーンブーンと、B24爆撃機が編隊を組んで飛んでいる重みのある爆音が耳に響いてきた。一発目の爆弾がズシューンと、地面に衝突してドカーンと爆発した途端に、防空壕の中で今まで息を殺して静かにしていたイスラムのおっさんや、おばちゃんたちが、一斉に「ウヴオーン、ウヴオーン、あらまー助けてー、助けてくんせー」と、訳のわからないお経（コーラン）を唱えだした。狭い防空壕の中で20人もの人たちがウヴーン、ウヴーンと唸っているので、耳にガンガン響き、僕はうるさくていたたまれなくなり、外へ飛び出してしまった。池のほとりで、バンコクの空を見上げていると、まるで花火大会でもやっているかのように、ドカーン、ドカーンと、爆弾が落ちるたびに、真っ赤な火の粉が舞い上がり、爆弾が落ちるのがよく見えた。

僕は、このソーイ・アーリーのスパイの基地だったのかも知れないイスラムの屋敷に、3回ほどお世話になった。あのアラビア人が予言したことは実によくあたった。自分の名前も明かさなかったあの不思議なアラビア人は、1944（昭和19）年2月の或る日、突然姿を消してしまった。何処へ行ってしまったのかわからないが、彼はやはり敵のスパイだったのかも知れない。僕には随分お世話になった。それだけに彼の安否が気になる。お人よしの彼は、やはり不思議なアラビア人だったのだ。

## ■南方軍の凱歌

1942（昭和17）年5月までは日本軍が破竹の勢いで連合軍を蹴散らしていた頃で、世界一を誇る日本軍の最盛期であった。日本軍は初期の南方作戦（タイ、マレー半島、ビルマ）で、およそ21万の兵力による精鋭を編成し、東南アジア地域を防備していた敵の、およそ22万人の正規軍に立ち向かった。

1941（昭和16）年12月8日未明、タイでは、シヤム湾（タイ湾）を封鎖し、バンコクの南にあたるサムップラカーン県のバーンプー避暑地に、白馬山丸から運よく吉田支隊が無血上陸した。が、南部タイのプラチュワプキリカン、スラーターニー、チュムポーン、ナコーンシータマラート、パッタニー、シンゴラ（ソククラ）に奇襲上陸を決行した部隊は、タイ軍の守備隊と激戦となり、双方に多数の死傷者をだした。

マレー半島（現マレーシア）の英印軍が警備していた東海岸のコタバルに上陸した部隊は、敵の猛攻に遭遇したが、苦戦の末2日後にコタバル空軍基地を占領し、さらにシンガポール攻略へと向かって進撃した。

1941（昭和16）年12月19日にペナン島を占領し、続いて28日にイポーを占領、31日にクワンタンを占領し、翌年の1月11日にクアラルンプール都市を占領、15日にマラッカを攻略し、31日にはジョホールバルを占領し、2月15日に待望のシンガポールが陥落し、2月17日に「昭南島」と、改名された。

タイの北部と国境を接しているビルマ（現ミャンマー）との戦況は、1942年1月4日に、第15軍のビルマ侵攻作戦令が発せられた時点から軍部の行動が開始された。

ビルマ戦線に向かう第15軍がタイの北部、チャンマイ、ラムプーン、ラムパーン、プレー、ラヘーン（現ターク県）および、ピサヌローク、ナコーンサワン周辺に進駐したのは、タイ南部の上陸作戦が一段落し、大休止した12月15日の日からだった。

日本軍がチャンマイに進駐する前に、日タイ両軍の協定により、タイのパヤップ部隊が一足先に、バンコクのフワランポーン中央駅から列車に乗り込み、12月10日にチャンマイに到着し、数ヶ所の寺院を占領し、チャンマイの守備にあたった。

このパヤップ部隊はのちに日本軍の後援でビルマ北部のチャントウンへ進撃し、連合軍と戦った部隊だが、終戦後、日本軍の援助（日本軍も補給がなくて大変だった）も得られず、約160キロの山岳地帯の険悪な道を苦勞してやつの思いでタイに辿り着いた悲惨な部隊であった。

ビルマ作戦に編成された部隊がバンコクから列車を利用してタイ北部のチャンマイ方面に向かって進撃を開始し、現地に到着したのは、12月15日だった。日本軍はタイのパヤップ部隊と同じように、学校や、由緒ある寺院を占領して駐屯した。

チャンマイ所属部隊は旧市外の西方にあたるワツ・ムーンサーン（ムーンサーン寺）にブラック式の仮小屋を造り、司令部および、野戦病院を開設し、ビルマ攻略に向けて準備を整えた。

一方、馬車の町で有名なラムパーンにも司令部を置き、ビルマ攻略に向けて、ラムパーン飛行場を拡張し、爆撃機も離着できる隼空軍基地を構築し、ビルマ戦線に備えた。

ビルマ作戦で日本軍の頭痛の種となったのは、肝心なタイからの補給ルートの問題だった。当時、タイの北部からビルマへ抜ける貫通した道は皆無に等しかった。

日本軍が道なき道を苦勞して越境したチャンマイ、メーホーンソンヤ、ラヘーン（ターク県）のメーソートならびに、ターソンヤーンのモーイ川が流れている周辺もそうだったが、国境地帯は獐猛な野生動物が住む鬱蒼とした険悪なジャングルに遮られた未開地だった。

ビルマへ越境する道がなかったために、日本の工兵隊はタイの労務者や、農民を動員して劣悪な密林を早急に切り開かなければならない突貫工事が待ち構えていた。

チャンマイからメーホーンソンヤへ抜けるルートの場合、チャンマイから北上して、メーマーライを拠点にし、西北に向かって、パーイを通過し、（パーイには、パーイ川が流れたているが、日本軍は川に木橋を架けて渡っていた。現在も橋は記念に残してあるが、木橋は1963年の洪水で流されてしまい、現在架かっている鉄橋は、元チャンマイのピン川に架かっていたナワラツの鉄橋である）メーホーンソンヤ（現1095号線）からさらに南下してクンユアムまでの道、およそ300キロを突貫工事で速やかに仕上げなければならなかった。

ラヘーン（現ターク県）の場合は、ラヘーンからビルマの国境線を示すモーイ川が流れているメーソートから更に、ターソンヤーン（現105号線）へ抜ける道を切り開かなければならなかった。

岩石で固まった密林の道路工事は難航し、なかなか思うように捗らなかった。このために先行する部隊は待ちきれず、駄馬や、農民の牛車を駆りだし、食料や武器弾薬を満載して運搬させたが、

のろろガタゴトと、歩く牛車が坂道で足を滑らせて急な崖から牛もろとも谷底へ転落する悲惨な場面が再三にわたり発生したために、おとなしい素直な農民に恐怖心を与える結果となった。

後方からの補給ルート困難な山岳地帯を破竹の勢いで邁進し、敵を撃破した第15軍の精銳は、1942（昭和17）年の1月から僅か5ヶ月の間に、1月19日にタヴオイを占領、1月31日にモールメンを占領、3月8日にラングーンを占領、4月29日にラシオを占領、5月1日にマンガレーを占領、5月3日にバーモートを占領、5月4日にアキャップ飛行場を占領、5月5日に緬支国境を占領し、5月7日にはミートキーナを占領し、マレー半島、フィリピン、ボルネオ、インドネシア、タイと隣接しているビルマ（現ミャンマー）などの諸国に猛火を浴びせた日本の皇軍は各地で連戦連勝し、盛大な凱歌をあげた。

南方作戦で最後まで残っていたビルマ戦線も、5月末にはすでにモールメン、東部シャン州、ラングーン、中部マンガレー、北部のバーモート、ミートキーナ、さらに中国の雲南省、拉孟、騰越を順次占領し、日本の配下に収めた。これで南方軍の鎮圧作戦は一応完了し、一段落した。

この初期作戦で南方軍の大勝利に帰し、軍部の士気は大いに燃え上がった。日本軍の戦果は、連合軍の捕虜25万人、軍艦105隻撃沈、大中破91隻、空軍機1537機、であった。日本軍の損害は、戦死およそ7000人、負傷およそ1400人、艦船27隻、空軍機562機であった。

この大戦果に笑いが止まらなかった日本の軍部は、連合軍弱し、と判断し、ますます米英を甘く見下すようになった。「大東亜共栄圏」をキャッチフレーズに呼びかけた日本は占領地に「独立を与えるから」と宣伝し、軍政を布き、軍隊式治安を施した。占領地域の膨大な物資資源を確保した日本は、本国への輸送および、自足自給を維持する方針を編みだした。

### ■バンコク駐屯軍の素顔

バンコクには、ルムピニー公園や、その他の地域に、バンコクおよびタイを守備する部隊と、ビルマ戦線へ赴く日本の部隊が点在し、駐屯していた。僕が住んでいたスリヴオン通りにも、日本人学校の近くに、南憲兵隊があったし、我が家の前にあるドーム式のイギリス図書館にもインパール作戦に参加する祭部隊が駐屯していた。

ヤワラー通りの中華街の、当時有名だった屋上にダンスホールがった海天楼の近くにも中国人を睨んでいた北憲兵隊があったし、オリエンタル・ホテルの横にあったチャウプラー川に面したデナムークのイースエシアテック社の二階建ての大きなビルにも憲兵隊本部があった。この憲兵隊本部では、時々、在留邦人までが呼びだされて厳しい取締りを受けていた。

スリヴオン通りには、軍人専用の赤玉や、白木屋、白雲荘などの看板が上がり、上官専用の遊樂地になっていた。この他にも下士官の兵士が詰め掛けていた慰安所が、クローン・トイヤ、スリヴオン通りの日本人学校があったソーイ・サップ周辺にも点在していた。従って、スリヴオン境界は昼間から胸を張って闊歩する軍靴の響きで異常な活気に満ちていた。

夜ともなると、酒の匂いをプンプン撒き散らし、千鳥足になった将兵が訳のわからないだみ声で、

歌を口ずさみ、何処でも所かまわずジーヤジーヤと、立ち小便をしていた。威張り散らした気の短い軍人が言葉も通じないのに、「タイ人がなんだー、生意気だーッ」と息巻き、タイ人と殴り合いの喧嘩をぶっばじめたりして、いざこざが絶えなかった。

或る日の夕方玄関の所で涼んでいると、一人のすらっとした将校を乗せたサームローが僕の目の前でキーツとブレイキをかけて停まった。サームローから降りた将校は、そのまま料金を払わずにスタスタと歩きだした。

その途端に、サームロー引きのおっさんが「お金、お金、まだサームロー代を払ってない。サームロー代をください」と、大きな声で怒鳴りだした。不満顔でじろりと一瞥した将校は、「なにをわめいているのだっ、うるさいっ、このやろうー」と、一喝したかと思っただけその刹那、あつという間に日本刀を抜き、ガチーンと車輪が跳ね返る鈍い音と同時にサームローのタイヤをスパツと切ってしまった。

タイヤを台無しにされた可哀想なサームローのおっさんは、「チャムワイナ・ムン、アイユン」(このやろう覚えていろ、背の低い日本人奴)と、わめいて逃げ去った。

これは僕自身が直面したほんの一件に過ぎないのだが、日本軍が駐屯していた、ソクラー、ナコーンシータマラート、チュムポーン、ラノーン、バーンポーン、カーンチャナブリー、トンブリーなど、その他の地方や地域でもいろんな問題を引き起こしていた。

ともすれば、中国大陸と同様に勘違いしがちな日本軍の規律はかなり乱れていた。威張り散らし傲慢になり過ぎた将兵が「此処は俺たちが占領した領土だぞ」と、人を小ばかにした顔で「土人がなんだ、土民の能無しがなんだ、タイ人の馬鹿がなにをべこべぬかすか」といった調子でタイ人を馬鹿にした。大事なタイの風習、文化をも軽視し、礼儀作法すらも忘れ、平気で失礼な行為を示した。

酷いのは、意味も訳もわからぬまま手を合わせて哀願するタイ人を掴まえて、ビシツとビンタをばり、ゴツーンと頭を叩いたりした。それに罪もない嫌がるか弱い女性を強姦した事件などが続出した。

この他にも、スパイ容疑で逮捕され、半殺しの目に遭った者もいた。しかし、被害を受けたタイ人が警察に駆け込み「助けてください」と、訴え、救いを求めても、どうにもならなかった。

タイは日本に占領された領地でも植民地でもなかったはずである。ちゃんとしたタイ国自体の憲法ならびに、法律が維持されていた独立国である。だが何故か、武力の威力に威厳を張った憲兵隊や軍部の圧力によって押さえられていた。

日本からがんにがらめに縛りあげられていたタイ当局としては、穏便に話を進める以外になんとも手の施しようがなかった。被害に遭った可哀想な人々はただ泣き寝入りするしかなかった。悪事を働いても裁判もなんの刑も受けずに済む将兵の振る舞いは日毎に悪化するばかりで、目にあまるものがあつた。

特に最悪に酷かったのは、1942(昭和17)年12月18日に起こったバーンポーン事件だ

った。事件の発端は一人のタイの坊主が捕虜にタバコをあげようとして、日本兵に「捕虜にタバコをやるなっ」と、注意されたが、言葉が通じなかったために、捕虜にタバコをやったのがきっかけだった。

兵士は「このやろうっ」と、怒鳴り、ドントウム寺の坊主の頬っぺたに、バシッと、ビンタを張ったのだった（タイでは人の頭を撫でたり、叩いたり、頬っぺたにビンタをくらわせたりすると、侮辱されたとみなされる。特に、僧侶は国民から尊敬され、大事にされている）。

このバーンポーン事件がきっかけとなり、タイ人は遂にカンカンになつて怒りだした。「ここはタイ国なのだ、俺たちの国なのだ、何故俺たちタイ人を虐めるのだ、威張るなアイ・ユン、タイ人を馬鹿にするなっ」と、自尊心を踏み躪られたタイ人の愛国心が瞬く間にタイ全土に広がった。

このために、一時的ではあったが、不満を抱いたタイ人が「アイ・ユン」と強調した声で日本人を罵倒し、各地で反日感情の火の手がめらめらと燃え上がった。道を歩いていても、白目でジロジロ睨み、「アイ・ユン」と罵られ、身の危険を感じるようになった。

喧々囂々とした険悪な情勢下に見舞われた折りしも折り、南方軍総司令部の配慮により、日・タイ双方の友好を保つ重大な大役を帯びた救いの神、義部隊の中村閣下が現れた。第15師団の予備隊にあたる義部隊の司令官、中村明人中将が急遽バンコクに赴任したのは、1943（昭和18）年1月21日だった。

義部隊長赴任と同時に、義部隊本部の設置の場所探しが始まり、当時華僑仕事を担任し、華字紙を発行していた中原報の藤島健一さんの努力により、南サートーン通りに面した中華総商會が義部隊司令部本部となった。

中村閣下が着任して数カ月後には、不思議なことに、軍部の規律がきちんと守られるようになった。中村閣下の人徳により今まで起きていた様々な事件がスーと消え、解消され、やっとタイ人から暖かい眼差しを受けるようになった。

### ■バーンポーン事件の真相

1942（昭和17）年12月8日の17時頃だった。ポーム・シリピブン僧（37歳）がドントウム寺の住職に会いに行くときだった。境内には疲労死したらしい7、8体の遺体が転がっていたのを横目で見歩いていると、捕虜収容所にいた白人の捕虜に「タバコをください」と言われて、タバコを渡そうとしたその瞬間に、第9鉄道隊が警備していた日本兵に続けさまに3回もビンタされ、倒れ、地面に顔をぶつけたのである。

ポーム僧が日本兵にビンタされているのを見たタイの労務者たち30名が怒り狂い駆けつけて日本の守備兵士と格闘になった。結果は、境内で守備兵2人が刺されて死亡し、1人が負傷する惨事が発生した。

事件発生後、寺院の住職を含む僧侶全員と地元のタイ人男女子供を含む31人が鉄道隊に逮捕され、連行されて取調べられた。お寺の僧侶は午前3時まで取調べを受け、午前6時に釈放された。

タイの労務者31人のうち20人は12月24日に釈放されたが、残りの11人の労務者は監禁され、1943（昭和18）年1月23日に拷問の結果、身体中に打撲傷を負い、へとへとになった体を、タイ当局に引き渡された。11人のうちの8人の証言が残っているので、参考までに記しておく。

1942（昭和17）年12月18日から、1943年（昭和18）年1月18日14時まで日本兵殺害容疑で、日本軍に取調べを受けていた鉄道隊の仕事をしていた労務者8人の証言。（住所、職業、家族構成その他を省略）

1 チョム・シーソーパーさん（40歳）

1942年12月18日に逮捕された。両腕を後ろ手に縛られ吊るし上げられて木刀で殴られた。何回殴られたかわからない。殴りながら白状しろと、言われたが、白状しなかった。左腕に打撲傷がある。

2 ノーイ・ケーウロイドウワンさん（41歳）

鉄道の仕事をしていて逮捕された。同じ日に後ろ手に吊るし上げに縛られ木刀で殴られた。両手に綱で縛られた傷跡が残っている。肘の上側に二ヶ所と、背中にも五ヶ所傷跡がある。

3 ルワン・カムコムさん（26歳）

日本の鉄道隊の仕事をしている。12月19日の朝逮捕された。手を縛られ、頭を殴られて二ヶ所に傷口ができた。右手首と、左手首も傷がある。

4 レック・ワートユツさん（19歳）

12月18日の夜逮捕され、頭を殴られ、頭部前後に傷口がある。頭全体が腫れている。

5 サワイ・シーサーライさん（18歳）

鉄道の仕事をしていて逮捕され、頭を殴られ、傷口2ヶ所、右肩一ヶ所と左肩一ヶ所、両手首の周りには縛られた傷跡あり。

6 レック・ポートサックさん（40歳）

同じ日に逮捕され、殴られて、左肩に一ヶ所、右肘に一ヶ所、胸の肋骨を殴られた。



7 サワツ・トーンヤイさん(39歳)

同日皆と一緒に逮捕された。右腕に殴られた傷口一ヶ所、  
右手首にも一ヶ所傷あり。

8 ヴィン・ブンチュワイさん(34歳)

鉄道の仕事にきていてドントウーム寺の母家で皆と一緒に逮捕された。

体中を木刀で殴られたが、頭に傷口かひとつあるだけだった。

食事は1日三食あったが、マクルートみたいにまるめた固まりのご飯や、

塩を振りかけて食べるご飯、又は、白いご飯だけのときもあった。

飲料水はご飯のときにしかなかった。

(1942年12月19日ー1943年2月4日のラーチャブリー県の資料より)

## ■大東亜会議と独立

戦況が逆転し始めた1943(昭和18)年3月、東条英樹首相は南京を訪問、4月1日満州を訪れ、首脳と会見を交えた。5月にはフィリピンを訪問し、フィリピンに独立を与える動きをみせた。7月には、更にタイ、シンガポール、バタビアへと足を延ばした。

日本は制空権を連合軍に牛耳られていたために、東条首相は隠密行動をとり、7月3日急遽バンコク入りし、ピッサヌローク通りの迎賓館に2泊し、4日の日ピブーン首相と会談を交えた。

日・タイ友好関係を強化するとともに、かつてはタイの領土であった、と称する、イギリスに横取りされた失地、マレー領のサイブリー、ケランタン、トランガヌー、ペリス4州ならびに、ビルマのシャン地方のチェントウン、ムアン・バン2州の領土をタイに割譲し、タイのご機嫌取りを計った。

7月5日にシンガポールに飛んだ東条首相は、自由インド仮政府による自由インド国民軍の盛大な閲兵式を参観し、壇上より激励した。それと、ビルマのバーモウ長官とも会い、ビルマ独立について談話を交わした。更に、7月7日、バタビアへ足を延ばした首相はスカルノおよび、ハッタラとも会い、日本で開催される大東亜会議の地盤を築きあげた。

この東条首相の歴訪が実り、招待を受けて日本と運命をともにせざるを得なかった各国の代表者が東京に集まったのは11月初旬だった。たった一度の歴史的な大東亜会議は5日、6日の両日にわたり、東京の国会議事堂で開催され、大東亜共同宣言が発表された。

日本の東条英樹首相を筆頭に、中国の汪兆銘行政院長、満州国の張景恵國務総理、フィリピン共和国のホセ・ピラウレル大統領、ビルマのバーモウ首相、タイのピブーン首相代理(ピブーン首相は出席する意志がなかったため)ワンワイタヤコーン殿下、それにインド仮政府首班のスバス・チャンドラ・ボースがオブザーバーとして出席した。

日本は自国の作戦上、1943(昭和18)年8月1日、バーモウ長官を指導者に推薦し、ラン

グーでビルマ独立政府を発足させた。続いて10月14日、ラウシルが大統領に任命され、フィリピン共和国を発足し、軍政を破棄した。

インドも日本に亡命していたインド独立運動家のラス・ビハリ・ボース、それに、ドイツに亡命していた前国民会議派議長のスバス・チャンドラ・ボース兄弟によって進められていた。スバス・チャンドラ・ボースは日本の招聘により、相棒のハッサンとともにベルリンから密かに潜水艦に潜り込み、サイパン島経由で日本へ飛んだ。

日本は、シンガポールで盛大なインド独立運動を起こし、さらにタイでも1943（昭和18）年5月15日バンコクのシラバコーン劇場で、インド独立大会を開催した。

スバス・チャンドラ・ボース首班は10月23日シンガポールで、自由インド仮政府を樹立するにいたった。更に、1944（昭和19）年1月7日ビルマのラングーンに、自由インド仮政府事務所を開設し、7000人のインド国民軍を編成し、日本軍とともに共同作戦に参加し、勇敢に戦った。しかし、後に、このインド国民軍は連合軍の強硬な反撃作戦に遭遇し、インパールその他の作戦でほとんど全滅し、悲惨な運命を辿った。

戦いに敗れたチャンドラ・ボースは、日本の敗戦後、ソ連へ行く計画を立て、サイゴンで四手中将と一緒に台北経由で大連に向かうことになった。1945（昭和20）年8月18日、台北から飛び発とうとした軍用機が運悪く滑走中に土手にぶつかり、機体は火だるまとなり、チャンドラ・ボースは炎とともに散ったのである。

インドの英雄スバス・チャンドラ・ボースの英霊は、東京の杉並区の静寂な連光寺に祀られ、1975（昭和50）年に記念碑が建てられ、今もまだインドの心の中に生きている有名な英雄である。

## ■連合軍の反撃

南方作戦で勝ち誇った日本は、米英弱し、日本に強敵なし、と鼻息が荒くなっていた。軍部は、特に海軍は、更に太平洋上の作戦範囲を拡大する案を練り、機動部隊による上陸作戦を開始した。だが、海軍は敵の情報収集に関する油断が原因で、実際に日本の敗戦が決定的なものとなったのは、開戦後僅か半年であった。

それは1942（昭和17）年6月初旬に展開されたミッドウェイ海戦であった。ミッドウェイ上陸作戦に参加した日本の機動部隊がミッドウェイ目指して進撃していたときだった。日本はアメリカの機動部隊に、日本のミッドウェイ作戦に関する暗号を解読されているとは露知らず、待機していたアメリカの機動部隊を発見した。

素早く敵の機動部隊を撃滅せんと、準備を整え、母艦機が今にも航空母艦から飛び発とうとしていた瞬間だった。低空飛行で急に襲い掛かってきたアメリカの爆撃機30機の猛攻に見舞われ、母艦機は飛び発つ寸前に叩き落され、甲板で爆破されてしまった。それに、日本の機動部隊は、このミッドウェイ海戦で、大事な航空母艦4隻（赤城、加賀、飛竜、蒼竜）と、巡洋艦1隻を撃沈され

てしまった。それに母艦機200余機も海底の藻屑となった。

世界一を誇る日本帝国海軍は、この激戦で主力にあたる空母を一举に4隻も沈められ、悲壮な大敗を蒙った。日本海軍の威厳は減少し、その時点から制海権および、制空権を徐々に連合軍に牛耳られる破目となった。

1942（昭和17）年8月7日アメリカは、南太平洋のソロモン群島のガダルカナル島から、反撃の火蓋をきった。ガダルカナル島上陸を皮切りに、アリューシャン列島のアッツ島、キスカ島へと、奪回作戦を展開した連合軍の猛攻に、日本軍の守備隊は後方からの援助も補給もなく悲壮な玉砕を重ね、大敗を蒙った。

連合軍の反撃に多大な打撃を受けた日本軍は、ソロモン、ニューギニア方面の挽回を図り、1943（昭和18）年4月5日から16日まで「イ号作戦」を実地した。この作戦は、山本連合艦隊司令長官自身が陣頭指揮をとり、久しぶりに多大な戦果を収め、日本の勝利に帰した。

作戦終了後4月18日、山本五十六元帥は奮戦した将兵を激励すべくラバウル基地から戦闘機9機の援護の下に、中攻機でブインへ向かった。だが、肝心な山本長官の行動に関する暗号を、アメリカに解読されていた。

このために、山本長官が搭乗していた中攻機は、待ち伏せしていた30数機のアメリカの戦闘機群によって襲撃を受け、ブイン北方のジャングルに墜落し、名誉の戦死を遂げた。第二次大戦が勃発する以前にアメリカ相手の戦争に対して、初頭から戦争反論を口答していた、ハワイ真珠湾奇襲攻撃を編みだした多大な成果を収めた戦略の名士、偉大な山本長官の戦死は、日本にとって実に大きな打撃であった。

一方、西部戦線占領後のビルマ方面の戦況は平穩無事にみえた。しかし連合軍は、米英印中連合部隊によるビルマ奪回作戦を企画していた。インドおよび、中国をベースにした米英空軍部隊は1942（昭和17）年7月初旬、空軍力を増強し、戦闘準備を整えていた。

まず、B24爆撃機および、P38戦闘機の主力となるおよそ500機の新鋭機で空中作戦を開始した。1943（昭和18）年1月にビルマ全土を荒らしまくった敵機の数は、延べ1000機に達した。

これと前後して、地上部隊もインドのインパール方面に英印軍が2個師団半、北部のミートキーナ付近にウイングート空挺師団1個旅団、雲南地域にも米支混合による重慶ビルマ遠征軍7個師団が集結し、ビルマ反攻のチャンスを狙って待機していた。

1942（昭和17）年11月末、英印軍の第一線部隊は遂にアキヤップ戦線から反撃の火蓋をきった。英印軍は1943（昭和18）年1月にはブチドン、ドンペイクまで進出し、日本の守備隊と猛攻を交えていた。

2月中旬、ウイングート師団が、インパール方面からミートキーナへ進撃を開始し、本格的なビルマ奪回作戦が始まった。守備の立場から反撃作戦に乗りだしたアメリカは、1943（昭和18）年の新年頃から、武力と物資の威力にものをいわせ、各地で徹底的な撃滅作戦を実地した。

かつて一度も負けたことがなかった威張り散らした日本軍は、肝心な武器弾薬、医薬品、糧秣や水の補給もなく、気力だけで、飲まず食わずの死闘を繰り返し、弾尽きて勇敢に戦った。だが、制海空権をなくした日本の将兵は惨めな思いで退却しなければならなかった。退却するにも、昼間の行動は不可能に近かった。常に敵機の機銃掃射に遭遇するために、ジャングルの木陰を利用し、散々な目に遭い、足を頼りに敗走に敗走を重ねたのである。

最前線で可哀想な将兵が散々な目に遭遇し、負け戦を継続していたにもかかわらず、日本の大本営は、国民には真実をひた隠しに隠し「勝った勝った」と宣伝し、本土決戦、一億火の玉だ、欲しがりません勝つまでは、一億一心、鬼畜米英、一億玉砕、と、様々なキャッチフレーズで国民の志気を煽り、なにも知らない純真な国民を騙し、こき使い、死地に追いやったのである。

太平洋諸島ならびに、ビルマ戦線で戦果を挙げた連合軍は、更にB29大型重爆撃機による日本本土空爆を企画していた。そのために、1944（昭和19）年7月初旬、アメリカの機動部隊はサイパン島を砲撃し、敵前上陸を決行した。島を防備していた2万7000人の日本の守備隊は、後方からの応援も、補給もないまま、最後に弾尽きて悲壮な玉砕を遂げた。

サイパン島を奪回したアメリカは、直ちにB29空軍基地の要塞を構築し、徹底した日本本土の爆撃を開始した。10000メートルの上空を飛ぶ空の要塞B29が編隊を組み、定期便のように飛来し、爆弾や、焼夷弾の雨を降らせた。

日本は、銀翼を揃えて、雄々雄しい富士山を目当てに、堂々と侵略してくる敵機を防止する術もなく、連日ブーンブーンと、自由自在に飛来するB29爆撃機による鉄の雨を降らす猛爆を受け、国民は悲惨な目に遭遇していた。

木造建ての家屋はアメリカの焼夷弾戦術で焼かれてしまい、罪も無い哀れな同胞は、めらめら燃え上がる地獄絵図と化した、渦巻く火の海で、避難所もなく、家族と離れ離れになり、必死で逃げ惑い、力尽きてバタバタと倒れて逝ったのである。

無敵日本の敗北が予想よりも早く訪れた理由は、広島、長崎に落とされた原爆にもよるかもしれない。しかし、日本はそれよりも、もっと大事なものを見逃していた。それは、戦後になってから判明したことではあるが、連合軍の電波探知機戦術であり、日本にとって特に決定的な宿命となり、早期から敗北を招いた原因は、連合軍に日本軍部の暗号を感知され、軍部の戦略を解読されていたからである。

僕たちのこの小さな盤谷日本国民学校も、日本が引き起こした太平洋戦争の戦火に巻き込まれ、運命をともしせざるを得なかったわけである。勿論、日本の国民も軍部の命令には忠実におとなしく従わなければならない（反論者は非国民、国賊と言われた）同じ運命を背負わされていたのである。

僕はタイにいたお陰で、お腹を空かしてひもじい思い（日本では終戦間際には日比谷、上野公園でお腹を空かした餓死者が始めていた。上野動物園の動物も餌がなくて餓死していた）をしませんでした。しかし日本では、海からの輸送による補給ルートは次第に途絶え、食料も底をつき、配

給制度となっていた。

日本の政府は1943（昭和18）年6月25日「学徒戦時動員体制確立要綱」を決定し、更に、1945（昭和20）年3月23日には、妊婦と病人を除く13歳以上60歳以下の男女を国民義勇兵に動員する方針を決定した。

この政府の法案に基づき、中学3年以上の授業は打ち切られ、人手不足の工場の穴埋めを計った。勤労働員令に従い、生徒は原料が欠乏しかなかった兵器工場などへ送り込まれ、血眼になり、慣れない機械で怪我をし、事故を起こしたりしながらも、お国のためにと、精魂込めて生産にあたった。

文科系の男子学生に対しても、徴兵猶予制度が廃止され、徴兵制度に切り替えられた。このために、大学生や、高等専門学校の生徒は、徴兵され、軍隊へ送り込まれ、厳しい軍事教練を強いられ、ある者は戦場へと送り込まれた。低学年の児童は地方への強制疎開が実施され、親元を離れた幼い児童は、疎開先で不安にかられ、様々な体験を積んだ。

日本の国民は、日に日に暗黒の世界へと、引きずり込まれていった。この日本の荒んだ影響が、やがて「こんにちは」と、海外にいる僕たちの身にも降りかかってくることになった。

## ■人生の転換期

1943年（昭和18）年3月25日、僕と同じ教室で勉強していた2年先輩にあたる14期生4人の卒業式があった。学寮で一緒だった餓鬼大将の林国偉君、春木康雄君、僕と同じクラスにいた春子さんのお姉さんの許淑珠さん、それに幸治君のお姉さんにあたる渡辺淳子ちゃんだった。僕はみんなと親しかっただけに、なんとなく悲しくて、最後の「蛍の光」を歌いだしたときは無性に悲しくなって目に涙を溜めていた。

僕はこの5月の新学期から5年生になった。やっと12歳になったばかりだったが、この時点から体内に潜んでいた物事に対する考え方が不思議なくらい一編に180度方向転換してしまった。何故か、まず自分自身の人生を考えるようになり、大人の世界に目を向けるようになった。特に、自分の家庭、両親について凄く関心を持つようになった。マラッカの天国で威勢を張り、恋人と一緒に暮らしていた父は、バンコクにいる僕のことなどは脳裏に全く音信不通であった。

母は相変わらずブスカ、ブスカと、父の愚痴ばかりこぼし、「お金がない」と言いながらも、賭博に夢中になっていた。それに、ソングラーにいた頃からの仲だった例の若い0中尉も時々母に逢いに来ていた。0中尉が現れるたびに、母は魔法使いのように急に親切な女に変身し、0中尉と喜々として自分の部屋でいちやついでセックスを楽しんでいた。

母と0中尉の肉体関係、セックスについても、人間は何故セックスをしなければならぬのであろうか。父もマラッカでの優しい恋人と、母と同じようなことをしているのであろうかと、セックスについても感心を持ち始め、大人の言動に敏感になっていた。

母はお金を持っていながら、いつも「お金がない」と言っただけ、僕が欲しがる物は日常品以外はなにも買ってくれなかった。「お腹が空いたからお金頂戴」と言っても、母はただ渋い顔をするだけで、一銭もくれなかった。

それに母は何故か、母の甥にあたる田島のおじさんに「父から送金がないから」と泣きつき、時々お小遣いをせびっていた。田島のおじさんはシーロム通りに近いニューロードの商店街に会社を構え、日本軍関係の仕事を請け負っていた。おじさんも、母のことについては「困ったものだ」と、頭を痛めていた。

丁度食べ盛りだった僕は、家の中にある物は、なんでもガツガツ平らげてしまった。だが直ぐお腹が空くので、そのたびににお金が欲しい、と思ったが、ただ思うだけでどうにもならなかった。家庭内の金銭面のことまで考え、これではいけない、なにかアルバイトをしてかせがなければいけない、と、自分の惨めな身を省み、僕は両親も誰も頼れないのだ。自分の人生は自分で切り抜くしかない、と、いつの間にか自立の道を真剣に考える我慢強い少年になっていた。

複雑な人間関係が絡んだ家庭の事情に悩まされた僕は、頭を使う学問のほうはあまり身につかなかった。しかし、声を震わせて歌う歌や音楽、特にオペラやクラシック音楽が大好きになってしまった。

本も「のらくろ」や「たこのはつちゃん」などの漫画の本ばかり読んでいた僕だったのだが、この頃から天文学や探偵物が好きになった。図書室で天文学の本を開いて、北斗七星や南十字星の星の位置などを頭の中に叩き込み、夜になると、キラキラ輝いている無数の星の中から、その星が何処にあるのかを探し求め、確かめるようになった。

僕はいろんな生き物に対しても関心を持ち、マラッカで父に貰ってきた顕微鏡でいろんな虫類を拡大して覗いた。顕微鏡で覗く世界は格別違った面白い世界だった。だが、それだけでは物足りなくなってしまう。僕は、蛙、魚、蟹、小鰐、鳥、蜘蛛、毛虫、その他様々な虫類を、夢中になって集めた。そのために、一時、みんなから「正夫は虫きちがいになってしまったのではないか」と、言われたほどだった。

僕は長さ20センチほどの小鰐を宝亭の池で捕まえてきて、洗面器に水を入れて自分の部屋で飼い、餌を与えて育てていた。だが、少し大きくなった頃、部屋から逃げだしてしまった。ほかにもいろんな虫類を部屋の中で、餌を与えながら、それぞれ異なった生き物の生態を興味深く観察した。蛙などは、池から卵を掬ってきて、大きな缶に入れ、卵からおたまじやくしになり、小さな足が生え、尻尾が取れて蛙になるまでの成長の仕方などを観察した。

一番面白かったのは蜘蛛だった。僕は大小様々な蜘蛛を20種ほど捕ってきて自分の部屋に放し飼いにした。蜘蛛はお尻から透明な柔らかい糸をだして、いろんな形をした巣を編みだし、1日で自分たちのテレポートリーを築き上げてしまった。餌はハイを与えていたのだが、そのうちに丸々と太った蜘蛛が無数の卵を産んだ。

やがてグシャグシャッと、小さな可愛い蜘蛛の子が、白い綿のような卵の中からフンワリ、フン

ワリと抜けだし、母親の体中にへばりつき、或いは巢の所に群がっていた。ところが数日後には、親元を離れ、独立を目指した数百匹の蜘蛛の軍団が所狭しと、部屋中に巢を張りだした。あれよ、あれよと言う間に、家中蜘蛛の巣だらけにされてしまった。大笑いした隣近所の人たちから「正夫は蜘蛛男だ」と、ありがたいニツクネームを頂戴してしまった。

僕はおよそ半年間この小さな弱い虫の生命を、目を丸くして観察した。一見なにもないように見えるが、自分達のテレトリーを守る生命力の強い小さな世界だった。しかしそこには、小さいながらも、やはり強いものが生き伸びる厳しい虫けらの社会があった。

### ■買って貰えなかった自転車

僕たちの学校は、1943（昭和18）年度から1944（昭和19）年度にかけて、転入生および、新入生の人数が急速に増え、100人あまりになった。先生も1942（昭和17）年に洋裁の先生として松崎秋子先生が、1944（昭和19）年には、痩せた眼鏡を掛けた小牟田重徳先生が赴任してこられた。講堂もおんぼろな旧講堂では狭くなり、学寮の前に新しい柱のない立派な講堂が新築された。

或る日、ミッキーのクラスにずば抜けて背の高い里見時宗君が転入してきた。彼のお父さんは有名なグララフックデザイナーの里見宗次さんで、お母さんはフランス人だった。僕たちは時宗君のことを、ノツポとか、ボーイングと、ニツクネームで呼んでいた。ボーイングはいつも競輪用の頭を下げて乗る自転車で学校に通っていた。彼が自転車に乗っている姿は颯爽として実に格好がよかったので、みんなの憧れの的となった。

それからまもなく、学校では自転車が流行し、5、6年生の間ではみんな自転車に乗って遊ぶようになった。休みの日などにはバンカッピのバンナー周辺までペダルを踏み、みんなでサイクリングして楽しんだりした。

僕は自転車がなかったので、いつも建国君の家で自転車を借りて一緒に仲間に入れてもらい、楽しんでいた。しかし僕もみんなと同じように26インチ用の綺麗なスポーツタイプの自転車が欲しくなった。

イギリス製のギア付き自転車は高かったが、格好がよかった。僕は欲しいと思うと、無性にほしくなり、或る日、思い切つて母に「スポーツタイプの自転車を買って頂戴」と頼んだ。だが、「そんな高い物、お父さんから一銭の送金もないのに、食っていくのに精一杯なんだから駄目」と、即座に撥ね付けられてしまった。

しかし、自転車を欲しがると僕の顔を見ていた田島のおじさんが、母に「正夫君に自転車を買ってあげなさい」と言つて、1000バツ渡した。が、母は「自転車は危ないから駄目」と言つてそのお金を、スリヴォン通りの角にあった1936（昭和11）年7月に開設した横浜正金銀行に預金してしまった。（終戦後、1945年9月17日に凍結され一銭も戻つてこなかった）。

僕は「それは僕がおじさんから貰つたお金なんだから自転車買って」と、必死になつてわめき散

らした。やっと自転車が……と、目を輝かせた僕の夢は悲しいかな、蛇のような冷たい目で僕を睨みつけた母に心を踏み躪られ、自転車は涙とともに消え去ってしまった。あーあ、なんと切ない気持ち。美しい道端の草花を、樹々を、流れ行く雲を、涙が一杯溜まった瞳でぼんやりと眺めた。

## ■ドーンムアン空軍基地

きちんと整頓されたドーンムアン空軍基地には、阿部部隊や古川部隊などの空軍部隊、それに飛行機の整備部隊が駐屯していた。僕はこの厳重に警戒された厳しい基地に、学校からの慰問および、見学の他にも、父のご利益により、個人的な招待を受けて5、6回訪れている。

何故そのようなことになったのかは、定かでない。それは1943（昭和18）年8月15日に遡らなければならぬ。この日、学校からの慰問で基地に訪れた僕たちは、まず大きな格納庫に一杯詰め掛けた将兵の目の前で、日ごろからもう慣れっこになっていた様々な演技を披露した。

プログラムが進行し、やがて保田多美子ちゃん、宮脇虹華ちゃん、藤島康子ちゃん、それに日高百合江ちゃん4人の名コンビによる「かわいい魚屋さん」の踊りとなった。レコードから流れる

「かわいい かわいい 魚屋さん てんびんかついで どっこいしょ

今日はよいよい お天気で こちらのお家じゃ いかがでしょ

今日はそうね よかったわ……」

の曲にテンポを合わせ、捻り鉢巻にはつぴ姿の4人がステージへ踊りだした瞬間だった。感激した将兵のウワーツと唸るような声と同時に、一斉にパチパチパチツツと嵐のような拍手が鳴り出した。拍手はなかなか鳴り止まず、音楽もなにも聞こえなくなってしまった。舞台慣れしたさすがの4人も、びっくりして急にストップしてしまい、また初めからやり直す始末だった。

続いて僕の出番、「若葉」の独唱だった。「鮮やかな緑よ 明るい緑よ 鳥居を包み わらやを隠し かおるかおる 若葉がかおる。さわやかな緑よ……」と、二番までを静かに歌った。

慰問が終わってから見習い兼見学があった。隼戦闘機や重爆撃機内を見学し、風向きの見方、緯度の計算の仕方、離着陸の操縦の仕方、爆弾の落とし方、機銃掃射の仕方などにつき、細々した説明を受けた。

僕はうんざりしたが、説明も終わり、一休みしていたときだった。何処からきたのか、一人の将校が金井先生となにか話を交わしていた。時々チラツツと僕の顔を横目で見ていたが、やがて僕の所にツカツカとやってきた。

優しい目をしたその将校が、僕に「さつき若葉を歌ってましたね。マラツカにいる瀬戸さんの息子ですか」と問われた。僕が「はい、そうです」と答えると、「お父さんには随分お世話になりました」と、嬉しそうな顔で僕を見つめていた。僕はこの人はお父さんの友人なんだな、と思っただけで、別に気にも留めずそのまま別れてしまった。

しかし、それから数ヶ月経った或る日、空軍基地から夕食の招待を受けた。基地から迎えにきた軍用車に乗り、拡張されたドーンムアン基地の奥にあった将校専用の宿舎に案内された。



中から黒幕を張り巡らせた広い座敷に案内された。座敷にはご馳走が一杯並び、その周りに十数人の将校が胡坐をかき、僕たちがくるのを待っていた。僕と母は真ん中の席に勧められ、「マレー攻略のときに世話になった瀬戸さんの家族です」と紹介された。

僕には自分の父がどれだけの権限を持っていたのか知らないし、どんなに偉かったのかも知らない。僕が知っていることは、父はソンクラーにいた頃から日本軍の情報関係の特務機関の仕事をしていたこと。特別扱いの軍属であったこと。シンガポール陥落後、いつ頃からマラッカの警察署長をしていたのかも知らないし、のちに、どうしてマラッカ病院の院長になったのかも知らない。

従って、僕はこの部隊の上層部の人たちが父とどのような関係を持っていたのかは知る由もない。それになんの事情も聞いていなかっただけに、どうしてこうなったのかすらも皆目不明見当がつかない謎のような話である。

あの慰問の日に、僕が格納庫のただっ広いステージで「若葉」を独唱したばかりに、このような結果なってしまったのだが、謎に包まれた縁あつてか、僕は終戦の日までに、この同じ席に5回ほど招かれた。

食事中に連合軍の空襲に見舞われたこともあった。だが、やけくそになつていた命しらずの軍人は、黒幕を張り巡らせた室内で明かりを光々と点し、徳利に入つた日本酒を酌み交わしていた。みんな故郷の家族のことでも思い出しているのか、だみ声を張り上げて寂しげに民謡を歌い、氣勢を上げていた。

僕が最後にこのドーンムアン空軍基地に訪れたのは、米軍が硫黄島に上陸し、まだ激戦を交えていた1945（昭和20）年3月初め頃だった。基地には爆撃機の姿はほとんどなく格納庫には故障した数機の戦闘機があるのみだった。

しかもその機械の整備をしていた若い兵士が、なんと、僕よりもせいぜい二つか、三つぐらい年上かなと、思われる、あどけない顔をした少年兵だった。その、20人ぐらいの少年兵が、かいがいしく飛行機の整備をしている姿を見た僕は、子供心に、あーあ、日本はもう駄目だ、と、暗い気持ちになつてしまった。

## ■朝の雑巾掛け

僕は毎朝早朝に起きてご飯を炊き、朝7時頃にはスリヴォンの家から静かなスリヴォン通りをスタスタ歩き、学校に登校していた。学校の教員室に、上の方に穴が開けてある、みんなの名札があった。学校に登校した順に上から自分の名札を釘に引っ掛ける仕組みになっていた。

それは、その日にきた順番と、欠席した人が、一目でわかるようにアレンジされていた。いつも一番早いのは、僕か、ミッキー2人だけだった。毎朝顔を合わせるたびに、笑顔で「おはよー、早いねー」と、挨拶を交わし、箒を手にして、細長い廊下の拭き掃除に掛かるのだった。

まず真っ先に、お弁当を階下にある弁当棚に置き、二階の教室に自分の持ち物をしまい、教室の窓を開け、それから、二階と下の廊下を掃わき、バケツに水を汲んできて、長い廊下を拭いていた。

これは別に当番があつたわけでも、強制されたわけでもなく、自然とそうなつてしまった。とにかく先に登校した人から順に、みんなワイワイ言いながら長い廊下を駆け巡り、楽しく雑巾がけをやっていた。

学校には週番制度があつた。上級生が担当していたが、男と女で組を作り、2人で一週間受け持つことになつていた。週番は、胸に赤い小さなリボンをつけていた。僕はいつも1年先輩だった小谷和子さんと組んでいた。

週番の役割は、学校全体を見回り、みんなの面倒をみたり、図書室の本をきちんと整頓したりした。毎日分厚い日誌帳に、その日の出来事や、思いついたこととか、感想文などを書き込み、それを担任の先生に渡していた。

## ■物資不足に悩む

第二次大戦争の影響で、海外の輸出入品がストップし、今までバンコクの市場で販売されていた様々な商品が、商店街から徐々に姿を消してしまい、品不足となつた。特に消耗品となるガソリンは普通には手に入らなくなつた。バスなどは屋根に炭袋を一杯積み、炭を焚いて走っていた。

日用品もそうであつたが、化粧品ひとつにしても、おしろいや石鹸もなかつた。石鹸は急遽灰で加工したタイ製の石鹼が出回つた。だが全然泡が立たない使い物にならない代物だつた。

謄写版で刷る書き込み原紙も手に入らなくなつた。僕たちが学校で使う帳面や鉛筆なども入手しにくくなつた。大事な教科書も、連合軍に制海空権を握られていたために、日本からの輸送は困難を極め、皆無に近かつた。

鉛筆は、使い終わったのを担任の先生の所へ持っていけば、学校で長い新しい鉛筆と取り替えてくれるようになった。僕たちは鉛筆と帳面は大事にして使つた。特に鉛筆を削るときは、鉛筆の芯が折れないように気を配り、鉛筆の芯がトツキン、トツキンになるまで削つた。

使っている鉛筆がだんだん短くなつてくると、鉛筆の軸の上に長いキヤップをくつつけて長くして使つた。僕たちは一度みんなで、「誰の鉛筆が一番短くなるまで使つたか」と、短い長さ比べをしたことがある。一番短かつた鉛筆は、名前は忘れたが、女の子のもので、僅か1センチしかなかつた。

授業で使う印刷物や、宿題用に刷つて配る用紙も、謄写版用の原紙が品切れになつてしまつたために、みんなに配れなくなつた。初めの頃は先生が黒板に白墨で書いたのを、帳面に写し取つてやっていたが、それでは手間取り、時間のロスがでるばかりだつた。

そこで、町田先生の発案で、寒天から複写することになった。僕たち上級生は、先生と一緒に蒸し風呂みたいに熱いむつとする日本人会の地下室で、大粒の汗をタラタラ流しながら、寒天を溶かした。

溶かした寒天を矩形の容器に入れて冷やし、用紙よりも少し大きめの形に固め、複写する文字を寒天に刷り込み、紙を一枚ずつ寒天の上に敷いて、寒天の塊が割れないように気をくばり、ローラーで軽く撫でて複写作業をした。

1943（昭和18）年の中頃からは、教科書も不足がちになった。日本から取り寄せる方法もなく、途方に暮れ、先生方の頭痛の種となった。だが当時、中原報の社長をしていた頭のよく切れる藤島健一さんが「それは可哀想だ」と心配して、製本も全部ひっくりかえりて実費で印刷してください。藤島社長の配慮のおかげで、僕たちは難なく勉強が続行できて助かったのである。

## ■プール開き

「学校にプールを」と、いう声が広まり、父兄が努力した甲斐があって、1943（昭和18）年の2月初めに校門を入った右側に、25メートル用のプールの着工が始まった。僕たちは「もうすぐ毎日泳げるぞー」と、楽しみにしながら校舎の二階から工事現場を眺め、早く泳げる日を夢見ていた。

丁度その頃、マッカサンの日本大使館でもプール工事が始まっていた。そのプール開きが5月25日に行われ、在留邦人も集まり、水泳大も兼ねているようなイベントが開催された。僕たちも競泳に出場したが、僕はまだクロールしか泳げなかったもので、クロールで挑戦した。だけど、残念ながらビリだった。

待望の待ちに待った学校のプールもおよそ4ヶ月ぶりにプールが完成し、6月1日にプール開きがあった。僕たちは大喜びで競泳に挑戦した。プール際に父兄の「○○ちゃん頑張れーっ、頑張れー」と叫ぶ応援の声に励まされて、僕たちも水飛沫を上げて全速力で泳いだ。僕は今度もドンケツだった。みんなに「正夫ちゃんはお尻から数えて一番なんだなー」と、ゲラゲラ笑われて「ウーン」と、俯いてしまった。

学校にプールができてからは、町田先生の指導の下に、いろんな泳法を徐々に習い、ほとんど毎日泳いでいた。学校では、およそ2ヶ月に一回のわりで各泳法のフォームの進級テストがあったが、非常に厳しいものだった。手足が完全に伸びきっていなかったり、手先がほんのちよつとでも曲がっていたりするだけでも失格だった。

僕は水泳が大好きになり、勉強はそつちのけで、休みの日でも学校に顔をだして、町田先生に「先生、泳がせてください」と、ねだってはプールに飛び込み、きちがいみたいに泳ぎまくっていた。その頃、渡辺幸治君が町田先生の所に世話になっていたので、僕は幸治君、芙美代さん、それにビィちゃん（宮脇虹華）なども誘って、みんなと一緒に泳いでいた。

## ■水泳特訓

水泳教室は町田先生の指導の下に特訓が始まり、日増しに厳しくなった。僕が一番苛められたが、歯を食いしばって頑張った。僕は各泳法の試験にも全部パスし、最高の黒鉢巻を取得した。日本水泳連盟から、初段、一級、二級の、証明書も授けてもらい、町田先生の助手になった。

泳法のテストをパスしてからは、持久力と速く泳ぐ特訓が待ち構えていた。僕は或る日、町田先生の監視の下に、朝8時から夕方5時まで、平泳ぎで、飲まず食わずで1日泳がされたことがあ

った。

先生は椅子に座り、無言でじっと僕の泳ぎ方を見つめていた。僕も水飛沫を上げないように黙々と泳いだ。僕はちゃんと泳ぎきった。だが、フラフラで歩けなかった。

先生は僕の体をタオルでくるみ、抱っこして「正夫、よく頑張った」と、褒めてくださった。僕自身も自分が最後まで泳げたので、自信がつき嬉しかった。

競泳もクロールで50メートルを、息継ぎなしでスピードをだして泳ぐ特訓があった。僕はそれにも挑戦し、自分でも練習を重ねて遂にやりとげられるようになった。

僕はハードな練習にも平気で耐えていた。だが、自分の家で栄養分になるものをほとんど取っていないかったので、栄養失調になり、炎天下に暫く立っているだけで、貧血を起こしてバターンと気絶するようになった。水泳も全速力で泳ぐと、時々気が遠くなり、気がついたときは医務室のベッドに寝かされていたりした。

町田先生が「正夫、どうしたんだ」と、心配顔で聞くので、話したくない自分の家庭の事情を説明すると、哀れんだ眼差しで僕の瞳を見つめていた。そのことがあってからは、時々、町田先生が「正夫、正夫」と言っていて、我が家に見舞いにくるようになった。

## ■学校の水泳大会

学校のプールはカルキが欠乏しだし、少しずつ苔が生えてくるようになった。ほったらかしておくと、プール全体が苔だらけになってしまうので、時々水を抜いてプール掃除をした。

プール掃除をする日は、上級生全員がたわしで、プールの底をゴシゴシこするのだが、苔が一杯くっついていてツルツルしていた。よく滑るので僕たちは「これは面白い」と歓声をあげてスケートごっこをして遊んだりした。

1943（昭和18）年11月23日は学校で水泳大会がある日だった。僕たちは水泳大会を目指して猛訓練を重ねた。僕は町田先生に「水泳の競技は飛び込みとターンで勝負が決まるのだから」と、叱咤され、歯を食いしばってハードな練習を繰り返した。

時々、練習の合い間に息抜きとして、みんなで水中で鬼ごっこをしたり、赤と白組みに別れて、鉢巻取ごっこをしたりして愉快地遊んだ。

いよいよ待ちに待った水泳大会の日となった。当日、プールの周りには立派な客席が用意され、中村義部隊長をはじめ、大使館の内山総領事も参観にこられた。今回は記録も正式に取る公式な大会で、盛大な水泳大会だった。

僕たちは日ごろの練習成果を発揮すべく、胸をわくわくさせていた。僕はクロールが得意だったので、クロール一本で頑張ることにした。今日のプログラムには、児童の競泳の他に、特別に親子リレーも組み込まれていた。それに、1、2、3等まで賞品が出るので、みんな張り切っていた。

よく晴れた青空の炎天下で、開会式が始まった。まず初めに、町田先生がプールで弓を射ることになっていた。僕が先生の助手役を勤め、的をプールの真ん中に浮かべた。先生が両手でぐっと弓

を引きのを狙って矢を放った。矢は的を外れ擦れ擦れに飛んで、ボシヤツと水中に突っ込んだ。続いて、先生と僕のコンビで木剣を持ち、水中に潜ったりして、切り合いの真似事をして水中格闘を演じた。学校で町田先生から水中武道を習っていたのは、僕だけだった。

待望の水泳競技の幕が切って落とされた。プログラムの順序は低年児童からで、みんな25メートル泳がなければならなかった。やがて僕の出番がやってきた。「よいドン」の合図と同時に、僕は足にスプリングをかけてザブーンと飛び込み、日ごろ練習していた息継ぎなしクロールで、一気に泳いだ。僕はみんなを大幅に抜き一位だった。

いつもビリだった僕はとうとうみんなに勝ったのだ。僕は嬉しくてそのまま町田先生の所へすっ飛んでいった。いつもゴツーン、ゴツーンと拳骨の雨を降らせる町田先生が顔を綻ばせて「正夫よくやった、タイムも凄くよかった」と、珍しく頭を撫でてくださった。

僕は中村明人義部隊長から「瀬戸正夫君か、よく頑張った」と褒められ、ずっしりした一等賞の褒美を頂戴した。僕は水泳大会があったその日から自信をつけ、学校のチャンピオンになった。

大会のときに取った僕の記録は、町田先生の配慮によって日本の水泳連盟に送られていた。ところが、僕がだした記録は当時の日本の小学部の新記録だった。その記事が日本の新聞に掲載されていたとかで、町田先生が非常に喜び「正夫、日本の新聞にバンコクで正夫が小学部の新記録をだした、という、記事が載っていたそうだよ」と、嬉しそうに教えてくださった。先生は僕に「戦争がなければ、正夫はオリンピックにでられるんだけど、おしいなーあ」と、残念がっていた。

## ■英霊参拝

日本人学校の生徒が英霊法案所に参拝に行くようになったのは、開戦当初南方作戦で勝ち誇っていた日本軍が1942（昭和17）年6月、太平洋上のミッドウェイ攻略参戦に失敗し、大敗した敗戦の兆しが訪れ始めた昭和17年の8月頃からだだった。

英霊奉安所はペツブリー（当時ニューペツブリー通りはなかった）通りにあつたタイの学校に安置されていた。だが、1943（昭和18）年の初め頃からプラトゥムワン（現チュラー大学のサヤム寄りの近くにあつた）のウテーンタワーイ職業学校に移された。

英霊奉安所へ行く日は、全校生で行くことになっていた。前列から背の低い順に二列に並び、両側にクローン（運河）が流れている涼しい木陰の並木道を、ペツブリー通りの奉安所まで歩いた。チュラー大学付近には舟はあまりなかったが、ペツブリーのクローンには、無数の小舟が浮かんでいた。果物を積んで商売にきている「ポンラマイイ・チャー」と、呼びかける太ったおばさんの舟や、「カノム・チャー」と、声を張り上げて叫ぶ、お菓子売りの舟、「プーップー」と、合図を送り、コーヒーを売っている華僑のおっさんの舟などが、のどかに行き来していた。

英霊奉安所へお参りに行く日には、先生に引率され、チュラー大学がある並木に覆われたパヤータイ通りに差し掛かった時点から、軍歌「大東亜戦争陸軍の歌」を、歌いながら行進した。

僕たちは胸を張り、足並みを揃え、行進しながら前列と後列二組に分かれ、二部合唱でおっかけ

ついで軍歌を歌った。前列が「今こそ撃てと宣戦の……」と歌うと、後列が直ぐ「今こそ撃てと宣戦の……」と追い、前列はそのまま「……みことに勇むつわものが……」と歌い、一番から六番までを、奉安所に着くまで、何回も繰り返して歌った。

- 1 今こそ撃てと 宣戦の みことに勇む つわものが  
火蓋をきって 押し渡る 時 十二月 その八日
- 2 マレーに続く ルソン島 快速部隊の 進撃に  
鉄より堅き 香港も わが肉弾に 砕けたり
- 3 春先にマニラ 陥して 更にボルネオも  
旋風の如き 勢いになびくジャングル 椰子の浜
- 4 黒いスコール 火の嵐 戦車も唸る赤道下  
路なき路を ひた押しに 炎と進む 鉄かぶと
- 5 六十四日の 追撃に 白梅かおる 紀元節  
シンガポールを 撃ち陥とし 大建設の 日のみ旗
- 6 南十字星 空高く 桜とまごう 落下傘  
若木の花の 精鋭が 手柄はかおれ パレンバン

英霊奉安所の靈魂を並べてある祭壇には、お国のために勇敢に戦い、戦場で戦死した哀れな兵士の亡骸が収めてある四角い小さな白木の箱がずらりと並んでいた。僕たちは焼香を焚き、恭しく頭を深く垂れ、お国の為に戦った尊い命を犠牲にした人々に冥福を祈った。

僕はこのシーンとした英霊奉安所に何回お参りに行ったか覚えていない。行きたびに白木の箱の数がぐっと増え、ますます増え続けるばかりだった。特にビルマ戦線の激戦が悪化を辿り始めた1943（昭和18）年頃からは祭壇の高さもぐっと高くなり、こんなに大勢の人が戦死しているのか、と思うと、何故かジーンとするものを感じ、泣けてくるのだった。赤紙一枚で召集され、荒野に晒されて戦死した兵士はどんな悲惨な思いをして息を引き取ったのであろうか。実に哀れであり、戦争の悲惨さが身に染みて悲しい。

## ■屑鉄拾い

日本では鉄が不足し、ゴーンゴーンと鳴らす大小様々なお寺の鐘まで外され、武器や弾薬その他の製造にあてられていた。その頃タイでも鉄が手に入らなくなっていた。僕たちの学校も、軍部からの命令で鉄類を集めることになった。

曲がった釘や小さな針、針金、錆付いた鉄のかけら、空き缶、古い電線、兎に角、鉄でも銅でも真鍮でもなんでもよかった。僕は休み時間を利用して、まず学校の敷地内から探しだし、いろんな物を集めた。

家へ帰ってからは、袋をぶら下げて隣近所を歩きまわり、屑拾いよろしく、そこらじゅうをくまなく探し回り、屑鉄を拾い集めた。

日本はアメリカの反撃による猛攻に遭い、各地で日本軍の負け戦が始まった。日本の輸送船は連合軍の潜水艦、或いは空軍機により、まるで木の葉を沈めるようにどんどん撃沈されていった。戦場によっては戦地に送り込まれた外地部隊は、島流しにされた状態となり、食料や弾薬も欠乏し惨憺たる目に遭っていた。本土からの補給ルート絶たれた日本軍は現地で自活持久に頼るしかなかった。

タイの防備にあたっていた第18方面軍は食糧の心配もなく安泰だった。但し武器弾薬の補給はほとんどなかった。日本人学校の前には敷地の広い一軒屋が数軒並んでいた。丁度学校の真ん前に外部からちよつと見ただけではなにをしているのか分からない砲弾を作っている工場があった。

屋敷の裏にある細長い仮小屋で、私服の兵士がせつせと迫撃砲の弾を作っていた。砲弾の筒の中に真剣な目つきで火薬を入れる作業中の職人もいた。この砲弾工場はいつ頃から製造を開始したのか全然気がつかなかった。

上級生だけが其処を見学したが、軍隊口調で説明する管理人から「弾丸はこうして造るのだ」と、説明していた。学校ではこの他にもいろんな所へ見学に行っている。学校で見学に行った所と言えば、タノントックの藤原鉄工所、トロークチャンのガラス工場、バンカッピの靴下工場、榎本さんの染工場、タングアンスワイの石畑さんの味噌工場、クローン・トリーのなめし工場などであった。

この他にも、数ヶ所で軍需品の生産を始めていた。藤原源三郎さんが経営していた藤原鉄工所では手榴弾や他の武器を造り、亀山衣服店では軍服を、北庄司会社の工場では軍靴を、日高洋行では飯盒、ベルト、軍靴を造って軍部に収めていた。

それと、船舶関係では、日泰海運がチャウプラー川沿いで3ヶ所、三井物産が北のバーンカブーで建造し、三菱商事がマレー半島のアロスターで海南会社が経営していた造船所を買い取り、陸軍監視の下に軍用木造船を建造していた。

20トン級の上陸用船艇と、150トンから170トン級の木造船を建造し、1944（昭和19）年頃には150トン級の日吉丸、大泰丸、日泰丸を出航させている。

問題は小型の上陸用船艇の焼玉エンジンは現地で造れたが、大型のディゼルエンジンは造れなかったために、終戦時に、エンジンのない100隻余りのチーク材で造った170トン級の木造船がチャウプラー川に浮かんでいたのである。

## ■軍事教練

太平洋上および、ビルマ方面の戦況が悪化しはじめたお陰で、1943（昭和18）年の末頃からはバンコクの上陸も一段と激しくなった。インド方面の基地を飛び発った連合軍の爆撃機が昼夜を問わず編隊を組んで空爆にくるようになった。僕たちの学校は毎週定められた時間割にあたる授業の他に、軍事教練や慰問などが前にもまして頻繁に割り込まれるようになった。

軍事教練なども日本軍が破竹の勢いで戦い、戦果を挙げ、勝った、勝った、万歳、万歳と狂気のように叫び、騒いでいた頃はわりに楽でよかった。しかし、物資に物をいわせたアメリカの反撃が、

予想外に速く猛攻を極めたために、日本の雲行きが悪化しだし、1943年（昭和18）年の末頃から次第と厳しくなってきた。

初めの頃は学校でろくぼくによじ登ったり、逆立ちの姿勢で上まであがったり、ろく木の上を歩いて、上から下まで飛び降りたり、運動場に砂を撒いて梯子の上から飛び降りる練習や細長い棒を持って「とーつーげーきー」と、声を絞り上げて叫び、突撃したり、火薬のない本物の手榴弾を、伏せの姿勢で安全弁を外して「1、2、3、4、5」と、数えてからトーチカの細長い穴目掛けて投げ込む練習などをやられた。

そうかと思うと、大きな真鍮のまるいビームに足を縛り付け、両手でビームの端を掴まえて、頭を上下にしながら体の反動でぐるぐる回転し、止めてから真っ直ぐ走る練習をした。また、リュックサックに20キロほどの石ころを詰め込み、それを背負い、フーフー喘ぎながらスピードをだして防空壕の上へ駆け上がったたり、転がるようにして降りたりする戦争の真似事もさせられた。

軍事教練がハードとなり、本格化され始めたのは、太平洋上のアリューシャン列島で、アメリカの機動部隊の猛攻を受けたアツツ島の守備隊が玉砕（1943年5月29日）した昭和18年の中頃からであった。日曜日になると、日本人学校の全校生は、当時ルムピニー公園に駐屯していた外池部隊へ赴き、教官の指導の下に、女子は挺身隊と称し、負傷者の傷の手当て、包帯の巻き方、担架の運び方など、看護婦としての実施訓練を受けた。

男子は、まず、通信関係のモールス信号の記号を暗記して、ツーツートン、トンと打つ無電の送信、受信、小旗でパタパタと手を振りながら、イロハニホヘトの合図を送る手旗信号、ライトでパチパチ点けたり消したりする光で送信する信号などの実習が課せられた。

続いて、「一 軍人は忠節を尽くすを本分とすべし」と、軍人勅諭および、戦陣訓などを読まされ、暗記させられた。小銃や機関銃の焦点の合わせ方や、小銃を立ったり、しゃがんだり、伏せたりして撃つ撃ち方や、銃の手入れの仕方などもやらされた。機関銃の持ち運び方や、解体して、また元通りに速く組み立てる練習までやらされた。

授業中に空襲警報がウーウーと鳴りだすと、みんな教室から飛び出して防空壕に飛び込んだ。だが僕はよく見張り役に回された。校舎の二階のベランダに立って双眼鏡で敵機の飛来する方向を確かめて、「敵機○○機来襲、今学校の真上を通過した」などと、大声で怒鳴り、爆弾が降下される頃に素早く防空壕に駆け込んでいた。

敵と戦うためにと、女子は薙刀の練習を強いられ、学校で女の先生から薙刀の指導を受けていた。僕は校舎の裏で、町田先生から弓術を施された。弓をぐっと引き絞っては矢を射ち、指先の皮が剥けるほど練習を重ねた。弓は練習の成果があつて矢が的に命中するようになったので、僕は弓と矢さえあれば敵を殺せるぞと、自信を持つようになった。僕たちは常に「いざとなったら、竹やりで突っ込み、一人でも多くの敵を殺せ」と、頭から叩き込まれていたし、その教訓を重んじて、竹やりで刺し殺してやるぞと、意気込んでいた。

1944（昭和19）年6月26日、男子は外池部隊で1日入営があつた。すべて軍隊組織に従



った実にハードな軍事教練を味わった。簡単な復唱の仕方なども大きな声で一言も間違えないように、はつきりと、てきぱきした口調で言わないと、何回でもやり直しさせられ、最後には「この阿呆の能無しめっ」と叱咤され、ビシッと、ビンタを喰らい「痛いか」と聞かれ、「はい、痛いです」と答えると、またビンタが飛んでくるので「痛くありません」と、答えなければならなかった。ゲートルの巻き方や、飛んでくる弾の中を身をかがめてジグザグに走る走り方や、走っていていきなりさっと身を伏せる伏せ方。負けた者が残る厳しい銃剣術の試合などが披露され、「戦争というもの、びくびくぼやぼやしていたら、直ぐ殺されてしまうのだ。だから如何にして相手を先に殺すかである。わかったか」と、気合をかけられ、「はい、わかりました」と、声を張り上げて答えていた。

竹に藁を巻き、軍刀を引っ提げた将校が「人間の首はこうやって切るのだ」と言って、軍刀を抜き、スパツと首を刎ねるしぐさを実演して見せた。「人間の首を切るときは、首の皮が少し残るぐらいに切るのが上手な切り方なのだ」と説明を加えた。

1日入隊は僕にとって初めて経験した日本軍の軍隊式特訓であった。だが、たった1日でふらふらになってしまい、夜の消灯ラッパ「新兵さんはかわいやねー、また寝て泣くのかねー」と、物悲しく響いてくるラッパの音を夢うつつに聞きながら、ぐったりした体を休めた。

これが僕が13歳のときに体験した「先に相手を殺すか、殺されるか」という、殺人への教訓、軍国主義的な大和魂精神だった。その時点で僕は既に実に敏感な殺人鬼になっていた。「大人2人や3人がなんだ、皆殺しにしてやる、火の中、弾の中、体当たり、なんでもこい」と、怖い物しらすのならず者になっていた。

1943（昭和18）年の初め頃からだだったと思うが、僕たち男子は白いヘルメット帽から、つばの付いた戦闘帽を被るようになった。戦闘帽を被ると、不思議に僕も一人前の兵隊になったような気分になり、「僕だって誰にも負けない日本の軍人なんだぞ」と、胸を張り、威張ってかっ歩するようになった。道を歩いていて兵隊さんと擦れ違ったりするときは、威勢よく「敬礼っ」と叫び、右手を素早くさっと上げて敬礼していたが、得意になっていた。

### ■祭部隊の兵隊さん

僕の家我真ん前にあったドーム型をしたイギリス図書館に、いつ頃からだったのか定かでないが、気がついたときは、祭部隊の兵隊が駐屯していた。部隊に出入りする門の入り口に小さな掘っ立て小屋があった。その小屋にはいつも38銃を持った兵隊さんが1時間交代で立っていた。守備に立っていた兵隊さんは、ただ突っ立っているだけで、あくびをしたりして退屈そうだった。僕は兵隊さんと顔を合わせるたびに「兵隊さん、今日は」と、笑顔で挨拶を交わしていた。

僕は別に頼まれたわけでもないのだが、時々兵隊さんの買い物やらタイ人との間に入って簡単な通訳をしてあげたりするようになった。そのお陰でいつの間にかみんなと親しくなってしまう、兵隊さんがいる部屋へも自由に出入りしていた。

部屋と言っても、大部屋でベッドがずらりと並び、細い紐で吊った軍隊用の草色の蚊帳がぶら下がっているだけのお粗末な部屋だった。形ばかりの各々の私物は枕元に置いてあった。

ふんどしひとつでベッドにゴロンとひっくり返っている人や、上半身裸で汗を流しながら将棋をしている人たちがいて、みんな退屈そうにして暑さを凌いでいた。

僕は部屋へ訪れるたびに、兵隊さんの持てあました元氣のない同じ仕草を見ていたのだが、何故だか寂びそうにしている姿を見ると、哀れな気持ちに駆られた。時々ハーモニカを持って兵隊さんの部屋へ行き、ベッドの端っこにちよこんと座り、学校で習ってきた唱歌や軍歌の曲を、プーピープーピー吹き鳴らしていた。みんなは僕の下手糞なハーモニカのメロディーを、押し黙って聴いていたが僕にできることはこれしかなかった。

不思議なことに、僕は此処でもみんなのアイドルにされてしまった。僕が2、3日顔を出さないと「正夫君、何処へ行っていたんだ、何故遊びにこなかったんだ」と言われ、みんなから「正夫、正夫」と呼ばれて、大事にされた。

特に、二十歳ぐらいの良い家庭の出身らしいお坊っちま育ち、と言った感じの、実に朗らかな新兵さんと気が合い、一番仲良くなった。その新兵さんは言葉遣いも非常に優しく、僕を自分の弟みたいに可愛がってくれた。自分の両親の話や、日本から出征するときに結婚したお嫁さんのことなども話してくれた。

だがやがて、この祭り部隊の親切にもらった兵隊さんたちともお別れしなければならぬ日がやってきた。部屋の中は部隊が移動する一週間ほど前から活気づき、みんな元気に鼻歌を歌いながら出発準備に忙殺されていた。

準備も整い一段落してからであった。僕がまた元の雰囲気に戻った静かな部屋へ姿を現すと、「正夫君、正夫君」と、あっちこっちのベッドから声が掛かった。僕が「はい」と、元氣よく返事をすると、「ちよっとおいで」と、手招きされた。

その兵隊さんがいるベッドへゆくと、「正夫君、これは日本を出るときに親から貰ったお守りだけど：弾が当たるときは当たるものだし、死ぬときは死ぬんだから正夫君にあげるよ」と言って、小さなお守りを頂戴した。僕はこうしてみんなからお守りやら、火薬を抜いた銃弾の弾や、軍服姿で写っている写真など、様々な物を、お別れの形見として貰った。

僕の大好きな新兵さんも、真面目な顔で「正夫君、いよいよお別れだなー、もう二度と会えないかもしれないけど、正夫君元氣で頑張れよ」と言って、まっさらな白い生地に赤い糸で丸い球形に縫い付けてある千人針の腹巻と、金比羅さんのお守りを僕に渡し、「僕はこれから戦場へ行くんだ。どうせ助からないと思うから、この千人針とお守りを正夫君にあげるよ。この千人針を見て、時々僕のことを思い出して頂戴ね」と呟き、涙で潤んだ眼差しで僕の手をぎゅっと握りしめた。

僕はか細い声で、「兵隊さん、死じゃだめだ、元氣で帰ってきてね」と言ったが、無性に悲しくなつてシクシク泣き出してしまった。

僕は兵隊さんから貰ったじんわりと身に染みる形見の品を、みんなの真心を、泣き濡れた胸に抱

きしめ、涙で霞んだ瞳でみんなに別れを告げ、首をうなだれ、しんとした部屋をあとにした。

次の日、武器を手にし、武装した祭部隊の兵隊さんは、「元氣よくトラックに飛び乗り、「さようなら、さようなら」と、手を振り、元氣よく戦場へと去って行った。もう二度と会えないかもしれない祭部隊の優しい兵隊さん。何処へ行くのか場所は教えてくれなかった。だが、あとからわかったのだが、あーあ、なんと可哀想に、日本軍は補給なしで、敵の強力な部隊と激突し、散々な目に遭い、大敗したあの悲惨な死地、ビルマ戦線からインドのインパール作戦へと向かったのだった。

## ■死の泰緬連結鉄道

1941年12月8日未明、日本軍の精銳が南タイに上陸し、激戦を交えて上陸した部隊には、1938年千葉で編成された鉄道第5連隊も同時に上陸し、ソンクラーでは、駅に停車していた汽車を占領し、将兵を満載してハーツヤイに向かって突進していた。

鉄道隊は1941年12月20日、日本軍はタイの国鉄(SRT)と、軍の鉄道使用協定を結び、鉄道隊の本部をバンコクのサナムキラ(国立競技場)に設置し、路線に関し、次のように配備された。

東路線、北路線、南路線、特別軍用列車及びビルマの新鉄道建設

第7鉄道隊は東路線

第11鉄道隊は南路線

第9鉄道隊は泰緬連結鉄道建設

第5鉄道隊は泰緬連結鉄道建設

(タイのノンプラドゥックからビルマのタンビサヤまで415キロ)

東路線 バンコク：サワイドンケーウ

北路線 バンコク：ウタラディット：バーンダーラー：サワンカローク

南路線 バンコク：バーンポーン、バーンポーン：ハーツヤイ

ハーツヤイ：ソンクラー、ハーツヤイ：スンガイコロック

ハーツヤイ：パダンベッサール

1942年3月13日、日本軍はタイ側と死の鉄道建設交渉を開始し、同年9月16日にピブーン首相と、もりや少将(タイの資料ではつきりしない)と調印し、死の鉄道建設が開始されるに至った。

日本軍はラーチャブリー県バーンポーン郡のワツ・ドントウームに大きなキャンプを造り、準備を整え、1942年7月26日、シンガポールから日本の技術者が先着し、誰も想像していなかった悲惨な死の強制鉄道工事が始まった。

1942年10月13日に、第一便でイギリス軍の捕虜600人がシンガポールから貨物列車でバーンポーンに到着し、ワツ・ドントウームキャンプに収容された。その後順次到着し、10月15日の時点で3075人になっていた。

1942年10月13日から1943年11月1日までに3万7450人の捕虜がドントウムキャンプに到着し、収容されていた。当初判明していた捕虜は、イギリス1万8782人、オランダ5625人、オーストラリア1200人、国籍不明1万1850人、合計3万7454人だった。1942年10月13日から1943年5月1日までに、シンガポールから貨物列車で連行されて、バーンポーンに到着し、ドントウム寺のキャンプに収容された捕虜の明細も参考までに記しておく。

(ドクター・ブワンテイツプ・キャツテイサハクン氏の資料より)

1942年	日本の監視兵	国名	捕虜の数
10月13日	25	イギリス	600
10月14日	10	イギリス	650
10月15日	13	イギリス	650
10月16日	10	イギリス	700
10月17日	10	イギリス	650
10月18日	8	イギリス	400
10月19日	13	イギリス	600
10月21日	12	イギリス	675
10月25日	13	イギリス	550
10月26日	13	イギリス	650
10月27日	13	イギリス	630
10月28日	14	イギリス	400
10月29日	13	イギリス	650
10月30日	14	イギリス	650
10月31日	12	イギリス	600
11月1日	14	イギリス	650
11月2日	14	イギリス	675
11月3日	14	イギリス	600
11月4日	11	イギリス	650
11月5日	11	イギリス	650
11月6日	17	イギリス	650
11月7日	19	イギリス	620
11月8日	19	イギリス	650
11月9日	19	イギリス	600
11月10日	19	イギリス	700
12月3日	30	イギリス	1500

1943年	日本の監視兵	国名	捕虜の数
1月20日	13	オーストラリア	600
1月21日	18	オーストラリア	600
1月23日	21	イギリス	625
1月25日	25	イギリス	625
1月26日	40	イギリス	532
		ジャワとマレーから連行された苦力	100
1月27日	21	オランダ	625
1月31日	20	オランダ	625
2月2日	25	オランダ	625
2月3日	25	オランダ	625
2月7日	35	オランダ・印度	1250
2月8日	15	オランダ	625
2月9日	25	オランダ	625
3月18日～24日の7日間	25	国籍不明捕虜	3,900
4月12日	不明	マレーの苦力	750
4月19日	30	国籍不明捕虜	500
4月20日	25	国籍不明捕虜	500
4月21日	27	国籍不明捕虜	500
4月22日	30	国籍不明捕虜	600
4月23日	30	国籍不明捕虜	600
4月24日	30	国籍不明捕虜	600
4月25日	25	国籍不明捕虜	580
4月26日	30	国籍不明捕虜	600
4月27日	25	国籍不明捕虜	500
4月28日	25	国籍不明捕虜	600
4月29日	25	国籍不明捕虜	600
4月30日	25	国籍不明捕虜	500
5月1日	25	国籍不明捕虜	500

1943年9月の時点で、シンガポール（昭南島）から貨物列車、ひと貨車に30人乃至35人がギユウギユウ詰めになされ、バインポーンまで2200キロの道程を5昼夜揺られて連行された捕虜および苦力の人数は、捕虜が4万1570人、苦力（労務者）マレーのタミール人が4万900人、中国人が2万2910人となっている。この他に、日本軍の守備隊2万4764人（日本の資料では1万5000人となっている）を含めると、工事開始時にタイに動員された人数は、13万1444人となる。

1943年9月にカーンチャナブリキャンプに配備されていた捕虜と苦力の人數

アムポー（郡）	タムボン（地区、村）	捕虜	マレー人	中国人
カーンチャナブリー	バーン・ヌア	2,600	2,400	300
	バーン・タイ	500	500	300
	パークプレーク	1,200	1,800	400
	ターカーム	300	—	—
	コ・サームローン	9,000	4	35
	チャラケープアク	—	—	220
	ルム・スム	1,590	1,450	1,200
	サイヨーク	1,030	3,100	1,630
	シン	—	—	150
	タームアン	—	—	—
	ターロー	—	—	—
	ターマカー	—	—	—
	タールア	—	—	—
	バーン・ポーン	—	—	800
	ノンコップ	1,300	—	300
	パークレート	250	8,900	900
	バーン・ポーン	50	—	—
	トーンパープーム	200	300	200
	ヒンダート	700	600	200
	ターカヌン	4,700	4,800	1,950
	ピロック	1,500	1,400	500
	ノンルー	200	1,500	—
	パランペレー	9,700	10,200	—
	合計	34,820	36,954	9,085

死の鉄道は1943年10月17日に完成し、10月24日に開通し、1944年の7月1日から31日までに4795人、8月1日から28日までに1万2250人、9月1日から31日までに1万7891人、10月1日から31日までに8535人、その他、1250人の兵力とともに、大砲123門、戦車24台、弾薬および食糧などを、延べ1924回にわたりビルマのタンビサヤを往復している。

日本軍がインパール作戦を企画したのはビルマ戦線が一段落した1942（昭和17）年の7月

頃だったが、ビルマ、インドへの補給ルートが問題となったために一時中止された。

日本軍はタイに進駐した当初、ビルマ攻略のために、チャンマイからパーイを抜けて、メーホーソンソンへ行く道と、ラヘーン(現ターク)メーソートへ行く凸凹した険悪な狭い道しかなかった。しかもこの道は雨が降ると、道はグシヤグシヤになり、どうにかビルマ国境までしか行けなかった。

そこで日本軍首の脳部が企画したビルマからインドのインパール作戦へ行く補給道路として、標高1000から1500メートルあるチャンマイからパーイを抜けてメーホーソンソンで国境を越境してビルマのトングーまで約200数十キロにおよぶ道路を、人力による突貫工事で工兵隊と地元の労働力によってどうにか通れる道を完成した。軍部の補給ルートはあまり頼りにならないこの2本の赤土の悪路しかなかった。

そこで、日本軍が企図したビルマ戦線の補給ルートが、世界に名を轟かせた死の鉄道であった。タイのラーチャブリー県のノーンプラドゥックからカーンチャナブリー県のクエー川を渡り、山岳地帯の未開地のジャングルだったタイ・ビルマ国境のスリーパゴダを通過してビルマのタンビサヤへ抜ける414・9キロにおよぶ、泰緬連結鉄道と、この死の鉄道と前後して、世間にはあまり知られていない南タイのチュムポン県から、ラノーン県のラウン郡を通過して、クラビーのバーン・カウ・ファーチー(ファーチー山村)山麓のラウン川の終点を結ぶ90キロのクラ地狭横断鉄道(ロツファイ・コーコートクラ)2本の鉄道工事を早急に完成させることだった。

日本軍はタイのノーンプラドゥックとビルマのタンビサヤ両方から挟み討ち式に同時に着工するために、約1万5000人の兵力を配備し、マレー半島のレールを外し、鉄橋はジワから運び、猛獣やマラリアの蚊が密生する鬱蒼とした密林地帯の工事をする手配をした。

工事をするにも日本には最新式のブルドーザーも、電気鋸も機械もなにもなかった。日本軍が取った方針は、人の労働力、つまり人海だった。

アメリカ、イギリス、オーストラリア、オランダの連合軍捕虜およそ6万1000人がシンガポール(当時は昭南島)から狭い蒸し暑い貨車に押し込められ、身動きもあまりできない列車で、5昼夜掛かってノーンプラドゥックのキャンプまで運ばれた。

マレー人、ジャワ人、中国人、タミール人たちの労働者(当時はクリーと呼ばれた)約10万人(ビルマ人9万人、タイ人は含まぬ)も同様な苦しい思いをして、ぎゅうぎゅう詰め列車に揺られて運ばれた。但し、ビルマのタンビザヤに運ばれてきた捕虜や労働者は、ジャワや、スマトラ、シンガポールから海上輸送による船によってビルマ領内のタンビザヤへ運ばれたのである。

1942(昭和17)年6月、1938(昭和13)年4月20日に千葉で鉄道第5連隊が編成されていた。その鉄道隊の第9連隊が、タイのノーンプラドゥックから国境線となっているビルマのスリーパゴダまでの303・95キロを、そして、第5連隊鉄道隊がビルマ領のタンビザヤからスリーパゴダの国境までの101・5キロを、双方で日本軍の監視の下に悲劇の死の鉄道突貫工事が開始された。

時期的に丁度雨季に入ったカーンチャナブリーの国境地帯の密林は豪雨に直面し、工事はなかな

か捗らず予想外に難航した。

日本軍に駆りだされた連合軍の捕虜や、労働者は食糧も満足に与えられず、医療品の支給も皆無に等しかった。病身であっても叩き起こされ、連日交代で早朝から1日に16時間も強制労働を強いられ、身体は衰弱し、マラリアや、コレラ、ジフテリア、熱帯病などに冒され、栄養失調でバタバタ倒れた。

捕虜約1万2000人、労務者約10万人の犠牲者をだし、僅か1年4ヶ月で完成した泰緬連結鉄道は1943（昭和18）年10月25日、鉄道隊によって盛大な開通式が行われた。SLC56機関車もくもくと黒煙を吐き、屍のレールをギンギン軋ませて初通過した。

インパール作戦を目指して突貫工事を進めて完成した、15キロに及ぶ泰緬連結鉄道は「枕木一本に死者一人」と言われたほど、曰くつきの悲惨な地獄絵図を描いた鉄道であった。鉄道全線に6ヶ所に簡素な駅が建造され、鉄道の沿線に沿って連合軍捕虜のキャンプが点在していた。

ビルマ領土から工事が進められて設置された捕虜のキャンプはキロ数で所在地を示し、タイ側は土地の地名でキャンプの所在地を示していた。途中にあった連合軍捕虜のキャンプは、117ヶ所に点在し、線路沿いに穴を掘って埋葬した可哀想な捕虜の病死者の墓地は107ヶ所あった。特に、ニテアキュン・キャンプにいた7000人のイギリス人と、オーストラリア人の捕虜は1943年5月から12月までの短期間に突貫工事で3000人が尊い命を亡くしている。

なお、死の鉄道の路線は1970年代頃まではまだ残っていたが、1970年末頃からダム工事が始まり、1985年にワチラーロンコーンダムが完成したために、現在シーモンクライ地区からナムチョンマイの駅まで約40キロ間の鉄道が水没している。

参考までに各国の連合軍捕虜並びに労務者の人数及び死亡者数を記して置く。

労務者	人数	死亡者
マレー人	76,000	42,000
ビルマ人	90,000	40,000
ジャワ人	7,500	2,900
シンガポール人	5,200	500
計	178,700	85,400

#### 連合軍捕虜

イギリス	30,131	6,904
オランダ	17,990	2,782
オーストラリア	13,004	2,802
アメリカ	686	131
計	61,811	12,619

（オーストラリア博物館の資料より）



死の鉄道開通後、鉄道隊の高崎少将（初めに担当した責任者南方第2鉄道隊の下田宜少将が鉄道第5と9聯隊は1月下旬飛行機事故で戦死したので、高崎少将が後任した）の指示により、捕虜及び労務者を吊うための慰霊碑を建造し、1944（昭和19）3月12日午前9時30分に厳かにオーブニングセレモニーが行われた。

終戦後タイは、レール及び機材を、イギリスから賠償として150万ポンド（5000万バーツ）で買われ、月賦で返済。外国人墓地（ドンラック及びチョンカイ墓地の敷地）2ヶ所も強制されて提供。駅前の17ライ（1ライは1600平米）あるドンラック墓地に6982柱、川向この11ライあるチョンカイ墓地には1740柱の、強制労働を強いられた可哀想な英霊が静かに眠っている。

第二次大戦開始と同時に12月16日にソクラーで、父の立会いの下で死刑にされたイギリス空軍の操縦士 Captain H. C. Wright, Captain R. Gordon, Captain E. Rega 3柱の可哀想な霊もドンラック墓地で眠っている。墓地の墓に示すマークは、バラはイギリス、チューリップはオランダ、アカシアはオーストラリアを示す。

カーンチャナブリーには、クエーヤイ川、クエーノイ川、メークローン川が流れている。市内の道路には、インド通り、マラユー通り、タイワン通り、シンガポール通り、アメリカ通り、トルキー通り、イングリッシュ通りやソーイ・ウェートナム通りなどがある。だが、何故だか、日本の道路名は無い。

あるとすれば、日本軍専用の慰安所が2、3ヶ所あった。それと、クエー川沿いの日本軍のキャンプ目指して小舟で稼ぎにきていた地元の慰安婦もいた。当時、タイ人が女を抱くと、1人50サタンだった。しかし日本兵を相手にすると、1人1バーツから2バーツの収入があったので、地方から出稼ぎにきていた人も多かった。

タイでは慰安婦に関しては、個人の意志で行われてたので、強姦以外にはなんら問題はなかった。タイの場合は、日本軍と地元の県知事及び、警察署長の密談によって慰安所の場所や、オーナー、慰安婦の時間制による収入額などが綿密に決められていた。

北部の日本軍の大きな基地があったラムパーン県の慰安所を例にしてみると、次のようになる。1942（昭和17）年3月23日、中国人が経営していた13室あるユンヒンホテルを日本軍が借りて、借入金を月々350バーツ支払い、ホテルに慰安婦希望者を、15人乃至20置き、時間制にし、収入の分配を、慰安婦70%、オーナー30%とし、兵士は1時間1バーツ、伍長は1・50バーツ、上官は2・50バーツ、下士官は昼間しか時間がないが、上官は階級によるが、徹夜の場合は（午後22時から翌朝の午前7時まで）4・50バーツから7・50バーツと決められていたのである。

慰安婦問題に関して、ドクター・ブロンテイツプ・キャッティサハクン著者の資料によると、太平洋戦争中、日本軍の慰安所があった地域は、北支に100ヶ所、中支に140ヶ所、南支に40ヶ所、太平洋西南に10ヶ所、南サハリンに10ヶ所あり、全部で400ヶ所に点在していた。

慰安婦は、韓国、台湾、中国、インドネシア、フィリピン、マレーなどから騙されて連れてこられた慰安婦や、現地で調達された慰安婦があるが、タイは本人の希望で国内のみで海外の出稼ぎはなかった。

日本軍の強制労働に強いられ、十数万人に及ぶ尊い生命を飲み込んだ泰緬連結鉄道は今は、観光地として有名になった死の鉄道は、130キロ地点のナムトック終着駅まで走っている。各国の観光客を乗せて、苦しみ悩んだレールをギシギシ泣かせて走っている。当時の耐え難い苦しみを、辛苦を、あの悲惨極まりない思いを、涙を溜めて思い出す人はいるのであろうか。

## ■クラ地峡横断鉄道

日本軍がビルマ作戦に用いた補給ルートとして建設した鉄道は、タイとビルマを結ぶ死の鉄道と言われた泰緬連結鉄道だけではない。一般にはあまり知られていないが、南部チュムポーン県のチュムポーン駅から、ラノーン県ラウン郡バーン・カウ・ファーチー（ファーチー山村）まで90キロのクラ地峡横断鉄道（ロツファイ・コーコートクラ）である。

この南部のクラ地峡横断鉄道はラノーンの終着駅ファーチー山から船でビクトリアポイントを通り過ぎて、ビルマを攻略する戦路上見逃せないおよそ1000キロほど短縮できる近距離コースである。

泰緬連結鉄道建設にあたり、日本軍は、まず死の鉄道に関して、タイと1942（昭和17）年9月16日に調印し、悲惨な「死の鉄道」に着手している。

一方、クラ地峡横断鉄道建設に関しては、1943（昭和18）年5月10日に、日タイ共同でペッカセーム道路の路線の調査のために、タイ側からは数人のお供を伴った代表のモムチャウ・チャツチャノック中佐および、日本からは久保田中佐以下15人が参加して共同で調査を行った。

その結果5月31日にピブーン首相と義部隊長の中村中将とがクラ地峡横断鉄道建設に関し、90日以内に完成させ、レール5000メートルをタイが捻出する条件で調印した。

当時、森林に覆われた鬱蒼とした虎や毒蛇の巣窟だったチュムポーンからラノーンまで行くペッカセーム4号線の道路は、途中のクラブリー郡バーン・マルまでしか行けず、あとは船に乗り換えて2時間ほど掛かってラノーンへ行かなければならなかった。

タイは、チュムポーンからラノーンのバーン・カウ・ファーチーまでの90キロ間の土地を無償で日本に提供せざるを得なかった。日本軍はタイと調印した後、直ちに6月4日に工事を開始した。

ガタガタだった狭いペッカセーム道路に平行して、道路と鉄道を同時に建設することになった。現場工事にあたり、金鶏グループ、西本グループ、加藤グループの3組に手分けし、土木、橋、溝、レール工事を、各グループに分担して工事は進められた。

1943年8月15日から9月末にかけて30000人のマレー人70パーセントと、中国人10パーセントの苦力を毎日1000人ずつシンガポールから貨車でチュムポーン駅経由で運び、クラ地峡横断鉄道の工事にあたられた。

日本軍は地元のタイ人を10000人集めるようタイ当局に要求したが、当局は県庁の知事に指令を出し、南部タイのスラターニー、ナコーンシータマラート、パッタラン、ペップリー、ナコーンパトム、パッタニー、ヤラー、ソクラー方面で3630人、それと、ペップリー、チャチョンサウ、アユッタヤー、パトウムタニー、チョンブリー、ナコーンナーヨックで労働者の募集を行ったが、中央部では1221人しか集められず、日本軍の要望を満たすことはできなかった。

苦力の日当は普通は1バーツ以下だったのを、特別に1バーツ20サタンから1バーツ50サタンに吊り上げて募集していた。特に、中国人にはアヘンを一袋1バーツで売り、アヘンで釣り、仕事に従事させていた。

当時、タイではアヘンは法律で禁止されていたので、当局から「法律違反である、中止するように」と注意された。だが、日本軍は無視したのである。

1943年9月6日に、シンガポールから、マレー人4600人と中国人400人の苦力が追加された。

クラ地峡横断鉄道に敷いた鉄道は、マレー半島のカンタンから運ばれたのも含めて、手軽にできる土盛りや橋はタイ側に任せ、レールは日本軍監視の下に、マレー半島から連行されてきたアジア人捕虜と労働者が、交代で昼夜の突貫工事を強いられた。

だが、食糧もまともにとらふく与えてもらえず、疲れきった労働者は、マラリア、風土病、栄養失調などに冒され、疲労が重なり、力尽きてバタバタ倒れて逝った。

工事中に死亡した労働者は、死亡者を運ぶ余裕もなく、鉄道脇で油を掛けて燃やしたり、穴を掘って埋めたりした。埋めたとしても掘った穴が浅かったのもあり、鉄道沿いは死亡した人たちの悪臭が漂っていた時期があった。この他にも、バーン・フーチー山周辺の裾にも大勢の労働者が埋められている。

強制労働に耐えきれず、工事現場から夜逃げした者もかなりいたが、途中でペツチャブリー周辺で逮捕され、また現場に連れ戻されて地下牢に入れられて拷問され、酷い目に遭った者もいたのである。

工事が始まった初めの頃は小川大佐が監督していたが、のちにイスイおよびマハシ（地元の資料で名前がはっきりしない）が技術者として関わり、マレーから運んできた50ポンドと60ポンドのレール工事に取り組んだ。

クラ地峡横断鉄道90キロの建設にあたり曲がりくねった400、1000メートルの勾配した箇所を岩石をダイナマイトで削り、137ヶ所のカーブにレールを敷き、小川が流れている37ヶ所に20メートル前後の橋を架けている。

チュムポーンからバーン・カウ・ファーチー間にある途中の駅は、ワンパイ駅、ターサーン駅、ペークチャン駅、タップリー駅、カラブリー駅、クローン・ラムリヤン駅、カウ・ファーチー終着駅の7ヶ所に、木造と竹で簡単に詭えた小さな駅があった。

西に位置したバーン・カウ・ファーチー終着駅の周辺には、ラウン運河が目の前にあり、船着場

年月日	日本兵	白人捕虜	中国人	マラヤ人	モン人	ビルマ人
1943年9月15日	20,158	27,790	12,000	26,300	1,600	2,870
1943年9月27日	24,764	41,570	22,910	40,570	1,600	2,400
1943年11月25日	25,423	32,820	9,075	36,954	2,050	4,000

1943年	10月初旬	10月下旬	翌年1月下旬	8月上旬	8月中旬
日本軍将校	50	50	45	—	—
下士官と兵	400	400	2500	1200	1200
インド兵	—	—	100	600	600
ジャワ兵	—	—	—	60	50

	10月初旬	10月下旬	翌年1月下旬	8月上旬	8月中旬
中国人	2000	1200	300	500	500
マレー人	2440	1050	470	2000	2000
タイ人	750	380	400	300	300
計	5200	2630	1170	2800	2800

トラック（乗用車を含む）	193台	204台	563台	130台	151台
オートバイ	2台	4台	4台	6台	5台
足踏みトロッコ	3台	3台	2台	—	—
自転車	約100台	約100台	50台	—	—
機関車	—	—	4台	4台	4台
気動車	—	—	7台	1台	1台
貨物車	—	—	—	不明	不明

に板と竹で建造した大きな倉庫があった。その他、食堂や、トタン屋根で造った捕虜収容所や病棟があった。倉庫には、米、乾燥物、石炭、ガソリンなどが積んであった。

フアーチー山の周囲には、日本軍の兵舎や司令部、直径1メートル、深さ20メートルの洞窟、防空壕、地下牢、大砲陣地や塹壕が構築されていた。この他にも、フワカウ・カーン（カーン頭山）と、コ・クワン（クワン島）にも堅固な砲座や塹壕、洞窟などが構築され、7キロの広範囲にわたり警戒線が引かれていた。

日本の鉄道隊は大本營の命令に従い、クラ地峡横断鉄道工事を、普通であれば10ヶ月ほど掛かるところを、労務者に強制労働を施し、突貫工事で完成を急ぎ僅か6ヶ月で完成させた。完成したクラ地峡横断鉄道を、日高洋行の日高邦夫さんと同僚2人が、チュムポーン駅からカウ・フアーチーまで90キロ間の鉄道線路をタイの駅員に手押しトロッコを操ってもらい、綿密にチェックして歩き、開通となった。

クラ地峡横断鉄道は、1943（昭和18）年12月25日にチュムポーン駅で開通式が行われた。開通式後順調に使用していたクラ地峡横断鉄道は、1944（昭和19）年11月26日英軍機20機による空爆を受けた。タイミング的に丁度クローン・ラウンに碇泊していた小型船に武器や物資の積み込み作業をしていた真つ最中だったが、運悪く数隻の貨物船が空襲で沈められてしまった。

その後も1945（昭和20）年6月19日午後2時から6時まで4時間にわたり、ラノーンの空を我が物顔で30機の編隊を組んだB24爆撃機による機銃掃射と猛爆に遭遇し、日本軍の陣

1943年10月12日時点のラノーン側の日本兵	将校	下士官・兵士
51キロ地点タップリー村		15人
10キロ地点ナムチュート村	3人	15人
8キロ地点	不明	100人
27…30キロ地点（カウファーチー）	7人※	400人
※ 中佐1、大尉1、中尉3、少尉2		

#### タイに駐屯する日本軍将兵と連合軍捕虜および労働者の推計

バンコク	6900人
泰緬鉄道建設現場	96000人
チャンマイ	30000人
クラブリー	23000人
合計	150900人

#### 1943年頃の軍人軍属捕虜苦力人数

	軍人軍属	苦力捕虜
バンコク	7000人	1000人
チャンマイ	16500人	50000人
泰緬鉄道	15000人	45000人
クラ地峡横断鉄道	1500人	13000人
合計	40000人	121000人

地や鉄道線路は目茶目茶に破壊されてしまい、90キロのクラ地狭横断鉄道は使用不可能となった。

クラ鉄道建設にあたり推定で、およそ10万人乃至11万（日本兵含まず）人に及ぶアジア人労働者が動員され、人海戦で森林を切り開き、僅か6ヶ月で完成したクラ地狭横断鉄道は鉄道隊が建設した立派な業績である。だが、この僅か6ヶ月の短期間に少なくとも20パーセントに上る労働者が力尽きて犠牲になった悲惨な歴史に終止符を打ったのである。

ラノーンは錫鉱山の産地で戦時中でも静かな平和な街だったのだが、悲惨なクラ地狭横断鉄道の歴史が刻まれたほかに、タイ人にとって、特にラノーンの住民にとって忘れ難いタイ全土を揺るがした悲しい日本軍のラノーン事件が歴史の隅に刻まれて残っている。

ことの発端は、ピブーン内閣の総辞職が原因だったと言われているが、1944年7月30日17時半、日本軍の誤報により、ラノーンのクラ地狭横断鉄道守備隊のコウノ中将の命令で3時10分にラノーン警察署を機関銃で襲撃し、郵便局を占領し、タイ兵士12人と、警官3人ならびに、住民4人が撃たれて無念の思いで死んでいる。

日本軍に射殺された12人のタイの兵士の死体を、地元の住民が返して貰うように手を合わせて拝み、哀願しても聞き入れず、日本軍の無謀な無慈悲な行動により死体は焼かれて海に捨てられ、武器は没収し、武装解除し、更に、タイの国旗も引き降ろし、代わりに日章旗を掲げてタイの国民の心を傷つけたのである。

事件発生後、日本軍は死者の遺族に対して15万バーツの見舞金を与えたが、家族に拒否されたので、第6軍管区司令官のサック・セーナナロン中将に託した。セーナナロン中将は見舞金を日本軍に返した場合、あとでまたいざこざが起る可能性を恐れて、遺族に分配したのである。

タイは日本の同盟国だったはずである。親愛なるタイに様々不審を抱かせ、武力の威力により好き勝手に行動し、多大の迷惑を掛けた日本は、残念ながら1945年8月15日に敗戦を迎えるはめとなった。同年8月15日に敗戦を迎えたカウ・ファーチーの守備隊は9月中旬に英軍に武装解除されている。レールはのちに英軍が取り外して、マレー半島へ持ち帰っている。

現在、日本軍が築いたバーン・カウ・ファーチーの場所は、カウ・ファーチー30キロ市場となっている。ここは朝からビルマのビクトリアポイントから尾長ボートで波を蹴立てて買出しにくるビルマ人や、地元の人で混雑した活気に満ちた市場であり、市民の生活を助けている日本の置き土産である。

日本軍がファーチー村に陣地を構築した頃、ファーチーの村人は主にファーチー山の北部と山が二つ並んだ西側に住んでいた。南の海岸に面した波打ち際には、コーンカンの木や、セームの木、プームの木が生い茂り、ラウン学校の西側に民家が2軒あるのみだった。

かつて過去において日本軍が駐屯していた頃、戦火に見舞われたファーチー村は、今は何事もなかったかのように市場に買出しにきている人並みで蠢き、日本軍が造ったペッカセーム4号線道路の両側には商店街が建ち並び、わりに繁栄した街に変貌している。

時代の流れとともに、いろんなものが入れ替わり、村人も昔の光景を垣間見た年寄りとは若者と世

交代し、当時のことを語れる村人はもうほとんど他界している。

70年間の時代の流れとともに、確かにいろんなものが変わった。しかし、未だに日本軍の形見として残された大事なものが残されている。一般の人にはあまり興味ないかもしれないが……、それは、戦時中に連合軍の空爆により、沈没した数隻の哨戒艇や貨物船の残骸が、まだクローン・ラウンの川底に沈められたまま残っている。

それと、もうひとつ大事なことは、マレー半島から貨車で連行してきたおよそ10万人乃至12万人とも言われている可哀想な中国人、インド人捕虜や、マレー（カラー人）人やビルマの労務者の人たちである。

工事現場で強制労働を強いられ、ビンタを喰らい、殴られ、「バカやろう」と叱咤されて働かされ、工事中に倒れて息を引き取った哀れな労務者たちの亡骸は、未だに祖国にも帰れず、クラ地狭横断鉄道の沿線に沿った荒野にほったらかしにされたままである。

終戦後、後始末もきちんとしなかったアジア人を酷使した日本軍の責任である。人権を無視した許しがたい行為である。不幸にして亡くなった労務者の名簿は愚か、生存した人たちの名簿すらなにも残っていない。はっきりした死亡者の人数も定かでないが、故郷へ帰りがたかったであろう大勢の屍が、魂が、今もまだ放置されたまま眠っているのである。

ファーチーマーケットの近くには、地元でアレンジした昔を偲ぶSL機関車（当時の物ではない）が展示されている。だけど、労務者を祀る慰霊碑は何処にも無い。できれば悲しい思いをして息を引き取り、亡くなった亡霊が安らかに眠れる慰霊碑のひとつでも建ててあげればと、切に思う。

## ■機銃掃射を受けて

バンコクは1943（昭和18）年の暮れ頃から日増しに空襲が酷くなり、銀色の翼をキラキラ輝かせた双発のB24機が編隊を組み昼夜を問わず堂々と飛んでくるようになった。それに、小型の胴が二つあるロッキード機が飛来し、遠慮会釈もなく地上目掛けてバリバリ機銃掃射を浴びせるようになった。

或る日のこと、僕は学校が引けてから、ナレー通りにあつたインちゃんの家へ遊びに行っていた。確か夕方の4時頃だったと思うが、重苦しい空襲警報がウーウーと鳴りだした。今日もまた空襲かと思い、インちゃんの家を飛び出した。

爆音がこだまする綺麗に透き通った青空を仰ぎ、遙か彼方にB24爆撃機の編隊と、数機のロッキード戦闘機が目映った。今日は何処が狙われるのかな、と思っていると、チャウプラー川沿いに面した付近一帯がドカーン、ドカーンと爆撃を受け始めた。

戦闘帽を被っていた僕は路上から人々の姿が消えうせたスリヴオン通りを我が家に向かって急ぎ足でスタスタ歩いてたいたときだった。左手から突然ビューンと低空で現れたロッキード戦闘機にいきなりダダダダーッと機銃掃射を浴びせ掛けられた。ヒュンヒュン、シュンシュン飛んで来る弾をかわし、僕は咄嗟のうちに窪地に伏せていた。ほんの一瞬の出来事であったが、紙一重であった。

## ■闇のバンコク

敵機は地下工作をしていた約8000人のセーリータイ（自由タイ）の協力の下に、主に日本軍の施設関係を狙い、爆弾の雨を降らせて破壊していった。フワラムポーン駅や、バンコクノイ駅、マッカサン鉄道修理工場、タイ全土の地方の鉄橋などが頻繁に空爆に見舞われ、日本軍の軍事輸送に多大な打撃を与えた。

1944（昭和19）年2月10日夜、マッカサンにあった日本大使館もマッカサンの工場と一緒に空爆で炎上し、吹っ飛んでしまった。

当時、チャウプラヤー川に架かっていた橋は2ヶ所しかなかった。バンコクとトンブリー県を結ぶチャウプラヤー川に架かっていたサパーンプツが1944年12月14日に、続いてノンタブリー県に架かっていた汽車兼用のラーマ6世橋が翌年の1月2日に空爆により完全に破壊されてしまった。

サパーンプツが不通となり、お陰で川向こうのトンブリー県に行くには、渡し船か、ルア・チャーン（細長い手漕ぎボート）でしか渡れなくなり、両岸は混雑したが、船頭さんにとってはよい収入源となった。

1945（昭和20）年3月にはヴォラチャックの水道局が爆撃を受け、水道が出なくなった。4月14日にはワツ・リヤプの発電所や、サムセーンの発電所も爆撃で破壊されてしまい、バンコクは遂に、水道も電気もない原始時代の暗黒の街と化した。

プツ橋や、ワツ・リヤプ発電所が連合軍に狙われた時点で、プツ橋の近くにあった日タイ協会も爆撃に見舞われ、焼失してしまった。それに、流れ弾が日本人納骨堂があるリヤプ寺にも落ちたために、お寺の本堂はすっ飛び、瓦礫と化し、入り口の右側にあった高い塔も真ん中から折れてしまった。しかし、納骨堂だけは屋根がちよっと破損しただけで、運よく奇跡的に助かったのである。

## ■アルバイト

バンコクは爆撃の洗礼を受けていたお陰で、水道も出なくなり、電気も点かなくなってしまった。この電気と水が無い生活がおよそ5ヶ月、終戦の日まで続いた。僕の家の前には小さな深い池があったので、水にはさほど困らなかった。水を浴びたり、食器を洗ったり、洗濯をしたりするときは、この手近にある池の水を使っていた。

しかし、飲料水は何処にもなかったもので、原始的なやり方で、バケツの底に小さな穴を開けて、石や砂利、炭、砂などを一杯入れて池の水を流し込み、ちよろちよろ出てきた綺麗になった水を、更に明礬（ミョウバン）で溶かし、沸騰して飲んでいた。

夜になると、暗闇に包まれてしまうが、椰子油や豚の油を煎じた油の中に細い紐を軸にして、その紐を油に認めて火を点すと、不思議とほのかな明かりが点るものである。他の近所の家ではランプやガスランプを使っていたが、我が家は年がら年中節約で惨めなものであった。



発電所が爆撃でやられて一番困ったのは、タバコの専売局であった。工場は電気が停電し、タバコの生産がストップしてしまった。生産不能となり、途方に暮れた専売局は、タバコの葉と紙を巻く道具を家庭の主婦に配り、家庭生産に切り替えた。

タバコ巻きの手間賃は、100本巻いて1バーツ（当時麺類は一杯20サタン）だった。我が家も隣近所の人たちと一緒にタバコ巻きアルバイトの仲間入りをし、専売局から近所の卸元に配られてきた細かく刻んだタバコの葉と巻紙、それにタバコを丸く巻き込む道具を貰い受けて、タバコ巻きの生産に掛かった。

タバコを巻き込む道具は、幅およそ10センチ、長さ15センチほどある厚手の紙が細長い丸味のある竹に糊付けして貼ってある実に簡単なものだった。まず真っ白いタバコの紙を敷き、紙の端に糊を少しなすり、その上に目分量でタバコの葉を乗せて、竹の棒の先でくると巻き込み、両端からはみ出している葉屑を鋏でチョコキン、チョコキンと切り捨てて、これで一本出来上がりとなるわけである。

僕はタバコのアルバイトをやり始めてからは、学校から帰ってくると、大急ぎで宿題をすませて、毎晩夜更けまで炎が揺れ動く薄暗い部屋で、こおろぎや、様々な虫の演奏曲に合わせて、せつせとタバコ巻きアルバイトに精をだした。

冷たい淡い月光が光々と輝いている月夜の晩などには、月光に誘惑された隣近所の人たちが空き地に集まり、ラウローン（地酒）を酌み交わし、太鼓をリズムカルにトントコトントコ叩き、みなでラムウオンの歌を歌い、輪になって楽しそうに浮かれて踊っていた。

僕は昼間は母と一緒にタバコを巻いていたが、夜はいつも一人だった。空襲があったりしたときは、やり掛けのタバコをそのままにして、素早く対面の小沢さんの防空壕か、或いはちよつと遠い北庄司さんの防空壕に駆け込んでいた。空襲解除のサイレンが早目に唸りだせば、家に戻ってから、またやりかけのタバコ巻きに精をだした。

このタバコ巻きは僕にとっては、生まれて初めてのアルバイトであった。出来上がったタバコの数がどんどん増えるのを目で追い、一人で楽しみながら巻いた。

だが、時々疲れたりしときは夜更けのベランダに立ってじつと淡い月光に照らされた空を仰ぎ、綺麗に輝いている星を眺め、父は一体いつになったらマラッカから帰ってくるのであろうかと、物思いに耽ったりした。

## ■大日本帝国敗戦の兆し

欧州戦線では、アメリカとイギリス連合軍の反撃に遭ったイタリアは、1943（昭和18）年9月8日に無条件降伏した。ドイツ軍も1945（昭和20）年の初旬頃から、米英ソの強敵に三方から攻撃を受けて負け戦が続き、徐々にベルリンに追い詰められていた。

しかし、4月30日、ヒットラー総統が司令部の地下壕でピストルで自殺したのをきっかけに、5月2日、ベルリンは連合軍に占領されてしまった。ヒューマン・キラードであった党首をなくした

ドイツは、5月8日遂に無条件降伏した。およそ8年間も荒れ狂った欧州戦線の地獄の火がやっと消え、逃げ惑っていた人々の身に、ホッと安堵の日が訪れた。

だが、アジア太平洋諸島では相変わらず日本軍と連合軍の死闘が続いていた。日本は拡張範囲におよび、アジア諸国の資源豊かな膨大な領土を占領した。が、それはほんの束の間であった。攻撃から守備の立場に変わった日本は、破竹の勢いで反撃する連合軍を喰いとめることができなかった。

戦力も武器弾薬物資も欠乏し、自立持久戦に立たされた日本は、アメリカの電波探知機などを完備した新兵器と膨大な火力の威力に圧倒され、散々な目に遭遇していた。

戦場は連合軍の機動部隊の来襲に伴い、急速に日本本土へと接近していた。1942(昭和17)年12月8日のバサブア部隊の玉砕を皮切りに、ブナ部隊の玉砕、アッツ島、マキン島、タラワ島と、島伝いに玉砕が続いた。

1943(昭和18)年の夏には、日本の防波堤を兼ねていた大事な基地、中部太平洋上のマリアナ諸島に点在していたグアム島、サイパン島などがアメリカ軍に占領され、日本に長距離爆撃機で空爆可能な距離に迫られ、暗い陰りを投げかけた。

日本本土に本格的な爆撃が開始されたのは、1944(昭和19)年に入ってからだった。同年の11月1日、マリアナ基地から飛び発ったB29爆撃機2機の偵察機が日本本土上空に飛来したのがきっかけとなり、11月24日からB29機爆撃機による本格的な本土空襲が開始された。

日本はマリアナ基地から1万メートルの上空を編隊を組んで悠々と飛来する、空の要塞と言われたB29爆撃機を喰いとめる術もなく、本土は連日の無差別爆撃でめっちゃめっちゃに破壊され、瓦礫と化し、人命を奪ったのである。

特に、3月9から10日にかけて、東京は焼夷弾戦法による大空襲に見舞われた。アメリカの焼夷弾戦術により、数時間のうちに江東地区の家屋が23万戸も焼かれ、約10万人の非戦闘員の命が葬られ、国民に多大な不安を与えた。

1945(昭和20)年2月中旬には、日本の玄関先である硫黄島にも、170隻に上る優秀なアメリカの機動部隊が出現し、空と海から爆撃と艦砲射撃による激烈な攻撃を開始した。

だが、アア、残念なるかな、日本は本土から目と鼻先にある硫黄島を死守していた2万3000人の小笠兵団に対して応援する術も、補給する力もなかった。主力艦隊はほとんどが太平洋上で撃沈され、海の藻屑と消えていた。残念ながらすでに、敵の機動部隊を撃破する余力すらもなかった。

2月28日、第4、5師団によるアメリカの海兵隊が敵前上陸を決行した。硫黄島の守備隊は敵を撃滅する威力もなく、敵の有力な火炎放射器などの大量な火力に薙ぎ倒され、悲惨な死闘を繰り返した。

だが最後には弾も尽きてしまい、3月17日夜、栗林兵団長以下生き残った将兵は最後の突撃を決行し、悲壮な玉砕を遂げた。硫黄島は遂にアメリカの余力を持った火力に制圧され、占領されてしまった。

硫黄島が陥落し、悲しみに沈痛していた矢先、今度は沖縄が危機にさらされるはめとなった。硫黄島を占領したアメリカの機動部隊は、日本に息つく暇も与えず、更に沖縄作戦に踏み切った。輸送船1475隻におよぶ艦船群が沖縄沖の洋上に出現し、3月末頃から沖縄本島に向かって連日艦砲射撃の砲撃による洗礼を開始した。

4月1日、アメリカの陸軍および海兵隊は沖縄本島の嘉手納海岸に上陸を開始した。海岸線の守備隊を撃破した米軍は、その日の夕方には北、中飛行場を占領してしまい、大本営を啞然とさせたのだった。

沖縄本島の激戦は学生までが駆りだされ、軍民一体となった全島挙げての攻防戦となった。3ヵ月におよぶ持久戦の末、日本は軍人ならびに義勇兵を含めて、およそ9万人が戦死した。

戦火に巻き込まれた哀れな島民は、老若男女およそ10万人が砲火の犠牲となった。全力を尽くして死守した守備隊の必死の努力も空しく、沖縄は6月23日、遂にアメリカに占領されてしまったのである。

喉首をアメリカに牛耳られた日本本土の事態は最悪となり緊急を要した。1944（昭和19）年夏から準備されていた本土決戦が具体化し、日本の敗戦色が濃厚となった。大日本帝国は沖縄が陥落したその日に、既に企画されていた15歳以上60歳までの男子、ならびに17歳以上40歳までの女子（戦時中年齢は数え年で数えられていた）を、国民義勇戦闘隊に編成する義勇兵役法を公布し、大本営のPRにより、一億玉砕が唱えられた。

## ■タイ戦場の兆し

一方、タイと国境を隣接しているビルマ戦線もあまなり芳しくなかった。武器も兵力も食糧も不十分な日本軍は後方からの補給ルートもほとんど皆無に等しいまま英印支軍17万の膨大な近代武器を装備した強敵を相手に戦場を拡大し、無理な戦闘を繰り返して死線を辿っている現状だった。

1943（昭和18）年2月から4月に掛けて、突然出現したヴィンゲート少将率いるヴィンゲート旅団の空挺部隊がビルマの北部のミートキーナ鉄道沿いに出現し、鉄道沿いを占領し、戦車を配備し、空輸による補給により堅固な難攻不落の円形陣地を構築し、日本軍を悩ませた。

それと同時に、英軍第33軍団、第2英師団、第3英師団、第19インド師団、第20インド師団、第254インド戦車旅団、第268歩兵旅団、第4軍団、第5インド師団（空挺）、第7インド師団、第17インド師団（機械化）、第255インド戦車旅団、ルシヤイ旅団、第28東アフリカ旅団、約17万の兵力に、戦車400輻に約600機の英空軍機による援護の下に日本軍に対する反撃が開始されたのである。

日本軍は1943（昭和18）年3月27日、ビルマ方面軍を次のように再編成した。

ビルマ方面軍司令官河辺正三中将 任務（1）ビルマ前面作戦指導、

（2）西南沿岸方面作戦直轄 （3）政略指導。

第15軍 軍司令官牟田口廉也中将 任務 中・北部のビルマ作戦担任

第55師団 師団長古関健中将 任務 西南沿方面の作戦担任方面軍直轄部隊  
第18師団 師団長田中新一中将 任務 北部ビルマ方面軍の作戦担任  
第56師団 師団長松山祐三中将 任務 雲南省方面担任軍直轄部隊

ビルマ戦線の敵は弱し、と軽視した日本軍は、1943（昭和18）年8月、南方軍に対して、インドのインパール作戦準備命令を下した。が、途中で一時取り止めとなっていた。だが、1944（昭和19）年1月7日、日本軍の無謀な死地に遭遇した悲惨な白骨街道の汚名を描いたインパール作戦が開始された。

日本は7万8396人の兵力を無理に繰り出し、山岳地帯の険悪な悪路を突破し、インパール目指して進撃し、1944（昭和19）年3月から本格的な戦闘を開始した。しかし、日本は制空権を連合軍に牛耳られ、しかも物資豊かな数倍の英印軍ならびに、米支軍に立ち向かった。日本軍は昼間の行動はママならず、夜しか行動がとれず、敵の有力な空陸部隊の砲火に悩まされ、死地に追い詰められ、死闘を続けていた。

日本軍はやがて最悪の事態に直面した。南方特有の豪雨が降りしきる雨季に見舞われ、泥沼と化した戦場に直面し、敵の猛攻に対抗できず、弾も尽き退却を余儀なくされた。

しかも味方の頼りにしていた後方からの武器、弾薬、糧秣、医薬品の補給もなく最悪の事態に直面した日本軍の1日の主食となった食料は、大事な塩、粉味噌、それと米のみだった。それも、月日の流れとともに、白い飯粒からお粥となり、更に重湯となり、最後に空腹のママ行軍し、栄養失調となり抵抗力をなくした将兵は、マラリア、アメーバ、赤痢、水虫などに冒され、空腹でミイラと化し、餓死でバタバタ倒れ、戦場で戦って戦死した将兵よりも餓死者が60パーセントに達し、悲壮な最期を遂げたのである。

インパール作戦に参加した約8万人の精鋭は、ただ気力だけで激烈な戦闘を繰り返し、生き地獄の中で喘いでいた。日本軍は僅か数ヶ月の攻防戦で4万8930人に上る将兵を亡くした。

最後には武器もほとんどなく、着の身着のままの哀れな姿と化した2万9436人の将兵がタイを指して退却するはめとなった。このように中国の印支補給ルートを遮断するために企図されたインパール作戦は、7月、遂に空しい敗北に帰したのである。

インパール作戦の敗走と前後して、ビルマ戦線も各地で負け戦が続いていた。連合軍は空軍部隊の強力な支援の下に、堅固な空挺部隊を進撃させ、円形陣地を敷き、炎放射器ならびに戦車隊による立体戦術を用いて日本軍の反撃を蹴散らし1945年（昭和20）年5月2日、ラングーンはあっけなくイギリス軍に占領されてしまった。

後方からの援助も補給力もなかった日本軍は、戦場で分捕り戦法を用いるしかなかった。抵抗するにも、肝心の武器弾薬も戦力もなかった。連合軍に追い詰められた日本軍は総体的に敗退した。

生き残った哀れな素手に近い飯盒だけぶら下げた将兵は、険悪な山岳地帯の密林を越え、飢えを凌ぎ、泥沼と化した中に埋もれた戦友の屍を乗り越えて、タイのチャンマイ、メーホーンソン、ターク、カーンチャナブリーを目指して、タイへ、タイへと、力なくトボトボと足を頼りに気力だ

けで退却してきたのである。

ビルマ戦線の敗北により、バンコクにもいつ敵の空挺部隊が侵入してくるかわからない。タイは地下工作をしているセーリータイ(自由タイ)組織により、タイ軍がいつ日本軍に寝返りを打つかわからない、といった噂が飛び交っていた。

実際に外池部隊が駐屯していたルムピニー公園の周囲にも堅固なトーチカや塹壕が掘り巡らされ、戦闘準備がなされていた。タイ側も四辻や重要な要所の所々に砂袋を積み重ねて市街戦の体制が敷かれ、喧々囂々たる雰囲気の流れていた。

僕たちの授業も勉強よりも軍事教練の方が多くなり、日増しに厳しくなった。特に男子は上級生だけが時々、戦勝記念塔まで2、3人のグループに分かれて競歩でさっさと歩き、目的地に着いても休む暇もなく直ぐ往復させられたりした。

汗をぐっしよりかき、喉がからからに渴き、学校に戻ってすぐ水を飲もうとすると、「あと10分待つてから飲め」と命令され、がっかりしたが、唾を飲み込み我慢するしかなかった。お弁当も空襲に備えて、5分で口の中にかきこんで食べる訓練が施されたりした。年齢も数え年で数えられた。それは軍部が1日も早く僕たちを利用しかつたからである。

僕たちの児童の洋服には、名前と住所を明記した身元がはっきりわかる布を縫い着けることが義務付けられた。上級生は、日本大使館から小さな身分証明書が発給され。いざというときは、外池部隊に駆け込めば、男には銃と弾が配給される段取りになっていた。戦場は急速にタイの国境周辺に迫り、緊迫した空気が流れていた。

## ■僕の卒業式

僕の大好きな仲間がいた6年のクラスには、僕が一年生のときから一緒だった池田實君、祭建君、祭素真さん、許春子さん、洪瑟々さん、それに後からプレー島の田舎からきていた泉英美代さん、マレー半島から転入してきた色の浅黒い英語の上手な江畑恵美子さんそれと、11月中旬に神戸から「がんどす丸」に乗船し、途中で台湾の基隆港に寄港し、12月5日に運よくバンコクに着し、太平洋戦争が勃発した12月8日の晩に、下船したばかりの「がんどす丸」にまた舞い戻った「白豚」と呼んでいた天田米美さんだった。男は僅か3人で、女性軍のほうが多かったが、みんなおとなしく、兄弟姉妹のように和気藹々とした仲だった。

今までは先輩に当たる卒業生を見送っていた僕だったが、今年は自分が見送られる番となった。僕がバンコク日本人学校に入学したのは、1939(昭和14)年の5月初めだった。入学した当初、僕の頭脳の内部に刻み込まれていた肝心な日本語は、まあまあで、南部訛りのタイ語しか詰め込まれていなかった。

親元を離れて家庭の事情で悩んでいた僕は、孤独ではあったが、みんなにからかわれたり、笑われたりしながらも、実に楽しい学生生活を送った。月日の流れは実に早いもので、あっという間に6年が夢のように過ぎ去ってしまった。

僕がこの日本人学校に入学した当時、学生はたったの27人しかいなかった。校舎もなにもない寂しい学校であった。だが、徐々に二階建ての木造校舎ができ、学校の寮ができ、25メートルプールが完成し、最後には柱のない広い講堂ができあがった。

小学生も130人余りに増え、幼稚園も30人ほどに膨れ上がり、6年の間に立派な活気に満ちた学校に変貌していた。それと、今度卒業する僕たちのために、もう日本へは危険で行けなくなっていたので、急遽、今年の新学期から高等科が開校されることになった。

日本が引き起こした大東亜戦争の戦乱に巻き込まれた僕たちは、連合軍の空襲を受け、防空壕に飛び込みながらも勉強に勤しみ、ハードな軍事教練にもめげずに精をだした。常に「日本のために、お国のために、天皇陛下のために、七度生きて尽くすのだ。アジアの邪魔者、憎き米英、鬼畜米英を倒すのだ」と、頭の天辺から叩き込まれた僕は、「出てくる敵は皆殺しにしてやるんだ」と、満身の力を込め、神風特攻精神に燃えていた。

各方面の戦況は、日本にとってあまり芳しくなく暗いニュースばかりだった。大人の人たちの「日本はもう駄目だ、時間の問題だ」と、ぼそぼそ話している陰口を耳に挟むようになった。僕自身も日本が負けそうな気配を感じ、もし本当に日本が負けたら、これから先一体どうなるのであるうかと、不安な気持ちにかられるようになった。

このように重苦しい不安に包まれた雰囲気の中で、僕たち9名の卒業式が厳かに行われた。それは、1945(昭和20)年3月20日(火曜日)、空襲もない晴れたよい天気にも恵まれた日だった。講堂の前列に並んだ僕たち卒業生は、金井校長先生の「今、日本は大東亜諸国のために戦っているのです。みなさんも日本のために生命を捧げ、頑張らなければならないのです。云々」といった教訓を授かった。

實ちゃんが卒業生代表で、姿勢を正し、時々喉を詰まらせながらお別れの言葉を読みあげた。続いて宮脇アキエ先生が弾く「仰げば尊し」の歌を、ピアノの伴奏に合わせ、みんなで歌った。僕は細かい声で歌ったが、歌っているうちに、何故か、お世話になった先生のことや、仲良く遊んだ友達のことなどを思い出していた。

それに、この卒業式がみんなと離別する最後のお別れになるのではないのか、と思うと、無性に悲しくなった。体をくの字に曲げ、力なく立っていた僕は、ジュルジュル鼻水を啜り、喉を詰まらせ、シクシク泣き濡れていた。最後に「蛍の光 窓の雪……」と、声高らかに歌う後輩の歌声が講堂に鳴り響き、僕の胸にジーンと染み込んだ。

### ■優しい町田先生

卒業式が終わって暫くすると、いつもだと、みんなが楽しみにしているフワヒン臨海学校があるのだが、今年は政情不安定なために、中止となってしまった。仮にあつたとしても、僕にとってはどうせ行かせてもらえない身であった。しかし、僕の仲間みんな「なんだ、つまらない」と、がっかりしていた。

学校は4月末まで長い休暇が続くので、みんな体を持ってあまし友達の家へ遊びに行ったりしていた。僕はほとんど毎日のように学校へ行き、町田先生に「先生、泳がせてください。お願いですから……」と、駄々をこねて「よし、泳いでいい」と言われるまで粘り、元氣よくプールで泳いでいた。

僕の楽しみはただ泳ぐことだけだった。バシヤバシヤ飛び散るリズムカルな水飛沫の心地よい音楽を聴きながら泳いでいると、不思議と快感な気持ちになるものだ。あとは、家に籠もって細長い竹の棒の端を、親指、人差し指、中指の3本の指先で、器用にくるくる回し、タバコの匂いに包まれたむっとする自分の部屋で万遍なく同じ仕草を繰り返しながら終日タバコを巻いていた。

だが、タバコの量がどんどん増えたとしても、僕の懐には1銭のお金も入ってこなかった。しかし、多少なりとも僕の小さな力が家庭の支えになっていたことだけは事実だった。従って、僕は僕なりに満足していた。

休みの間、時々町田先生が自転車で我が家に訪れることがあった。僕がせっせとタバコを巻いていると、「正夫、疲れないか、よく頑張るなあ」と、心配そうな優しい眼差しで僕の顔をまじまじと見つめるのだった。

町田先生は僕が学寮にいた頃から、僕のことを心配してくださっていた思いやりのある親切な先生だった。その優しい先生に、なにか心配そうな声で問われると、その気持ちが僕の胸にジーンと染み、なんとなく目頭が熱くなるのを感じてしまうのだった。

## ■高等科一年生になって

新学期が始まったのは確か5月1日からだったと思う。3月に卒業した僕たち9人の仲間は、日本へ帰りたくても、日本の輸送船がほとんど連合軍に撃沈されていたために、帰る伝もなく全員揃って高等科一年生に進学した。

バンコク日本人学校に初めて高等科（現中学）が誕生したわけだが、僕たちの入学式もなにも行われなかった。ただ講堂に集まり、朝の朝礼をすませ、平常通り指定された教室に入った。僕たちのクラスは、ミツキーや、幸治君たち六年生のクラスと一緒にの教室だった。担任の先生が、なんと、僕の大好きな町田先生だったので、とても嬉しかった。

初日は新しい教科書をもたらったり、時間表や、教室の割り当てがあるだけで、早引きの日だった。僕は代数の分厚い教科書もらい、中の頁をペラペラ捲ってみたが、分数形式になった数字だらけのいかにも難しそうな教材だった。

数字が苦手な嫌いな僕は、これからこんなに難しいものを習わなければならないのか、と思うと、嫌になってしまった。高等科一年生ともなると、勉強も一段と難しくなった。嫌でも苦手な数学も頭に叩き込まなければならなかった。それに、宮脇先生から難しい古事記伝、候文、漢文、崩し字などを、びっしり習った。

## ■倉上香織ちゃんの死

それは、確か1時間目だった。教室でなにもすることもなく、みんなでペチャペチャ喋っていたときだった。町田先生が悲しそうな顔で「みなさん静かにしてください」と静止して、おもむろに「この間阿波丸で帰国した倉上香織さんの船が敵の魚雷にやられて、船が沈み亡くなりました。これから倉上香織さんの冥福を祈り、一分間の黙祷を捧げます」と話す、先生の悲痛な声が流れてきた。

香織ちゃんは帰国寸前まで町田先生のクラスにいた先生の教え子だった。しんとした教室で目をつぶり頭を垂れた僕は、ついこの間まで一緒に遊んでいた香織ちゃんの笑顔が映像のように臉に浮かんできた。香織ちゃんももう死んでしまったのか、と思うと、悲しかった。香織ちゃんはミッキーマウスのクラスにいたのだが、クラス中でも小柄で愛嬌がある可愛い子だった。

香織ちゃんと別れたのは、確か僕の卒業式が行われる数日前だったと思う。香織ちゃんは、バンコクから板井さんの家族や、他の人たちと一緒に昭南島（シンガポール）へ赴き、昭南島に停泊していた日本郵船の死の阿波丸に乗船したのだった。

この阿波丸は日本郵船の船で、1万1249トンもある大型船だった。白い船体に緑の十字のマークを付け、緑の十字船とも呼ばれ、アメリカからも公式に認められた輸送船だった。アメリカの政府と、協定の下に、連合国の捕虜などに慰問品を届け、安全に帰還できる、と、保障されていた日本の輸送船だった。

しかし、1945（昭和20）年4月1日の夜11時半頃、台湾海峡南西43キロ付近を通過していたときだった。アメリカの潜水艦クインフィッシュ号から発射された3本の魚雷がまともに阿波丸に命中し、船体が真っ二つに折れて、あっという間に轟沈したのだった。香織ちゃんはぐっすり眠っていたであろうに……、無邪気な香織ちゃんは船員さん148人と、乗客1896人と一緒に運命をともしたのだった。

戦争とはなんと残酷な仕打ちであろうか。僕にはアメリカと日本両国の間でどのように取り決められ、どんな事情があったのか知る由もない。だが、約束が約束にならない騙まし討ちである。これが人を殺すため、船舶を撃滅するためになされたアメリカの行為なのだ。

なにも知らない罪もない香織ちゃんまでも奪いとってしまったのだ。可哀想な香織ちゃん、海底はさぞかし冷たいでしょうに、安らかに眠ってね。もう二度と会えない香織ちゃん、永遠にさようなら――。

## ■阿波丸轟沈事件の真相

国際問題になった「悲劇の緑の十字船」とも言われている、日本郵船の阿波丸（浜田松太郎船長）轟沈事件の真相は、日本はアメリカの政府の依頼により、日本に占領されている南方各地に監禁されている連合軍の一般市民ならびに、捕虜約16万5000人に、慰問品を届けるために実施されたのだった。



勿論、その間の航海中の航路となる香港、西貢、シンガポール、ジャカルタに航海中の寄港地ならびに、帰路の航路の安全も保障する認定に基づき実地されたのである。阿波丸は2000トンの慰問品を積み1945（昭和20）年2月17日、門司を出港し、各地の巡回を終わり、無事に任務を果たし、帰路についた。

帰りはジャカルタ、ムントクに寄港し、各寄港地で、一部の大使館員ならびに、邦人や病人を乗せ、一方内密に6000トンの武器弾薬や予備部品を積み込み、最後にシンガポールに寄港した。

3月24日シンガポールに入港した阿波丸は、ここでも更にタイから駆けつけてきて乗り込んだ双方の邦人の乗客でごった返した。船内は2000名余りの乗客で越満員となった。一方、軍部は密かにこの阿波丸を利用して膨大な物資を積み込もうとした。だが、浜田船長に反対されたが、軍部の一喝で、錫3000トン以上、生ゴム3000トン、タンゲステン、水銀などを9812トン、この他に貴金属やダイヤモンドなど、5000億ドルに上る物資を積み込んだ。

すべてをアメリカに感知されていた悲劇の阿波丸は、3月28日シンガポールを出港し、教賀へと向かった。4月1日午後11時半頃アメリカのクイーンフィツ号（艦長ラフリン中佐）に見えられ、北緯24度41分、東経119度12分の台湾海峡南西43キロ付近で、3本の魚雷を船体にぶち込まれ、ものの2分で轟沈したのである。

この遭難で便乗者約1900人、船員148人が戦死したが、阿波丸のコックだった下田貫太郎さん（45歳）がたった一人だけ奇跡的に助かったのである。海中でかなり油を飲んでいた下田さんは、アメリカの潜水艦に救助され、ある島に連行された。終戦後帰国した下田さんは、1970（昭和45）年12月、70歳で戦災で受けた悲惨な人生に終止符を打った。

この国際的に有名な阿波丸轟沈事件は、米艦パネー号事件の腹癒せにアメリカが故意に仕返しをしたのではないとも言われている。このパネー号事件は、陸軍の南京攻略が開始された1937（昭和12）年12月12日に突如として起こった事件であった。

この日、アメリカの避難難民を乗せた米艦パネー号が英艦などと前後して南京近くの揚子江を航海していたときに、日本の海軍機に見えられ、爆撃されたパネー号は、直撃弾を受けて撃沈。陸軍は、英艦レディパード号など3艦を砲撃し、撃破した。日本軍のミスによって生じたパネー号事件は、のちに、アメリカに要求された221万4000ドルの賠償金によって解決したはずなのだが……。

悲惨な阿波丸轟沈事件は、日本の再三の抗議により、アメリカは阿波丸を撃沈した責任を認めた。ただし、賠償問題に関する審議は終戦後まで延期することになった。だが、終戦後1948（昭和23）年の秋にGHQのシーボルト外交局長から「戦争終結以来のアメリカの対日援助に免じて、阿波丸事件の賠償請求を放棄して欲しい」との要望が提出され、最終的に国会で議論の結果承認され、1949（昭和24）年4月14日、吉田外務大臣とGHQシーボルト外交局長とで、日本の賠償請求放棄に関する文書に署名調印が交わされ、阿波丸事件に関する終止符を打った。

その後、1950（昭和25）年8月1日、阿波丸事件に関する法律が施行され、政府は被害者

一人あたりに7万円の見舞金を支払い、日本郵船にも見舞金が施された。阿波丸の遺族は阿波丸遺族会を結成し、東京タワーに近い芝増上寺の境内に40坪の土地を得て、犠牲者がもと所属していた団体、一般の友人知己、遺族などの熱意によって1972（昭和52）10月に阿波丸殉難者合同慰霊碑を建設し、土地の中央に主碑、裏面に事件の由来と遺骨収納箱、後方両側面に2070名の犠牲者の名前が刻まれた霊が、外側に植樹した、さくら、つげ、つつじの木陰で静かに眠っている。

1979（昭和54）年、中国が水深60メートルに沈んでいる阿波丸を発見し、遺骨、錆びた時計、万年筆、眼鏡、荷札、靴、尺八、パイプ、陶製の人形などの遺品を一部を回収し、中国の好意で遺族の代表に渡され、慰霊碑に収められ悲しい無言の帰国となった。

僕自身もこの阿波丸の慰霊碑がある静かな東京の芝増上寺には、日本へ行くたびに時間さえあれば、慰霊碑の前に立ち、倉上香織ちゃんに会いに行っている。

## ■敗戦間近の日本人学校

1945（昭和20）年6月に入ってから、ビルマ戦線の敗退が絡み、タイに対する連合軍の空襲も一段と激しくなった。今まで内密に工作していた連合軍から近代兵器を与えられた、プリデー・パノムヨンを党首とするおよそ8000人に上るセーリータイ（自由タイ）の活躍も活発に動きだしていた。

プリデーはチャウプラヤー川に面したアテイツ通りにあった自分の家（旧FAOがあった所）を、自由タイ司令部本部にし、自分の暗号名をルーフとし、そこから無電を発信し、日本軍に関する情報を送信し、寝返りを打ち時期を待っていた。

自由タイはタマサート大学校内でもスパイ活動を行っていた。当時、タマサート大学はタイ側の管理下に基つき、アメリカ人や、イギリス人など、230名の外国人が軟禁されていた。だが、日本軍は介入する権限はなかった。

1945（昭和20）年6月18日の月曜日の午後13時から15時にかけてB24爆撃機3機と、マスタング戦闘機6機が低空で飛来し、タマサート大学周辺を旋回し、まず、「医薬品を病院のために投下する」と記したビラを撒き、続いて3機の爆撃機から18個の医薬品を落下傘でサナー・ムルワン（大宮広場）の真ん中に投下して飛び去った。

青空から白い大きな落下傘がフワリフワリと落ちてくるのが遠くからでもよく見えた。降下した医薬品は、地下工作をしていたセーリータイ（自由タイ）の手によって素早い速さで回収されてしまった。日本軍はそれを差し押さえることは出来なかった。

インパール作戦ならびに、ビルマ戦線で敗北した日本軍の一部は、ビルマの死の白骨街道を辿り、北部のチャンマイ、チャンラーイ、メーホーンソン、カンチャナブリーを目指して退却した。やっとの思いでタイの国境に辿り着いた兵士のほとんどが銃もなく、靴すらも履いてない兵士も多かった。ボロボロの軍服をまとったまるでミイラのような哀れな姿でチャンマイやメーホーンソ-

ンのお寺に辿り着いた将兵は、地元のタイ人から食糧を与えられ、手厚い介抱を受けた。

だが、栄養失調が伴い、疲労しきった多数の将兵は、可哀想に精根尽きて、餓死でバタバタ倒れ、お寺で永遠の眠りについたのであった。特に戦病死者が酷かったのは、メーホーンソーンのクンユアム周辺だった。

バンコクにもビルマの難関を突破して退却してきた将兵が、外池部隊が駐屯していたルムピニー公園のコ・ロイ（流れ島）で痩せ細った骸骨みたいな疲れ切った体を投げだして休んでいた哀れな姿があった。その中には、中国戦線から、可愛い12、3歳の中国人の子供と一緒に連れてきた第37師団の兵隊などもいたが、みんな寂しそうな表情で寛いでいた。

僕たちの学校にも、7月初め頃から裏のほうにあった講堂にビルマから逃げてきた一般邦人や兵隊が一週間ほどたむろしいた。当時ビルマから逃げてきた人のことを軍部の連中は「ビルマ下がり」と呼んでいた。

その後講堂には、後釜に、日本軍の性の奴隷にされた哀れな朝鮮人の慰安婦が20人ほど寝泊りすることになった。日本人会の婦人会の人たちが可哀想に思い、みんなでせっせと食事の世話をしていた。しかし、バーンラックの市場で売っている牛肉や、めぼしい物はほとんどが軍部に買い占められていたために、美味しそうな物はあまりなかった。

大きな鍋に肉と油が混ざった豚肉やカボチャ、それに大根を刻み、それを一緒にグツグツ煮た同じおかずを毎日食べさせていた。慰安婦の人たちはみんな感謝し、初めの頃は「美味しい、美味しい」と有り難く涙を流して喜んで食べていた。だが、毎日だされる同じような代わりばえのしないおかずが飽きてしまい、最後には「まずい」と、不服を言いだしたために、婦人会の人たちが怒りだし、慰安婦の面倒を見るのをやめてしまった。

その後、慰安婦の人たちは軍部の命令に従い、何処かの慰安所へ移動して行ったのだが、当時とても手に入らなかったキャメイやラックスの石鹸、それに立派な茶碗などを、お礼の気持ちで施し、贅沢品を講堂に残して、いつの間にか姿を消してしまったのだった。

僕が宮脇先生から平仮名や漢字の崩し字を習い始めて間もなくだった。崩し字に興味を持った僕は、毎日崩し字の練習に励んでいたのだが、7月に入ってから、ビルマ戦線から退却してきたフラフラになった見る影もない兵士で講堂が一杯になった。お陰で、授業らしい授業はなく、学校は休校となってしまった。

## ■疎開準備

インパール作戦が失敗に終わった時点から、軍部は北部のチャンマイ、ラムパーンならびに、ナコーンナーヨック、バンコクなどを防衛地区に配備し、戦闘準備を進め、老人婦女子をバンコクから集団疎開させる計画を立てていた。疎開地は一番安全だと見られていた、当時タイ領だったプラタボーン（ボタンバン）市に決定し、老人婦女子全員が疎開しなければならぬことになった。

疎開の計画は7月初旬に具体化し、8月初旬から実施されることになっていた。バツタンバン疎開地計画に關し、日本人会と在郷軍人会の幹部の間で、およそ1000人の老人婦女子の移動ならびに、バツタンバンの集団生活につき、どう配慮するべきかと、深刻な問題を抱えていた。

日本人会から三井物産の森広三郎日本人会々長と、日本人会事務局長の飯塚勉さんが下準備のために汽車でバツタンバンの疎開地を訪れたのは、1945（昭和20）年の7月下旬だった。

疎開地の現場は、バツタンバンの市街から5キロほど離れた閑散とした椰子種の椰子園に囲まれた、面積およそ3000平方メートルほどある敷地内にあった。

現場にはバンコクから派遣された海外土木の中井さんが30人ほどの大工や職人を使い、工事の監督をしていた。全部で10棟建てる予定になっていた建物は、労務者に払うべき物を支払っていなかったために、工事は遅れがちになり、完成した任せそうな家屋はまだ5棟しかなかった。

チーク材で建てた家の屋根はニッパ椰子の葉で覆われ、家屋の間取りは奥行き4・5メートル、間口30メートルで、前に長い廊下があった。各棟ともみつつに仕切られていたが、部屋は更に二室に仕切られ、流し台が着いていた。

各棟の配電もまだ完備されてなく、疎開地全体に物寂しい裸電球がたったひとつぶら下がっているだけだった。部屋の間取りは、ひと部屋に10人が一緒にゴロゴロ寝転がり雑魚寝できそうな広さの部屋だった。だが、寝具はござと毛布、それに蚊帳があるのみで、他にはなにもない実にお粗末なものだった。

森会長は、バツタンバンの銀行に2万バーツの現金を預金し、飯塚さんに「いざ、というときに使っていいから」と言い残して、次の日、急遽バンコクへ帰ってしまった。それに、建築を請け負っていた海外土木の中井さんも、労務者には支払いの後始末もせず、仕事をやりっぱなしでそのままバンコクへ戻ってしまった。

独りぼっちにされた飯塚さんは、疎開受け入れの準備のために現場に残ったが、疎開期日が迫る一方で、工事現場の仕事はぜんぜん捗らなかった。当時バツタンバンには日本の領事館が開設されていたのだが、赴任していた渡辺郁三郎領事からは、疎開に關する連絡はなにもなかった。飯塚さんはバンコクと連絡を取りたい、と思っても、通信事情が悪く、日本人会とは音信不通の状態になっていた。

一方バンコクでは、8月に入った時点で、「バツタンバンの疎開は希望者だけ」と、本人の自由意志に改められた。バツタンバンへの疎開が間近に迫っていた矢先、8月12日、日本大使館からの緊急連絡で「バツタンバンの疎開は一時見合わせる事になった」との連絡で、急に中止となった。しかし、疎開する人たちの個人の荷物はもう既にフラムポーン駅から貨物列車でバツタンバンへ発送された後だった。その荷物は8月13日にバツタンバンの駅に到着し、駅から馬車で疎開地に運び込まれたのだった。飯塚さんは山積みされた荷物を盗まれないように監視しなければならず、毎晩夜警役も兼ねて一人で大変な思いをしていた。

町田先生、宮脇先生や小牟田先生は疎開組だった。金井先生は、金井婦人が大きなお腹を抱えて

いたために、バンコクに残ることになっていた。僕は敵と戦ってもいいと思い、バンコクに残る残留組だった。

いよいよ疎開先がバタンバンに決まってからだった。僕たちバンコク日本人学校の児童生徒は最後のお別れを兼ねて、全員が講に集まってお別れ会をした。金井先生から「こうしてみんなが集まれるのも、これが最後のお別れになるかも知れない」と言われ、みんなは思い思いに自分の住所や、写真、ジュラルミンの小さな飛行機の模型、それに道端で拾ってきた機関銃の弾や、爆弾の破片などを交換し合った。

僕は仲良しだった渡辺幸治君とすっかり手を握り締め、再会を誓った。僕は他の親しかった学友にも別れを惜しみ、「さようなら」と手を振り、笑顔で別れた。僕と別れた幸治君は、それから間もなくバタンバンの領事館で領事をしていたお父さんと一緒に一足先にバタンバンへ赴いたのだった。

8月初旬に入ってからだった。授業はもうなかったが、上級生だった僕は毎日学校に通い、先生と一緒に教科書や、図書室の本を木箱に詰める荷造りの手伝いをした。汗水たらして荷造りした学校の荷物は、8月14日に発送されたが、途中で輸送中止となった。

一方、バタンバンの疎開先にいた飯塚さんは、8月15日に終戦になったことも知らないで、バンコクから疎開団がくるのを待ち侘びていた。だが、8月17日に銀行へ現金を引き出しに行つた折に、銀行員から日本が負けたことを聞き、初めて8月15日に終戦になったことを知つたのだった。

飯塚さんは、海外土木の中井さんが残して行つた、疎開地で残された問題を解消するために、海外土木に雇われていた労務者32人分の未支払いになっていた代金を清算し、不満顔の労務者の気持ちを和ませた。やっと難題を解決し、あとはみんなの荷物の見張り役と、同胞の到着待ちとなった。8月21日の昼頃、なんの前触れもなく、バンコクから金井先生や、町田先生など、日本人学校の先生が荷物を引き取りにきたのだった。

疎開先に山積みされていた荷物は、その日のうちに2台の貨車に積み込んだが、積み込み作業が終わつたのは夜の7時頃だった。みんなの荷物を満載した貨車は最後尾に連結され、列車がバタンバン駅を出発したのは夜の10時頃だった。

列車は途中で数ヶ所の暗闇で停車したが、泥棒が多くて油断できない有り様で、先生方は緊張尽くめで一睡もできなかった。ノロノロ列車がバンコクのパラムポーン中央駅に無事に到着したのは、次の日の夕闇迫る頃だった。一同の任務は終わったわけだが、これで難題を投げ掛けた疎開問題は、終戦のお陰で全員が助かり、完全に終止符を打つたのである。

## ■敗戦への道

地理的に海に囲まれた自国の国防をわきまえ、外地に資源を捜し求めた日本は、関東軍が仕掛けた満州事変をきっかけに、支那事変へと手を伸ばし、更に大東亜戦争へと、気が遠くなるような大

国アメリカ、イギリスを相手に、連合国に挑戦を挑んだ。

大日本帝国の皇軍は国のため、天皇陛下のために身を捧げ、必勝の信念をモットーに全力を尽くして戦い、全戦全勝に帰した。しかし残念ながら、それは開戦勃発当初の一時期だけに過ぎなかった。

世界列強を誇る日本の機動部隊がミッドウェイ開戦で、アメリカに大事な航空母艦4隻を一挙に撃沈されてからは、制海権も制空権も徐々にアメリカに牛耳られ、各地の緒戦で勝ち目のない負け戦が繰り返されるようになった。日本が反撃すればするほど、機動部隊も船舶も、飛行機も、構築した堅固な陣地も、勇敢な連隊も後方からの補給も皆無に等しく、すべてが敵の資源豊かな猛攻に遭遇し、徹底的に叩き潰され、撃滅されるばかりだった。

日本は戦力になくはならない大事な航空母艦や艦艇、それに輸送船が沈められても、それを更に補給し急造する余力はほとんどなかった。航空隊も、実戦機の数はぐっと減り、急遽練習機を改造したりして戦場へ飛ばさなければならぬ事態に迫られていた。

肝心な動力となる燃料もストックが欠乏し、松根油を増産し、代用したりしていたが、それも微々たる物だった。それに熟練した優秀なパイロットが相次ぎ戦死し、飛行機はあれど、後輩の養成が間に合わぬ深刻な問題を抱えていた。

南方や太平洋諸島各地に配備されていた外地部隊は、日本本土との補給ルートが徐々に切断されてしまい、島流し同然な事態に直面し、現地で自活持久体勢を取らなければならず、悲壮な覚悟で戦い、敗戦へ、敗戦へと追い込まれたのである。

日本の喉仏にあたる硫黄島と沖繩がアメリカの機動部隊の猛攻により占領されて以来、慌てた大本営は、戦闘の経験もない銃後である男子を、15歳から60歳まで、女子は17歳から40歳までを動員し、義勇隊に編成し、本土決戦防衛の配備にあてた。

しかし、戦略物資や食糧も欠乏し、食糧難に直面していた日本は、空襲による被害も深刻さを極め、軍事工場の生産も低下する一方で、武器すらも各部隊に十分に行き渡らない事態に追い詰められていた。

軍部の命令に従って航海した輸送船の運命は、海軍の艦隊よりも悲惨極まるものだった。輸送船の甲板に数門の対空戦砲を備えただけの、護衛艦もない、無防備同然の輸送船は、太平洋上で連合軍の潜水艦ならびに、大編隊を組んで飛来する空軍の餌食となった。

集中攻撃を受けた輸送船はひとたまりもなく木の葉を沈めるように海底へ叩き込まれた。終戦当日までに1万5518隻におよぶ大小様々な船舶が沈められ、海上で逃げ場のない乗組員がこの戦争のため悲壮な最期を遂げていたのである。

連合軍は更に日本本土封鎖戦を実施した。空からの徹底的な空爆と、1万2135個の磁気地雷、音響地雷、磁気水圧地雷など、3種類の地雷を日本近海の各港湾に投下し、海上輸送を防止し、外部から完全に孤立させる戦法を打ちだした。

同盟国だったタイも同様にシャム湾（タイ湾）や、南部のアンダマン海も連合軍に制空海権を牛

耳られていたために、1944（昭和19）年2月にタイに入港した万代丸を最後に、日本との輸送ルートは完全に遮断されてしまったし、しかも日本の輸送船はタイの近海でも次のように、敵潜水艦や空軍機の餌食となっていたのである。

タイ湾沖でびるま丸、荒尾山丸。ソングラーで金鈴丸、秋田丸。チュムポーンで越南丸、高砂丸。スラターニーで新東邦丸、#5南名明丸。チョンブリーのシーチャン島で寿洋丸、まだ工事中だったバンコクのクローン・トイ港で九龍丸。アングマン海のプーケツで豊橋丸、#1東曹丸、開南丸を含めて14隻がタイの海底に沈められ、224名の乗組員が名誉の戦死を遂げているのである。

連合軍に航空権を完全に牛耳られた日本は、敵の艦砲射撃まで受ける最悪の事態に落ちたが、日本海を悠々と航海する敵の機動部隊を撃滅する打開策も戦力もないまま本土決戦に挑んだ。

だが、日本の運命は、世界史上始まって以来、アメリカの非人道的な悪魔の原子爆弾の洗礼を受けるはめとなった。アメリカはソ連への圧制も兼ね、戦争に巻き込まれた無実の同胞を殺すために、日本で原爆の実験をしたのである。

日本では戦後無実の者までもが戦犯容疑で死刑に処されている。それならば、日本に原爆投下命令を下し、大殺傷を犯したトルーマン大統領も戦争犯罪者として死刑にすべきである。1945（昭和20）年8月6日、B29により広島に原爆（ウラニウム爆弾……主体ウラニウム235、TNT火薬2トン相当）が投下され、続いて8月9日、第2弾（プルトニウム……主体239、TNT火薬2トン相当）が長崎に投下された。

人類の頭脳によって開発された一発の「ピカドン」と光った原爆。原子爆弾の殺人光線の威力に家屋は一瞬にして瓦礫と変貌し、地獄絵図の中で蠢く同胞の皮膚は焼きただれ、苦しみがき、悲痛な形相で息絶えた哀れな姿は、悲惨さを上回るものだった。

原爆の被爆により、広島で同年末までに約14万人、長崎が7万3884人に上る異常な犠牲者をだした。だが、原爆の傷跡は、70年経っている現在に至るにもかかわらず、まだ癒されることなく、今もなお苦しみ喘いでいる同胞の尊い生命を奪い続けている。

その犠牲者の数は、2000年8月6日および9日の資料（資料は古いが）によると、広島21万7137人、長崎12万4191人である。こんなに大勢の同胞の人たちが悲惨な思いをして亡くなっているのかと思うと、悲しみと同時に怒りが胸に込み上げてくる。戦争に巻き込まれたお陰で、犠牲になった可哀想な犠牲者の方々に頭を深く垂れ、冥福を祈らずにはいられない。

原爆の惨事を機転に、米英と内密に参戦の協定を結んでいたソ連はおっとり刀で、日本との中立条約を破棄し、8月8日、日本に宣戦布告を発し、直ちに朝鮮（現韓国）、北満州、樺太へと破竹の勢いで進撃を開始した。骨抜き同然の関東軍は、戦車隊を先頭に満州国境を突破してきたソ連軍と激戦を交えたが、勢いに乗じた敵を喰いとめることはできなかった。

ソ連の満州進行作戦と同時に、関東軍に置き去りにされ、逃げ遅れた邦人は、155万人もいたのである。この内、特に酷かったのは満州開拓団の家族だった。家庭の大黒柱である約4万人の父兄は軍隊に引き抜かれ、第一戦の防御に配備にされていた。

荒れ果てた開拓地に取り残されていたおよそ23万人のか弱い老若婦女子は逃げるにも同胞を見守るはずの部隊の護衛も援助もほとんどなかった。乗り物もなく、広大な満州荒野を幼児を背負い、足を頼りにトボトボさ迷い、逃走を続けた。が、越境してきたソ連軍に襲撃され、親兄弟や最愛の我が子とも生き別れになり、行方不明を含めて、およそ8万2000人の開拓団の人たちが犠牲になったのである。

朝鮮半島を準備していた部隊も、羅津ならびに、清津に上陸を決行したソ連軍に僅か3週間で北朝鮮全地域を占領されてしまい、もろくも敗北に帰した。日本は原爆の被害ならびに、ソ連の不意打ちを被り、打撃を受け、最悪の事態に達していた。

8月10日の御前会議で、遂に終戦を決意し、米英支（中国は当時支那と呼ばれていた）3国（後にソ連も加入）により、1945（昭和20）年7月26日に宣言されたポツダム宣言を、無条件降伏で受諾することになった。

## ■日本の敗戦を迎えて

1945（昭和20）年8月15日、その日は僕にとっても、日本の国民にとっても、一生忘れることのできない日であった。僕はいつものように早朝に目を覚ました。水を浴びてから階下でポチと遊んでいると、スピードを落としたB24機が一機凄い低空飛行で飛んできた。僕は咄嗟のうちに外に飛びだし、飛行機を見上げた。飛行士の姿がはつきり見える低さだった。だが、機銃掃射をする代わりにバンコクの上空を旋回しながら、無数のビラを撒き散らして飛び去った。

隣近所の人たちがワイワイ騒ぎながら、空から風に揺られてヒラヒラ落ちてくるビラを追いかけていた。僕も一緒になってスリヴオン通りを走り回り、ビラを追っかけた。タイ語で印刷してあったビラを拾って見ると、なんと「日本は降伏した。戦争は終わった」と言うビラだった。

ビラを手にしたタイ人たちは「チャイヨー、チャイヨー（万歳、万歳）戦争終わったぞー、日本は負けたぞー」と、喚声をあげて喜び、あっちこちから喚声が湧き上がった。僕はヤーレヤレ、戦争はやっと終わった。これでもう誰も死なないで済む、と、ホッとした気持ちになった。

大使館からの緊急連絡で「今日、重大な発表があるので在留邦人は全員日ペップリー通りの日本大使館官邸に集合するように」との、隣組からの連絡があった（当時ニューペップリー通りはまだなかった）。こんもりした樹木に覆われた大使館の広場に集まったバンコクの在留邦人は、山本熊一大使が静かに朗読する天皇陛下の終戦勅語を、涙を流して聴き入った。誰も日本は負けるとは思っていないかった。しかも無条件降伏である。

世界に名声を轟かせた80年の伝統を誇った大日本帝国軍国主義時代の日本は遂にドドドーと根こそぎに薙ぎ倒されてしまい、日の丸の国旗をシンボルとし、日本の国家とともに生き残った国民の運命は、敗戦日の弱体化した時点から、アメリカナイズされた民主主義社会へと一変したのである。



## ■中国人街の青天白日旗流血事件

タイは日本軍部の圧力により、1942（昭和17）年1月25日、米英に対して宣戦布告をした。だが、当時アメリカで公使をしていたセーニー・プラモートの機転により「米英に対するタイ政府の宣戦布告を日本の圧力によるものとし、宣戦布告を無効とする。理由はタイ国民の意志ではない」として、直ちにアメリカの留学生を集めてセーリータイ（自由タイ）地下組工作運動を開始した。同時にイギリスでも留学生によるセーリータイ組織を結成し、タイを本部とし、首班のプリデー・パノムヨム摂政をルーフの暗号名で、積極的に連合軍に協力を施した。

タイは日本と同盟国だったので、日本の敗戦と同時にタイも敗戦となるはずである。ところが、タイは日本の圧力によって参戦させられたのである。それと、「宣戦布告文書にはプリデー・パノムヨム摂政のサインがないから無効である」と発表された。

宣戦布告文には、アティツ・ティプアーパー殿下、プリデー・パノムヨム摂政および、チャウパヤー・ピチャイジェン大将摂政3人のサインが必要とされていた。しかし、プリデーはアユッタヤーの故郷に帰っていたために、宣戦布告文にはサインしていなかった。

理由がなんであれ、自由タイ地下組織工作の活躍もあり、タイ独特の二面外交で、かろうじて敗戦を免れ、戦勝国として独立を守り通した世界に類の無い微妙な政治に長けた国家である。

バンコク市内は日本の敗戦の日を皮切りに、重慶から派遣され、今まで地下活動を続けていた抗日分子の工作員がスリヴオン通りに「中華民国国民党海外部駐暹弁事処」と、大きな看板を掲げ白昼堂々とかつ歩いて歩くようになった。

そのために、今まで日本軍に協力していた親日派の華僑が狙われるようになり、真昼間でも暗殺されるようになった。お陰で、一時重慶の殺し屋がはびこる物騒な街となった。この他にも三井物産の牛肉乾燥工場が何者かの手によって放火された事件などが発生し、緊迫した空気が流れていた。

ピブーン内閣時代1939（昭和14）年からずっと苛め続けられて根に恨みを持っていた華僑は「タイは日本がバックアップした汪兆銘行政院長の中華民国政府を認め、しかも米英に宣戦布告した国である。従ってタイも日本と同じく敗戦戦国である。ピブーンも戦犯である」と、宣言をくだった。

当時、300万人ほどいた戦勝国取りの華僑の勢力の風当たりは非常に強かった。終戦後間もなくだったが、華僑の商店では、戦勝国である自国の中華民国の青天白日旗を売りだした。タイ当局は青天白日旗の掲揚を禁止したが、この布告をも無視し、我が物顔でヤワラー通りの中国人街に、大小様々な青天白日旗を一斉に掲げて大々的に戦勝を祝った。

戦時中に華僑の排日運動や、日本人に対するボイコットなどはよく見かけたが、この青天白日旗事件は、未だかつて見たこともない異常な出来事であった。

独立国であるタイを侮辱した行為に怒った当局は、華僑が掲げた青天白日旗の取締りを開始した。しかし、9月20日（日本の資料は9月28日）夜、双方の衝突が起こった。夜陰に乗じて突如として、ダダツダダンと、銃声がこだまし、一晚中激烈な銃撃戦が展開され、最悪の事態となった。

タイ当局は武装した軍警官隊を動員し、数台の装甲車を繰りだして中国人街の要所を封鎖し、重慶分子の鎮圧にかかった。

ヤワラー周辺は、4日間におよぶ市街戦が続き、多数の死傷者をだす事件へと発展した。大惨事を引き起こした中華街の流血事件は、双方の上層部の話し合いで穏便に解決されが、それ以来タイと中国両国間の外交に、長年に亘り大きなしこりを残す結果となった。

## ■敗戦の代価

終戦当初、タイに駐屯していた守備隊は、ビルマ戦線から三三五命から退却してきた将兵とを含めて11万7750人におよぶ兵力がチャンマイ、ラムパーン、ウボン、ソンクラ、ナコーンシータマラート、チュムポーン、ナコーンパトム、バーンポーン、カーンチャナブリー、ラーン、ナコーンナーヨックならびに、バンコクなどの広範囲に配備されていた。

8月15日、日本が無条件降伏したその日から、やっと終戦になったにもかかわらず、お国のために戦った責任感の強い日本軍幹部の武士道精神に燃えた将校の切腹や、自決が各地で相次ぎ起こった。それと同時に、連合軍に武装解除される前に、部隊から私服姿で地下へ潜行する脱走兵も続出した。かの有名な「潜行三千里」の本を出版した黄色い衣を身に纏い、青木憲信と変名し、リヤ寺（ラーチャブラナ寺）の日本人納骨堂に身を潜め、のちに重慶に潜入した辻政信参謀もその中の一人であった。

それは英軍の進駐期間が迫るに従い、タイ全土に普及した。逃走中に当局の警官に逮捕されて豚箱に放り込まれた運の悪かった人もいた。が、特に北部のタイとビルマの国境地帯や、田舎の辺鄙な農村に身を隠し、中国名（主に中国名を名乗っていた）を名乗り、中国人に成りすまして逃げ回り、運よく親切なタイ人に匿ってもらい、のちに世話になった家族の娘と結婚した人たちも多かった。

1945（昭和20）年9月2日は日本では、東京湾に停泊していた米軍の戦艦ミズリー号の艦上で連合軍最高司令官マックアーサー元帥立会いの下に、重光大臣と梅津大本営参謀長両氏が日本を代表して、降伏状に調印した日だった。

バンコクも9月2日の同日に、シンガポールからタイ駐在英軍最高司令官イーバンス少将がドーンムアン空港に到着した。到着後、各地で日本軍の武装解除が行われ、それと同時に、海外の日本人の資産は全部凍結され、家財道具もタイの敵産管理局に没収され、裸一貫にされてしまい、日本人は敵国人と見なされた。

戦時中日本のために尽くした将兵は、前もってなんの尋問も取り調べもなく、そのまま一方的に戦犯容疑の疑いをかけられ、可哀想な憲兵隊員、捕虜収容所の担当者、地下工作で活躍した光機関や中野学校および、その他の関係者の人たち1344人（軍人1302人、軍属37人、台湾人5人）に出頭命令が下され、即時英軍に監禁され、取調べが行われた。

更に9月20日には、引き続き第18方面軍司令官中村明人中将以下660人が終戦処理司令部

関係で、イーバンス少将に管理されていたパヤータイ通り（場所不明）の一角に収容された。

その後、英軍はノンタブリー県のバンクワン刑務所を占領し、英軍の管理下に置き、戦犯容疑者専用の刑務所とし、刑務所の監視所2ヶ所に機関銃を据え、厳重な警戒体制が敷かれた。

敗戦当初、バンクワン刑務所に投獄されていたのは、ビルマのタンビザヤからカーンチャナブリーの死の鉄道で、列車で連行してきた憲兵と、タイに駐屯していたみんなに怖がられていた憲兵約1000人（ビルマから連行された400人を含む）を、やはり戦犯容疑でバンクワン刑務所に監禁していた。重罪犯人と思われた運の悪い可哀想な人は、そのまま死の判決が待ち構えているかもしれないシンガポールのチャンギー刑務所に再送されたのである。

バンコクの日本人社会の機能がすべて閉鎖されたのは、9月2日に英軍の進駐軍がタイに進駐してからだった。プローンチッ通りの英国公使館の一角にあった大日本帝国大使館の機能は9月11日に閉鎖され、9月14日からペツブリー通りにあった大使官邸と隣接していた二階建ての日泰文化会館（柳沢健館長）に軟禁されることになった。

なお、当時バンコクに移住していた婦女子960人を含めて、およそ2100人の在留邦人は、隣組の連絡網により、9月17日の午前12時から外出禁止、自宅軟禁となり、銃を持った警官が玄関の処で見張りに立つようになった。

一般在留邦人の軟禁が開始されたその日から、我が家の門の前にも旧式の小銃を肩からぶら下げた警官が2人ぼさっと退屈そうに立つようになった。元アラビア人がいた家には、マレー半島からきた星野親娘が2人で住んでいた。娘だと言っても年頃は25歳ぐらいの色白のふっくらした肉付きのよい綺麗な女だった。

軟禁されて数日経ってからだった。市内の様子を知りたくなった僕は、門の所で警備している警官に「サワディー」と笑顔で挨拶して「ちょっとだけ外にだしてね」と、いい顔をしてねだったが、警官に「なにか欲しい物があつたら買ってきてあげるから」と言われてあっさり門前払いを食ってしまった。仕方がないので、二階の窓から裏の塀を乗り越えてこっそりと外へ飛びだし、街の様子を偵察して歩いた。

我が家の近くを歩いていると、隣近所の知っている連中が、啞然とした顔で「危ないよ、捕まるかもかも知れないから気をつけなさい」と、心配そうに注意してくれた。僕は「マイペンライ」（大丈夫）と答えて、2時間ほど歩き回った。

つい数日前までは長い軍刀を携え、我が物顔で歩き回っていた戦闘帽を被った将兵の姿はもう街角から消えうせていた。ひっそりした炎天下の道をトコトコ歩いていると、何故か自分の哀れな姿を振り返り、もの悲しい悲哀に満ちた気持ちにかられた。

街の所々に外人向けのバーや、ダンスホールがあった。そこに肌を露出した派手なワンピースを着飾った数人の女性が客待ち顔でたむろしていた。まだ昼間だったせいか豪州兵やイギリス兵の姿はあまり見かけなかった。

僕たちが在留邦人が軟禁されて間もなくだった。夕方になると、日本軍に苛められた敵愾心に燃え

た凶体のでっかいイギリス兵や豪州兵のグループが日本人の家庭を荒らすようになった。その中には、捕虜収容所から解放された連合軍の捕虜も混じっていた。

正規軍からいきなり強盗に変身したヤンキーは玄関で見張っているモタモタした警官を押し退けて、「ヘイ、ジャップ」と叫び、玄関から土足のままズカズカと踏み込み、家宅捜査をし、金目の物を物色して欲しい物を好き勝手にひたたくって持っていった。

僕の一年後輩だった藤島康子さんの家庭も、バーンブワトーン・キャンプ収容所へ連れ去られる直前に豪州兵の侵入により、とんだ災難に遭った。当時、藤島さんは華僑対策を思考して中原報の社長をしていたのだが、康子さんの家族はバンカッピ（現スクムヴィツ・ソーイ53）の日本の通信隊が駐屯していたワッタナー女学校の近くに住んでいた。

或る日、表で犬がワンワン吼えるので、変だなと思っていると、3人の体の大きい豪州兵が、いきなり部屋の中にズカズカと入ってきた。一人は掘りに落ちて全身ずぶ濡れになっていた。応接間や絨毯をビショビショに濡らして獲物を物色していた。が、やがて洋服筆筒の上にあった貴重品が入っている大事なトランクをみつけれられ、ハンマーでぶち壊して、指輪やネックレス、時計、銀の器などを盗られてしまった。

藤島さんは気を利かせてウイスキーを勧めると、「Thanks」と言って、ガブガブ飲み、他の部屋を探索しようとしていた。別室には3人の女性が隠れていた。今井さん、飯塚さん、春さんたち3人は身の危険を感じ、息を凝らし、布団を被ってビクビクしながら隠れていたのだった。家に侵入した3人の豪州兵は、外で待機していた数人の仲間と車庫に閉まってあった大型車を分捕り、補給用のガソリンも失敬し、氣勢を挙げて帰っていった。

我が屋の敷地は何事もなく平穏無事だった。だが、いつ獐猛なヤンキー連中が押しかけてくるかわからない不安にかられ、戦々恐々とした日々を送っていた。戦争とは、勝てば官軍、負ければどんなに侮辱されようと、苛められて殺されようと、一言の文句も、なんにも言えない、敵国人として惨めな配偶者となるものなのだ。

来る日も来る日も何処へも行けず、タバコのアルバイトもなく、なんにもすることもなくただ一日中室内に閉じ籠もって退屈な無意味な日常生活にうんざりしていた。

9月初旬の或る日、日本大使館からの連絡で、「在留邦人はバーンブワトーン・キャンプに抑留されることになった。各自鞆一つのみ。家財道具はリストを作って書類を提出するように……」との連絡があった。僕にはそれがなにを意味しているのか、よくわからなかったが、僕なりにこれで多少は自由な身になれる、開放されるにちがいない、と、胸をわくわくさせた。

日本大使館の人たちが軟禁されたのが9月14日で、在留邦人が自宅軟禁されたのが9月17日だった。だが、タイ当局が在留邦人をバーンブワトーン・キャンプへ移動を開始したのは9月13日からだった。

大使館の人たちは外交官の特権で、コックや歯医者、医者付きでバンコク市内のプラトゥナムに近い旧ペツブリー通り（当時ニューペツブリー通りはなかった）の大使官邸内に軟禁された。大

使館邸の敷地は非常に広く、外の門から中へ入った途中の右側に、鶴見書記長の官邸があった。大使館邸と同じ側に面した2、3ブロック先のパータイ通り寄りにも池田彰副領事の官邸があった。大使館邸の左隣には、幅5メートルほどの小さなクローン（運河）が流れていたが、この向こう岸にテニスコートがある旧式な広い屋敷内に、大きな二階建ての日本文化会館があった。

このクローンに橋を架け、大使館邸内へ行けるようにし、182人（男子71人、女子85人、子供26人）がこの3ヶ所に分散し、使用人の部屋までフルに使用して、日本に送還される日まで窮屈な共同生活を余儀なくされた。

山本大使や参事官、石川総領事は大使館邸内に分散し、同校生の渡辺幸治君や、同級生だった天田米美さんの家族は文化会館の個室で暮らし、独身者は大部屋に詰め込まれていた。池田邸にも大勢の人が共同生活を強いられていた。が、この池田邸のことを、何故だか、みんなは「池田村」と言う愛称で呼んでいた。

1日なにもすることもなく体を持てあましていた大使館員の人たちは、健康のために、早朝に起きて庭園を何回もぐるぐる回って歩いたり、テニスやバレーボールの試合をしたり、ミニゴルフをしたりして汗を流した。時々、みんなで演芸大会をしたり、ニュース映画や、東宝の「男花道」の映画を観たりして、わりとのんびりした日々を送っていた。

### ■資産を没収されてバーンブワトーン・キャンプへ

マウントバツテン最高司令官の指示により9月中旬から自宅に閉じ込められ、連合軍兵士の略奪にビクビクしながら不自由な思いをし、軟禁されていたバンコクの在留邦人はやがてバーンブワトーン・キャンプへ抑留されることになった。

連合軍に武装解除され、惨めな思いを胸に秘め、丸腰にされた日本の将兵は、邦人とは別にバンコク市内の戦勝記念塔の近くにあったサナムパウヤ、パトゥムワンの国立運動場の裏、ドーンムアン空港の先にあった抑留所や、クローン・トリーの英軍が管理していたニューライフキャンプ、同じく英軍が管理していたバンコクから130キロほど離れたナコンナーヨック、それに、バンクワン刑務所などがあった。軍部の収容所は数ヶ所に分離され、カイ・チャロースック（捕虜収容所）と呼ばれていた。

敗戦と同時に、日本の国籍を持った戦争に負けて哀れな身となった日本人は、連合軍から「日本人は戦勝国に対する敵国人である。日本人および、日本邦人の資産は全部凍結する」と厳令され、ルーズなタイ当局内に敵資産管理局が設けられ、日本人の収容所管理をも、タイの政府に委ねた。

日本は陸軍の圧力により、アジア全土に無謀な大東亜戦争の旋風を巻き起こした。軍部に生命を託し、運命をともにしたなにも知らない国民は、操り人形と化し、踊らされ、最後にバラバラにされ、そ知らぬ顔でポイト、捨てられてしまった。

日本が負けたお陰で内地も大変であったであろうが、タイに在住していた邦人は、タイ人と結婚した人以外は、ほとんどの人たちが長年苦勞してコツコツ築き上げた財産も家財道具も全部没収さ

れ、丸裸にされ、涙を呑んでバーンブワトーン・キャンプへ連れ去られたのである。

第一回目のバーンブワトーン・キャンプへの抑留が開始されたのは、9月13日からだった。その頃バンコクの同胞はビルマから引き揚げてきた邦人や、軍属、それに邦人に化けた軍人、それと台湾人、朝鮮人などを含めると、およそ5000人余りに上る数に膨れ上がっていた。

バーンブワトーン・キャンプの所在地は水路でバンコクの北西およそ40キロの地点にあたるノンタブリー県にあった。当時は船でしか行けなかったが、キャンプがあった場所は、実はバンコク市内の空襲が日増しに激化し、官庁地帯も危険なので、1944（昭和19）年3月から4月にかけてバーンブワトーン郡区内の広い田圃の中2ヶ所に分離して、仮小屋が建てられ、官吏の安全を保つために仮官庁事務所地として選択した場所だった。

当時バーンブワトーン・キャンプの側に、自由タイ分子が運営していた赤いレンガを造っていた工場があった。そこに空に高く聳えている赤いレンガの煙突があった。自由タイと隠密に連絡を取り合っていた連合軍の爆撃機はこの赤レンガの煙突を目印に、爆弾を投下しない密約を取り交わしていたので、安全地帯とされていた場所だった。

### ■悲しい抑留前の準備

終戦になってから間もなくだった。隣近所のタイ人の間では「戦争に負け日本人は、今度進駐してくる連合軍になにをされるか何処へ連れて行かれるのかわからない。可哀想に……」という噂が流れていた。実際に今後どうなるのかお先真っ暗な不安にかられていた矢先だっただけに、不安は募る一方だった。

我が家が軟禁される2日ほど前だった。このところずっと憂鬱な顔をし、思案に暮れていた母は誰かに荷物とお金を預けておきたいと言いだした。しかし母に信用できる人は田島のおじさん以外には誰もいなかった。だが、何かを思いつめていた母は、星野さんとも相談し、遂に思い切って同じ敷地内にいた華僑系の家主を訪れ、お金と荷物を内密に預けることに決めたのだった。

僕は母と一緒に、母がいつも大事にしていた和服や、父の荷物が一杯詰まっていた大きな重たいトランク5個をそおつとオーナーの家の二階に運んだ。それと母は手元に残っていた6000バーツの現金をオーナーに預けた。僕自身は、田島のおじさんから護身用に貰っていたお気に入りのお気に入りの小さな銀色の2発入りの拳銃と、ビスケットの空き缶に入れた写真を、皺くちやになつた優しそうなおばさんに「この拳銃と写真をしまつてね」と言つて、可愛いおもちやもみたいな実弾の入った拳銃を渡した。

星野さん親娘「私はお金はあまりありませんけど……」と言つて懐から紙に包んだ3000バーツのお金をオーナーに渡し、「よろしくお願いします」と言つて、頭をさげた。母の甥にあたる田島のおじさんも、トンブリー県にいたタイの友人に2万バーツの大金を預け「これでひと安心そのうちに取りにくるから……」と、ほっとした顔をしていた。

だが僕の心情はおもしろくなかった。それは、母が6000バーツのお金を持っていたのに、何

故いつもお金がない、ないところぼしていたのかさっぱり理解できなかった。それからこの他にも、田島のおじさんから貰った僕の自転車の代金1000バーツが、スリヴオン通りにあった横浜正金銀行に預金されたままで9月17日の敵資産管理局に凍結で没収されてしまったけど、それは僕のお金なのだと思うと、待望の楽しいフワヒンの臨海学校にも行かせて貰えず、暗闇の中でチヨロチヨロ揺れ動く炎を頼りに、一生懸命にタバコ巻きのアルバイトまでしたのに、いつもひもじい思いをし、栄養失調にまでされ、気絶ばかりしていた自分が悲しかった。アア、この人は僕の本当のお母さんなのだろうか、疑いはますます募るばかりだった。

いろんな悩みに悩まされながらも、僕は母と家にあつた家財道具や鍋、釜、茶碗に至るまで綿密に数をチェックし、いつか敵資産管理局から戻ってくるであろうと、浅はかな夢を描き、リストを作りあげた。これでいつでも移動できる準備が整ったわけだが、キャンプへ連れて行かれる日はいつだか定かでなかった。

身の回りの整理が終わった僕は、マラッカで父から貰った短刀だけは常に大事にしまっていた。キャンプへ行くときも一緒に持つて行くつもりだったが、「母から武器に値するから駄目、差し押さえられるから」と言われ、オーナーに預けようかとも思ったのだが、やめて、一階の天井と壁の所にある窪地へ短刀を隠しておくことにした。

僕は短刀を見るたびに、父はいつになったらマラッカから帰ってくるのであろうかと、父の帰りを待っていた。タイで日本軍から召集を受けた人たちは終戦と同時に、本隊から解放され、遠い戦線にいた人たちまでもが数日後にはみんな待ち焦がれていた家族の元に戻っていた。

僕は父もみんなと同じようにすつとんで帰ってくるに違いないと、思っていたのだが、待てど暮らせど父は遂に僕の元には帰ってこなかった。僕に授けたあの形見の短刀はやはり最後のお別れの印だったのだ。

父は初めから僕とはもう二度と会えないことを知っていたのだ。僕は今でもはっきり覚えている。僕が車に乗る直前に僕をぎゅっと抱き締めた父の体の温もりが、目と目でじつと見つめあつたあの一瞬、なにかを物語っていたあの悲しそうなうるんだ父の瞳が、一生忘れることのない父の瞳が、幼い11歳の僕の心に刻み込まれている。また会えると思っていた父、涙こそでなかったが、あれが父との最後の生き別れとなったのだ。父と永遠の別れになろうとは誰が知ろう、運命の悪戯としか思えない。

## ■愛犬ポチとの別れ

今日は何処にあるのか知らないバーンブワトーン・キャンプへ引っ張られてゆく日だった。薄暗いうちに飛び起きた僕は、ザーザー水を浴び、大急ぎで七輪に火を起こし、ご飯を炊き、美味しい肉とご飯を混ぜて、僕の大好きなポチに一日分のご飯を用意しておいた。

ポチはきよとんとした顔で僕の仕草を眺めていたが、僕はポチを膝の上に抱き上げて頭をなでながら、「これがね、僕がポチにしてあげられる最後のお別れのご飯なんだよ、元気でいてね」と、涙

を溜めて、一人でブツブツ呟いた。

僕にとってポチには忘れられない出来事がひとつあった。それはいつの日だったか、夜中にポチが我が家の前にある囲いの高い深い池に嵌ったことがあった。その日は空襲もない静かな晩だった。下からヒーヒー叫ぶなにか助けを求めているような悲痛な声が夢うつに僕の耳元に響いてきた。無意識にガバツと、飛び起きた僕は、そのまま階段を駆けおり、階下の扉を開けるのももどかしく、星明りに照らしだされた池を凝視した。アツ、いた、鼻先だけを突きだしたポチが、今にも沈みそうに喘いでいた。

僕は咄嗟にポチを抱き上げた。ポチはどれぐらい泳いでいたのか知らないが、ガタガタ震えていた。虚ろな眼差しで僕を見つめたポチは安心したのか、ぐったりしてしまった。僕は乾いたタオルで何回もポチの体を拭き、毛布で体を包みベッドの中でやすやす眠っているポチを朝まで抱き締めていた。

ポチはナレーにいたときから僕が拾ってき育てた犬で、悲しいときも、寂しいときも、ポチを抱き締め、ポチの水晶のように透き通った可愛い目に慰められていた僕だった。それだけに、僕にとって、もう二度と会えないかもしれない大好きなポチと別れるのは身を切られるような非常に辛い思いだった。

## ■バーンブワートン・キャンプ

一台の古惚けたガラガラのトラックが我が家に迎えにきたのは午前7時頃だった。学生の制服を身に纏い、戦闘帽を被った僕が2、3着の着替と教科書を詰め込んだ小さなトランクをぶらさげて外にでてみると、隣近所の人たちが大勢見送りにきていた。

口々に「まあー可哀想、可哀想に……」と呟き、ひったくるようにして僕の荷物を持ってくれた。僕がトラックに乗ろうとすると、「なにもないけど、お腹が空いたらこのお菓子を食べてね」と言って、親切なタイの人たちから、飴玉や、お菓子を少しずつ貰った。が、手に持ちきれないほどになつてしまった。

僕はただ「ありがとう、ありがとう」と、お礼を言っていたが、だんだんと喉がつまり、最後には声もせず、涙ぐんでしまった。エンジンをかけっぱなしにしていたトラックは、「さようなら、さようなら」と、手を振る心配そうな表情をした人々の姿を残して、静かに動きだした。

僕に乗せたトラックは、スリヴオン通りの角にあった横浜正金銀行の角を左に曲がり、直ぐヨーロッパホテルの真ん前にあるソーイ・ローンパシー（税関レーン）の路地に右折した。細い道をガタゴトと進み、目の前に洋々と流れているチャウプラー川に面した税関の栈橋の所でピタッと停まった。

僕が乗ったトラックが最後だったらしく、先に連れてこられた140人ほどの人たちが川岸の木陰で寛いで待っていた。僕は僕の仲間がいなくて、見回したが、僕たちの悪戯仲間はいなかった。



大人の人はなにを話しているのか、なにかボソボソ喋っていた。僕には例によって例の如くで、誰もなにも教えてくれなかった。これから一体何処へ連れて行かれるのか、目的地は遠いのか、近いのかさえもぜんぜんわからなかった。

大東亜戦争が勃発したときもそうだった。日本人会の映画が終わった深夜、日高洋行のトラックに乗せられて、がんぢす丸に避難したのだが、大人の人は何故だか子供だった僕にはなにも教えてくれなかった。

大人から除け者にされた僕は、独りぼっちだった。ただソクラーの我が家に暫く同居していた滝川虎若ドクター、それにナラティワートのバーンナラーにいた芝儀一ドクターの家族の顔ぶれが混ざっていたので、なんとなく救われたような気がした。

柔らかな美しい光線を受けた税関の棧橋には、米を積んだりするおよそ50トン積みのがが4艘と、タックボートが2艘、緩やかな波に揺られながら、僕たちが乗り込むのを待っていた。「みなさん並んでください」と叫ぶ、のんびりしたタイの官吏人の指示に従い、各々が大小様々な荷物を手に持ち、フンワリ、フンワリと酔ったように踊っている4艘のがに乗り移った。僕は小谷亀太郎さんのお兄さんにあたる小谷幾多太郎さんと一緒に、最後の4艘目のがに乗せられた。

これから何処へ連れて行かれるのやら、太い丈夫そうな綱で2艘のがを引っ張ったタックボートは川の流れに逆らい、ポンポンと、リズムカルな音を響かせてのろろ動きだした。

半円形のトタン屋根で覆われた風通しの悪いがの中には人と荷物の山で足の踏み場もないほどごった返していた。あまりにも窮屈なので、僕はうしろで舵をとっている船頭さんの横に座り込み、心地よい風に身を任せ、両足を投げだして徐々に遠ざかってゆく両岸の風景をじっと見つめていた。

やがて第一世王の銅像があるサパーン・プツ（プツ橋）に差しかかった。橋の周辺を小さな渡し舟が木の葉のように揺れながら忙しそうに往き来していた。連合軍の空爆で直撃弾を受けたサパーンプツはまだ真ん中から折れたままになっていた。ワツ・アールン（暁の寺院）の隣にあった数隻の駆逐艦や潜水艦が並んでいる海軍基地は無事だったが、ちよつと先のトンブリー駅（バーンコークノイ駅）は爆撃の跡もまだ生々しく残っていた。

トンブリー駅を通過した頃からだったが、所々に点在していた農家がだんだんなくなり、青空に聳えていた協会の塔や家屋は姿を消し、川の両岸は延々と続く果樹園などの緑の樹々に覆われたこともりした森に埋め尽くされた風景に変わり、目を和ませてくれた。

南タイへ行くたびに通過していた懐かしいラーマ六世橋の橋に差し掛かった。いつも汽車の窓からチャウプラー川の流れを見つめていたが、水面からラーマ六世橋を見るのは今回がはじめてだった。その懐かしい橋もプツ橋と同じように爆弾の洗礼を受け、橋げたがすつ飛び、ひん曲がった哀れな鉄の残骸を水面から覗かせていた。

ラーマ六世橋を通過して、蛇のように曲がりくねった川幅の広々したチャウプラー川を遡っていた解は、やがて左手にある川幅の狭いクローン（運河）目指して頭を突っ込んだ。僕たちを鮪詰めにした解が川幅の狭い運河に入ってから、見渡す限り田圃が続き、釣り糸を垂らしている丸木

舟や、のんびりと舟を漕いでいる小舟の数も増えてきた。お陰で凶体の大きいずんぐりした舢舨のスピードは一段と遅くなり、亀の兄弟のような鈍さになってしまった。

女性の肌のように柔らかかった爽やかな光線は、いつの間にか頭上から眩しい光をジリジリ投げつけてきた。トタン屋根は電熱器に早変わりし、窓もない舢舨の中はまるで移動蒸し風呂の中に閉じ込められたような暑さだった。

僕たちは舢舨のなかに押し込められたまま延々と此処まで引っ張られてきたのだが、喉がカラカラに渴いても、飲む水もなかったし、お昼になっても、食べる物も、なにもなかった。それに、肝心な生理的に用をたすトイレすらもなかった。僕は舢舨の屋根の横からジャージャー小便をしたけど、大人の人たちは可哀想にみんな押し黙って我慢していた。

日本は戦争に負けた。サートーンの義部隊の敷地にあった大義神社で、毎月8日の日に、在留邦人が集まって、みんなで心を込めて「どうか日本が戦争に勝ちますように」と、祈禱を重ねた甲斐もなく、残念ながら日本は負けてしまったのだ。

日本は無理な戦争を強いて実行したのだから、負けるのが当然だったのかも知れない。しかも無条件降伏したのだから、自国の国民がどのような仕打ちを受けようと、仕方がないかもしれない。しかし、はつきり言って、原因は国家の責任なのだ。だが何故、罪も関係もない僕たちが今こんなに惨めな思いをしなければならないのであろうか、と思うと、情けなかった。

僕たちを乗せた舢舨はや々とバーンブワートン郡の小さな水門がある所に辿り着いた。水門の所には大小様々な舟が群がり、水門を通過する順番を待っていた。船頭さんのおっさんたちは土手の上でタバコをスパスパ吸いながら手足を伸ばしてのんびりと寛いでいた。

小さな狭い水門を通過するまでかなりの時間を費やし、タックボートに引っぱられた舢舨はまたノロノロと引き摺られながら動きだした。綱を引っ張っているタックボートは、クローン・バーンブワートンとクローン・テンポーとがぶつかって交差しているクローン・パピモンへ徐行しながら入って行った。

今までなにもなかった川岸にはだんだんと民家が増え、やっと活気づいてきた。この辺の住人はイスラム人が多いようで、イスラムの帽子を被った堀の深い良い顔立ちをした住民が両岸から僕たちを黙って見つめていた。

バーンブワートンの小さな町を通過すると、また元の静けさに戻った。夕陽を浴びた舢舨は微風に揺れ動く稲の海原に沿って、ポンポンと煙突からエンジンの音を響かせて、西へ西へと進んで行った。

朝からマツチ箱のような狭苦しい舢舨に缶詰にされ、人間缶詰でもあるまいし、一体僕たちを何処まで連れて行くのかと、思っていると、町からおよそ4キロ離れた右手に第1キャンプが見えてきた。

キャンプの土手の上に懐かしい顔が一杯並んでいる。大谷一之君、保田多美子さん、小泉美さん、池田實君、石畑静子さんなどが、「オーイ正夫」と、叫びながら手を振っている。僕も嬉しくて「や

「あ、元気かー」と叫んでいた。

濁った運河の中には、ふんどし姿で体をごしごと擦りながらアップナーム（水浴）をしている人たちもいたが、なんと、その中に立派な大将髭を生やした泉美代さんのお父さんの生太郎さんが水に漬かってこちらを向いているではないか。目ざとく見つけた僕は、思わず「泉さんのおじさん」と、声をかけた。僕のほうを振り向いたおじさんは「オー、正夫君、君もとうとうやってきたのか」と、元気な声が跳ね返ってきた。

僕は此処でみんなの仲間に入れてもらえると、胸を膨らませたのだが、それは僕の勘違いだった。残念だが、タックボートはそのままゆっくりと第1キャンプを通り過ぎてしまった。第1キャンプはもう満員だったので、僕たちは第1キャンプからおよそ1キロ先にあった第2キャンプに上陸することになった。

## ■第2キャンプ

やっとの思いで着いた第2キャンプは、電気も水道もない水浸しになった拡大した田圃の真ん中であつた。シーンと静まり返った第2キャンプには、まだ誰も入っていないかつた。僕たちのグループが一番乗りだつた。僕は舢舨が岸に着いた途端にヒョイと身軽に地面に飛び降りた。大人の人たちは10時間もじつと座っていたので、疲れたのか、体をくねらせ、背伸びをしたりして舢舨からノロノロおりてきた。

母は船に酔い顔色も悪くすっかり参っていたので、僕は母のトランクも持ち、小高い丘の上にもみんなど並び、人員点呼をとつた。各自の班と部屋が決められ、注意事項が終わってから、やっとう由行動となつた。

第2キャンプは運河を挟んで両側がキャンプになっていた。僕たちがおろされた北岸には竹とニッパ椰子で出来た細長い長屋式のバラックが所狭しとびっしり並んでいた。奥の東寄りの方にも無数の独立家屋が間隔を置き、行儀よく主になる人を待っていた。南岸は規模も小さく独立家屋しかなかったが、まるで幽霊屋敷のような不気味な静けさだつた。

僕は第2班の組だつた。運よく土手から近かつたので楽だつた。だが、キャンプ全体が水浸しになつていたので、僕は運動靴を脱ぎ両方の靴紐を結び、運動靴を首からぶらさげ、母の鞆を猫背になつて背負い、自分の小さな鞆を左脇に抱え込み、膝まである田圃の泥水の中をジャブジャブ歩いた。

僕にあてがわれた部屋は棟の一番端っこの一号室だつた。ただし、今日から星野さん親娘と一緒に共同生活をするこゝになつた。部屋は小さな部屋が一部屋しかなかつたので、僕は狭苦しい台所で寝ることになつた。台所には使い古した埃を被つた小さな七輪、鍋、釜、松脂、茶碗、皿、匙などの食器が申し訳なさそうに顔を覗かせていた。僕はなんとなく物足りなかつたが、仕方がなかつた。

竹の柱にニッパ椰子の葉で仕切られた隣の部屋には、小谷兄弟の兄にあたる小谷幾太郎さん、(弟

のメナムホテルにいた亀太郎さんは一カ月後に入居）が入居したので嬉しかった。小谷さんの部屋には、平山繁さん、平沢雅治さん、それにラノーンの田舎にいた白髪だらけのほっそりした辻田さんを含めて総勢5人だった。第2班の棟は10部屋に区切られていたが、女性がいたのは僕の部屋だけだった。

部屋の中には肝心なトイレはなかったので、何処にあるのかと、周囲を見回すと、裏のほうに竹で囲った扉のない土で高く地盛りしたトイレがあった。が、トイレへ行くには裸足で水の中をジャブジャブ歩いて行かなければならなかった。用をたすにも、足がつるつる滑るので、体を振りながら我慢してゆっくり歩かなければならなかった。

## ■ 偵察

次の日から本格的な抑留生活が始まった。こんなに大勢の人たちと一緒に共同生活するのは生まれて初めてだった。まだ遊び相手がいなかった僕は、戦闘帽のつばを缺でチョキン、チョキンと切り取り、それを頭にちよこんと乗せて、水浸しになったキャンプの中を偵察して歩いた。クローンから溢れ出た水の流れはわりに速く、水嵩は昨日着いたときよりも少し深くなっていた。流れに押されて歩きにくかったが、僕は転ばないように足元を見ながらゆっくりと歩いた。

西寄りの川岸から一番近い一班には滝川さんと芝さんの家族が入っていた。だが、なにか準備をしているらしく忙しそうに動き回っていた。第3班の棟には江畑組の若い連中が占領していた。だけど、僕と同じクラスにいた江畑恵美子さんはいなかったし、彼女のお父さんの姿も見当たらなかった。

川岸の小高い土手の所に、長い銃を肩からぶら下げた痩せた地元の警官が僕たちを監視するために見張りに立っていた。どんなに厳しい顔をしているおっさんかな、と思つて、恐る恐る近づいて見ると、ずるそうな目つきをした警察のおっさんは、非常に愛想がよかった。

広々とした第2キャンプに一番乗りをしたのは僕たちだったのだが、まだ3班までしかなかった。あとは全部空き家だったので、後ろの外れへ行ってみると、なんとなく薄気味悪かった。キャンプの周辺には50センチほどに伸びた稲が一面に植わっていたが、不思議なことに境界線となる筈の鉄条網も垣根もなにもなかった。

それに見張りがいたのは川岸の土手の所一ヶ所だけだった。もっと厳しい収容所かなと、思っていたのだが、想像に反して何処からでも自由に抜け出せる開放的な収容所だったので、僕は緊張感が解け、気がほぐれて楽な気持ちになった。

夕陽が沈み、暗黒の闇に包まれたキャンプの室内で、ゆらゆら揺れる薄暗いランプのほの影で雑談していると、日常品を積んだ小舟がスーツと現れた。はて、なんだろうと、覗いてみると、昼間の警官のおっさんだった。「なんでもありますが、いかがですか」と、笑顔で問いかけてきたので、僕は警官の顔を見るなり、おかしくなってゲラゲラ笑ってしまった。

## ■日射病

広いキャンプをぐるぐる歩き回り、一日中強烈な太陽にこんがりと焼かれた僕の肌は、おでこや、首の付け根からヒリヒリしてきた。喉がカラカラに渴き、体がホカホカして熱っぽくなってきた。体に異常を感じた僕はそそくさと台所の部屋へ戻り、そのまま床の上にゴロンひっくり返り、寝込んでしまった。夕方になったら、また土手へ行って收容所に連れてこられる仲間の人たちを迎えに行こうと、思っていたのだが、両方の目から涙がポロポロ溢れでる40度以上の熱にうなされて、どうしても起き上がれなかった。

翌日になつても熱は一向に下がらず、頭はやかんのように煮えくり返っていた。頭を冷やす氷も、熱冷ましの薬もなにもなかったのので、僕はとろんとした眼差しで、ただウンウン唸っているだけだった。

病気の原因を自分でよく考えてみると、僕はバンコクの税関で舁に乗せられた時点から船頭さんの横に座り、ずっと炎天下に身を任せていたために、どうやら日射病の神様に天罰を与えられたようだった。結局、薬もなにも飲まずに、ただ水だけをガブガブ飲んでた。が、3日目には嘔みたいにけろつと治ってしまった。ガバツと、跳ね起きた僕は、それ以来つばなし戦闘帽を被り、炎天下にもめげず、元気でキャンプの中を駆け巡っていた。

## ■配給品配り

夕方ともなると、みんなで申し合わせでもしたように、第2收容所本部が出来た小屋の近くの土手に集まるようになった。「今日は誰がくるかしら……」と、友人がくるのではないかと、淡い期待をかけ、バンコクから運ばれてくる同胞の舁の定期便を首を長くして待つようになった。

いつものことながら身動きも出来ない舁の中に10時間も放り込まれ、飲まず食わずで延々と運ばれてくる同胞はみんな疲れきっていた。

不安な顔色をした同胞が舁からおりてくるのを見るたびに、僕は自分の胸を締めつけられるような悲しさを覚えた。日本が負けさえしなければ、みんながこんなに惨めな思いをしないですむのにと、思えば思うほど、残念でならなかった。

空き家だったバラック建ての長屋は徐々に奥のほうまで入居者が増え、活気に満ちたキャンプになってきた。水深は日毎に深くなり、奥の棟に住んでいた人たちは舟がなければ出入りできなくなってしまうた。

毎朝7時頃になると、本部の前には朝市ができたように急にガヤガヤと賑やかになる。各班から、班の代表者が集まり、その日に食べる食料品の配給を分配するのだが、袴に鉢巻姿をしたおじさんたちが、手際よくてきぱきと配給品を分配していた。各班ごとに平等分配した食糧を大きな籠に入れ、天秤棒を肩に乗せて威勢よくヨイショと、担ぎ、自分達の班へ元氣よく戻ってゆく。

タイのキャンプを管理している管理局から届けてくれる食べ物、さすがに仏教国だけあって実に豊富な物を恵んでくれた。とにかく、豚肉、牛肉、きゅうり、野菜類などは、ほとんど毎日のよ

うにあったし、鶏肉、米、塩、炭、松脂類は一週間に一回の割り当てで配給されていた。お陰で、毎日食べきれないほどの食糧を頂戴し、栄養満点であった。

初めの頃は人手が足りなかったし、うまく舟を漕げる人がいなかったのも、僕も大人の仲間入りして配給品の手伝いをしていた。僕は毎朝分配された配給品を舟に山積にし、生物が腐らないように上から籠で覆い、高い商人みたいにゆっくりと舟を漕ぎ、「おはようございます。配給です」と、声を張り上げながら、奥のほうにいる各班に、配給品を配って歩いた。

僕が配給品を渡すと、みしらぬおじさんや、おばさんたちが笑顔で「ボーヤ、どうもありがとう」と、お礼の言葉を頂戴した。僕は胸にこだましてくる優しい声を聞くたびに、心が弾み快感を覚えた。

## ■第2キャンプの村造り

第2キャンプは第1キャンプと同じように遂に満員になり、延々とタックボートで引つ張られてくる舳の定期便は、僕たちのキャンプを素通りして更に1キロほど先のほうにある、運河岸に急増された一番小さな第3キャンプへ送られて行った。

第2キャンプは老若男女子供を含めて総勢1980名の集団に膨れ上がり、蜂の巣を突つ突いたようにワイワイ、ガヤガヤと、賑やかになった。やがて、第1、第2、第3キャンプの総合代表者が選ばれ、三井物産の森広三郎支店長（第22代日本人会長）に決定し、各キャンプの村長や、各部の委員が決まり、キャンプの村造りが始まった。

まず、三井物産の会計部長だった宮崎雄一さんの案で、白い矩形の紙に1バーツ、5バーツと書いた2種類の手製のキャンプ内でみんなが自由に使えるキャンプ・マネーが発行された。このお金は、主に使役になりだされた人などのキャンプの事業用に充てられた。最後は第1陣の引き揚げが開始された1946年の月初旬頃まで使用された。

村造りの使役に関しては、各班で任務を分担し、大きな貯水池や井戸堀り、給水塔造り、それと、川岸に近い班では水に濡れないで土手まで歩けるように土を盛り上げて畦道を造ったり、班の部屋から濡れないで裏のトイレへいけるようにするために、太い丸い竹で橋を架けたりする仕事などが待ち構えていた。

初めの頃は各班の各部屋から男が1人ずつ使役としてかりだされていた。僕の部屋には女しかいなかったのも、僕が使役になりだされるはめとなった。子供で使役になりだされたのは僕だけだった。上半身裸になった痩せぎすの僕は、畦道造りのほうに回された。四角に切り取った土の塊をひとつずつ運び、「メーター幅に土を盛り重ねていくのだが、土の塊が大きすぎると、「ヨッコラシヨ」と、気合をかけて持ちあげようとしても、重たくて、どうしても持ち上がらなかった。

すると、親切なおじさんたちが「正夫君、重たいか、ヨシツ」と、言って、更にその土の塊を半分に切り取ってくれたので、僕は大人の人に負けないように泥まみれになって一生懸命に精をだして働いた。仕事が終わってからだだったけど、みんなから「感心な子だ」と褒められ、照れてしまっ

た。

## ■釣り

水浸しになったキャンプにいと、水が引くまでは自由に走り回って遊べる場所もなかった。自分が閉じ込められている部屋の中から釣り糸を垂らして魚を釣ったり、網で小えびを掬ったり、クローンに潜って蛭貝を採ったり、泳いだりして遊んでいた。水が引き、どろどろしたしていた土が太陽の自然光によってセメントのようにカチーンカチーンに固められてからは、子供の天国であった。

僕は一日中なにもすることなく毎日のように釣りに熱中していた。水浸しのキャンプにはみみずは一匹もいなかった。餌は小えびか蛆だった。しかし、蛆のほうがよく釣れたので、僕は土手の所に出来た悪臭が漂っているゴミ捨て場で、ゴミの中でうじょうじょ動き回っている太った丸々した真っ白い蛆を生け捕りにしていた。

汚いかもしれないが、僕は指先で逃げようとする蛆を掴み、用意してきた空き缶に入れて、釣りを楽しんでいた。鮒や、大きな白なまず、雷魚、うなぎ、かまぼこにしたら美味しいプラー・チャラト、などが実に面白いほどよく釣れた。

長さ20センチほどある細長い潜水艦みたいなさよりが水面を水の流れに逆らって一杯泳いでいた。さよりを釣り上げてやろうと、思って、餌を目の前に垂らしても、貴婦人みたいにつんと澄ましたさよりは、振り向きもしなかった。

なんとかして美味しそうなさよりを生け捕りにしてやろうと考えた僕は、柔らかい竹の両端を紐で結び竹の先を水中に沈め、さよりの胴体の真ん中まで竹を誘導してから、いきなりパツと、跳ね上げてみた。すると、さよりの体は弓術の反動で他愛もなく空中に浮き、僕の足元にポトツと落ちてきた。僕はこの要領でさよりも笑いが止まらないほど、自分の思いのままに生け捕りにした。

大きな川えびもいたので、縫い針を火であぶり、えび釣り専用の釣針を作り、糸を垂らして釣ってみたが、時間が掛かる割には釣りにくかった。むしろ潜って草や杭に止まって休んでいるえびをうしろからおっと手を伸ばして捕まえたほうが手っ取り早かった。時間の経つのも忘れて釣りに熱中していると、たまには大きな川蛇が掛かったりして大騒ぎをしたこともあったが、実に楽しいひと時でもあった。

僕は時々ミツキーや、新野郁子ちゃんたちと蛭貝採りをした。クローンの水は茶色に濁っていたので、めくらに変身して潜らなければならなかった。潜って手探りで川底の泥の表面を、軽く手探りでなでまわし、川底一面に小さな蛭貝が群がっている地点で、ゆるやかな川の流れに流されながら、両手で蛭貝を採り、ものの30分も潜っていると、採れた採れた両手一杯に採れた。浅黒い小さな蛭貝がみるみるうちにバケツ一杯に採れた。

## ■キャンプの素顔

かなり落ち着いてきた第2キャンプ内は、相変わらずの水浸し。とにかく右を向いても、左を向いても水だらけだった。水上生活者同然の生活を、一ヶ月も強いられた。大人の人たちは、ほとんど一日中部屋の中に閉じ籠り、碁、将棋、マージャン、花札、トランプ、読書、釣り、編み物などに高じていた。それ以外は、ゴロゴロ寝転ぶ無意味な生活を余儀なくされた。

朝の日課は、みんなの心が通じ合う同じ気持ちだった。各々の部屋から一人、またひとりと、目覚めたばかりの目をショボショボさせながら、霧に濡れたツルツルする丸太の橋を手長猿みたいな格好でフラフラした怪しげな足取りで、トイレへ伝ってゆくさまは、まるでなにか映画を観ているような光景だった。

朝のラッシュが終わる頃、僕も大人に見習いソロソロリとトイレを訪問する番だ。トイレは誰が造ってくれたのか、外から覗けないように簡単な囲いができていた。便器もなにもない土の上にしてしゃがみ込み、股のあいだから下を覗くと、2メートルほど底にどす黒い積み重なったブーンと臭う大便の山には、真っ白い蛆虫の大量がうようよ群がっていた。

僕は臍の下に力を入れ、ウーンと気張り、その蛆の大量の真ん中に糞の爆弾をドスン、ドスンと落とした。直撃弾を受けた蛆虫が慌ててふためき、グシャグシャグシャッと威勢よく這い回った。

僕は白い蛆虫が逃げ回っている姿を見て、一人で楽しむ悪い癖があった。

僕の隣の部屋にいた小谷さんたちの食事は、母や星野さんが作ってあげていた。その代わりに、毎朝配給される配給品は小谷さんたちが貰ってきてくれた。クローンの側の丘の処に大きな共同炊事場があった。其処で炊事をしている人もいたが、母は僕が寝ている台所でおかずをシャーシャー、グツグツ煮詰めたりして料理を作っていた。

みんなで飲む飲料水を汲むのは僕の役目だった。毎朝ではなかったが、僕は給水塔から、肩にギンギン食い込む細長い天秤棒を担ぎ、バケツの水があまりこぼれないように気をつけながら自分の部屋まで水を汲んでいた。初めの頃は肩が痛くなり、かなり堪えたが、慣れてしまおうとなんでもなかった。

日が暮れ、ランプの灯火がユーラユーラ揺れ、原始的なランプ生活に戻る頃になると、みんなで歌を歌ったり、綺麗な星を眺めながら雑談をしたりしたが、寝るのにもわりに早かった。だが、班によつては、棟の所々にガスランプを光々と点し、室内で、夜更けまでガラガラ、ガチャガチャッと、マージャンに高じていた部屋もあった。かなりうるさかったが、誰も文句を言う者もいなかった。バーンブワトーン・キャンは鉄条網もなにもない開放的な収容所だった。しかし、何処からでも自由に出入りできるために、キャンプから逃げだした人も数人もいた。それに、泥棒も多くて油断できなかった。時々夜中に、「泥棒だー、泥棒だー」と、叫ぶ声がこだましてきたりしたが、泥棒はいつも暗闇に乗じて舟で姿を眩ませてしまうのだった。

収容所の外れに植わっていた稲は、雑草とともに背伸びごっこをしていたが、いつの間にか背丈もぐっと伸びていた。水が引き始める頃には、稲も実り、重たい頭をたれてザワザワと風に揺られて踊っていた。



水が引き出すと早いもので、地面は瞬く間にセメントで固めたようにカチンカチンに乾いてしまった。水が引いた途端に、うんざりした水上生活から開放された收容所内は急に生き生きしてきた。アツという間に、凸凹した広い田圃のあっちこっちに立派な野球場や、バレーボールコート、相撲用の土を盛り上げた土俵、それに演芸用の高い舞台などが第1、第2キャンプのみんなの友情に満ちた喜々とした奉仕によって築き上げられた。

それと同時に、各班ごとにベースボールチームや、バレーボールチームなどが編成され、誰もが嬉しそうな笑顔で、元氣よくボールとおっかけっこをしていた。スポーツの他にも、語学塾も盛んになり、タイ語、英語、中国語、フランス語、スペイン語、農業講座、仏教講座、憲法講座、手芸、短歌、俳句、土木、書道、彫刻、将棋、碁、絵画など様々な野外塾が木陰で行われるようになった。この他に、歌謡曲グループ、演芸グループなどが相次ぎ誕生した。

第1キャンプも第2に劣らず、第1キャンプの邦人ゾーンには、「川端屋の甘いぜんざい」、「うどん専門のおかめ屋」、「コロッケと鋤焼の御影屋」、「大黒のスッポン料理屋」、「困った人のための十三質屋」、「モミナ喫茶店」、「大福餅屋」、「豆腐屋」、「納豆屋」、「あん巻き屋」や、キャンプではビルマから引き揚げてきた人たちのために、大使館の援助資金によって、バインブワトーンの町の祐源盛でタバコの葉を仕入れ、キャンプ内でピースのタバコを製造して販売していた「タバコ屋」などが、ずらりと軒を並べて並んでいた。

第1キャンプには台湾人が450人ほど同居していた。台湾人のゾーにも大きな看板を掲げた「支那料理屋」、「うどん屋」、「シヤム料理屋」や、景氣よくレコードを鳴らしていた「喫喫店」などがあり、飲食店街は活気に満ちていた。

第1キャンプでは演劇も盛んだったので劇団も次のように多かった。「金連座」、「明朗座」、「十三劇団」、「パゴダ劇団」、「三登劇団」、「三つ輪劇団」、「バンバトン・シヤンソン劇団」などが誕生し、各劇団員の熱演により、いつ祖国に帰還できるかしの不安にかられたキャンプの人々に微笑みと希望を与えていたのである。

水が引くと同時に、收容所のあっちこっちの班の軒下で、各自が鶏や、アヒル、ガチョウ、豚などの家畜を飼っていた人たちも多く、がちようがグワツグワツ、ガーガー鳴きながら、棟の縁の下を群れをなして歩きまわるようになった。

僕も黒っぽい可愛いガチョウの子を5羽貰ってきて、縁の下で飼っていた。餌は野菜の残りを与えていたが、ガチョウは川岸で泳ぎながら勝手に餌を漁っていたので、丸々と太り、ほったらかしておいても大丈夫だった。一度同胞の誰かにガチョウを泥棒されたことがあった。僕はキャンプの中を歩き回り「ガーガーア、ビービービー」と、声を張り上げて呼んでみたら、或る班の軒下からガーガー叫びながら飛びだしてついてきたことがあった。

第2キャンプにいた白石崇さんが作詞し、作曲した「キャンプの歌」のメロディーが大ヒットした。戦争に負け、收容所に押し込められた切ない身ではあったが、みんなの心を慰めてくれる実に明るい歌だったので、誰もが楽しそうに口ずさんでいた。

「キャンプの歌」

一 蓮華はな咲く仏の国の           メナムのほとりバンブアトン  
竹の柱にニッパの屋根も           住めば都の日本村  
みんな元気で           みんな元気で  
行こうじゃないか           行こうじゃないか

二 村を流れる小川の水も           馴れりや楽しいアブナム（水浴び）だ  
老いも若きも力を    合わせ           暮らしゃ使役も苦にならぬ  
みんな元気で           みんな元気で           行こうじゃないか

三 国に残した家族のことが           気にかかれど    今しばし  
心ほがらにアヒルを飼って           待てば迎えの船もくる  
みんな元気で           みんな元気で           行こうじゃないか

バンブワトーン・キャンプは、第1、第2、第3と、およそ1キロ間隔で3ヶ所に分離されていた。收容所の管理がちよつと厳しかったのは初めの頃だけだった。それは、「キャンプからクローンを渡って向こう岸へ行つてはいけない。町へ行つてもいけない」などと、注意されただけで、その後はバンブワトーンの町へも交代で自由に行き来できるようになった。

僕たちが收容されていたキャンプのことを、地元のタイ人は、「カイ・ジープン」（日本の抑留所）、「ムーバーン・ジープン」（日本村）、クローン・ジープン）（日本の運河）と呼んでいた。が、僕たちは「日本村」の愛称で呼んでいた。

第1キャンプ内には、約450名の台湾人を含めて、日本人は1222名（男1037名、女100名、子供90名）で約1670名が同居していた。台湾の人たちは独身者は、第24、25、26班の大部屋に約150名ずつ詰め込まれていた。家族持ちの僕の同級生の許春子さんや、洪瑟瑟さんの家族は10部屋に仕切られたバラック建ての長屋に入居していた。

戦時中は日本人と認められ、日本名や日本の国籍まで持っていた台湾の人たちも日本人と同じ收容所に入っていた。だが、日本の敗戦と同時に中国の中華民国政府から「台湾人は中国人である。従って、台湾人は日本に勝った戦勝国の国民である」と指摘され、急遽中国人にされてしまった。

一方日本も、戦時中は台湾人も、朝鮮人も日本名に変名させ、日本人として認めていた。が、敗戦と同時に両者は日本人ではない、と否定されてしまった。従って、第1キャンプで日本人と共同生活を強いられいた台湾の人たちは、実に複雑な気持ちで辛い思いで、日本人と交流を交えなければならなかった。

第1キャンプに、中華民国の大使を筆頭に、中国から使節団が台湾人を訪問したのは1945（昭和20）年11月初旬だった。その日、台湾の人たちは中国語で会話を交わし、爆竹をバンバン鳴

らして中国の使節団を大歓迎したのだった。

第1キャンプの反対側の南岸にひっそりした独立家屋が5軒ほど並んでいた。そこにはいつも肩から銃をぶらさげたタイの警官が交代で見張りに立っていた。初めの頃は誰も気がつかなかったが、そこは連合軍から「戦犯容疑者だ」と睨まれた人たちを取り調べる仮監視所であり、独房だった。

光機関の鈴木さんも取調べを受けていた。第1キャンプに入っていた大南会社に勤務していた南正一さんも取調べを受けたひとりだった。南さんの場合は運よく何事もなく無事にキャンプに戻ってきた。しかし、第2キャンプの独立家屋に入居し、着いた翌日大きな蠍に刺された藤島健一さんも英軍から呼びだしを受けた。「直ぐ帰ってくるから」と、気軽に家族と別れた藤島さんは、第1の独房で取調べを受け、数日後にそのままノンタブリー県のバンクワン刑務所へ連行されてしまったのだった。

軍部に関係のあった人たちはほとんどが呼びだしを受けいたために、「キャンプ内に連合軍のスパイがいる」と、ひそひそ囁かれるようになった。それと、「連合軍から呼びだしがあると、怖い、いつバンクワン刑務所へ引っ張られていくかわからない。運が悪ければシンガポールまで連行されて最後は死刑だ」という、噂まで流れ、軍部に関係があった人たちは戦々恐々としたものを抱いていた。

西の上流の外れのクローン沿い岸にあった第3キャンプは後から急増されたキャンプで9棟しかない一番小さなキャンプだった。総勢僅か270名（男220名、女41名、子供9名）が収容されていた。このうち大使館に所属していた人たちが164名と大使館員が半数を占めていた。この小さな第3キャンプには、ビルマからさがってきた人や、有名な画家や、写真師が収容されていた。それに、一時辻参謀と一緒にリヤプ寺の日本人納骨堂に身を潜め、のちにマハータート寺にいた7人の部下も、留学僧に変身して入っていた。

7人の留学僧は第1棟の6号室に、小林憲雄さん、小沢常敏さん、富永徳孝さん3人が入居し、隣の7号室に久保厚仁さん、中島節也さん、矢神邦雄さん、福沢孝さん4人が入っていた。この他に、納骨堂の堂守をしていた智野藤吉僧などを含めると、8人もの僧がいて毎日厳かにお経を唱えていた。

クローンの風景を描き続けていた、バンコクで有名な横田仁郎画伯や、フランスでグラフィック・デザイナーとして有名になった里見宗次さんの家族、それにチャンマイで有名な写真師だった田中盛之助さんや、波多野秀さんも第3キャンプに入っていた。田中さんも、波多野さんも妻子がタイ人だったので家族をチャンマイに残したまま、東洋綿花の社員だった仲谷正一さんと3人で、第3棟の6号室に入居していた。

横田先生はよく第2キャンプの川岸でキャンパスを立てて、日がな一日1人でせっせとクローンの庶民の生活風景を描いていた。僕が時々覗きに行くと、濃い眉毛をピクツと動かし、にっこり笑って「正夫ちゃん、絵を描いてみないかい面白いよ」と、何回も誘われた。僕は学校にいた頃から絵を描くのは苦手だったし、あまり好きではなかったので、いつも「いやです」と、首を横に振っ

て逃げていた。

いつも第2キャンプのクロウンの川岸で絵を描いていた横田先生が暫く姿を見せなかった。どうしたのかと、思っていると、横田先生の最愛の奥さん、保子さんが盲腸を患い、キャンプで手術したのだが、手術の結果はあんまり芳しくなく、遂に息を引き取ってしまったのだった。医療設備さえきちんと整っていればこんな悲しい自体は起こらなかったであろうに、バーンブワトーンの町の市場に近いクロウンに面したワツ・ラハーン（ラハーン寺）で火葬し、奥様を亡くした横田先生は可哀想に暫くしょんぼりしていた。

## ■スポーツ大会

第1収容所で日本人対台湾人の親善運動会が開催されたのは、1945（昭和20）年11月末だった。これをきっかけに、スポーツ大会が本格的に開始されたのは、新年を迎えた1946（昭和21）年1月7日から始まった相撲大会だった。台湾人対日本人の対抗試合もあったが、一番強かったのは、5人抜きをした古川さんで、次が3人抜きをした豊永さんだった。

野球大会は1月29日から試合が開始された。朝日チーム、巨人チーム、金蓮チーム、桜チーム、ドラゴンチーム、コンドルチームなどが編成され、全員がグラウンドに勢ぞろいしたときの姿は実に壮観なものだった。試合はみんな練習していただけあって、実にうまく、気持ちのよい素晴らしいプレーぶりを発揮した。試合もよかったが、各々チームの応援団の仕方も非常に面白かった。ドラをジャンジャン鳴らし、相手を茶化したりして観客を大いに笑わせ、熱狂に巻き込んだ。

各チームごとの試合は勝ち抜き戦だった。最終日の2月2日まで挑んだチームが巨人対金蓮チームだった。巨人は大田さんと岩崎さん2人が素晴らしいプレーぶりを見せた。前半で負けていた巨人は、最終的に優勝し、大喝采を浴びた。その後、第1対第2の対抗試合が数回繰り返され、収容所内は野球ブームが続き、そのたびに収容所全体が湧き返ったのだった。

野球に続き、濁ったクロウンで水泳大会が始まった。両岸は黒山の人で埋まり、ワイワイ叫ぶ応援の声が入り乱れて飛び交った。僕も子供組で大人に混じって競泳にでてみたが、白線もなにもない流れているクロウンで泳ぐには、顔を上げて抜き手で泳ぐのが一番速かった。種目はクロール、平、潜水、なに型でもよし、宝拾いなどと多種目にわたって行われた。僕は全種目に挑戦してみたが、勝ったり負けたりしてとても楽しかった。勝った人には賞がでたが、楽しみにしていた賞品は、なんと、小さなマナウ（レモン）だった。しかし、それでも嬉しかった。

魚釣り大会も行われた。手に手にバケツや籠を持った釣りに自信がある人たちが川岸にずらりと勢揃いした。大小様々な釣竿が林立し、「やー釣れた、釣れた」と大騒ぎをし、実に楽しそうな雰囲気だった。大きな魚はなかなか釣れなかったが、髭の生えた白っぽいギーギー（なまず）がよく釣れた。

或る日のことだった。朝起きて川岸にでて見てみると、このなまずの仲間である小さなギーギーの子が水面一杯に顔をだして泳いでいた。手で掬っても捕れるぐらいだった。このギーギーは、い

つもギーギー鳴くので、みんなが「ギーギー魚」と呼んでいた。

## ■ブカブカの運動靴

運動会があったのは、空がどんより曇っていた4月29日の天長節の日（昭和天皇の誕生日）だった。その日は僕たち児童も全員出場することになっていたので、みんな張り切っていた。僕はスポーツにかけては自信を持っていた。しかし、収容所内を毎日元気よく駆け回っていた僕の運動靴の底はすっかり擦り切れて穴だらけになっていた。歩いても土の塊や、いろんなものが靴の中入ってきて足が痛くなるし、もう使い物にならない代物になっていた。

僕は運動会が始まる数日前から「新しい運動靴を買って」と、母に何回もせがんでいたのだが、運動会が始まる当日になってもついに買って貰えなかったもので、裸足で走るつもりでいた。だが、僕の班にいた親切なおじさんが僕が困っている様子を見かねて「おじさんの運動靴を貸してあげるよ」と言って、運動靴を貸してくれた。僕は「ありがとう」と、お礼を述べて、早速その靴を履いてみた。だが、その運動靴は重たくて足が抜けそうなくらいブカブカしていた。しかし履かないよりはましだと思い、その運動靴を履いて競争に挑んだ。

運動会は僕たちの子供組みから開始された。最初は確か幼稚園児からだったと思うが、やがて僕の番となった。僕はボーイングや、宏一君たち数人と一緒にスタートラインに並んだ。「よいいドン」の合図と同時にみんな一斉に走り出した。

僕は全速力で走った。だが靴がブカでなかなか思うように走れなかった。大股に走ると、却って遅くなるので、歩幅を小刻みにして走ったが、それでも気ばかり焦ってみんなにどんどん抜かされるばかりだった。横からみんなが「正夫頑張れー、正夫頑張れー」と、一生懸命に応援してくれた。僕が、僕は目を真っ赤に腫らし、泣きながら走っていた。

僕はとうとうビリになってしまった。しかしそれでも、金井先生や町田先生が「正夫、よく頑張った」と、肩を軽く叩いて慰めてくださった。あーあーなんと情けないこと、僕は自分の身の哀れさに、ただシクシク泣きじゃくっていた。

## ■演芸会

収容所の生活は時々使役にかりだされるだけで、わりと平穩無事だった。室内では碁や将棋に熱中し、棟の木陰では様々な野外講座や塾が開かれ、広々した運動場では野球やバスケットボール、バレーボール、相撲の試合などが盛んに行われるようになった。

しかし、娯楽と称するものは、ときたま劇団のメンバーが知恵を振り絞って披露する演芸会以外にはなにもなかった。従って、みんなの関心はこの演芸会に集中されていた。演芸部は第1キャンプと、第2キャンプに分かれていたが、お互いに交替で行き来しながら双方のキャンプで演技を披露していた。ただし、雨が降ったりしたときは、地面がグシャグシャになるので、急に中止になることもあった。

演芸会がある晩は、屋根もなんにもない舞台にガスランプが光々と点され、舞台の周囲は黒山の人で埋め尽くされてしまうのだった。舞台に出演する人たちにとっては桧舞台であり、観衆にとっては沈んだ不安な気持ちを和ませ、遠い故郷へ思いを走らせる笑いと、涙にほろ酔うひとときでもあった。

それはお餅もお雑煮もない1946(昭和21)年の怪しい新年を迎えた1月5日のことだった。第2キャンプでは新年を記念して演芸大会が開催された。この日もいつものように観衆から「そして、どうした、オーいいぞー」などと野次馬が飛んだりして、ドツと爆笑が起こっていた。

丁度観衆が湧き上がっていたときだった。舞台の上で演じる名演技に見とれていると、澄ちゃんが舞台に登場し、歌とハーモニカのメロディーに合わせて、しなやかに奴さんを踊った。続いて地蓄音機から流れる「赤木の子守唄」のメロディーの曲に乗って、可愛い勘太郎役に扮したブーちゃん(浅井信子Ⅱ浅丘ルリ子)を背負った三菱商事の大場功さんが「泣くなよしよしーねんねしな……」と、歌いながら舞台上に現れた。いかにも子供をあやして寝かせつけようと大場さんの仕種と、ブーちゃんの眠そうな表情に、場内から嵐のような喝采が沸き起こった。スポットライトもなんにもない美しい星がキラキラ輝くお粗末な野外劇場で初舞台だったブーちゃんにとってこれが正に未来への桧舞台となったのである。

## ■ひばり幼稚園

第2はキャンプには、僕たち児童のほかにも幼稚園児が大勢うるちよろしていた。だが、初め頃は誰も面倒を見る人がいなかった。ひばり幼稚園が独立家屋の反対側の小高い丘の上にできたのは、地上の水分がどんどん蒸発してしまう乾季に入った11月中頃からではないかと思う。

ひばり幼稚園の園長さんになった人は、僕の知っている澄子さんのお父さん、浅井源治郎さんだった。澄ちゃんのお父さんは東亜文書院の出身で、戦時中は日本軍に物資を補給するために、バンコクで中原公司を設立し、藤島健一社長と一緒に支配人を勤め、軍部のために尽くしていた人だった。

ひばり幼稚園には2歳から6歳までの可愛い園児が30名ほど入っていた。いつも歌を歌ったり、遊戯をしたりしてワイワイ遊んでいたのも、実に楽しそうな雰囲気溢れた幼稚園だった。

澄ちゃんのお母さんと、ちようさんが子供の面倒を見ていたが、この他にも、園児の世話をしていた先生は、優しい中村女史を筆頭に、特に、ビルマ戦線の難関を命からがら突破してきた3人の幼児専門の先生などだった。先生は常に園児と一体となり、親身になって指導にあたっていた。

僕とよく遊んでいた澄ちゃんは小学三年生だった。澄ちゃんにはまだ下に目のくるっとしたブーちゃん(信子)、それに清子ちゃん、由美ちゃんと小さな悪戯盛りの妹が3人もいた。姉妹が4人もいた浅井家の狭い部屋はまるで蜂の巣を突つ突いたような賑やかさだった。

澄ちゃんの妹は3人ともこのキャンプのひばり幼稚園に入っていた。その中の1人、次女にあたる当時6歳だったブーちゃんは、後に俳優になるチャンスに恵まれた。それは、ブーちゃんがバー

ンブワトーン・キャンプから日本へ送還され、まだ復興中の悲惨な思いで暮らしていた小学五年生のときだった。運よく日活の映画「緑はるかに」で、ルリ子の子役に扮してデビューしたのがきっかけだったが、それ以来ブーちゃんは浅丘ルリ子の芸名で一躍有名な大スターになったのである。敗戦の辛苦を乗り越えたブーちゃん。僕等の仲間だったブーちゃん。僅か30人ほどしかいなかったあの思い出深いバートン・キャンプのひばり幼稚園から有名なスターが誕生したのだ。あーあ、なんと喜ばしいことであろう。

## ■第2キャンプの学校

第2キャンプの東に面した一番端っこにあたる場所に僕たちのみずぼらしい学校がオープンしたのは11月初め頃だった。竹の柱でできた細長いバラック建てのニッパウスを、学校に改良したものだ。ニッパ椰子の壁で仕切られた窓もない狭い教室だった。教室の中には長椅子みたいな低い細長い小さなテーブルが並んでいたが、黒板もなんにもないお粗末なものだった。

学校の先生は運よく全員が第2キャンプの川向こうの独立家屋に入っていたので、僕たちを指導する教師の心配はなかった。僕はたまたま習っていた教科書を全部持ってきていたので助かったが、教科書がない人たちは、両親が苦勞して教科書を帳面に写し取ったりしなければならなかった。

僕たちは教材がなくて困っていた丁度その頃だった。日本本土では、教科書があっても戦争に負けたために、今まで習っていた教科書を、文部省の新日本建設教育方針に従い、逆に「不要だ」と、指摘された部分を強制的に墨で塗り潰し、消さなければならぬはめに落ちていた。

原因は軍国主義当時の敵愾心および英雄死的精神を無知な児童に植え付けるために、教科書を作り上げた日本の教育方針に大きな過失があったからである。だが、僕たちバートン・キャンプの生徒は、戦時中の教科書を写し取り、そのまま勉強を続けていた。

つばなし戦闘帽を被り、毎日釣りに熱中し、クローンで泳いだり、田圃の中を裸足で走りまわったりしていた僕はまるでくろんぼみたいに真っ黒になっていた。僕は何故か毎朝暗いうちから目が覚める癖があった。一旦目が覚めると、もう眠れなくなり、ゴソゴソ起きだすのだが、外はまだ真っ暗だった。

僕はじつとしていられないに性分だったので、いつもそうするのだが、片手にバケツをぶらさげて、まだ寝静まっている薄暗い川岸から茶碗皿を洗ったりする雑用水をせっせと汲んだりして時間を潰していた。

僕は学校が始まってからは何故だか自分でもわからないのだが、不思議なことに朝はなにも食べない癖がついてしまった。外が明るくなりだす頃には、もういても立ってもいられなくなり、凸凹した畦道をピョンピョン飛び跳ね、胸を弾ませて大好きなあばら小屋みたいな風でギシギシ軋む学校へすっ飛んでいた。

僕は当時の高等科（現中学）一年生になっていたのだが、第2キャンプには僕と同じクラスにいた同級生は誰もいなかった。僕のクラスにいた米美さんはバンコクの大使官邸内に軟禁されていた

し、英美代さんと恵美ちゃんは母がタイ人だったのでキャンプには入っていないかった。僕と親しかつた實ちゃんは第1キャンプにいたので多少は救われた。

実は僕と同じクラスにいた、瑟ちゃんや、春子さん、素真さん、建国さんたち4人は第1キャンプにいたのだが、台湾人だったために、残念ながら日本人と認められず、寂しい話だけでも日本人学校へ行くのは拒否され、第1から第2キャンプの学校に通っていたのは實ちゃんだけだった。

元日本人と称していた台湾の人たちは日本の敗戦と同時に「日本人ではない」と言われ、何故だか一部の日本人に冷たい目で「台湾人だから」と、軽視された。キャブにいた僕の同級生の仲間も「日本人に軽視され、嫌な思いをした」と、憤慨していた。

第1キャンプでは、第2キャンプよりも先に大谷長三さんの家で授業が開始されていた。初めの頃は読売新聞の石坂さんと、大谷さんが先生をしていたが、後に、小牟田先生と、松崎先生が教えるようになった。第2キャンプで学校の授業が開始されると、第1キャンプからは上級生だけが通ってくるようになった。第1キャンプの生徒は初めの頃は、舟で通っていた。だが、水が完全に引いてからは田圃伝いに歩いてくるようになった。

僕は当時六年生だった藤島康子ちゃんたちのクラスと一緒に教室で勉強することになった。僕と實ちゃんは何処かの借猫みたいにも後ろの席にぼつねんと座っていた。康子ちゃんたちのクラスには、ミッキー（新野充男）、日高百合江ちゃん、ビーちゃん（宮脇虹華）、それと、第1キャンプから、大谷一之君、保田多美子さん、小泉美和子さんの3人が通っていた。それに、第3キャンプからもほろのついたサンパン（手漕ぎボート）で、久松幸枝さん、ボーイング（里見時宗）、イソッペー（磯宏一）と、3人のクラスメイトが勉強にきていたので、6年の組は総勢10人の同級生が揃っていた。

戦時中は日本の方針で英語を話す者は「非国民だー国賊だー」と言われ、厳禁されていた英語を、僕はこのキャンプで生まれて初めて習った。英語の担任の先生は、海野先生だったと思うが、先生から「ABCDE」と、英語のアルファベットを習い、男、女、犬、猫、猿などの単語や、アクセントの出し方などを、毎日少しずつではあったが、スローテンポで頭の中に叩き込まされた。

ローマ字の書きき方なども習い、直ぐ横文字で自分の名前が書けるようになった。僕は英語を勉強しているうちに、英語の方が日本語よりもずっと易しいんだなあと、感じるようになった。

日本語の科目は、その日、その日に決められた時間表はなかった。国語と算数（僕は代数だった）に重点がおかれ、よく書き取りをさせられた。その他の国史、地理などの科目はまあまあで、あとはスポーツだった。スポーツと言っても運動場らしき場所はなかった。地面が凸凹していたために運動できる種目は限られ、いつも簡単にできる野球ばかりやっていた。僕たちは休み時間のときも男女混合でキャツキャ叫びながらキャッチボールばかり楽しんでた。

僕は何処へ行っても相変わらずの貧乏性だった。恥ずかしいかな野球のボールも、ミットもグローブもなにも持っていなかった。いつもみんなのを借りて遊んでいたが、野球も好きだった僕は、瞬くの上に上手になってしまい、いつもピッチャーばかりやっていた。



僕の相棒のキャッチャー役は、康子ちゃんの弟の健君だった。健君は5年生だったが、僕は彼とは馬が合い、キャンプでは一番親しかった。いつも夕方になると、2人で健君がいた独立家屋の近くで薄暗くなりかける頃まで、ボールの投げ方を工夫しながら精魂込めて練習に励んでいた。

或る日のこと、健君は僕が投げた速球を受け取り損ねて小指を突いてしまった。健君は「小指が痛い、痛い」と、顔をしかめて、左手の少し曲がった小指を押さえていた。その突き指をした小指は戦後70年も経過した現在も未だに曲がったままである。健君には実に済まないことをしてしまった。

## ■楽しかった学校

風が吹けばギシギシ軋む板張りにござが敷いてある教室にぺたっと座り込み、僕たちは相変わらず元気で勉強に励んでいた。僕たちのクラスは、スポーツの先生でもある町田先生に指導を受けていた。学校に運動場がなかったので、「みんなで簡単な運動場を造ろう」ということになった。早速休み時間を利用して教室の後ろのほうにあった田圃で、枯れ草をもぎ取り、走っても躓かないように地ならしをした。

運動場の整備ができてからは、野球は勿論、おにごっこや、ドッチボールなどもして、みんなと手を繋ぎ元気に飛び跳ねて楽しんだ。或る日のこと、野球の試合をしているときだった。打ったボールが後ろの細長い池の中にボチャーンと落っこってしまった。

僕がボールを取りに行こうとすると、町田先生が「よし、先生が取ってあげる」と言って、体の前に突き出し、手を差し伸ばした。が、その刹那に、先生の足が柔らかい土の中にめり込み、体の重みでそのままズルズルと、池の中に嵌ってしまった。僕たちはみんなで先生の手を持って、ヨイショ、ヨイショと掛け声をかけて池から引っ張りあげた。僕はしぶ濡れになった先生の面白い顔を見て、思わずお腹を抱えてクスクス、ゲラゲラ笑ってしまった。

1946（昭和21）年1月20日は晴れたよい天気だった。僕たち第2キャンプの生徒は朝から第1キャンプへ遠足にでかけた。キャンプに収容されていても自由に遠足ができるなんて夢にも思っていなかっただけに、とても嬉しかった。僕たちは学校に集合し、二列に並んでペチャペチャ喋りながら田圃伝いに第1キャンプを目指して歩いて行った。

僕は第2キャンプから一步も外へ出たこともなかったし、第1キャンプへ行くのも初めてだった。第1キャンプの外れの後ろのほうには農家が多く、野菜や、唐辛子などを植えた畑に、農民がせつせと水を撒いていた。

第1キャンプには竹藪が多く、蜜蜂の巣も多かった。広い池にはかまぼこにすると美味しい黒い斑点の着いた平べったい大きなプラー・カリーが泳いでいた。それと第2にはなかった、のれんを掛けたりどん屋さんや、きんときなどを売っている売店がずらっと並んでいた。なんとなく活気があったし、飲食店があるなんて珍しかったので僕にとっては驚きであった。

第1キャンプでは、去年の8月に学校で別れて以来久しぶりに会えた友達も多かった。だけでも

残念なことに同級生だった台湾籍の仲間には誰にも会えなかった。何故、台湾人と日本人を区別しなければならぬのか理解できなかった。いずれにしても、僕はみんなと一緒に昼ごはんを食べたり、歌を歌ったり、遊戯をして遊んだりして、最後に「さようなら」と、手を振って別れたが、それがみんなと最後の別れになるとは夢にも思っていなかった。今回の遠足で、何故だか僕の心に印象に残ったのは、第1キャンパスの外れで見た甲斐甲斐しく畑仕事をしている農民の姿だった。

## ■最後の卒業式

毎日午前中だけだったが、みんなと顔を合わせてジリジリ照り付ける炎天下で、先生と一緒に愉快地遊び、楽しい授業に明け暮れし、伸び伸びと過ごしていた僕たちだった。早いものでキャンパスの学校が始まってからもう既に5ヶ月もの月日が経過していた。

ミツキーたちの第17回目の卒業式があったのは、蒸し暑い日々が続いていた1946（昭和21）年3月25日だった。卒業式が始まる前までは、みんなで冗談を言ったりして、グラグラ笑いこけていた僕たちだった。しかし、式が始まると、みんな緊張してシーンとってしまった。

卒業式の式場は、椅子もなにもないカラカラに乾いた校舎の日陰になった田圃だった。卒業生が先頭に立ち、僕たちはその後ろに並んで立った。先生は僕たちの真正面に立ち、参列した父母は風でギンギン軋む校舎の横に面して静かに立っていた。

最初に金井校長先生の訓示があった。金井先生はなにかを語りかけるように、物静かに話しだした。「今日、この晴れたバーンブワトーン・キャンプのなにもない青空の下でみなさんの卒業式を迎えることになりました。みなさんは今もう直ぐ日本へ帰ることになると思いますが、これが我々盤谷日本国民学校最後の卒業式になります。みなさんは、いずれは親しい友達とお別れしなければならぬときがきます。人生は、一旦別れてしまうと、もう二度と会えなくなる人もいます。これから先もいろいろな苦勞が伴うと思いますが、今後の日本の復興のために、元気で頑張ってください。云々」と言った、しみみりしたものであった。

続いて卒業生代表で、ミツキーがでる番だった。ミツキーは一步前へ進みでて、自分で書いた「お別れの言葉」の書状を開き、声を張り上げてゆつくりと朗読し始めた。内容は、バンコクの学校生活から始まり、戦時中の空襲のことや、軍事教練、キャンプの学校、そして、最後に恩師に対するお礼の言葉だった。ミツキーはほんの数行読みあげただけで声が詰まってしまい、シクシク泣きだしてしまった。が、それでもミツキーの、声を振り絞るような切ない悲痛な声が、とぎれ、とぎれにヒューヒュー吹き付ける風とともに、耳元に響いてきた。

全身の力が抜けたように、ミツキーが元の位置に戻ると、タクトを持った宮脇アキエ先生がごく自然に僕たちの前に立った。ピアノの演奏もなく、アキエ先生のタクトに合わせて、10名の卒業生の最後のお別れの曲「仰げば尊し」を、すすり泣ながら歌いだした。

一 仰げば尊し

我が師の恩

教えの庭にも

はや幾年

思えばいとし

この年月

今こそ別れめ

いざさらば

二 互いに睦みし 日頃の恩 別るる後にも やよ忘るな  
身を立て名をあげ やよ励めよ 今こそ別れめ いざさらば  
三 朝夕なれにし 学びの窓 蛍のともとび つむ白雪  
忘るるまぞなき ゆく年月 今こそ別れめ いざさらば

目に涙を一杯溜めた卒業生は咽び泣き、俯いて歌っていた。歌声にならない泣き声が、みんなの涙が、耐え切れない切実な気持ちだが、ジーンと胸を打ち、涙を誘った。

前列に立っていた金井先生も、町田先生も、宮脇先生も、小牟田先生も、そして、タクトを振っていたアキエ先生も、みんな涙を流していた。僕たちも悲しくてシクシク声をあげて泣いていた。参列したお父さんや、お母さんも申し合わせでもしたようにハンカチを目に当ててすすり泣いていた。

次は僕たちが「蛍の光」を歌う番だった。アキエ先生が指先で「はい、スタート」と、合図のサインを送っても、なかなか声がでなかった。僕たちは胸を締め付けられる思いで声をふるわせ、嗚咽しながら込み上げる涙の「蛍の光」を合唱した。

一 蛍の光 窓の雪 書よむ月日 重ねつつ いつしか年も  
すぎの戸を あけてぞ今朝は 別れ行く  
二 とまるも行くも 限りとて かたみに思う ちよろずの 心のはしを  
ひとことに さきくとばかり 歌うなり  
三 筑波のきわみ 陸の奥 海山遠く へだつとも その真心は  
へだてなく ひとえにつくせ 国のため

いつかはみんなと別れなければならない僕等の運命。親しい友も、愛しい先生も去ってゆく。身をきられるようなこの思い。涙の瞳でいざさらば。アーアーなんと切ない悲しい最後の卒業式。僕はこんなに悲哀に満ちた卒業式に接したのは初めてだった。

このバンプワトーン・キャンプで行われた卒業式は、盤谷日本国民学校最後の卒業式となった。しかし、キャンプの学校は6月4日まで継続され、最終日にペラペラの半紙に書いた在学証明書を貰って解散したのである。

バンコクに日本人学校が設立されたのが大正15年6月1日だった。第一回目の卒業生、江尻英太郎さんを、昭和3年3月26日に送りだして以来、最後の卒業生を含めて全員で61名の卒業生を世の中に送りだしたことになる。

ミッキーたちのクラスはみんなで15名いたのだが、5名の欠席者がいた。欠席した原因は、渡辺幸治君と松尾信彦君は大使官邸内に軟禁されていたのだが、牧優君と波多野盛男君は、お母さんがタイ人だったためにキャンプには入っていなかった。

インちゃん（春木忠雄）は、敗戦のとき「バンコクにいたら日本人は逮捕されて収容所に入れられる」と聞き、直ぐその足でバツタンバン（プラタボーン）へ赴いた。しかしバツタンバンの国境の検問所で拒絶され、バツタンバンへは入れなかった。仕方がないのでウボン県へ行き、最後にウ

ボンの警察次長の家で世話になっていた。インちゃんはみんなが日本へ送還され、安全になってからバンコクに戻ってきたのだった。

この僕の母校である思い出深いバンコク日本人学校は、残念ながら1946（昭和21）年9月30日付の、吉田茂外務大臣の省令第四号に基づき「外務省在外指定学校規則廃止令」により、廃校となった。だが、日本の講和条約後、タイにも日本の企業がどんどん進出するようになり、1956（昭和31）年1月22日、在タイ日本国大使館付属日本語講習会として、バンコク日本人学校が10年振りに再開した。

全校生幼稚園を含めて僅か28名（幼稚園児14名、小学生13名、中学生1名）で、終戦後の初校長は岡崎熊雄領事以下4名の教官でスタートし、ソイ・サーラーデーンの大使館の敷地内に開校したひっそりした学校だった。終戦後のバンコク日本人学校は、時代の流れとともに、校名も変わり、1962（昭和37）年3月8日に「日本人小学校」となり、1972（昭和47）年2月25日に「日本人学校」となり、1974（昭和49）年7月24日に「泰日協会学校」となり、現在に至っている。

終戦後、僅か28名で再スタートしたバンコク日本人学校は、今は（2015年4月22日現在）小学部2292名で71クラス、中学部631名で18クラス、特別クラスが3クラスあり合計2923名で92クラス、教員が日本人の先生が149名、タイ語英語などの先生が36人、合計185人となっている。

## ■キャンプの出来事

くる日もくる日もなんの変哲もない無意味な生活を送っていると、なんとなく嫌気がさし、飽きてくるものである。3村のキャンプを自由に往き来できるようになったが、バンコクへ公用で行く場合は特別許可を貰って行かなければならない不便さがあった。それも誰しもが行けるわけでもなかった。しかし、警官に多少お金を掴ませて内緒で外出する簡単な方法があった。

このような退屈な日々を過ごし、丁度飽きがきていたときだった。2月14日、バーンブワトリーの町で年一度のお寺のお祭りがあった。タイ当局から「この日はお寺のお祭りに遊びに行ってもいい」という、正式な許可がでたので、キャンプから大勢の人たちがかけて行った。

昼間はサンハーン寺（後にワツ・ラハーンに改名）で相撲を披露し、夜はおけさ節や民謡を踊り、タイの人たちと一緒にラムヴォンを踊ったりして、町の人たちと友好を深めたのだった。

このお寺にはキャンプで誰かに不幸が起こったりした場合に、お通夜も兼ね、火葬して貰ったりしてお世話になっていた。キャンプの同胞はお世話になったお礼にと、みんなで力を合わせて、お寺から運河を舟で渡らないで歩いて渡れるように木造の橋を架けたのである。タイ人はこの橋を（サパーン・ミッタパープ（友好橋）と呼んでいた。70年の月日の流れとともに木橋は朽ち果ててしまい、現在セメンの橋に改造され、過去の思いで深い昔の面影を忍ばせている。

キャンプ内で、アミーバー、チフス、盲腸、天然痘、マラリアなどの病状がチョコチョコ発生す

るようになった。バーンブワトーンの町には町医者はいても病院らしきものはなにもなかった。コレラの発生の心配もあり、日高洋行の日高秋雄さんの奔走により、2月27日、第2キャンプの後ろの方にお粗末ではあったが、やっと病棟が出来上がった。一番はじめにこの病棟に入院したてのは、病身だった蓑和嘉子さんのお父さんだった。

第2キャンプでは、中原報にいた鳥越さんがウイスキーの飲み過ぎて酔っ払って死んでしまった。その後にも、クローンで泳いでいたおじさんが心臓麻痺で溺れて亡くなっている。それは夕方の4時頃だった。丁度みんながアープナーム（水浴び）にでる時間だった。「オーイ誰かが溺れたぞー」と、慌てて叫んでいる声が聞こえ、大騒ぎになった。

僕もその近くで泳いでいたので、みんなと一緒に底まで潜って手探りで捜しはじめた。だが、水に流されていたためになかなか見つからなかった。やっと川下の方で見つけたときは、もう青ざめていて手遅れだった。が、救出にあたった人たちは諦めなかった。みんな一生懸命に助けようと努力していた。

川岸で火を炙り、数人で手足を擦り、何回も人口呼吸を繰り返し、心臓マッサージをしたりして手を施した。だが、その甲斐もなく薄暗くなりかけても遂に息を吹き返さなかった。みんなは冷たくなった亡骸に手を合わせて拝み、亡くなった同胞に冥福を祈った。

キャンプにいと、外部のニュースはほとんど入ってこなかった。時々得られるニュースは、キヤブに面会にきた人たちから聞いた話だった。2月21日、大使館から水野公使と天田領事が視察がてら見舞いに来たことがあった。みんなの関心は帰国問題もあったが、やはり日本の実情や、故郷の家族への安否などを知っていたがっていた。

それは4月13日のことだった。誰が届けてくれたのか知らないが、昭和20年12月付けの大阪朝日新聞の分厚い新聞が一週間分ほど纏まってキャンプに届いた。4ヶ月も前の古い新聞ではあったが、みんなにとっては信頼できるホットなニュースだった。その日は同盟通信の記者が解説も含めて朗読し、日本の事情に就いて説明を加えた。大勢の人が耳を傾けて真剣に聴いていたが、東京の焼け野原の掘っ立て小屋で食料もなく……云々といった、日本のあまりの悲惨さに啞然とせざるを得なかった。

いつものことながら、何処から情報が入ってくるのか、口伝に帰国の話題が伝わってきては「やーもう直ぐ日本へ帰れるぞー」と、キャンプ中が騒ぎだす。が、いつもデマばかりで、またか、と諦めに似た心情になる。しかし、それでもいつになったら日本へ帰れるのであろうか、と、望みを抱かずにはいられなかった。

一般邦人の帰還問題は、一時、3月中頃だったかに「今年の6月か、7月頃日本へ帰れるかもしれない」といったニュースが流れていた。だが、何処まで信じてよいのか、あやふやなものだった。

丁度その頃だった。中国政府の圧力によって第1キャンプにいた台湾人は「台湾人は日本人ではない。中国人なのだ」という理由で、3月25日にキャンプから引き揚げることになっていた。しかし、実際にタイ側から迎えの船が差し向けられたのは4月1日の朝だった。

台湾の人たちは親しかった日本人の友人に別れを告げ、艇に乗せられて、一足先にキャンプを去って行った。およそ450人の台湾の人たちは、ノンタブリー県のパーク・クレツへ連れて行かれ、其処で本国へ帰る引き揚げ船待ちとなった。

パーク・クレツでは学校の敷地らしい処に宿泊していたが、みんな町へ買い物にいったりして自由に入りしていた。台湾人の帰還船はわりと早く訪れた。約100名弱の残留者を残し、およそ350名の台湾人が自分の祖国である台湾へ引き揚げて行ったのは1946（昭和21）年4月28日だった。なお、タイに残った仲間には僕と同じクラスにいた洪姉妹の家族や、許姉妹の家族、それと、後に戦後初の日本人会の事務局長を勤めた南さんもいたのである。

## ■ 残留組

一方、日本へ帰りたくない人たちもいた。特に長年タイに住みつき、家庭でタイ人の妻子が持っている人や、タイに愛着を持っていた人は、「日本は戦火で何処も彼処も焼け野原になっている。広島、長崎は原子爆弾を落とされてなにも残っていない。食糧も欠乏し、食べ物もない。配給制度で並ばなければならぬ。今、日本へ帰っても苦勞するばかりだ」と、大きな溜め息をついていた人たちだった。

やがてキャンプ内で帰還組と残留組の話題が持ちあがった。タイに残留する話が出始めたのは1月中頃からだった。この残留問題が本格的に具体化したのは残留希望者が第2キャンプの夕陽丘や、ひばりが丘で残留問題に就いて会議を開き、残留希望者を募ってみることになってからだった。

話が決まると早いもので「タイに残留したい」と、希望する人たちが我も我もと、約1000人近く集まった。が、最終的に約800人となった。こんなに大勢の人たちが残留を希望していたとは想像もつかなかったが、僕もその仲間の1人であった。早速、連合軍および、タイ当局に「残留希望願書」を提出することになった。

キャンプでは、当局から残留に関する回答がくるまでは「果たして残留できるのか、あるいは帰されるのか」と、不安な気持ちにかられた日々を送っていた。タイ当局から残留に関して、キャンプに舞い込んだ最初の回答は2月25日だった。

その書簡によると、タイに残留したい者は「特殊な技術がある者」、「40歳以上であること」、「長年タイに永住している者」と、簡単に3項目が記してあるだけだった。この条件だと、タイに残れる人は結構大勢いたので、タイに、タイ人の妻子がある人や長年住んでいた人たちは「残れるぞ」と、淡い希望を抱き喜んだ。

しかし、喜んだのは束の間だった。3ヶ月後の5月10日に入った情報では「タイに残留できる者はタイ人と結婚している者。タイと特別な関係にある者」と、なっていた。だが、さらに5月13日に、タイ側から入った残留組に関する資格内容は、次のように実に厳しいものだった。

一 1939（昭和14）年9月以前にタイに入国した者

二 タイに妻子がある者。但し、正式に結婚届けがしてある者

三 内縁関係者であってもタイ人の妻子があること

四 タイ政府によって推薦された者

この条件だと、この資格に合格する者は残念ながら僅か365名しかいなかった。しかしこれらいつになったら許可がでるのか、正式の残留許可書を手にするまでは果たして残れるのか、どうなるのかさっぱりわからない状態だった。

日本への引き揚げがはつきりと6月10日に決定したのは、5月初旬頃だった。帰還組はみんな躍りあがって喜んだ。しかし残留組については待てど暮らせどまだなんの回答も得られないままだった。

待ちに待った残留組についてタイ側から公式に発表があったのは、帰還組が引き揚げる日が間近に迫っていた6月5日だった。それは残念ながらタイ残留を拒否された326名の失格者に対する名簿だけだった。呼び集められた残留希望者のメンバーは、全員固唾を呑んで、読み上げられる名前を聞いていた。

自分の名前があたりませんように、と、まるで死刑の判決でも聞いているような気持ちだった。僕の名前はなかったのでホッとしたが、喜ぶのはまだ早すぎた。なにしろ「あと545名が失格になる見込みだ」と、宣言されたために、みんな気が抜けたようにしよんぼりしてしまった。

## ■涙の別れ

キャンプには時々英軍のモーリス中佐が4、5人のグルカ兵を伴い、日本語のできる通訳を連れて視察にくることがあった。モーリス中佐がくるたびにいつも誰かが呼びだしを受け、詰問されていたのでみんなビクビクしていた。

第3キャンプに身を潜めていた辻参謀（辻政信中佐）7人の部下も、或る日、いきなり家宅捜査をされたことがあった。だけど運よくボロがでないですんだ。モーリス中佐は逃走中の辻参謀や、キャンプに潜り込んでいるらしい、と、思われる戦犯容疑者を捜しているのだった。キャンプには英軍に密告していた日本人のスパイも、2、3人いたので、うかつにも日本軍の機密めいたようなことを大袈裟には話せなかった。

帰還組が来月はもう日本へ帰れる、と、そわそわしている矢先だった。モーリス中佐は5月2日にもキャンプに現れた。今回はカメラマンを伴い、ビルマから引き揚げてきた、と、いわれていたおよそ400人の人たちを呼び集め、みんなの名前をチェックしたうえで、前と横向きで上半身の写真を撮って引きあげて行った。次はなにが起こるのかと、不安にかられていたが、全員が帰還する日まで何事も起こらなかったのホッとした。

帰国に際し、5月の時点でパスポートがない人には、日本大使館から急遽仮パスポートか、または「日本人である」と、日本国籍を証明した公文書が領事部から発行された。僕はタイ生まれだったので、日本のパスポートもなにも持っていなかった。早速、大使館から正式に、母と僕2人の名前を連ねてある一枚の紙に明記された日本の国籍証明書を発行して貰った。僕はこの大使館の証

明書さえ持つていけば、例えタイに残留したとしても、いつでも日本へ帰れると、楽観していた。

帰還組およそ3000名の人が日本へ帰る日があと4、5日に迫っていた。帰国組の名簿をきちんと揃えなければならず、6月7日の日に、武田さんと藤井さん2人が徹夜で名簿を書き上げたのだった。帰国準備に追われていたキャンプ内はまるで蜂の巣を突つ突いたようにごったがえしていた。

各々が忙しそうにトランクやガニバッグに荷物を詰めていた。ビルマから命からがら逃げてきた人たちの中には、荷物もなにもない手ぶらに近い可哀想な人もいた。荷造りした荷物がなくなつたと、大騒ぎした人もいたが、その荷物はタイ人に盗られたのではなく、隣の同胞に盗られていたりした。手際は荷物の上からガニバッグを被せて本人の名前が書いてあつたりしてばれたケースもあつたが、実に切ない世知辛い世の中である。

帰国にあたり荷物は1人一個。持参できるお金は日本円だけだった。しかも1000円までと限定され、タイの紙幣は一切持ちだし禁止となっていた。実に厳しい宣告だった。それでもみんなはいろいろと工夫してお金や貴金属をあつちこつちに隠していた。

僕の部屋にいた星野親娘も帰国組だった。金のネックレスを洋服の裾に縫いつけたりしていたが、「日本へは帰りたくない」と、悲観していた。星野さんはバンコクのオーナーに、僕と一緒に預けたお金のことも話していたが、バンコクへ取りに行くこともできなかった。

6月8日、第2キャンプでは帰国を前に全員の身体検査が行われた。およそ2000人弱の人が朝から長い列を作り、1人ずつ順番に呼びだされて検査を受けた。なんのための検査だったのかわからないが、僕は自分の干からびた悴まで調べられ、嫌な思いをした。

6月9日は帰国組の人たちにとっては今日がキャンプ生活最後の日だった。帰国を明日に控えた帰国組の人は、タイに残留する残留組の親しかった人たちの部屋を訪れ、お互いにしんみりした口調で語り合い、最後の別れを惜しんでいた。

僕は最後の別れを兼ねて、川向こうの独立家屋にいた先生に会いに行った。散らかっていた先生の部屋で荷造りの手伝いをしたりしたが、明日は先生ともお別れしなければならぬのか、と思うと、気が滅入ってしまった。

いつまでも先生の側にいたい、と思っても、そうもいかなかった。最後に、町田先生に「先生お元気で、さようなら」と、頭をさげた。すると、先生が真っ白い野球のボールを僕の掌に乗せて「正夫元気でな、なにもないけどこのボールあげるよ」と言つて、暫くの間じつと僕の瞳を覗き込んでいた。僕も先生の瞳を見つめ、涙を溜めて「先生、ありがとう」と、一言呟やいただけで、俯いてしまった。

午前中に迎えにくる筈の、艇を引っ張ってくるタックボートがお昼になつてもまだこなかった。待ちに待った2艘の艇を引っ張つた無数のタックボートの大群が遠くの方からポンポンと煙突から薄い煙を吐きながら次々に現れたのは、午後3時頃だった。艇はやがて第2キャンプの両岸に停まり始めた。が、クローンの水がかなり引いていたために、岸壁から3、4メートルほど離れて



停まった。

各々が無邪気な子供の手を引き、或いはおんぶし、大小様々な荷物を担いだり、ぶらさげたりして、各自の部屋から移動を開始したのは夕方の4時頃からだった。およそ1680名の第2キャンプの帰還組の同胞は各班ごとに整列し、ぞろぞろと岸边に集まった。舢舨から細長い幅30センチほどの分厚い板が岸壁に渡され、荷物の積み込みが始まった。

使役にかりだされた若い元気な男の人たちが、リレー式に荷物をひとつずつ積み込んでいた。だが、足の踏み場もないたった1枚しかない狭い板の上での作業はなかなか捗らなかった。

時間は瞬く間に経過し視界は暗い闇に覆われてしまった。舢舨の所々にガスランプが点され、明かりをたよりに甲斐甲斐しく作業していた人たちの姿がまるでシルエットの世界にいるようにくつきりと浮かびあがっていた。

闇に包まれた川岸では、乗船待ちの婦女子が大きな蠅蚊に悩まされながら我が子を見守り寛いで休んでいた。荷物の積荷が終わると、遠方から「オーイー乗船だぞー船に乗り込むんだぞー」と、張りのある声が響いてきた。

体を休めていた群集はゴソゴソと起きだし指定された舢舨の前に一列に並んだ。やがて乗船が開始され、ひとりずつ板橋を渡り始めた。実におぼつかない危なっかしい格好で渡っていた。足が震えてなかなか渡れずすり足で渡っていた人もいたが、見ていて涙が溢れる思いだった。

全員の乗船がやつと終わったのは、冷たい星が哀れな光を投げかけていた深夜だった。岸边に静かに停まっていた船は動く形跡もなくピタリと停まったままだった。僕はヒューヒュー吹きつける真つ暗な岸に跪って一睡もしないで船が出るのを待っていた。

9日の深夜に舢舨の中に缶詰にされた同胞の舢舨が動きはじめたのは、10日の午前5時頃からだった。まだ薄暗いクローンを、舢舨を2艘ずつ引っ張ったタックボートが次から次へと通過して行った。が、舢舨の中に乗っている人の顔は暗くて見えなかった。

太陽がやつと上がり始めた頃だった。第2キャンプに停まっていたタックボートも、1隻また1隻と岸壁を離れて行った。そのたびにみんなが「00さーん、さようならー」と、涙声で泣きながら手を振り、別れを惜しんでいた。

僕は遠くがよく見える小高い土手の上に立っていた。僕も手を振りながら「さよーなら、さよーならー」と、叫んでいた。僕が知っているお世話になったおじさんや、おばさんが去ってゆく。仲良く遊んだ幼友達か去ってゆく。1人また1人と去ってゆく。

「さようならー、さようならー」と、叫んでいたときだった。金井先生や、町田先生、宮脇先生が舢舨の前に立っている姿がゆっくりと僕の目の前に近づいてきた。先生も「正夫、元気だなー、さようならー、さようならー」と、みんなが手を振っていた。僕も声を振り絞り、「先生ー、さようならー、さようならー」と叫び、一生懸命に手を振った。

だが次の瞬間、どおっと涙が溢れでてその場に泣き崩れてしまった。先生を乗せた舢舨は静かに通り過ぎてゆく。僕が7年間もお世話になった先生が「さようならー」と、思い出を残して去ってゆ

く。

いつまでも僕を見つめていた先生の悲しげな瞳が身に染みて悲しい。戦争に負けた身の辛さ、いつ逢えるか知れないが、別れは辛い。美しい瞳に溢れ出る大粒の涙を一杯溜めて「先生、さようなら」と、涙をポロポロ流し、霞んでゆく先生の姿を追い、僕はいつまでも放心したように風に打たれて土手の上に立っていた。

キャンプから舩に乗せられて連れて行かれた同胞は、バーンブワトーンの町に差し掛かった途端に両岸から地元の人や、バンコクや地方から見送りにきていた友人や最愛の家族、愛しい妻や子が必死に手を振りながら、口々に「サワツデー・チョークデーナ」（さようなら幸運に恵まれますように）と、泣き叫ぶ身内の声に悲痛な身を切られる思いで別れたのだった。

疲れ果てた一行は、その日の夕方クローン・トイ港に到着し、クローン・トイに新設された英軍が管理していたセメントの上にテントが張ってあるだけのお粗末なニューライフ・キャンプ（新生キャンプ）に入れられたのだった。

ニューライフ・キャンプに保留された同胞は6月15日にコ・シーチャン（シーチャン島）から出航する辰日丸で帰国することになっていた。

みんなは「いよいよ本当に日本へ帰れる」と喜んだ。だがその間、英軍の嫌がらせや苛めもあった。特に、男に対してはまだ英軍の蛇のような冷たい目が光っていた。男は全員が上半身裸にされ、背中に弾痕の跡がないかを調べられた。それは行方不明になっていた潜行中の辻参謀（辻政信中佐の背中には数発の弾痕があった）を探していたために、実施されたものだった。

続いて最後の検問所で英兵から名前をチェックされ、小さな紙切れに「DETAIN」、「CLEAR」と書かれた2種類の違った横文字が並んでいた紙切れを渡された。「DETAIN」に引っかけた人は、可哀想に、そのままバンクワン刑務所へ引っ張られて行った。辻参謀の7人の部下も英軍の検査に引っかけ、バンクワン刑務所へ連行された組だった。

およそ3000人の同胞が重たい荷物をぶらさげ、眠っている子供を背負い、真っ暗なニューライフ・キャンプからノロノロとクローン・トイの波止場に向かって歩きだしたのは、6月15日の午前4時半頃だった。午前6時頃やつの思いで目的地の波止場に到着したが、疲れ果てた同胞は休む暇もなくそのまま連絡船に乗せられ、本船が待っているシーチャン島へ向かったのだった。

乗船間際にタイ当局の管理人から、お別れの印として、各自が5キロのタイ米を施され、慈悲深い仏の国のおおらかなタイのスワンナプーム（黄金の大地）の大地を去ったのだった。

連絡船に乗せられた同胞は大波小波に揺られ、酔ってゲーゲー吐いていた人もいた。お腹がキューキュー空いていても食べる物もなかった。焼けつくような熱い太陽にジリジリ照り付けられ、喉がカラカラに渴き死にそうなくらい辛い思いをしても、一滴の水すらも与えられなかった。特に可哀想だったのは、なにも知らないで駄々をこねて泣き叫んでいた小さな子供たちだった。

あーあ、人間はなんと無情なのであるう。戦争に負けた身の悲しさ、どんなに苛められようと、辛い思いをしようと、なんにも言えない惨めな日本人。まるで囚人扱いされた同胞はやるせない気

持ちを胸に抱き、夕方やつとの思いで待望の辰日丸に乗船した。

みんなは心温まる親切な船員さんから温かい気持ちで迎えられ、慰められたのだった。美しい月光に照らされて静かに眠っていた辰日丸は6月16日の早朝にシーチャン島をあとにし、荒れ果てた愛しい祖国へ向かった。途中で指定されていた寄港地の変更が重なり、七転八転しながら7月3日無事に長崎に入港し、頭からDDTを撒かれて祖国の土を踏んだのだった。

## ■第1キャンプへ移動

キャンプからみんなが引き揚げてしまったあとは、まるで嵐が去ったあとのような静けさだった。主をなくした棟や、独立家屋の中には持ち主から捨て去られたいろんな不要品が散らばっていた。ガヤガヤ、ガーガー鳴っていたアヒルやガチョウは綺麗さっぱり食べられてしまったらしく、一羽も残っていないかった。

僕は人気のないキャンプの中を歩き回り、自分の部屋へ戻ろうとしていたときだった。ふと見ると、遠い田圃の彼方にみずばらしい格好をした大勢の農民の姿が目にとまった。みんな、じつとキャンプの様子を伺っていたようだったが、ジワジワと近づいてきた。

キャンプの外れの方はもう完全な空き家になっていた。農民の群集はまず一番外れの空き家周辺に殺到し、その辺に転がっている物を手当たり次第に拾いだした。一ヶ所で味をしめた農民は、大胆になり、人数もどんどん膨らみ、次の獲物を狙って徐々に僕たちがいる方へ押し寄せてきた。

「こっちはまだ僕たちがいるのだから駄目だっ、出て行けっ」と、怒鳴っても、もう誰も言うことを聞かなかった。神から授かったお恵みに授かるうとした農民は「マイペンライナー」（いいじゃないか）と答えて、ずうずうしくどんどん近寄ってきた。だが、カンカンに怒った高寺さんが長い棍棒を振り回し、「こらっ、出て行けっ」とドスの利いた声でカツを入れると、さすがに高寺さんの剣幕に恐れをなして、やつとキャンプからでていった。

第2、第3キャンプには帰還を免れ「これならタイに残れるかも？」と、夢を託した残留組の希望者の人たちが小規模で残っていた。第1と第3キャンプにはまだ302名の残留留組のメンバーが残っていた。第2、第3キャンプにいる人は全員が6月15日に第1キャンプへ移動することになった。移動準備は13日に大きな荷物から先に運びだすことになっていた。

丁度その日に江畑朔哉さんの奔走により、第1と第2キャンプに分散していた江畑組の人たち9名が解放され、一足先にバンコクに行くことになった。モーターボートに分乗した江畑組の人たちは大喜びで「やつと残れたぞー、お先にーさようならー」と手を振り、元気に氣勢をあげて発つて行った。僕は江畑組の人はみんな本当に残れるのだろうか、不安な気がした。だけど、それでもやはり羨ましいと思った。

僕は15日の朝、トランクをぶらさげて迎えにきたボートに乗り、悲哀に満ちたいろんな思い出深い第2キャンプをあとにした。第1キャンプでは大勢の人たちが川岸で僕たちが到着するのを待っていた。その中には池田實君と妹の啓子ちゃん、シーちゃん（石畑静子）、ソングラーにいた仲良

しの久松みのる君がいたので嬉しかった。

第1キャンプにはバンコクでお世話になっていた小杉さんのおじさんやおばさん、太った稲田のおばさん、シーロムで仕立屋兼味噌屋を経営していたでっぷり太った石畑のおじさん、プレー県で医者をしていた大将髭を生やした泉英代さんのお父さん、写真師だった實ちゃんのお父さんやお母さんなど、親しい顔馴染みの人が大勢いたので心強かった。

みんなが日本へ引き揚げた後の第1キャンプの部屋はがら空きだった。僕が入居した新居は奥行きがあつてわりと広くてゆとりがあつた。

母の花札仲間も大勢揃つていた。母は守屋さん、寺尾さん、平田さん、おはなさんや、ほかの仲間の人たちと毎日時間が経つのも忘れて「やったーナナタンだー、シコー、マツキリポーズだー」と叫び声をあげ、一日中パチン、バシツ、バシツと花札合わせをして楽しんでた。

僕は第2キャンプにいたときから碁に懲り、碁の本を読み、一人で碁の打ち方を研究していた。僕に碁の手解きをしてくださったのは、花屋食堂の上松次雄のおじさんだった。初めの頃は井目置いて、おじさんの相手をしていた。が、だんだんと強くなり、第1キャンプにきたときは三目置いて時々勝てるようになっていた。上松のおじさんは「僕には碁の才能がある」と、感心していた。だが、僕が碁に熱中していたのは、残念ながらキャンプにいたときだけだった。

僕は第1キャンプでは、第2キャンプで味わえなかつた違つた遊び方をした。第1キャンプに残つた僕たちの悪戯仲間だった實ちゃんやミツキー（新野充男）、みのる君（久松みのる）たちと、吹き矢で鳥を打つたり、釣り針を火で炙り、釣り針を真っ直ぐに伸ばして細長い棒の先に取り付け、吹き矢の後ろに長い紐を結び、吹き矢をフツと吹いて、池の中にいる魚を捕つたりした。

それと第1キャンプには、あっちこちに濁つた水溜りがあつた。魚も泳ぎ回つていたので、みんな水の中に土手を築き、バケツでバシャバシャ水を汲みだして、かいぼりをしたりした。大きい魚は本能的に危険を感じるらしく、どんどん泥の底へ潜ってしまう。その潜り込んでいる魚を足の爪先で追いだし、泥の上へ顔をだしたところを手掴みで掴まえるのだが、実にスリルがあつて面白かつた。

いつも泥まみれになつてワイワイ騒ぎ、魚を追い回していたが、大きな雷魚や、なまずが一杯捕れた。特に黒い大きななまずがよく捕れたので、かば焼を作つてもらい、みんなで仲良くムシャムシャ食べた。このほかに、竹藪で竹の子を引っこ抜いたり、下から煙を蒸して蜜蜂の巣をとり、甘い蜜を舐めたりして一日遊びこけていた。それに、おじさんの名前は忘れたが、よくいろんなお話をしてくれるおじさんがいたので、僕たちは夕方になると、いつも川岸でそのおじさんの周りに集まつて面白いお話を、耳を澄ませて興味深く聴いていた。

農村に心を惹かれていた僕は、ひとりでキャンプの外れにあつた農家へ足を伸ばした。畑には大きな赤味を帯びた唐辛子が、美しい花が咲いたように一面に一杯実つていた。あまりにも綺麗なので、じつと見とれてみると、農家のおばさんが近寄つてきて「ボーヤは日本人？」と聞かれた。僕は「そうです」と、目を輝かせて答えると、おばさんは僕が氣にいつたのか、いろいろと話しかけ

てきた。僕が帰ろうとすると、「ちょっと待って」と呼び止めて、お土産に唐辛子まで頂戴してしまつた。僕は親切なおばさんにお礼を言つて戻つてきたが、それがきっかけで、時々その農家へ遊びに行くようになった。

毎日遊んでばかりいた僕たちのことを心配していた百合江ちゃんのお父(残留組会長の日高秋雄)さんは、僕たちを教えてくれる先生を物色していた。先生が見つかり、第1キャンプでも勉強を始めることになった。がら空きになっていたキャンプ内で教室を捜すのはごく簡単なことだった。みんな埃だらけになっていた16棟の大部屋を掃除し、黒板や机を揃え、寺小屋式授業が開始されたのは、6月26日からだった。

第1キャンプに残っていた僕たちの仲間は僅か14、5人しかいなかった。授業時間は毎朝9時から昼頃までだった。先生は三浦先生と、守山先生だったが、クラスは上級生と下級生のふたクラスに分けられ、毎日読み書きだけの勉強だった。僕もみんなと同じ様に勉強を続けたが僕にとっては、やはり楽しいキャンプ小屋教室だった。

## ■バンクワン刑務所

第1キャンプにはまだおよそ400名の残留希望者が残っていた。みんなはいつになったら自由な身になれるのであろうかと、夢と不安にかられた複雑な気持ちで日々のキャンプ生活を送っていた。キャンプ内の日常生活はバーンプトーンの町へも自由に出入りできるようになり、なんの変化もないズルズルベッタリな平穩無事な生活が繰り返されていた。だが7月6日の日だった。何事が起こつたのか、モリス中佐が突如キャンプに訪れ、「今後キャンプからの外出を禁じる」と宣言し、なんの取り調べもしないでさっさと引き揚げてしまった。

次はなにが起こるのであろうかと、不安にかられていた矢先、7月8日の午前10時頃だった。グルカ兵を引き連れた異常な雰囲気を漂わせたモリス中佐がキャンプに現れた。全員集合の命令が下り、緊急点呼が始まつた。続いて名簿をタイプしたリストが手渡され、代表者がそのリストを読みあげた。アルファベット順に並んだリストの中には今まで僕たちのために骨身を惜しまず世話をしていた残留組の会長をしていた百合江ちゃんのお父さんの日高秋雄さんの名前も入っていた。

名前を呼びだされた149名の同胞は、一応戦犯容疑者としてバンクワン刑務所へ連行されることになった。バンクワン刑務所へ連れて行かれることは、運が悪ければシンガポールのチャンギー刑務所に放り込まれ、死刑の宣告をも意味していた。それだけに、今まで明るかったみんなの笑顔は急に曇り、深刻な表情に包まれてしまった。

連行する理由もなにも述べられず、なんの抗議も言語の自由も与えられず、監視付きの6艘のボートに強制的に乗せられた前途真つ暗な可哀想な149名の同胞は、ただ手を振り、心残りがする家族との別れを惜しみ、涙を残してバンクワン刑務所へ連行されたのだった。

バンクワン刑務所はノンタプリー県のチャウプラー川の川岸に所在し、凶悪な重罪犯人を投獄する厳しい刑務所であった。敗戦当初は一時英軍が管理し、櫓の監視所には機関銃が据え付けられ

英兵が目を光らせて監視していた。そのバンクワン刑務所に日高さん一行の同胞が投獄されたときには、国のために戦った軍人や軍属、憲兵および、中村義部隊長以下およそ700名にのぼる軍人が四角い冷たいセメントの獄室に押し込められていた。

獄中生活を余儀なくされた日高さんたちは、毎日のように誰かが呼びだされ、長時間にわたり詰問され、神経をすり減らし、苦境に悩まされていた。このほかにも炊事当番、水浴場の水汲み、残飯運び、くみ取り当番など、と、嫌な仕事までが強制的に課せられた。が、軍人に対する扱い方はもつと厳しかった。

戦犯容疑者の罪名を被せられたキャンプから連行された149名の人たちは、軍人とは会話ができないように完全に隔離されていた。冷たい狭いコンクリートの囲いの中にぶち込まれ、絶えず英兵やグルカ兵の冷たい目に監視されていた。タバコを吸うことも、タイ語で話すことも禁じられ、違反した者は1日外出禁止のペナルティーを被った。時々詰問に呼びだされ、ネチネチ突っ突く英軍将校の質問にくたくたなってしまうこともあった。常に緊張感と、耐え切れないほどの孤独感に襲われ、不安な気持ちで過ごしていた。

バンクワン刑務所内の生活は、午前中は朝6時に起きて歯を磨き、7時半に全員揃って朝食をとり、朝食後は自由時間だった。各自が体操したりして体を鍛えていた。午前9時にみんなで整列して点呼をとり、12時にお粗末な昼食となっていた。

午後は草取りなどをし、2時半にアーブナム（水浴び）をすませ、夕方4時半の明るいうちに夕食が与えられた。6時に全員の点呼を受け、念入りに人員チェックをされた。9時には床につかなければならなかった。寝床といっても、ベッドもなにもなかった。ただ薄っぺらな毛布が一枚あるだけだった。その毛布をぐるぐると体に巻きつけ、冷え冷えするしたゴツゴツのコンクリートの上にゴロンと寝転ぶだけだった。しかし、蚊や南京虫に悩まされ、寝返りを打つたびに、骨の髄に響く痛みを耐えて寝なければならなかった。

7月30日にはバンクワン刑務所からおよそ200名の憲兵がシンガポール経由で日本へ送還されていった。可哀想に、その中にいた一部の仲間も、更にシンガポールのチャンギー刑務所で、戦犯容疑者としての取調べを受けることになっていた。

この7月30日の同じ日に、憲兵と交替で、バンブワトーン・キャンプから、更に第2陣として19名の同胞が連行されてきた。続いて8月3日にも、先にキャンプから開放されて喜んでバンコクに飛びだしていった江畑組のグループ93名のうち、64名が逮捕され、強制投獄されたのだ。後の29名の人も呼びだしを受けたのだが、逮捕される寸前に逃走したのだった。

バンブワトーンを一足先にバンコクにでた江畑組の人たちは、初めはバンカッピ（現スクムヴツ）のソーイ・ナーナーにいたが、英軍の厳しい手が伸びてきたので、逃亡を希望した者だけがチョンリーの某海軍大佐の家へ逃げることになっていた。

その大佐の家の側にナムプラーを作っていた工場があった。遠くに小さなお寺が見える処だった。みんなはチョンブリーへ逃げたものの、英軍から日本人の首に1人につき1万から3万バーツ

の賞金が懸けられたためにチョンブリーも危険となり、大佐の取り計らいでサタヒーブの海軍基地に匿ってくれることになった。

しかし、海軍の軍港へ逃げ込んだのは、同級生だった恵美ちゃんのお父さんの江畑朔哉さん、園山さん、それにビルマから逃げてきた椿賢志さんと、城村照雄さんなど、およそ10名だけだった。みんなは軍港で泳いだり、魚を捕ったりしてのんびりと暮らし、一ヶ月あまり世話になり、海軍基地からバンコクに抜けだした。中国人の永住権を偽造し、中国人になりすまし、中国名を名乗ったり、または、タイ人の女性と仮結婚したりして当局の目を掠め、逃げ回り、やつとの思いで、どうにか逮捕されないで無事に残留できたのだった。

## ■第16陸軍病院

戦時中に軍部に協力した149名の同胞がバンクワン刑務所へ連れ去られたその日から、キャンプ内は急に活気をなくしてしまいシーンとなってしまった。大人の人たちは暗い表情で、夫や友人の安否を気遣っていた。キャンプでは一時バンクワン刑務所の話題で持ちきりだった。しかし誰が噂を流すのか、「バンクワンに引っ張られていった人は、近々にみんなシンガポールに送られるそうだ」とか、「我々も日本へ送還されるんだって」といった、信じがたい話題が飛び交っていた。だが、案外事実なのかもしれない、みんなの不安は募る一方だった。

その不安は遂に事実となって現れた。事前に連絡は入っていたが、それは7月30日だった。呼びだしを受けた国のために尽くした19名の同胞がまた、バンクワン刑務所へ連れて行かれたのだった。続いて8月1日だったと思うが、数隻の小型ボートを伴って例のモリス将校が現れた。

今日もまた誰かがバンクワン刑務所へ引っ張られていくのか、と思うと、憂鬱だった。整理している僕たちの正面に威厳ありげに立ちはだかったモリス中佐が、名簿を手渡し、「これから呼びだしを受けた者は直ぐ荷造りをして此処に集合するように。諸君は第16陸軍病院へゆき、そこから日本へ送還されます」と伝えた。

順々に名前が読みあげられ、刑務所に監禁されていた家族の人たちも含めて、およそ140名の人たちが陸軍病院へ移動することになった。僕の名前は抜けていたので、助かったと、ホッとしてみると、暫く経ってからだった。懐から白い紙切れを取り出した中佐が「まだ3人の名前がありませんから」と、僕たちを呼び止めた。

みんなは誰が呼びだされるのであろうかと、固唾を飲んで立っていた。すると「泉生太郎」それは立派な大将髭を生やした芙美代さんのお父さんだった。続いて「瀬戸テル、瀬戸正夫」と、僕も遂に引っかかってしまった。僕はなにも悪いことはしていないのに、と思ったが、どうにもならなかった。僕はキャンプでお世話になった人々に挨拶する暇もなく、そそくさと荷物を絡げ、みんなの後ろにくつつき、芙美代さんのお父さんと一緒にボートの人となった。僕が乗ったボートには百合江ちゃんや、久松みのる君も乗っていた。

心配そうに見送るキャンプの人と「お元気で、さようなら」と手を振り、別れたが、これが最

後のお別れになるのではないかと思うと、やはり胸に込みあげてくるものがあった。バーンブワトーン・キャンプを後にした僕は、自分の意志とは正反対に、強制的に見知らぬ祖国、日本へ連れ去られようとしていた。陸軍病院へいったら、もう一度タイに残してください、と頼むしかない、と、考えを張り巡らせていたときだった。

丁度ボートがバーンブワトーンの町を目指していたときだった。右手の竹藪の土手所にこちらを向いて、白いハンカチを振っている芙美代さんの姿が目にとまった。芙美代さんの悲痛な「おとーさん、お父さん」と泣き叫ぶ悲痛な声に、ボートから上半身を乗りだした芙美代さんのお父さんは、「芙美代ー、フミヨー」と、涙をポロポロ流し、最愛の娘、芙美代さんをいつまでもじっと見つめていた。さらさら流れるバーンブワトーンの水は、2人の切ない涙を受け止め、悲哀を乗せて徐々に離れていった。これが父娘最後の永遠の別れになろうとは誰が知ろう。幸せな家庭を破壊した日本の戦争がもたらした悲劇なのだ。

僕たちを乗せたボートは細長いクローンを右折して、やっと広々したチャウプラー川に顔をだした。進路をバンコクに向けて暫く進むと、左手にバンクワン刑務所が見えてきた。百合江ちゃんのお母さんが「パパはあの中にいるんだけど、どうしているかしら……」と、表情を曇らせて話していた。僕たち子供組は、みんなで「お父さんと呼んでみよう」と、話し合い、せめて僕たちの気持ちだけでも届けばと思い、みんなで1、2、3と、掛け声をかけて、大きな声で「おとーさん、おとーさん」と、何回も繰り返して叫んだ。が、洋々と流れるチャウプラー川の水は、僕たちの願いを込めた声を、風とともに空しく飲み込んでしまった。しかし、それでもみんなで一生懸命に「おとーさん、おとーさん」と、切ない願いを込めて叫んだのだった。

バンクワン刑務所を過ぎると、まだ川の中に落ちたままになっていたラーマ六世橋に差し掛かった。橋の下では上半身裸になった大勢の使役にかりだされた日本の兵隊さんが川に漬かって橋の補修作業をしていた。僕たちは「兵隊さん、ご苦労さんです」と、声をかけた。兵隊さんたちは仕事の手を休めて、僕たちを振り返って「何処へゆくんだー、日本へ帰るのかねー、いいなー、元気でなー」と、手を振っていた。

ラーマ六世橋を通過したボートは、ターチャーイン(タマサート大学の近く)付近の栈橋に停まった。みんなで荷物をぶらさげてノロノロと、トラックが停まっている所まで歩かされた。トラックに分乗して乗せられた僕たちは、静かなラーチャーヴィーの通りの鉄道沿いにあった日本軍の第16陸軍病院(今はラーチャーヴィー孤児院になっている)の敷地内で下ろされた。

今日から日本へ送還される日まで、この陸軍病院でお世話になることになった。人員点呼のあと、各自の部屋の割り当てが決まり、やっと解放となった。僕は二階の寺尾さんと一緒に部屋だった。此処は日本軍の陸軍病院だけあって、専門医も揃っていた。だが、医療設備はまあまあであった。それにありがたいことに、わりに広いお湯の沸いた風呂場もあった。

その日の夕方僕は實ちゃんと一緒に大人の人たちの中に混じって、心地よい湯船にドップリと漬かった。温かい湯気に酔い、10ヶ月ぶりにキャンプで溜まっていた垢を落とすと、心も落ち着き、



脳裏に溜まっていたモヤモヤした悩みごとも消え去り、さっぱりした気分になった。

僕たちは8月7日に、全員が日本へ送還されることになっていた。住み慣れた温かいタイにいられるのもあと数日しかなかった。しかしそれでも誰もがなんとかしてタイに残ろうと努力していた。みんな様々な伝を使い必死になって残留奔走に没頭していた。

中川清君のお父さんは旧ピブーン首相の友人に頼み、ピブーンの鶴の一声で残留できたが、芙美代さんのお父さんのように、タイの官吏から「3000バーツだせば残れるように取り計らうから……」と、言われたが、「バカバカしい」と言って、信じなかったために、帰された運の悪かった人もいたのである。

僕の場合は、いちかばちかあたって砕ける方式であった。僕は母と直接モリス中佐に面会を申し込み、「日本へ帰りたくない。是非タイに残留したい」と頼んだ。だが、「僕はスパイの子だから駄目だ」と、即座に拒否されてしまった。しかし「僕は子供で、お父さんのことはなにも知らない。長崎は原爆でふつとんでいてなにも残っていないし……」と、必死になって哀願した。僕の気持ちに通じたのか、お陰でOKがでて、運良く残れたのだが……、アア、これでやっとタイに残れると、安心した僕は、もう飛び跳ねて踊りたいくらい嬉しかった。

一週間が瞬く間に過ぎ、陸軍病院を出発する日が明朝に迫っていた。病院の門の所にある日本の守衛が立っている面会所は、悲しい涙で濡れた面会所となっていた。タイ人の妻子とボソボソ語り、最後の切ない別れを惜しんでいた家族は、お互いに手を握り抱き合ったままジュルジュル鼻水を垂らし、シクシク泣いていた。

外はまだ真つ暗だった。門の所に整列した135名の同胞は、街灯の明かりに照らしだされてトラックに乗り込んでいた。ブルーン、ブルーンとエンジンをかけたトラックは、最後の唸りを残してゆっくりと動きだした。クローン・トリーの波止場を目指して動きだしたのは、8月7日の午前5時頃だった。暗くてみんなの表情は見えなかったが、僕は最後のトラックが門の所から姿を消すまで見送っていた。

一行はクローン・トイ港で、バンクワン刑務所から釈放された225名の家族の人たちと一緒にになった。お互いに安否を気遣っていた家族にとって、言葉にならない涙の再会だった。一同は波止場に待機していたリバティ型<93号上陸用船艇に乗せられ、コ・シーチャンに碇泊していたウイリヤムデン・ハウエン号に乗り換えて日本へ向かった。8月22日、無事に神奈川の浦賀に到着し、浦賀港で頭からDDTを吹っかけられて、やっと日本の大地に足を踏み入れたのだった。

## ■病院内の生活

みんなが引き揚げてしまったあとにガランとした病室に残ったのは、寺尾さんの家族を含めてほんの数人だけだった。子供では僕とみのる君、それにまだ小さかったボーヤ（寺尾長寿）の3人だけだった。だが、8月9日だったと思うがバンクワン刑務所に投獄されていた残留希望者20数人の同胞が一応残留を認められ、刑務所から釈放されて陸軍病院で僕たちと一緒に暮らすことになっ

た。

僕たちは外へでたくても、正式に残留許可書が発給されるまでは外出を禁止され、陸軍病院に軟禁されたままの状態だった。いつも3人で仲良く遊んでいたが、時々兵隊さんがいる部屋へ押しかけていたりして、蓄音機で日本の流行歌を聴かせてもらったりした。

病院の敷地はとて広く、西に面したサワンカローク通りに沿って、クローンと平行して鉄道が通っていた。時々ゴットンガタンと列車が地響きを立ててノロノロ走っていた。車も少なく実のんびりした情緒だった。病院の奥の方にも木造建ての建物があった。が、周囲は草がぼうぼうと生い茂っていて空き家になっていた。北の外れの角には別の幅の広いクローンが流れていて、運河と運河が交差していた。北の外れの奥には短い黒い鉄橋が架かっていた。

僕が宿泊していた病棟の後ろには、大きなわりに深い池があった。池の周囲には、いつも誰かが木陰で糸を垂らして、のんびりと釣りをしていた。その池の真ん中に東屋があった。そこには弾き手のない埃を被った古びたピアノが一台置いてあった。僕はピアノに魅せられて、時々片手でポーンポーンとキーを叩き、やっと曲らしいく聴けるようになった。いつも独りで楽しんでいた。が、毎日弾いているうちに両手で速く弾ける様になった。

僕は、みのる君やボーヤと3人で裏の竹藪から釣竿用の細長い竹を探してきて、釣竿を作り、みんなの釣り仲間に入れてもらった。この病院の池には、鮒や大きな鯉、それになまずや、頭のかいすばしこい大きな雷魚などがうようよ泳いでいた。

雷魚はミミズか、青蛙を餌にすると直ぐかかるが、鯉は頭がよくてなかなか釣れなかった。僕はどちらかというともっぱら鯉に恋焦がれていた。僕は裏の炊事場から糠を貰ってきて、糠を炒つてご飯とまぶしたのを餌にして、鯉釣りに熱中し、威勢のいい大きな鯉を釣りあげていた。釣れた鯉は夕食のおかずに使われていたが、釣り針にかかった鯉は凄いい力でぐいぐい引つ張るので、釣りあげるまでに10分ほどかかりスリルがあつて実に面白かった。

僕は鯉のお陰で、炊事係りの兵隊さんとも仲良くなつてしまった。鯉が釣れるたびに「正夫ちゃん、また釣れたか、今晚のおかずができたぞ」と、喜んでくれた。炊事場の後ろの方に豚を飼っている囲いがあった。いずれは僕たちのおかずにされてしまうのだろうけども、まるまる太った艶のいい10数匹の豚が元気よくブーブー鼻を鳴らしながら残飯を食べていた。その豚を時々殺していたが、豚を殺すときは2人の兵隊さんが四足を持って引っくり返し、銃剣用の剣で豚の胸をグサッと刺していた。刺された豚はブーブーヒーヒー悲鳴をあげて泣き叫び、やがてお尻から最後の便を放出して息絶えてしまうのだった。

僕が毎日釣りをしていた2メートルほどの深さがある池には、敗戦と同時に日本軍が使っていた様々な武器が放り込まれていた。その池の底に沈んでいる武器を拾うために、12、3歳のタイの子供たちに日当を与えて潜らせていた。6、7人の子供がもう錆びだらけになっていた使い物にならない飯盒、鉄兜、小銃や拳銃、銃剣、軍刀、機関銃、迫撃砲など様々なものを、拾いあげていた。いつも2人の兵隊さんが手真似足真似で子供たちを使っていたので、僕も、みのる君と一緒にな

って通訳をしてあげたりして手伝ってあげた。池から拾い集めた物は、裏の鉄橋がある垣根の所で、こっそりと華僑の屑屋さんに売り飛ばしていた。売れた売上金はみんなの小遣い銭に回されていた。僕はみんなから気にいられ、女を交渉する通訳まで任されていた。班長さんに「今晚、若い娘を10人連れてくるように」と、頼まれれば、裏の鉄橋の所に行つて、いつも顎を長くして待っている太ったおばちゃんに、「今晚綺麗な若い娘を10人頼むよ」と、一声かけておくと、何人でも集めてくれるのだった。

僕は病院でもいつの間にかみんなのアイドルにされ、誰からも可愛がられていた。僕はお陰でみんなと親しくなり、各自の部屋へも自由に出入りしていた。僕は電気関係の係りをしていて痩せて温和な田中さんとも親しくなった。「位は兵長だった」とか言っていたが、きっかけは、或る日、田中さんが電線の配線をしていたときだった。丁度屋根によじ登ろうとしていたときに、ぼくが「兵隊さん、僕が手伝ってあげましょう」と、言つて、手伝つてあげてからだつた。

それ以来、仕事があるときは僕はいつも田中さんの後ろにくつついて助手役をやっていた。電線の配線の仕方や、コードの繋ぎ方などをやらせてもらったお陰で、電気関係について多少わかるようになった。僕にとつて田中さんは親切な良き先生であつたし、病院にいた大勢の兵隊さんの中で名前を覚えたのは田中さんだけだつた。

病院にいたおよそ300人の兵隊さんも、そろそろ日本へ帰れる時期が近づいていたようで、みんな徐々に帰る準備を始めていた。僕は診察室にも自由に出入りしていたのだが、静かな歯科室で1人の兵隊さんが、先生に「この俺の歯にダイヤモンドを入れて金冠を被せて貰いたいのだけけど、出来るかな」と、質問していた。先生は口の中の歯並を調べていたが、「ダイヤモンドの大きさはこのくらいだ?」と、聞き返していた。ポケットから1カラットほどのダイヤを取り出した兵隊さんは、その小さな透き通つたダイヤを、先生に渡した。「うん、これか? ここに埋めればいいんだ。出来る」と、返事が跳ね返り、直ぐ歯の治療に取り掛かつた。

兵隊さんはもう日本へ帰る準備を始めているのに、僕は一体いつになつたらここからだして貰えるようになるのであるのか、と、思うようになった。この陸軍病院にお世話になつてもうかれこれ2ヶ月になるうとしている。タイ当局からは相変わらずなんの音沙汰もないままだつた。くる日もくる日も、なんにもすることもなく、いつも好き勝手に怠け者のような無意味な日々を過ごしていた。しかも何処かの殿様みたいに美味しい物をたらふく食べさせて貰っている僕は、どちらかと言えば、贅沢すぎるほど幸せな身だつた。